Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-09

# 乳幼児の音楽的成長過程に関する研究 : 話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に

岡林, 典子

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2007-03-25
(Date of Publication)
2008-07-11
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲3889
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003889

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

# 乳幼児の音楽的成長過程に関する研究

## ー話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心にー

013F442F

総合人間科学研究科
コミュニケーション科学専攻
人間表現論講座

岡林典子

# 目次


## 序章　研究の意義・目的と概要

第１節　問題の所在　～先行研究の検討を踏まえて～　……1

第２節　研究の意義と目的　……5

第３節　本論文の構成と概要　……8

(1) 本論文の構成と概要

(2) 本論文での語句について

## 第１章　音楽的行為を分析するための理論的枠組みと研究方法の設定

第１節　本論文で扱う「音楽的行為」と理論的枠組み　……14

(1) 本論文で扱う「音楽的行為」について

(2) 音楽的行為に関するさまざまな捉え方

① ４人の研究者による観察事例の分析記述

② 分析記述の相違とその背景

(3) 本論文で扱う「音楽的行為」を理解するための理論的枠組み

① Ｊ．ブラッキングの理論と、そこから得られる示唆

② 藤田芙美子の理論と、そこから得られる示唆

③ ２つの理論を背景にした「音楽的行為」の理解

第２節　研究方法　……30

(1) 本研究で用いる研究方法について

(2) 本研究の対象とフィールドワークの実際

## 第２章　話し言葉・運動動作の発達過程の概観

第1節　話し言葉の発達過程の概観　……33

(1) 一般的な子どもについて

(2) 研究対象Ｙ児について

第２節　運動動作の発達過程の概観　……39

(1) 一般的な子どもについて

(2) 研究対象Ｙ児について

第３節　本章のまとめ　……41

## 第３章　話し言葉の発達段階からとらえた音楽的行為の変化過程　～養育者とＹ児のやりとりを中心に～

第1節　Ｙ児の話し言葉の獲得過程における発達段階の区分の設定　……42

第2節　前言語期にみられる音楽的やりとりから　……44

第3節　１語発話期にみられる音楽的やりとりから　……54

(1) 1語発話前期について
(2) 1語発話後期について
第4節　2語発話期にみられる音楽的やりとりから ……74
第5節　3語～多語発話期にみられる音楽的やりとりから ……88
(1) 3語～多語発話前期について
(2) 3語～多語発話中期について
(3) 3語～多語発話後期について
第6節　本章のまとめ ……115

**第4章　動作の伴う拍節的な日本語の獲得過程にみられる音楽的行為**
**～かけ声「ヨイショ・ヨイショ」に関わる事例から～**
第1節 かけ声「ヨイショ」の獲得過程を分析対象とする理由 ……120
第2節 観察事例の分析と考察 ……122
第3節 本章のまとめ ……137

**第5章　動作の伴う抑揚的な日本語の獲得過程にみられる音楽的行為**
**～擬音語「ブーラン・ブーラン」に関わる事例から～**
第1節　擬音語「ブーラン・ブーラン」の獲得過程を分析対象とする理由 ……139
第2節　観察事例の分析と考察 ……140
第3節　本章のまとめ ……154

**第6章　遊ばせうたの習得過程にみられる音楽的行為**
**～遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》に関わる事例から～**
第1節　遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》の習得過程を分析対象とする理由 ……155
第2節　観察事例の分析と考察 ……158
第3節　本章のまとめ ……166

**終　章　乳幼児の音楽的成長の過程**
第1節　総合的考察 ……170
(1) 研究結果の総括
(2) 乳幼児の音楽的成長の過程
第2節　本研究の意義と今後の課題 ……180
(1) 本研究が示唆するもの
(2) 今後の課題

# 凡例

## 1. 記述方法等について

① 括弧は次のように使い分ける。

『　』… 日本語の書名、雑誌名。

‘　’… 英語の書名（但し、引用文中に用いられている場合は、そのまま記述する）。

「　」… 論文や文章名、引用。特に強調したい語。

《　》… 曲名（文中では、引用に関しても曲名には、《 》を用いて、統一した）。

（　）… 筆者の補足、出典、法令。

【　】… 事例や譜例、および図表の番号。

〔　〕… 静止画の番号。

② 脚注は、各章ごとに通し番号でつけている。

③ 引用文献は、論文末尾に各章ごとにまとめている。

④ 事例や譜例、図表の番号は、各章ごとに【事例 1-1】、【譜例 2-1】【図 3-1】【表 4-1】のように示す。

⑤原則的には、歌詞は音符の下に記するべきであるが、動作との対応のために音符の上に記する場合がある。

## 2. 語句について

① 「養育者」という語は、観察対象児の主たる養育を行っている母親に対して用いる。また、母親以外に観察対象児と頻繁に関わる父親や祖父母は、それぞれ「父親」「祖母」などの語を用いる。

# 序章　研究の意義・目的と概要

## 第１節　問題の所在　　～先行研究を踏まえて～

本論文は、これまで乳幼児の音楽的成長・発達に関する研究が、子どもの音楽的行為の本質を見据えてなされてきたのか、ということを基礎的な問題として捉え、日本の文化や社会の中で育つ子どもの音楽的成長・発達の筋道を、話し言葉や運動動作の発達との関わりを中心に解明することを目的とするものである。

音楽的な発達研究において、子どもの音楽的行為の本質を見据えることの必要性を問うことは、子どもの音楽性、すなわち広く大人も含めた人間の音楽性をどのように捉えるかという問題をもはらんでいる。明治以来の学校音楽教育が西洋音楽を中心になされてきたことを背景に、われわれ日本の社会では、「音楽性のある・なし」が、西洋音楽に堪能であるかどうかを基準にして評価されがちである（柴田 1987；藤田 1994, 2001）。それは、西洋音楽の理論に基づいた既成の音楽作品を演奏したり、その旋律やリズムや和声を聞き分けたりする能力をもって音楽性を捉えようとするものである。 しかし、現実的な生活場面に目を向けると、子どもたちが様々な形で音楽的経験を重ねている実態がうかがえる。例えば、運動能力の発達によって、やっと階段をのぼれるようになった子どもに対し、母親がその子の足の動きに合わせて、「よいしょ、よいしょ」とリズミカルにかけ声をかける。やがて、言語の獲得によって、子どもは自身の動きに対して「よーしょ、よーしょ」と発声できるようになり、親と声を合わせ始める。最初は声と動作の一致がみられなくとも、このような母親とのやりとりを重ねていくうちに、次第に声と動作が同期するようになり、リズミカルな表現が生まれる。そして、子どもはこうしたリズミカルな言葉や動作を自発的に様々な場面で用いるようになるのである。このように、日常生活のやりとりを通して身につけられる音楽的行為がある。

岩井正浩（1997）は、1970 年より 10 年ごとに行なった子どもの遊び歌の調査において、近年の子どもの歌は、子どもが遊びのための時間を奪われ、子ども集団が破壊されるに伴って、危ぶまれる状況にありながらも、そこには日本語に基づいた伝統的リズム感と旋律法が生きている実態があることを示唆している。これらの子どもの音楽的行為の実際は、西洋音楽に堪能であるかどうかという音楽性の評価基準では捉えられないものであり、ここに、人間の音楽性を文化や社会と関わるものとして捉えることの必要性が求められる。

ところで、子どもの音楽的成長・発達に関わる研究は、心理学領域において音楽に対する反応や能力などの発達的変化を捉えることに始まったといえる。ドイツの比較心理学者ヴェルナー（Werner,H 1917）や、米国の発達心理学者ゲゼル（Gesell,A 1943）、さらにはドイツのモーグ（Moog,H 1968）らに代表される音楽的な発達研究は、西洋音楽の理論に基づいた音楽作品との関わりを中心になされてきた。それらは歌の再現能力やメロディの再認能力、あるいは音楽刺激に対する反応などを子どもの音楽的行為としてとらえ、その発達的な変化の過程を音楽的な成長・発達として示そうとするものであった。さらに近年においても、芸術の発達心理学を研究しているボストン・プロジェクト・ゼロ・グループに属するマッカーノン(Mckernon,P.E 1979)やデイビッドソン(Davidson,L 1981)や、英国の心理学者ハーグリーブス(Hargreaves,D.J 1986)らの研究は、子どもが既成の歌の正しい旋律やリズムを獲得していく過程を解明しようとするものであり、西洋音楽の理論をもとにした音楽に関する、知覚と生産の能力的な発達を問うているといえる。

日本においても、これら諸外国の研究知見を参考にした研究や、音楽的な能力や反応に関する発達研究がなされてきた。国安愛子は、1960年代から子どものリズム同期に関心をもち、実験によって幼児のリズム反応やリズム再生の能力的な発達を、精力的に研究してきた(国安 1967; 国安・神原 1987)。彼女は、1980年代当時の音楽的な発達に関する研究状況について、「日本での研究は緒についたばかりといってもよく、発達の経路をたどるためには、大半を欧米の研究に依らなければならない」や「その研究は結果が貴重なばかりでなく、使われた方法はこの種の研究に示唆を与え得ると思う」などと述べ、モーグをはじめとする諸外国の研究を詳しく紹介している(国安 1986)。

また、日本を代表する音楽心理学者の梅本堯夫は、乳幼児の音楽的発達の特徴を捉えようと、保育園児の観察研究(梅本・新名 1971)をはじめ、幼稚園児・小学生から大学生に至るまでを披験者として、長年にわたり数多くの実験研究を行なってきた（梅本ほか 1985; 梅本・菅 1986; 梅本・岩吹 1990; 梅本 1992; 梅本 1993)。

梅本が保育園で行なった観察研究は、「乳幼児がメロディー形態をどのような過程を経て理解し、上手に歌うようになるのか」（梅本・新名 1971 p.20)を発達的に捉えることを目的としていた。観察結果として、幼児の歌のレパートリーや音程感・調性感の年齢的発達について、西洋音楽の理論にもとづく音楽作品との関わりから考察がなされている。

また、幼児のオクターブ類似性の認知を発達的に捉えるための実験(梅本・菅 1986)や、幼児のリズム同期反応を調べるための実験（梅本ほか 1985)、旋律創作の能力が年齢ととも

に発達するかどうかを調べるための実験（梅本・岩吹 1990）などが行なわれた。

これらの実験を通して梅本は、西洋音楽の理論に基づいた音や音楽に関する子どもの知覚や再生の能力の発達を捉えてきたが、そこには子どもの音楽的行為が文化や社会との関わりの中で形づくられるという観点が導入されていたとは言いがたい。

一方、英国の民族音楽学者ブラッキング（Blacking, J ）[1]は、南アフリカのヴェンダ族の現地調査を行ない、彼らの音楽作りがヴェンダの文化や社会と深く関わっていることや、ヴェンダの社会には音楽的でないと見なされる人はいないことを明らかにした（Blacking, J 1973)。そして、「人間の音楽性は、その人が属する文化や社会の中で育てられる」という、人間の音楽性の本質を探究するための手がかりを示唆した。また、彼は人間の音楽性について説明するためには人々の音楽的行為（musical behavior）[2]に認められる二重構造性に注目することが重要であると述べた。音楽的行為に認められる二重構造性とは、その一方を「深層構造」、すなわちきわめて日常的な生活経験の中で音楽以外の文化と、直接関わって培われる音楽的行為とし、他方を「表層構造」、すなわち人為的に作り出された一定の音律を基礎として音響を構成するという、日常から離れたそれ自体成立する音楽的行為とするものである。ブラッキングは、深層構造こそが人間の音楽的行為の基底をなすもの、すなわち人間の音楽性の本質をなすものであることを主張した。

『日本人の音楽』（有馬 1951）において日本人の音楽的行為の本質を論じようと試みた有馬大五郎は、日本人が作り出す音階は、日本人が生活の中で経験する日常的な会話や、物売りの呼び声などの音楽実感の蓄積と不可分の関係にあると指摘した。ブラッキングと同様に有馬もまた、日常生活の中で実用的な行為を通して経験する音楽実感こそが、人間の音楽的行為の基底をなすこと、すなわち人間の音楽性の本質に関わるものであることを主張していたのである。

また、世界の民謡や民族音楽の調査研究を行なった小泉文夫は、人々の日常的な動作や会話、挨拶や仕事のなかにみられる、かけ声、劇の科白、物売りの呼び声、唱えごと、わらべうた、仕事の合図など無意識的な表現を「音楽以前の歌」として捉えた。中でもわらべうたについては、「その民族のコトバに密着しており、そこには生活環境が反映されてい

---

1 ブラッキング(1928-1990)は、英国の民族音楽学者で、北アイルランドのベルファースト・クイーンズ大学の教授であった。

2 徳丸吉彦や藤田芙美子は、音楽行動と訳している。人間が音楽と関わる行いは、「音楽的表現」や「音楽行動」、「音楽的行動」、「音楽的行為」などの言葉で表わされるが、本論文では、「音楽的行為」という言葉を用いることにする。本論文で扱う「音楽的行為」の範疇については、第1章1節において詳しく述べる。

る。…その民族の古い習慣や信仰が残っていたり、文化の成長過程が投影されていることもある。」(小泉 1977 p.87) と述べ、日本の子どものわらべうたの詳細な調査研究を進めた。そこには、ブラッキングや有馬と同様に、小泉が日常生活の中での実用的な行為を通して経験する音楽実感こそが、人間の音楽的行為の基底、すなわち人間の音楽性の基礎をなすものであると捉えていたことがうかがえる。

これら先人の人間の音楽性に対する捉え方を参考に、本論文では子どもの音楽性が文化や社会と関わって育てられるものとして捉える。

近年は、発達心理学や社会心理学などの領域における研究者が、従来の研究のあり方が人間の発達に関わる文化的・社会的要因を重視してこなかったことの反省に立ち、人間の営みの文脈を重視するようになった。そして、行動の文脈を壊さずに人間を研究する方法として、自然状況での観察が志向されるようになってきた。音楽領域においても子どもの日常生活における音楽的行為に注目し、行動の脈絡を壊さずに観察・分析を行なう研究が試みられるようになってきた (藤田 1989-1997, 1998-2002; 今川 1997, 1999; 南 1991, 1997, 1999)。自然な状況での観察というのは、元来人類学の主たる研究手法である。しかし、同様の方法を用いても、それぞれの研究者が心理学や民族音楽学の理論など、どのような理論を背景に持ち、何を音楽的行為として捉えるかにより、抽出される子どもの音楽的行為やその分析内容は違ってくる。

以上のような問題意識を踏まえ、本論文では、民族音楽学の理論を背景として、子どもの音楽性を文化や社会と関わって培われるものとして捉え、フィールドワークとエスノグラフィの手法を用いて、子どもの音楽的成長・発達の筋道を解明することを目指す。

日本における民族音楽学領域での子どもの音楽的行為に関する研究には、英国でブラッキングの指導のもとに社会人類学の研究法を学んだ、藤田芙美子による民族誌学的研究がある(Fujita 1988; 藤田 1998)。藤田はこの研究において、日本の子どもの音楽的行為に一貫してみられるルールを理論化[3]した。その後、藤田の理論や方法に示唆を得た研究(岡本 2002;伊野 2003a, 2003b)がなされるとともに、藤田自身の指導により幾つかの卒業研究がなされている(大原・中倉 1994; 海道・数田ほか 1996; 西本・安森 1997; 岩野・高田 1998; 鈴木 2004)。

岡本拡子(2002)は藤田の理論と方法論を踏まえて、保育者と 1・2 歳児の音楽的なやり

---

[3] 藤田の理論については、第1章1節において詳細に述べる。

とりを観察した結果、子どもの音楽性が保育者との音楽的やりとりを通して育まれていることや、子どもたちが音楽的やりとりを通して人間の基礎となるべきさまざまな事柄を学んでいる実際を明らかにした。さらに伊野義博(2003a, 2003b)は、藤田の理論をもとに日本語の持つ音楽性を基盤とした音楽教育を提唱し、日本語から始める音楽授業の構成案を考案して小学校1年生や3年生への授業実践を試みている。

また藤田の指導のもとに保育園での観察研究をおこなった国立音楽大学幼児教育専攻の卒業研究グループ(大原・中倉　1994 ほか)は、藤田の示唆した「日本の子どもの音楽的表現の形式」が確立されていく過程を実証すると同時に、保育園・幼稚園において子どもが経験している音楽の種類や量についての詳細で有用な情報を提供した。鈴木麻子(2004)は、津守真の『乳幼児精神発達診断法』(津守・稲毛 1995)を参考にして、自身の子どもの新生児期から生後10か月までの運動動作・探索行動・社会的行動・生活習慣・発話行動の発達と音楽的成長の関わりを詳細に記録し、運動動作の発達と音楽行動の関わりがもっとも顕著であることを示唆した。鈴木の研究は、一人の子どもの縦断的な記録であり、貴重なデータであるといえるが、言語獲得以前の記録であるために言語発達と音楽的成長の関わりを捉えるためのデータが不足している。このように、人類学的アプローチによる乳幼児の音楽的成長に関する縦断的研究は、まだ緒についたばかりであり、十分な議論がなされるまでには至っていない状況にある。

以上、本節では先行研究の検討に基づき、本論文における問題の所在を明らかにしてきた。次節では、本論文がそれらの問題点の何を解決しようとしているのかについて、説明したいと思う。

## 第2節　研究の意義と目的

本論文は、子どもの音楽性を文化や社会と関わって育てられるものとして捉え、乳幼児の音楽的行為をあるがままに詳細に観察・記述し、その成長・発達の筋道を明らかにすることを目指すものである。観察と研究は、特に次の4点に注意を向けて行なうものとする。

第1点は、日本の子どもがどのように音楽的成長を遂げるのかを、子どもの側に立って、すなわち、子どもの現実の生活場面の具体的な実例を通して見つめなおすことである。

子どもの音楽的行為は、例えば既存の歌をどのくらい正確に歌えるようになるのか、あるいは聞こえてくる音楽にどのように反応して身体を動かしているのか、というように、ともすれば音楽作品との関わりや、大人の考える音楽のあり方に沿って捉えられがちであ

った。しかし、本論文は、子どもの音楽的行為を大人の音楽的偏見をはさまずに、子どもの立場に立って分析しようとするものである。音楽をその作り手である人間の側から捉えようとする民族音楽学の考え方に基づくフィールド研究は、子どもが生活場面で音楽する本来の姿を具体的に示す資料を提供するものである。また、それらの資料分析を通して得られる知見により、子どもが日本の文化・社会の中でどのように音楽的成長を遂げるのかを見つめなおすことができると考えられる。

第2点は、近年の研究課題として取り上げられている音楽的な成長に関する研究アプローチの問題について（Hargreaves 1986；梅本 1996；今川 1997）、民族音楽学の理論や方法論に基づく視点を提案することである。

先にも述べたが、子どもの音楽的成長・発達に関わる研究は、主に心理学領域において、音楽に対する反応や能力などの発達的変化を捉えることに始まったといえる。そのために、これまでの多くの研究は、西洋音楽の理論をもとにした音楽作品との関わりから、子どもの音楽的行為を捉えようとするものであった。そこには、文化や社会との関わり中で子どもの音楽的行為が形づくられるという視点は、導入されずにきたといえる。また、研究方法に関して、これまでは実験法や実験的観察法が多く用いられてきた。近年では、小型ビデオカメラやコンピューターの普及などにみられるテクノロジーのめざましい発展により、自然観察や参与観察などの観察法を用いた研究が、増加の傾向にある。しかし、それぞれの研究の理論的背景の違いにより、収集されるデータや、その分析内容は異なってくる。民族音楽学の理論と方法論に基づく本研究は、文化や社会との関わり中で子どもの音楽的行為が形づくられるという考えを基にして、乳幼児の音楽的行為をあるがままに詳細に観察・記述するという方法を用いるものである。それは、子どもの音楽的行為に関する研究に、新たな視点を提案する機会となりえると考えられる。

第3点は、子どもの音楽的成長を、子どもが属する文化や社会との関わりの中で、言語や運動動作、対人関係などと絡み合わせて重層的に捉えることである。

従来、子どもの成長・発達は、「身体的発達」「言語的発達」「社会的発達」「情緒的発達」というように、個々の機能や領域に分断されて捉えられる傾向にあり、「音楽的発達」も同様にその中の1つとして捉えられてきた。しかし、成長・発達を遂げつつある子どもの機能や領域は、本来、互いに不可分に連関しあって展開されるものである（森上 2001）。日常生活の中で、子どもが養育者と関わりながら、手遊びうたを覚えていく様子を観察してみると、動作を模倣することから始まり、部分的に言葉を挿入し、次第にうた全体を言葉と動

作で表現するようになるという過程を辿る。はじめは養育者から働きかけられていた遊びも、やがては子どもから養育者を誘い込むようになる。こうした過程には、自然な状況の中で、言語や運動動作、対人関係などの発達と絡み合って、音楽的に育ちゆく子どもの姿があらわれている。民族音楽学的な視点から子どもの音楽的行為を捉えようとする本研究は、音楽的に成長を遂げつつある子どもの姿を、言語や動作、対人関係などの発達過程と関連づけて、重層的に捉えた実証的な資料を呈示することができると考えられる。

第4点は、これまでに述べた3つの点を踏まえて、子どもの音楽的成長の実際を、実践に供することである。

幼稚園教育においては、幼児の発達について、「心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものである」ことが示されている(『幼稚園教育要領』 p. 1)。さらに、5 領域のねらいや内容については、「ねらいは幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」と記されている(『幼稚園教育要領』 p. 2)。また、『保育所保育指針』にも、領域について同様に「保育は、具体的には子どもの活動を通して展開されるものであるので、その活動は一つの領域だけに限られるものではなく、領域の間で相互に関連を持ちながら総合的に展開していくものである」と示されている(『保育所保育指針』p. 7)。しかし、保育現場における領域「表現」に関わる音楽活動は、依然として歌うことや楽器演奏などを中心に行なわれている場合が少なくない。

一方、保育園や幼稚園の現実的な子どもの生活場面に目を向けると、集団生活の中で、保育者と子ども、あるいは子ども同士がさまざまな音楽的やりとりを交わしている場面がみられる。散歩に出かけるための準備をしている保育者と子どもが、用意ができたかどうかを「もーいいかい」「まーだだよ」と日本語に基づいた音楽的な言葉のやりとりを交わしながら確かめ合っている。また、子どもがつたい歩きを始めたり、階段を上る場合に、家庭生活において養育者が行うのと同じように、保育者が子どもの動作に合わせて、「ヨイ・ヨイ・ヨイ」や「よいしょ・よいしょ」などとリズミカルなかけ声をかけている場面に出会う。さらに、子どもたちが水道や滑り台の順番を待つ場面では、しばしば「かーわってー」という呼びかけと、「いいよー」あるいは「イヤよー」という返答を用いたやりとりがみられる。ここには、子どもたちが集団生活の中で音楽的なやりとりを通して、ルールや

他者との関わり方を学んでいる実際がよくあらわれている。民族音楽学の理論に基づいて、子どもの音楽的行為をあるがままに捉えようとする本研究は、幼児教育や保育の実践現場に、新たな音楽のあり方を示唆することができると考えられる。

上記に述べた4つの点をふまえて、本論文では子どもの音楽性の本質を見据えた発達研究を行なうために、子どもが周囲の人々と関わり、さまざまな生活体験を通して、話し言葉や動作などを身につけてゆく成長の過程を、音楽的な視点で捉える。そして、日本の文化・社会の中で日本語を習得しつつある子どもの音楽的成長・発達の筋道を解明することを目的とする。

特に、話し言葉と運動動作の発達との関わりに焦点を当てるのは、先行研究と筆者自身の観察から得られた結果より、子どもの日常生活における行為には、音声や言葉と動作をリズミカルに同期しているものが多いことが理由としてあげられる。例えば、段差のある場所から跳ぼうと構えている幼児が、「イッ・セー・ノー・デー, ピョン（跳ぶ）」と、呼吸を整え、音声によって4拍にまとまった拍節を作り出した後、次の拍で跳ぶ動作を起こしている場面はよく目にするものである。また、ジャンケンをする数人の子どもが「サイ・ショは・グー(グーを出す)・●, ジャン・ケン・ポン（グー、チョキ、パーのいずれかを出す)」[4]と、互いに呼吸を整えて拍節を作り出し、言葉と動作をリズミカルに同期させる場面もよくみられる。このように、子どもがきわめて自然な形で音声や言葉と動作を音楽的に関わらせている基盤には、音声や言葉の発達過程や運動動作の発達過程の中に、音楽的行為との何らかの関連性があるものと考えるからである。

## 第3節　本論文の構成と概要

### (1) 本論文の構成と概要

第1章では、本論文で扱う音楽的行為の概念について、背景とする理論を基に説明する。観察データから音楽的行為を抽出し、分析することが中心となる観察研究においては、どのような行為を「音楽的である」と捉えるかということが、研究の根幹に関わる重要なポイントである。そこで、第1章1節の1項では、まず本論文で扱う音楽的行為の内容を述べる。2項では、乳幼児の行動を音楽的な視点から分析する観察研究を意欲的に進めてい

---

4 ポンの後に●を入れる場合もある。例えば「あいこ」になった場合は、次への進行からポンの後にも拍が刻まれる。ここではポンでとめているものと捉え、7拍ひとまとまりになっていると考えて偶数拍とはしない。

る4人の研究者たちが、子どもの音楽的行為を、どのように捉えているのかを、事例の分析記述より比較検討する。また、3 項では、本論文で扱う音楽的行為の概念規定の根拠について、背景となるブラッキング理論や藤田理論に依拠して行った保育園での観察研究の結果を用いて、説明する。さらに2節では、1項において本論文で用いた研究法について述べ、2項において観察対象とフィールドワークの実際について述べる。

第2章では、1節において話し言葉の発達過程に関して、一般的な子どもと本論文の観察対象であるY児について概観する。また、2 節において運動動作の発達過程に関して、一般的な子どもと本論文の観察対象であるY児について概観する。そして、3 節では、一般的に認められる乳幼児の話し言葉や運動動作の発達過程と、Y児にみられた発達過程を表にして比較検討する。

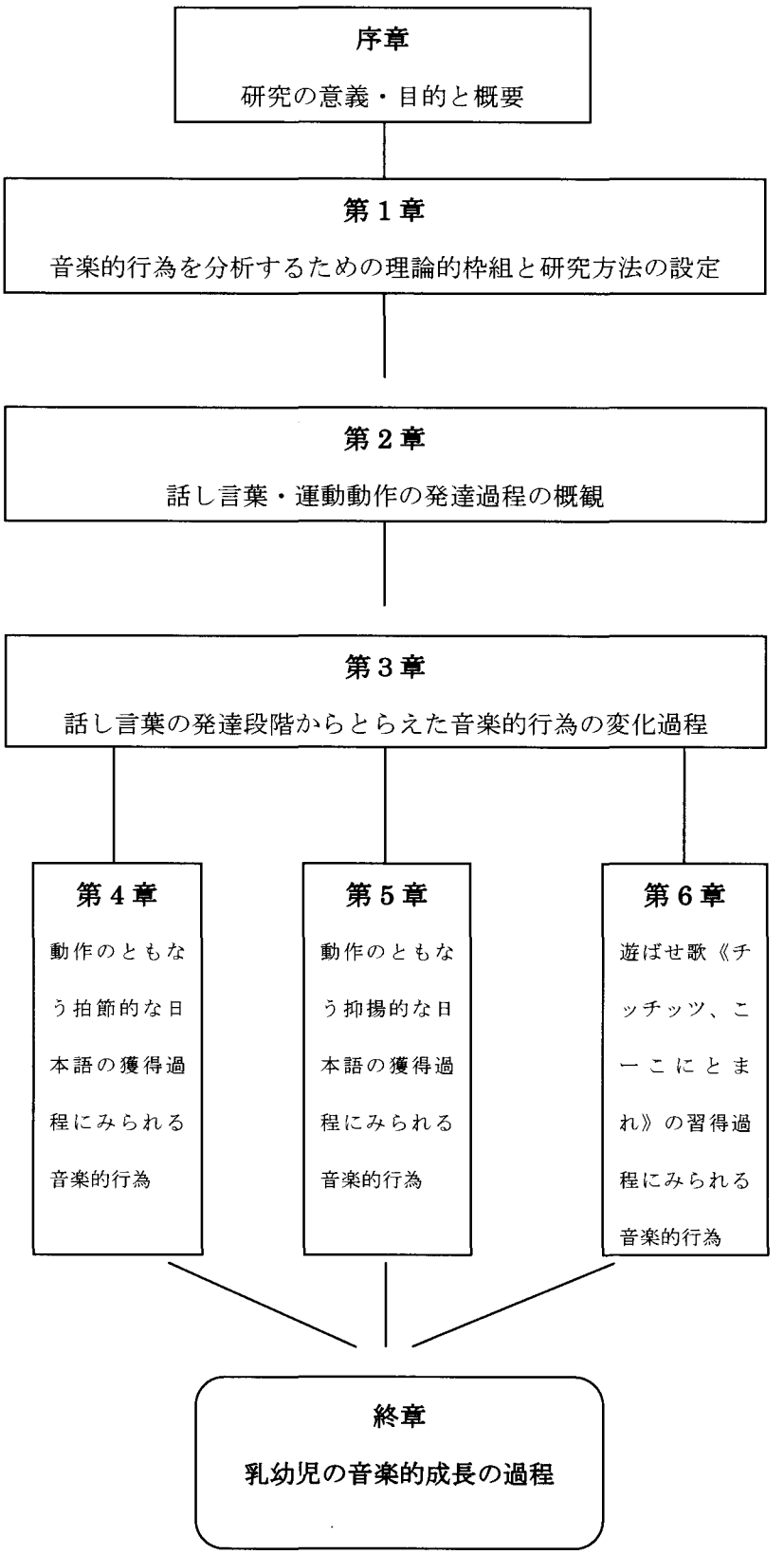
第3章では、1節においてY児が話し言葉をどのように増やしていくのかについて、その具体的な言葉の内容を示し、言語の獲得過程における発達段階を区分する。2〜6節では、話し言葉の発達段階に沿って、養育者とのやりとりの中にみられるY児の音楽的行為を捉えて分析を試み、その変化の過程をたどる。

第4章と5章では日本語のもつ音楽的な要素に焦点を当てる。まず第4章では、拍節的な要素の強いことばとして、かけ声「ヨイショ・ヨイショ」を取り上げる。ここでは、運動動作や話し言葉の獲得過程とかけ声「ヨイショ・ヨイショ」に関わる音楽的行為の発達的な変化をたどり、言葉を拍節的にまとめる音楽的な行為が子どもに獲得されてゆく過程を明らかにする。次に第5章では、抑揚的な要素の強いことばとして擬音語「ブーラン・ブーラン」を取り上げる。ここでは、運動動作や話し言葉の獲得過程と擬音語「ブーラン・ブーラン」に関わる音楽的行為の発達的な変化をたどり、言葉を抑揚的にまとめることから旋律的に唱える音楽的な行為が子どもに獲得されてゆく過程を明らかにする。

第6章では、日本語の抑揚的要素と拍節的要素の両方を合わせ持った題材として、遊ばせ歌《チッチッ、こーこにとまれ》に焦点を当てる。ここでは、養育者と対象児の間に遊ばせ歌を用いてどのようなやりとりがなされているかの実際を示し、話し言葉の獲得状況と表現の変化過程の関わりをまとめる。

終章では、3〜6章で明らかになったことを基に、文化や社会の中で育つ子どもの音楽的成長の筋道について、フローチャートを作成し、話し言葉と運動動作の関わりを中心に捉えた乳幼児の音楽的成長の過程を提示する。以下の図1に、博士論文全体の構成をイメージしたものを示す。

**【図 1-1】全体構成のイメージ**



### (2) 本論文での語句について

①本論文では、日本語の50音図に示されているような基本単位の言語音[5]（直音、拗音、撥音、促音、長音）を、「音（おん）」と呼び、1音という単位として数える。したがって、「あ」「ば」「きゃ」「ん」「っ」「ー」なども1音として数え、「パンダ」ならば3音、「スキップ」ならば4音、「チョコレート」ならば5音とする。

②「拍」について

日本語においても、音楽においても、「拍」という語が用いられるが、それぞれ示す事柄は異なっている。言葉の拍は、最も小さい音の単位を示す。音楽の拍は、等間隔の時間単位を示す。日本語の場合、音声的な区切りの単位としての「音節」や「モーラ」に、時間的な単位の「拍」が用いられるが、本論文では、上記①で示した「音」の時間単位を「拍」とする。つまり、「1音」が「1拍」となる。

※尚、「音節（シラブル）」や「モーラ」の時間単位として「拍」を用いる場合も、同じく「1音節（シラブル）」や「1モーラ」が「1拍」となる。

岩井（1998）は、日本の子どもが《故郷》や《朧月夜》を歌うときに、4分の3拍子の拍節感をもって歌うのではなく、1拍子の連続で歌っていることを指摘している。また、それはきわめて日本的な音楽性の表出であることを示唆している（譜例1-1）[6]。このことは、日本語の1音が1拍となる音楽的特徴と関連するものである。

【譜例1-1】　　《ふるさと》

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3/4 | 1 2 3 | 1 23 | 1 2 3 | 1 2 3 | 1 2 3 | 1 23 | 1 2 3 | 1 2 3 | （後略） |
| | うさぎ | おいし | かのや | ま－－ | こぶな | つりし | かのか | わ－－ | |

岩井(1998) P147より引用

③「拍（律拍）」について

2音ずつのまとまりが1拍を感じさせる場合を拍（律拍）として用いる。律とは、リズムを意味している。特定の音数構成によって成立する特別なリズムを「音数律」といい、

---

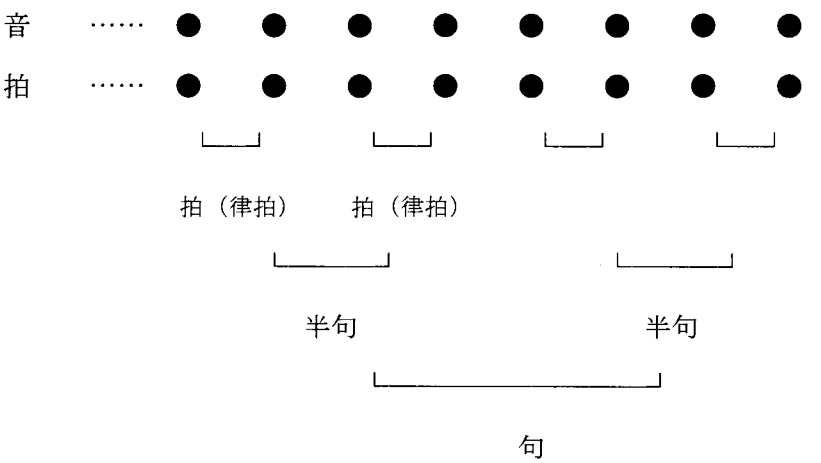
5 この基本単位の言語音は、「音節」「モーラ」などとも呼ばれている。

6 岩井正浩 1998 『子どもの歌の文化史』第一書房 p. 147

音数律における1拍ずつの拍子の単位を、「律拍」という[7]。日本語の音数律の基本型は、1律拍に2音ずつ割り当てられるので、2音のまとまりに拍を感じる場合が多い。例えば、「交通安全」は、リズミカルに発話されると、「こう・つう・あん・ぜん」と2音ずつのまとまりによって4拍（律拍）に感じられる。また、律拍と律拍が結びついて、「半句」となり、半句と半句が結びついて、「句」となる。

これらの「音」「拍」「律拍」「半句」「句」の関係を図示すると、以下の図1-2ようになる。

**【図1-2】 日本語の「音」「拍」「律拍」「半句」「句」の関係**



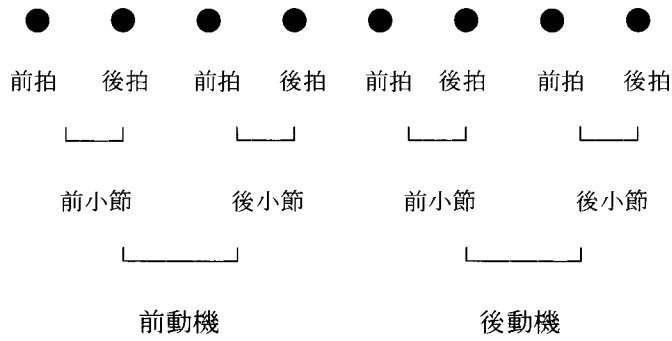

上記の「音」や「拍」「律拍」などの関係は、音楽的側面からも捉えられる。民族音楽学者の小泉文夫は、わらべうたの基本リズムに関連して、以下の図1-3ように示している[8]。

---

7 「律文と散文」金田一春彦・林 大・柴田武 編 1988『日本語百科大事典 縮刷版』大修館書店 pp. 865-869, 坂野信彦 1996『七五調の謎をとく ―日本語リズム原論』大修館書店, 坂野信彦 2002「日本語の音数率」飛田良文・佐藤武義 編 『現代日本語講座 第3巻 発音』pp. 124-142

8 小泉文夫 1984 『日本伝統音楽の研究2 リズム』音楽之友社 p. 107

**【図 1-3】 小泉文夫による日本語の「音」と「拍」「小節」「動機」の関係**




④「拍節」について

打拍の周期的なまとまりに「拍節」という語を用いる。したがって、上記③で示したリズミカルな発話「こう・つう・あん・ぜん」は、4拍（律拍）からなる拍節を形成する。

⑤「養育者」について

養育者という語は、観察対象であるＹ児の主たる養育を行っている母親に対して用いる。母親以外にも、父親や祖母が養育を担う場合があるが、これについては、「父親」「祖母」と表す。

# 第１章 音楽的行為を分析するための理論的枠組みと研究方法の設定

## 第1節　本論文で扱う「音楽的行為」と理論的枠組み

### (1) 本論文で扱う「音楽的行為」について

本論文では、「音楽的行為」という語の概念を、西洋音階でできた既成の歌を歌う行為以外に、以下のように理解して用いる。

① ２音からオクターブにいたる旋律[1]でできた歌をうたう行為

② 日本語の抑揚をもとに、一定の固定した音高[2]で旋律的に言葉を唱えたり、音声をまとめる行為[3]

③ 日本語の音（おん）をもとに、一定の拍節リズムで言葉を唱えたり、音声や動作を拍節的にまとめる行為

④ 一定の拍節リズムで、音声や言葉と動作を同期させる行為

⑤ 他者と間（呼吸）を合わせて、動作や声をタイミングよく同期させる行為

上記の②③④は、一定の拍節リズムや、一定の固定した音高で拍節的に言葉を唱えたり、演じたりするようなリズミカルな行為ということができる。しかし、これを「音楽的である」と捉えるか否かは、研究者によって見解が異なる。それは、各研究者が音楽を捉えるための観点が一定ではないことに起因していると考えられる。観察データから、音楽的行為を抽出し分析することが中心となる観察研究においては、どのような行為を「音楽的である」と捉えるかということが、研究の根幹に関わる重要なポイントであると筆者は考えている。そこで、本節２項では、乳幼児の行動を音楽的な視点から分析する観察研究を意欲的に進めている研究者たちが、子どもが一定の拍節リズムや、一定の固定した音高で、音声や言葉、動作をまとめる行為を、どのように捉えているのかを、事例の分析記述より比較検討し、考察する。また、本節３項では、筆者がなぜ一定の拍節リズムや、一定の固定した音高で音声や言葉、動作をまとめるような行為を、「音楽的である」と捉えるのかという点について、背景となる理論をもとに説明する。

---

1 必ずしも、平均律で用いられるような音程に基づくものではない。

2 同上

3 言語獲得以前の喃語期において、母国語の抑揚が出現するのは10～12か月頃だといわれている〔小嶋祥三 1999「声からことばへ」 桐谷 滋編『ことばの獲得』ミネルヴァ書房 pp. 1-36, 林　安紀子 1999「声の近くの発達」 桐谷 滋編『ことばの獲得』ミネルヴァ書房 pp. 37-70〕。本論文では、喃語期にみられる抑揚のある音声と動作を同期させる行為や、養育者と抑揚のある音声を交互にやりとりする行為を「原初的な音楽的行為」として捉える。

### (2) 音楽的行為に関するさまざまな捉え方

言語獲得の過程にある乳幼児期には、言語的な意味のない短い音節や、語のまとまりを繰り返すリズミカルな音声表現が頻繁にみられる。また、そのような音声表現には動作を伴っている場合も多い。このような表現を「音楽的である」と捉えるか否かは、研究者によって見解が異なるところである。そこで本項では、こうした子どもによる独特のリズミカルな表現が、これまでどのように捉えられてきたのかを知るために、乳幼児の音楽的行為に関して、意欲的に観察研究を進めている 4 人の研究者の事例分析の記述を比較検討し、考察する。

#### ①4 人の研究者による観察事例の分析記述

**●藤田芙美子の観察研究にみられる 2 歳児の音楽的行為に関する分析記述**

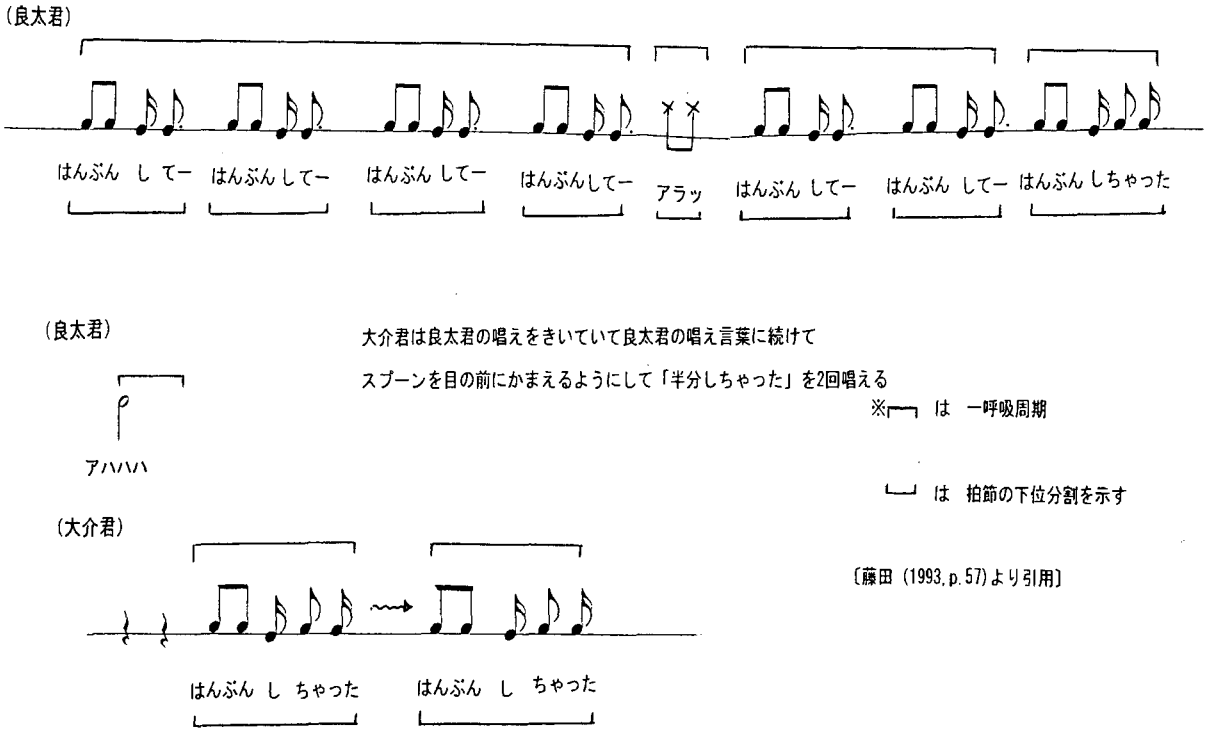
藤田は、ブラッキングの音楽的行為に関する理論と研究方法を踏襲して、保育園や幼稚園における現地調査を行い、子どもの音楽的行為に関する民族誌学的研究(Fujita:1988, 藤田：1988-2002)を日本ではじめて行なった研究者である。

以下に 2 歳児クラスの観察における藤田の観察事例と分析の記述を取り上げる。

【藤田の研究にみられる 2 歳児の観察事例の記述から（藤田:1993, p. 57)】

はじめ良太君は、「はんぶんしてー」4 回をひと呼吸で唱えることによって、拍節を作り出します。次に、「アラッ」という言葉で、ひと呼吸おいて、また初めに作り出した拍節にのって「はんぶんしてー」を 2 回唱えます。そして次に「半分しちゃった」と軽く締めくくります。これを隣で聞いていた大ちゃんは、「はんぶんしちゃった」「はんぶんしちゃった」と良太君が作り出した一連の唱え言葉を強く完結するかのように、タイミングよく唱えます。次に良太君が「はんぶんしてー」と唱える時は、スプーンでプリンを切る動作と言葉の拍節が、ぴったりと合ってきます。向かい側にいた、しのちゃんも良太君が作り出した拍節にのって唱え、スプーンで切る動作をします（譜例 1-2)。

【譜例 1-2】　　《藤田芙美子の観察した 2 歳児の表現（藤田:1993, p. 57 より）》




【上記の事例についての藤田の分析記述から（藤田:1993, p. 57）】

2～3 歳児の場合は、このような短い単語や文節を繰り返して唱えることによって偶発的にリズミカルな唱え言葉を作り出すことが多く見られますが、…子どもたちは、このような唱え言葉もまた、呼吸を整え、言葉をまとめて拍節的に唱えるという道筋で学習しています。…子どもたちの音楽性は、子どもたちが周囲の人々と関わって、どのように音響を組織づけているかという視点で見直されるべきでしょう。このような視点、すなわち、子どもの音楽行動を音楽の作り手である子どもの側から捉えるときに、子どもたちは誰もが皆音楽的であることの実際が明らかになるはずです（下線は筆者による）

**●田中　泉の観察研究にみられる 1 歳児の音楽的行為に関する分析記述**

田中は、幼児の音声行動にみられる音楽的側面について、音、リズム、反復などに注目して観察研究を進めている。彼女は、幼児の音声は「ことば」と「歌」に分化しつつも、

言語的表現と音楽的表現がかかわりあっているのではないかという考えを基に、乳幼児の縦断的観察を進めている(田中:1998, 2003)。

以下に、田中の観察事例の中から、1歳児に関する分析記述を取り上げる。

【田中の研究にみられる1歳児の観察事例の記述から(田中:2003, pp. 97-98)】

Y(男児・1歳4ヶ月)と母親が、玩具の車を持って自宅の前の道路にでる。…(中略)…Y児は玩具の車を少し動かし「ブーブー」と発すると、母親が「うん、ブーブー」と言う。Yは後ろ向きになって「ブー」といいながら数歩歩くと、左右片方ずつに重心をかけるように足を踏みしめながら次のように声を出す。「ブーブッ、ンーンッ」。母親が玩具の車を指して「これもブーブ、これもブーブ」と言うと、Yはしゃがんで玩具の車に触りながら「ブーブッ、ブーブッ、ブーブッ(譜例1-3)」と声を出し、車を動かしながら「ブー」と言う。

【譜例1-3】　《田中 泉の観察した1歳児の表現(田中:2003, p. 98より)》

【上記の事例についての田中の分析記述から(田中:2003, p. 98)】

筆者は、リズム譜にあらわした反復のある表現を、Yが「ブーブ」ということばの音やリズムに興味をもち、身体の動きにあわせて声を発することそのものを楽しむ「遊び」、すなわち「音楽的」な表現であると解釈する(下線は筆者による)。Yは車が関連する状況で「ブー」や「ブーブ」と発しているため、この「ブーブ」には言語的な意味があるものの、同時にYはそのことばの音やリズムを感じ、身体の動きに合わせて発しているのではないだろうか。

**●今川恭子の観察研究にみられる2歳児の音楽的行為に関する分析記述**

今川は、心理学者ガードナー（Gardner, H）〔1943-〕の理論[4]を背景に、乳幼児期を音楽的シンボル形成期と捉え、その音楽的行為の質的解明のために、数人の子どもを対象として縦断的に観察研究を進めている（今川:1997, 1999）。

以下に、今川の観察事例にみられた 2 歳児に関する分析記述を取り上げる（今川:1999, p. 45）。

【今川の研究にみられる2歳児の観察事例の記述から（今川:1999, p. 45）】

2 歳ちょうどのYちゃんは、紙とはさみを母親にわたして「これ切って、ねえ、これ切って」と言っているうちに、しだいに声のリズムが周期性を帯び、抑揚も大きく規則性をもつようになる。「キッテー　キッテー　コレキッテーー」という声を出しながら、声のリズムに合わせて、下線の音のたびに大きく足踏みをして後ろ向きにさがっていく。

【上記の事例についての今川の分析記述から（今川:1999, p. 45）】

事例の Y ちゃんにとって、はじめは言葉の意味の伝達が大切だったのであろうが、しだいに「切って」という要求の伝達は重要性を失ってしまった。指示的意味が抜け落ちて音だけになった語に、周期的な抑揚とリズムがついたのであるが、だからといってこれを即座に音楽的とも言いがたい（この部分の下線は筆者による）。

**●南　曜子の観察研究にみられる2歳児の音楽的行為に関する分析記述**

南は自身の次女を観察対象として、縦断的な観察を行い（南:1989, 1991, 1997, 1999, 2002）、発話と歌の関係や、つくりうたの成立過程および旋律性などについて、意欲的に研究を行っている。

以下に、南の観察事例の中から、2歳児に関する分析記述を取り上げる。

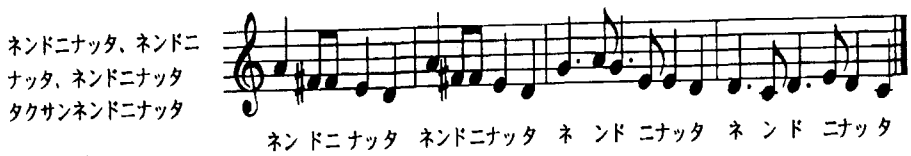
---

4 ガードナーは、「多重知能の理論」を提唱したことで知られているが、人間の発達においてもっとも重要なことは、環境との関係でシンボルの操作ができるようになることであると考えている。また、芸術的発達を芸術の諸領域固有のシンボルの獲得とみており、ほとんどの子どもが 7 歳頃までに、美術家、演奏家などの芸術的過程への参加者として必要な本質的要素を獲得していると捉えている。（ハーグリーブス:1993, p. 59）

【南の研究にみられる2歳児の観察事例の記述から(南:1999, p. 27)】

鉛筆がたくさん入った箱をひっくり返して「ネンドニナッタ、ネンドニナッタ、ネーンドニナッタ、タクサンネンドニナッタ」と発話。手でそれらの鉛筆をゆっくりかきまわしているうちに、発話よりゆったりとしたテンポで歌が始まる（譜例1-5)。

【譜例1-5】　《南　曜子の観察した2歳児の表現(南:1999, p. 27より)》




【上記の事例についての南の分析記述から(南:1999, p. 27)】

最初の発話部分である「ネンドニナッタ…」はリズミカルであり、3回目には「ねーんど…」と最初のモーラが延長されている。そして、その発話から一息おいてそのまま旋律のある歌になった。リズミカルに発話することが言葉のリズムやイントネーションを浮き彫りにし、歌へと繋がったとみることができよう（下線は筆者による)。

### ②4人の研究者による分析記述の相違とその背景

前述した4人の研究者による観察事例は、どれも1～2歳代の子どものリズミカルにまとめられた音声、言葉、動作の表現である。音声や言葉の意味内容や生起状況はそれぞれ異なるものの、音声や言葉に周期的なリズムが生じている点や、動作が伴っている点には共通性がみられる。しかし、4人の研究者の分析記述には、これらの表現を音楽的とみなすか否かという視点の違いにより、分析記述に相違がみられる。

藤田の記述には「子どもの音楽行動を音楽の作り手である子どもの側から捉えるときに、子どもたちは誰もが皆音楽的であることの実際が明らかになるはず」[5]とあり、彼女がリズミカルにまとめられた音声、言葉、動作による子どもの表現を、ブラッキングの理論（本

5 藤田芙美子 1993 「子どもはどのように音楽的であるか」『音楽教育学』第23-2号 p. 57

節3項で述べる）と方法論に基づいて、できるだけ子どもの立場に立ち、大人の音楽的な偏見をはさまずに分析をした結果、音楽的であると捉えていることがわかる。また藤田は、丹念な観察から、幼児にとって話す行為と歌う行為が連続体をなすものであることを明らかにし、日常生活には、話す行為を歌う行為へと切り替える、かけ声、唱え言葉のような「中間形式」が豊富にあることを示唆した(Fujita 1988)。この「中間形式」とは、「通常の話し言葉と異なり、一定のリズム、あるいは一定のリズムと音高をもって唱えられる言葉」である[6]と定義されている。

また田中は、事例に取り上げているような、乳幼児期にみられる言語的な意味のない短い音節や、語のまとまりを繰り返すリズミカルな音声表現を、「身体の動きに合わせて発することそのものを楽しむ『遊び』、すなわち『音楽的』な表現であると解釈する」[7]と述べて、音楽的であると捉えている。田中は、幼児の生活の中でみられる、通常の話し言葉とは異なるリズムや音高をもつ、言葉とも歌ともつかない子どもの表現の特徴について、

> これらの特徴は、表現された音声そのものの音的な側面にみられる特徴である。しかし、おとなの区別にあてはめるという視点からだけでは見落としてしまうような、子どもの表現の独自性を検討するためには、それが子どもにとってどのような意味や機能をもった表現であるのか、という面に目を向けることも必要である。つまり、おとなの尺度で、表現そのものの音響的側面から判断するだけでなく、何を「音楽的表現」とみなすのかということを、「子どもにとってどのような意味を持っているのか」という観点から問い直さなければならない[8]

と主張している。さらに、

> 「指示的意味を表すことば」であっても、その意味だけが重要なのではなく、音声そのものも、発する者の注意を引く力を持っているのではないか。そして、そのために、ある対象を示すような言語的な意味を持つ音声が発せられた場合も、その意味に留まらず、音声そのものが感覚に訴えるという側面もあり、身体の動きに合わせるよ

---

6 藤田芙美子 1988「幼稚園における‘様式化された話し言葉’」『日本保育学会第41回大会研究論文集』pp. 612-613

7 田中　泉 2003『幼児の音声行動にみられる音楽的側面に関する研究―音・リズム・反復を中心に―』日本女子大学大学院人間生活学研究科人間発達学専攻博士論文 p. 98

8 田中　泉 1998「幼児の音声行動における言語的表現と音楽的表現」『音楽教育学第28-2号』pp. 17-30

うに音声を発したり、パターンをくり返して楽しむような表現が連続的に、自然に現れるのではないだろうか[9]

と述べ、意味論との関わりから子どもの音声行動を捉えようとしている。

このようにみてみると、藤田と田中は、背景としている理論が異なっていることが理解できる。藤田は子どもが周囲の人々と関わって、どのように音響をまとめようとしているのかという点に、あるがままの子どもの音楽的行為を捉えようとしている。また、田中は子どもの行為の意味を捉えようとしており、両者の違いがみられる。しかし、藤田の「音楽の作り手である子どもの側から捉える」という見方や、田中の「おとなの区別にあてはめるという視点からだけでは見落としてしまうような、子どもの表現の独自性を検討する」や「おとなの尺度で、表現そのものの音響的側面から判断するだけでなく」という見方には、両者が子どもの立場に立って、子どもの側から子どもの行為を捉えようとする共通した姿勢が読みとれる。そして、それぞれの事例に取り上げているような、通常の話し言葉とは異なるリズムや音高をもつ、言葉とも歌ともつかない子どもの表現を「音楽的である」と捉えている点でも、共通性がみられる。

一方、今川は「指示的意味が抜け落ちて音だけになった語に、周期的な抑揚とリズムがついたのであるが、だからといってこれを即座に音楽的とも言いがたい」[10]と述べ、リズミカルに言葉を唱えるような子どもの表現を、音楽的であるとは捉えていない。彼女は、乳幼児期を音楽的シンボルの形成期と捉えている。この音楽的シンボルの形成とは、音を介した人とのかかわり方として、音楽固有のあり方を身につけることであり、また、文化の中に共有する音楽的プロセスの参加者になることであると述べている[11]。さらに、この「音楽固有のあり方」や「文化の中に共有する音楽」とは、われわれが暗黙のうちに、音楽という名のもとに音を交わしあっている現実のあり方、すなわちＣＤの音楽演奏に聴き入ったり、音楽会でうたったりピアノを演奏したり、アニメの歌や子どもの歌などをうたいだしたりする行為であると、説明している[12]。

さらに、以下の今川の音楽的シンボルの形成に関する記述からは、彼女が子どもの音楽的行為をどのように捉えようとしているのかを知ることができる。

---

9 前掲書 注7 p. 28

10 今川恭子 1999 「音楽的シンボル形成期としての乳幼児期―発達の視点からみる乳幼児の音声行動―」浜野政雄監修『音楽教育の研究　理論と実践の統一をめざして』音楽之友社 p. 45

11 前掲書 注10 pp. 43-53

12 前掲書 注10 p. 44

子どもの実態から出発して経験的に考えるならば、音楽的シンボルは、乳幼児期を通して子ども達の中に形成されつつあることがわかる。しかし、行為としての表れ方はさまざまである。既存の歌を大人と変わらないほど正確に再現することもあれば、きわめて不完全な再現であったり、聞こえてくる歌声に明確に声に出してではなく身体で同調するだけだったり、つくり歌であったり、…容易な一般化を寄せつけない多様さがある。しかし、音楽的プロセスの参加者であるという点、すなわち音楽的シンボルの送り手であったり、受け手であったりする、という点において、こうした子ども達の行為は大きな観点からみたとき、現象は違っても大人の音楽行為とある意味で機能的に変わらないと考えてよいのではなかろうか[13]

これらの今川の主張には、彼女が子どもの音楽的行為が大人のそれと機能的に同じものであり、大人の音楽のあり方に参加していくプロセスが音楽的発達であると捉えていることが伺える。

また、南は、「ネンドニナッタ」という繰り返しのある2歳児の表現に対して、「リズミカルに発話することが言葉のリズムやイントネーションを浮き彫りにし、歌へと繋がったとみることができよう」[14]と述べている。同じ事例について、南は別の機会に「その発話自体がことばの韻律の遊びであり、歌になる条件を十分に備えていると言える」[15]とも述べている。さらに、彼女は、「乳児期を脱した段階では、子どもは既に発話と歌のカテゴリーを互いに独立した関係として知覚し、行動しているはずだと考えている」[16]とも述べている。これらの記述からは、南が、通常の話し言葉とは異なるリズムや音高をもつ、言葉とも歌ともつかない子どものリズミカルな発話が歌の契機にはなるが、音楽的行為そのものであるとは捉えていないことが読みとれる。また、幼児にとって話す行為と歌う行為が連続体をなすものであると考える藤田[17]と違って、乳児期を脱した段階の子どもにとって発話と歌のカテゴリーは互いに独立した関係であると考えていることがみてとれる。

さらに南は、多くの観察事例に基づき、子どもの発話と歌の関係について分析を試みて

---

13 前掲書 注10 p.46

14 南曜子 1999「言語習得期における発話と歌の関係」日本音楽教育学会編集『音楽教育学』第29-1号 p.27

15 南曜子 2002「子どもが歌うことの源」川端有子／戸苅恭紀/難波博孝 編『子どもの文化を学ぶ人のために』世界思想社 p.246

16 前掲書 注14 p.17

17 Fujita Fumiko 1988 *Problem of Language, Culture and the Appropriateness of Musical Expression in Japanese Children`s Performance* , Tokyo :Academia Music

いる。以下の記述からは、彼女が通常の話し言葉とは異なるリズムや音高をもつ、子どもの表現をどのように解釈しようとしているのかを知ることができる。

ことばには文節的側面と韻律的側面があり、日常的な発話はその両者のバランスの上に成り立って様々な事象を指示するのである。韻律的側面には音楽を構成する要素との共通部分が多いが、韻律的側面にウエイトがかかった発話を我々は“歌っている”とは言わない。

一般的に、言語習得期の子どもは、獲得したばかりの言葉を使って構音に意識を集中させて他者に懸命に意味を伝達しようとする。その時の音声は、一つ一つのことばのモーラが区切られて発音されることが多く、自ずとリズムも拍節的になり、ことばのイントネーションもピッチとして聞こえてくることが少なくない。たとえば、ドアを「あけて」と言うとき、それは「アーケーテー」となり、4拍まとまりの長2度旋律に聞こえてくる。しかしながら、状況は、明らかに発話である。…… 中略 …… 子どもは構音のスキルを得るために一度発したことばを二度三度と反復することがあるが、それはリズムのまとまりをつくることになる。 … 音声に繰り返しがあり、リズムのまとまりがあることは、子どもが音楽をしていることとイコールではないし、まとまりがあるからといって、それを音楽的行動に分類する必要もない。誤解のないようにしたいのは、音韻を繰り返す音声行動や動作に伴って発する音声行動は音楽的カテゴリーに含まれないと言っているのではないということである。逆に、観察者が、音韻を繰り返したり動作に伴って音声を発している子どもの中に何らかの音楽的なイメージが生まれていて、歌っているようにみえると判断すれば、むしろ積極的に音楽的カテゴリーに入れるべきだろう[18]。

南は、上記の記述において、「音声に繰り返しがあり、リズムのまとまりがあることは、子どもが音楽をしていることとイコールではないし、まとまりがあるからといって、それを音楽的行動に分類する必要もない」と述べ、音声や言葉を用いたリズミカルな子どもの表現を、音楽的行為として捉えてはいない。しかし、「観察者が、音韻を繰り返したり動作に伴って音声を発している子どもの中に何らかの音楽的なイメージが生まれていて、歌っているようにみえると判断すれば、むしろ積極的に音楽的カテゴリーに入れるべき」だと

---

18 前掲書 注14 p. 18

主張している。

南の「観察者が歌っているようにみえると判断すれば、積極的に音楽的カテゴリーへ入れるべき」という主張や、今川の「音楽的プロセスの参加者であるという点、すなわち音楽的シンボルの送り手であったり、受け手であったりする、という点において、こうした子ども達の行為は大きな観点からみたとき、現象は違っても大人の音楽行為とある意味で機能的に変わらないと考えてよい」という主張は、子どもの行為を大人の音楽的バイアスを通して捉えているものであると思われる。すなわち、子どもの行為を大人の側からの見方によって音楽的である、ないと判断する姿勢や、大人の考える音楽のあり方に子どもが参加していくプロセスを音楽的発達だと捉える姿勢は、大人の立場から子どもの音楽的行為を捉えようとする視座が内包されているといえるのではないだろうか。筆者は、子どもの表現や行為は、大人の音楽に対する偏見をはさまず、子どもの立場に立って捉え、理解することが必要であると考える。

そこで、次項では、子どもの立場に立ってその行為や表現を理解するために有用な理論と方法について述べる。そして、筆者が、一定の拍節リズムや一定の固定した音高で音声や言葉、動作をまとめるような、幼い子どもに頻繁にみられるリズミカルな行為を、「音楽的である」と捉える理由について説明する。

### (3) 本論文で扱う「音楽的行為」を理解するための理論的枠組み

本節第 2 項では、4 人の研究者が子どもに頻繁にみられるリズミカルな行為をどのように捉えているのかを、事例の分析記述より比較検討した。また、筆者が「子どもの音楽的行為は子どもの立場に立って理解することが必要である」と考えることについても述べた。

本項では、本論文で扱う「音楽的行為」を理解するための理論的枠組みとして、ブラッキングの理論と藤田芙美子の理論を挙げる。そして、本論文で扱う「音楽的行為」について、2 つの理論を背景にして、説明をする。

#### ①J.ブラッキングの理論と、そこから得られる示唆

民族音楽学者の J.ブラッキングは、南アフリカのヴェンダ族とともに 2 年間を過ごし、ヴェンダの子ども達がヴェンダ社会の中で音楽を学んでいく様子を、“Venda Children`s Songs”(Blacking, J 1967) に著わした。彼は、マリノフスキーが 3 段階に区分した現地調査法 [19]を踏襲して、丹念に調査や資料収集、分析を行なった。

---

19 マリノフスキーは、現地調査の全過程を 3 つの段階に区分して示した。第 1 段階では、部族生活のしっかりした骨

ブラッキングは音楽を「人間によって組織づけられた音響」として捉えていた。そして、「民族音楽学的分析の第一ステップは、音楽の採譜が、演奏者によって意図されるものを示すものであることを確認することである。…ある音楽家が特別の機会に、特定の曲をどのように演奏したかではなく、彼はその曲を演奏するときはいつもどのように演奏しようとしているのかを知る必要がある」[20]と述べて、音楽を作り手である人間の側から説明することを試みていた。彼は、音楽を孤立した現象とはみなさず、その構造を文化的基盤に関係づけて捉えようとする点において、A.メリアム[21]と共通した考えを持っていたともいえる。

また、ブラッキングは現地調査により明らかになったヴェンダ音楽の二重構造性について、次のように説明している。その表層構造（Surface Structure）は、音階や旋法、楽器と声のアンサンブルの選択や、五音音階と七音音階のリードパイプの音楽など、「音響パターンを知覚し再生することができる人ならば誰もが聞くことができ、学習することができるもの」[22]である。そして、深層構造(Deep Structure)は、「永遠に変化することのないものであり、ヴェンダの社会に全面的に参加することや、その上にヴェンダの文化が築かれるような社会的、認知的プロセスの無意識的な同化作用なくしては、学習することのできないヴェンダ音楽のもう一つの側面である。　…それは、成長し発展していく可能性があり、プロセスとして捉えられるべきものである。それはヴェンダ音楽の創造性の源」[23]である。このように、彼はヴェンダの人々が社会現象と関わって音楽作りをする過程を深層構造と捉え、その結果として産出される音楽の物質的な音響を表層構造と捉えていた。そして、人々の音楽的行為の本質を捉えるには、深層構造に注目すべきであることを指摘したのである。

さらにブラッキングは、音楽作りの結果よりも作る過程に注目して分析を行なうべきで

---

組みを明らかにすることであるとしている。そのために、具体的なデータを広範囲にわたって集め、比較し、つき合わせるという方法が示されている。第2段階では、第1の段階で明らかにした文化の骨組みに、血を通わせ、肉づけする作業が必要であるとの述べている。そのために、制度や慣習が実際にはどのように運用されるのか、など実生活の不可量部分を調査することが示されている。第3段階では、精神―つまり、原住民の見解、意見、発言をしるすべきであることと示されている。(Malinowski, B. 1922 *An Argonauts of the western Pacific:* An Account of Native Enterprise and Adventure in the Aschipelagoes of Melanesian New Guinea, London:George Routledge & Sons.（寺田和男・増田義郎訳 1967「西太平洋の遠洋航海者」泉 靖一(編)『世界の名著』59　中央公論社)

20 Blacking, J. 1967 *Venda Children's Songs.* Johannesburg: Witwaterdrand University Press p. 27

21 メリアムは、"The Anthropology of Music"（Merriam, A : 1964）と題した一書を著すことにより、音楽構造の研究に集中していた従来の民族音楽学に新しく人類学的視点を導入し、音楽学と人類学の融合をはかった。彼は、民族音楽学を「文化における音楽の研究」と定義づけた。

22 Blacking, J. 1971 Deep and Surface Structure in Venda Music, *Year book of the International Folk Music Concil* Ⅷ p. 95

23 前掲書 注22 p. 95

あることを、以下のように主張している。

音楽の価値とは、それを作ることに含まれている人間的な経験によって判断されるべきだと信じている[24]。

人間の音楽性の評価は、音楽外的な諸過程を考慮したものでなければならず、また、音楽の分析にもそれらが含まれるべきである[25]。

音楽の分析は本質的に、さまざまな種類の創造行為の結果の記述である。それは、個人や集団の生活の中にあり、組織づけられた音響の生産へと通じる、社会的、文化的、心理学的、音楽的出来事を説明しなければならない[26]。

また、ブラッキングは、彼が学んできた伝統的な西洋音楽の分析法が、ヨーロッパの文化に限られたものであり、ヴェンダの人々の音楽作りの過程を分析するには適用できないことから、文化に依拠した音楽の分析法「文化的分析(The Cultural Analysis)」こそ、人間の行動としての音楽を捉えるために必要であると主張し、その必要性と目的について以下のように述べている。

音楽分析のための一元的な方法が必要である。それは、音楽だけに適用されるのではなく、形式や社会的、情動的な内容と音楽の効用の両方を、無限にある変数間の関係を組織づけるシステムとして説明する方法である。…この分析法の目的は、単に人間の行動としての音楽の文化的背景を記述し、リズム、調性、楽器の音色や編成、上昇・下降音程、その他の専門用語を用いて様式の特殊性を分析することではなく、全体的なシステムの中で関わりあう部分として、音楽とその文化的背景の両方を記述することである。[27]

以上のブラッキングの主張と理論からは、子どもの音楽的行為の本質を見据えるために

---

24 J.ブラッキング著　徳丸吉彦訳『人間の音楽性』岩波現代選書 1978 p.72( Blacking, J. 1973 *How Musicl is Man?* University of Washington Press)

25 前掲書 注24 p.128

26 前掲書 注24 p.141

27 前掲書 注22 p.93

必要ないくつかの示唆を得ることができる。まず第1点として、音楽を作り手である人間の側から説明するべきであるという主張の中にみられる、現地調査の姿勢についての示唆が得られる。すなわち子どもの音楽的行為を、大人の音楽的偏見をはさまずに、できるだけ子どもの立場に立って理解すべきであるという点である。

次に第2点として、音楽の深層構造に注目すべきであるという指摘から、子どもが日常生活の中で音や音楽と主体的に関わって音楽作りを試みる過程をみることの必要性についての示唆が得られる。さらに第3点として、「文化的分析法」からは、子どもたちが表現した声や音、音楽の音響面のみを分析するのではなく、その行為が生み出される背景にある社会的、文化的、心理的な出来事も分析の対象とする、分析方法への示唆が得られる。

**②藤田芙美子の理論と、そこから得られる示唆**

藤田は、先にも述べた子どもの音楽的行為に関する民族誌学的研究（Fujita:1988)において、日本の子どもの音楽的表現の形式には、以下のような特徴があることを見出し、理論化した。

1）日本の子どもの「音楽的表現の形式」の基礎的な単位は、ひと呼吸周期で発話される日本語のフレーズ、語、音節によって作り出される。その音響構造は、その行動が起こったときの子どもの表現意欲の強さ、呼吸の長さ、日本語の音構造を変数として決定される。

2）日本の伝承的なわらべうたは、おそらく話し言葉から歌への変容を経て作り出されたものと考えられる。日本語の話し言葉と伝承的なわらべうたの音響構造の間には密接な関連性が認められる。

3）1)に述べた「音楽的表現の形式」は、日本の子どもたちのパフォーマンスに一貫して認められる。その基本的ルールは、話す行為、歌う行為、楽器を演奏する行為、踊る行為といった異なったあり方の創造的行為に共通するものであり、これらの創造的行為を結びつけ関連させているものの実態である。

また、藤田はこの理論の前段階として、以下のような日本語を話す行為にみられる音楽的側面について明らかにしている[28]。

1）ある語を話す行為において、その表現の形式は日本語の特質である相対的音高関係

---

[28] 藤田芙美子 1986 「話す行為にみられる音楽的側面」『国立音楽大学研究紀要』第21集 pp. 113-122

を保持する。

2）ある語を話す行為において、表現エネルギー（expressive energy）が大きい場合、高い音で発声される音節は語気（expressive peak）により押し上げられ、語の音節の音高関係は拡大される。表現エネルギーが小さい場合は、語の音高関係の標準が保持される。

3）表現エネルギーのピークは、高い音の音節あるいは母音におかれる。

4）一定の状況下で定められる時間単位は、個人の呼吸周期が基準になって作られる。個人はひと呼吸周期で話される語に含められる音節のまとまりの数に従ってひと呼吸周期の時間単位を等分に下位分割し、拍節的に語を発するのである。

以上の藤田芙美子の理論からは、子どもの音楽的行為の本質を見据えるために必要ないくつかの示唆を得ることができる。特に日本の子どもが作り出す音響の構造を決定する変数として、表現意欲、呼吸、日本語を挙げている点からは、第1に日本語のもつ音楽的側面に目を向けることへの示唆が得られる。藤田は、日本語の音構造の特徴として、旋律面では高低アクセント、リズム面では音節が等拍で発話されることを挙げて、それらの変化を観察の視点として取り入れている[29]。

さらに第2には、日本人に特徴的な呼吸に注意を払うことへの示唆を得ることができる。藤田は、有馬大五郎の「日本人に特有の音楽の仕方weiseがあること、それは呼吸法に並々ならぬ重点をおくものである」や「日常の話す行為から歌う行為に至るまで、日本人に一貫した音楽の仕方、ヴァイゼが認められ、それは日本人が長い年月をかけて工夫してきた呼吸法と関係が深い」という主張[30]に、観察視点に関する示唆を得た。そして、幼稚園の子どもたちがどのように呼吸をコントロールしているのかという視点を観察に取り入れた。

藤田が取り入れた観察の視点は、日本の文化の中で日本語を習得ながら育つ子どもの音楽的行為を観察し、分析しようとする本研究において、観察視点のもち方に示唆を与えてくれる。

**③2つの理論を背景にした「音楽的行為」の理解**

筆者は、上記でのべたように、ブラッキングの理論から、現地調査の方法について示唆を得た。また藤田の理論からは、観察視点についての示唆を得た。そして、保育園 1〜2

---

29 藤田芙美子 1998「日本の子どもたちの音楽性とその育ちに関する民族誌学的研究」『国立音楽大学大学院研究年報』第十輯 p. 58

30 有馬大五郎 1951 『日本人の音楽―国際歌手への道―』名曲堂 pp. 12-14, pp. 147-149

歳児クラスにおいて、以下のような方法で2年間現地調査を行った（岡林 2003）。

現地調査は、月に1～2回程度、午前9時から午後12時半（午睡）までの参加観察であった。保育には積極的に参加はしないが、子どもが関わりを求めてきたときには拒否せずに共に遊んだり、散歩のときには手をつないで会話をしながら歩いたりした。観察内容はフィールドノートとビデオテープに記録した。ビデオ記録は、デジタルカメラ1台を保育室のロッカーの上に設置して収録した。フィールドノートの記録は可能な限り観察中にも行ない、観察終了後に加筆をした。また、子どもや保育についての理解を深めるために、保育者へのインタビューも随時行なった。これらの資料の中から、保育者や子どもたちに「かーわってー」「いいよー」という応答唱に関わる音楽的行為がみられた場面を事例として抽出し、分析の対象とした。観察と分析には、藤田の理論を背景にして、「子どもが日常の場面で生じる情動を、呼吸を整え、言葉の音響面をまとめて、どのように音楽的な声と動作に作り上げているか」という視点を取り入れた。その結果、遊具の使用や手洗いの順番交代の場面で交わされる「かーわってー」「いいよー」というリズミカルな応答唱のやりとりの表現に、子どもたちがリズムにのって身体を動かす心地よさを感じたり、保育者や友達と声や呼吸を合わせて唱える楽しさを味わったり、情動を音楽にのせて発散させたりするなどの音楽的秩序の形成や音楽的情動の表れを見出すことができた[31]。

このように、大人の側からみると「指示的意味がぬけ落ちて音だけになった語に、周期的な抑揚とリズムがついた」だけとして切り捨てられかねない表現も、ブラッキングの理論や藤田の理論から得られた示唆に基づき、子どもの立場に立って民族音楽学的な分析を試みると、子どもたちが様々な気持ちや情動を音楽にのせて発散させたり、リズムに乗って身体を動かす心地よさを感じていたり、開放的な気分を作り出している実際が見出されるのである。

そこで、筆者は本節1項で「音楽的行為」として挙げた、②日本語の抑揚をもとに、一定の固定した音高で旋律的に言葉を唱えたり、音声をまとめる行為、③日本語の音（おん）をもとに、一定の拍節リズムで言葉を唱えたり、音声や動作を拍節的にまとめる行為、④一定の拍節リズムで、音声や言葉と動作を同期させる行為、⑤他者と間（呼吸）を合わせて、動作や声をタイミングよく同期させる行為などを、音楽的であると理解するのである。

---

31 岡林典子 2003 「生活の中の音楽的行為に関する一考察 -応答唱《かーわってー・いいよー》の成立過程の縦断的観察から一 p. 216

故に、本論文では、「音楽的行為」という語の概念を、本章第1節1項で述べたように、西洋音階でできた既成の歌を歌う行為のほかに、以下のように理解して用いることにする。

① 2音からオクターブにいたる旋律でできた歌をうたう行為

② 日本語の抑揚をもとに、一定の固定した音高で旋律的に言葉を唱えたり、音声をまとめる行為

③ 日本語の音（おん）をもとに、一定の拍節リズムで言葉を唱えたり、音声や動作を拍節的にまとめる行為

④ 一定の拍節リズムで、音声や言葉と動作を同期させる行為

⑤ 他者と間（呼吸）を合わせて、動作や声をタイミングよく同期させる行為

## 第2節　研究方法

### (1) 本論文で用いる研究方法について

どのような研究手法を採用するかは、研究者が依拠する理論とも密接に関わっている。筆者は、本論文において、ブラッキングの理論を背景に、子どもの音楽性を文化や社会と関わって育てられるものとして捉え、その成長・発達の筋道を明らかにすることを目指している。そこで、本論文では、先述した民族音楽学の理論と研究手法をもとに、フィールドワークとエスノグラフィの手法を用いることとする。

元来、フィールドワークとエスノグラフィは、人類学の研究手法である。近代人類学の父と呼ばれるマリノフスキーによって確立されたフィールドワークの手法を踏襲したブラッキングは、丹念に調査や資料収集、分析を行い、独自の理論と分析方法を構築した。ブラッキングの理論から、現地調査の姿勢や文化的分析法の示唆を得て、乳幼児の音楽的行為をあるがままに詳細に観察・記述し、その成長・発達の筋道を明らかにしようとする本論文においては、フィールドワークとエスノグラフィの手法を用いることが有用であるといえる。

序章でも触れたが、心理学領域において音楽に対する反応や能力などの発達的変化を捉えることに始まった従来の音楽的成長・発達に関わる研究は、主に実験法や実験的観察法などの研究手法が採られてきた。近年では、フィールドワークによる自然観察や参与観察の手法を用いた研究が、増加の傾向にはあるが、人類学的アプローチによる乳幼児の音楽的成長に関する縦断的研究は、まだ緒についたばかりの状況にある。故に、フィールドワークとエスノグラフィの研究手法を用いることによって、子どもが日常生活の中で、周り

の人々や育つ場の文化と関わって、音楽的成長をする過程を描き出すことができると考える。

### (2) 本研究の対象とフィールドワークの実際

本研究においては、筆者の長女を観察対象者とする。故に、本研究は一事例研究に過ぎないものである。筆者は養育者として関わりながら長女の日常生活における音楽的行為に関して縦断的に観察を進めている。以下に、観察に関する詳細を述べる。

【観察対象】

筆者の長女Y児（1996年4月12日生まれ）

【観察期間】

生後0か月～30か月（1996年4月～1998年9月）

※観察期間を生後0～30か月としたのは、以下の2つの理由による。

①村山貞雄らによって1983年～1985年に渡り、大規模に行われた幼児の発達と成長の調査[32]において、「ワンワン　ガ　アッチへ　イッタ」など整った文が言えるようになるのは、2歳前半で6割、2歳後半では9割といわれていること。

②観察対象のY児の言語獲得が、30か月（2歳半）時には多語発話が多くみられ、日常の話し言葉をほぼ獲得していると判断したこと。

【観察・資料収集・分析の方法】

観察は筆者1名で行なった。観察時間は毎週木曜に2時間と、これに加えて時間の許す限りビデオ撮影を行なった。また、行動の内容と状況を行動記録としてフィールドノートに筆記した。さらに、日々の育児日記をつけた。こうして収集されたデータ資料は、120分のＶＴＲテープが295本、フィールドノートとして大学ノートが9冊、育児日記[33]が5冊であった。これらの資料をもとにエスノグラフィを作成し、子どもと養育者の間に音楽的なやりとりがみられた場面を事例として抽出し、分析の対象とした。抽出した事例について、ブラッキング理論と藤田理論に依拠して具体的な分析を行った。音楽的側面の分析には、筆者が採譜し、現在一般的に用いられている記譜法によって楽譜にかきあらわしたが、これについては音楽の専門知識のある者[34]に確認を行った。尚、研究

---

32 村山貞雄 編 1987 『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査―保育カリキュラムのための基礎資料―』サンマーク社

33 日暮 眞・福岡秀興・飯田美代子監修 1996『私の育児日記』 森永乳業株式会社

34 東京学芸大学大学院楽理科出身で現在高校の音楽教員の職にある 高橋 恵 氏

者自身が子どもを養育する当事者であることによって、かかわり方が意図的に歪まぬよう、データの分析は観察開始より2年以上経過した後に開始した。

【Y児の日常生活と発育状況】

Y児は筆者の第一子として生まれ、他に兄弟姉妹はいない。筆者が妊娠中毒症であったため、出産予定日よりも5週(37日)早く、帝王切開にて生まれた。そのために、新生児の標準身長(約 50cm)や体重(約 3000g)に比べると、かなり小さく、身長 45cm、体重1908gであった。その後、生後1か月には、身長49cm、体重2808gになり、生後5か月には、平均身長、平均体重に達し、順調な成長過程がみられた。生後6か月までは、一日の殆どの時間を筆者(養育者)と共に過ごしている。生後6か月時より養育者は週に1日、大学の非常勤講師として勤務することとなり、12 時半～17 時半までベビーシッター（沖永良部島出身で18歳より関西に在住している1996年当時45歳の女性）に筆者の自宅にて保育してもらう。生後14か月～24か月までの期間は父親が単身赴任となり、Y児は週末のみ両親と共に過ごすこととなる。また、月に 1～2 度、祖父母との交流がある。

日常の遊びの多くは養育者と関わってのものである。また、メディアによる音楽的環境として、9 か月時からＮＨＫの子ども番組「ドレミファどーなつ（30 分)」を一日に 2 回程度視聴しているほか、市販の童謡ビデオ[35]も 1 日に 1～2 回程度視聴している。

35 講談社ビデオ/ よいこのビデオシリーズ 『よいこのどうよう1～3』

# 第２章　話し言葉・運動動作の発達過程の概観

日常生活における子どもの音楽的行為は、音声や言葉に動作が伴われたものが非常に多くみられる。例えば、段差のある場所から跳ぼうと構えている幼児が、呼吸を整えて、「イッ・セー・ノー・デー，　ピョン（跳ぶ）」と、４拍（律拍）にまとまった拍節的な言葉を作り出した後、次の拍（ピョン）で跳ぶ動作を起こしている場面などはよく目にするものである。また、ジャンケンをする数人の子どもが「サイ・ショは・グー（グーを出す）・●，ジャン・ケン・ポン（グー、チョキ、パーのいずれかを出す）」[1]（●は休止を表わす）と、互いに呼吸を整えて拍節を作り出し、言葉と動作をリズミカルに同期させる場面もよくみられる。

このような事実をふまえて、本論文は、子どもの音楽的な成長過程を話し言葉や運動動作の発達との関わりを中心に捉えようとするものである。乳幼児期の話し言葉や運動動作の発達は、遺伝要因や環境要因などによる個人差が大きいといえる。そこで、これらの発達をみていく場合には、一般的な発達過程を捉えるだけでなく、個人差についても考慮する必要がある。こうしたことから、本章では、一般的な子どもの話し言葉と運動動作の発達過程を概観するとともに、本研究の観察対象であるＹ児の話し言葉と運動動作の発達過程を辿り、それぞれを比較検討する。そうすることにより、一般的な発達に対する本論文の対象児Ｙの個人差を考慮することができると考えるからである。

## 第1節　話し言葉の発達過程の概観

### (1) 一般的な子どもについて

#### ◆生後１年間の音声発達の過程

子どもに初めての有意味語（初語）が現れる時期は、誕生後およそ１年くらいであるといわれている。子どもに初語が現れるまでの１年間には、ことばの獲得に向けて５つの発達段階が認められているが[2]、以下にそれを概説する。

《反射的発声期：月齢 0～1 か月》

最初の１か月に乳児が出す音声は、ほとんどが呼吸に伴って発せられる反射的な発声や

---

1 ポンの後に●を入れる場合もある。例えば「あいこ」になった場合は、次への進行からポンの後にも拍が刻まれる。ここではポンでとめているものと捉え、７拍ひとまとまりになっていると考えて偶数拍とはしない。

2 小嶋祥三 1999「声からことばへ」 桐谷 滋編『ことばの獲得』ミネルヴァ書房 pp. 1-36, 江尻桂子 2000 『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房

不快な泣き、叫びである。反射的でない音声を出すこともあるが、それは声道の共鳴が十分でない母音的な音声である。また、この時期は、正常な声帯の振動をともなっているが、声道が共鳴腔として充分に利用されないため、音声が鼻音化している。

《クーイング期：月齢 2～3 か月》

喉の奥をクーと鳴らすクー（coo）イングと呼ばれる発声や、笑いに伴う発声が現れるようになる。また、大人の発声に対して、声を出して反応するという行為がみられるようになる。このようにして、養育者との音声コミュニケーションが密接になっていく。

《拡張期：月齢 4～6 か月》

この時期は、「声遊び(vocal play)」の時期とも呼ばれ、金切り声やキーキー声(squeal)、うなり声(growl)、大きな声（yell）やささやき声（whisper)、唇を震わせて鳴らすブーブー音（raspberry)、子音と母音の組み合わせが不明瞭な音節からなる不完全な喃語（marginal babble）など、様々な種類の音声が発せられる。また、乳児の音声の自発性も増大し、子どもがひとりでいても音声を出し、楽しんでいるかのようにさえみえる。

《基準喃語期：月齢 7 ～10 か月》

この時期には、子音と母音による複数音節の反復からなる基準喃語が出現する。[bababa]、[mamama]などのように聞こえるものである。基準喃語は多くの点で音声言語と共通する特徴を持っている。そのため、この喃語の出現は生後 1 年間の音声発達過程における重要な変化とみなされる。

乳児の発したこのような基準喃語に対して、養育者は子どもが話し始めたとの印象を持ち、敏感に応答してやり、それにしばしば意味を付与する場面がみられる。江尻（2000）は「例えば、[mama]といった喃語は、まさに『ことば』らしく聞こえるものであり、『なあに、ママはここよ。』などのように、乳児の発声に対して母親は積極的に言語的意味を与える。こうした社会的フィードバックは、音声言語の発達を支える重要な要因の一つであると考えられる」[3]と述べ、養育者の応答を重視している。

《非重複喃語期：月齢 11～12 か月》

---

[3] 江尻桂子 2000 『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房　p. 124

不快な泣き、叫びである。反射的でない音声を出すこともあるが、それは声道の共鳴が十分でない母音的な音声である。また、この時期は、正常な声帯の振動をともなっているが、声道が共鳴腔として充分に利用されないため、音声が鼻音化している。

《クーイング期：月齢 2～3 か月》

喉の奥をクーと鳴らすクー（coo）イングと呼ばれる発声や、笑いに伴う発声が現れるようになる。また、大人の発声に対して、声を出して反応するという行為がみられるようになる。このようにして、養育者との音声コミュニケーションが密接になっていく。

《拡張期：月齢 4～6 か月》

この時期は、「声遊び(vocal play)」の時期とも呼ばれ、金切り声やキーキー声(squeal)、うなり声(growl)、大きな声（yell）やささやき声（whisper)、唇を震わせて鳴らすブーブー音（raspberry)、子音と母音の組み合わせが不明瞭な音節からなる不完全な喃語（marginal babble）など、様々な種類の音声が発せられる。また、乳児の音声の自発性も増大し、子どもがひとりでいても音声を出し、楽しんでいるかのようにさえみえる。

《基準喃語期：月齢 7 ～10 か月》

この時期には、子音と母音による複数音節の反復からなる基準喃語が出現する。[bababa]、[mamama]などのように聞こえるものである。基準喃語は多くの点で音声言語と共通する特徴を持っている。そのため、この喃語の出現は生後 1 年間の音声発達過程における重要な変化とみなされる。

乳児の発したこのような基準喃語に対して、養育者は子どもが話し始めたとの印象を持ち、敏感に応答してやり、それにしばしば意味を付与する場面がみられる。江尻（2000）は「例えば、[mama]といった喃語は、まさに『ことば』らしく聞こえるものであり、『なあに、ママはここよ。』などのように、乳児の発声に対して母親は積極的に言語的意味を与える。こうした社会的フィードバックは、音声言語の発達を支える重要な要因の一つであると考えられる」[3]と述べ、養育者の応答を重視している。

《非重複喃語期：月齢 11～12 か月》

---

[3] 江尻桂子 2000 『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房　p. 124

基準喃語が出現した後のこの時期を特徴づける音声は、非重複性の喃語である。例えば、[babu]や[bawa]のように、異なる種類の音節を組み合わせて産出される喃語である。この他に、意味は不明であるが何かを話しているように聞こえる、多様なイントネーションの発声(jargon)が現れてくる。そして、1 年を迎える頃、初めての有意味語である初語が現れる。

以上、生後 1 年間における音声の 5 段階の発達的変化を概観したが、喃語の音声面の発達は、初期には区切りのない同一音節の連続であったものが、2 音節ないしそれ以上の音節が単位となって区切られ、その間に短い声の休止があるような形が生じてくる。この区切りのあらわれは、発声反応の言語化、喃語行動から談話行動への発達的移行のきざしを示唆するものである（村田，1968)。

**◆1 歳から 3 歳にかけての言語発達の過程**

およそ生後 1 年で初めての有意味語が出現するが、その後の言語の獲得は、1 語発話、2 語発話、3 語発話の片言的な発話から多語発話の形式をとり、次第に成人の構文に近づいていくといわれている [4]。以下では、従来の知見 [5]に基づいて 1 語発話から多語発話への発達過程を概観する。

《1 語発話期：月齢 13～18 か月》

1 歳近くなる頃から、喃語の繰り返しのようなものではなく、意味が理解できるような 1 つの単語からなる発話、いわゆる 1 語発話（1 語文とも呼ばれる）を発するようになる。例えば、「パパ」「ママ」「ニャンニャン」といった語である。さらに、子どもが「ニャンニャン」と言ったとき、「ネコがいる」や「ネコが来た」というように、句または文としての意味を含んでいる場合がある。

この時期の語の種類では、子どもにとって身近な人間、食べ物、おもちゃ、動物などの名詞が多く、形容詞、動詞は比較的後から使われる。1 語発話期は 1 歳半くらいまで続くが、日本語の場合「アッタ」「ナイ」「イタ」「アチー」「ネンネ」「ダッコ」など、50 語く

---

4 黒田実郎監修 1985『乳幼児発達事典』 岩崎学術出版社 pp. 132-133

5 村田孝次 1968『幼児の言語発達』 培風館， 岡本夏木 1982『子どもとことば』 岩波新書， 志村洋子 1989『赤ちゃん語がわかりますか』丸善メイツ， 加瀬次男 2001『日本語教育のための音声表現』 学文社

らい話せるようになるといわれている[6]。また、このような有意味語を獲得していても、まだ喃語的発声（jargon〔ジャルゴン〕ともいわれる）は多く残っており、喃語音声の中に子どもがすでに獲得している語が含まれることは、この時期には珍しくないことである（村田, 1968；岡本, 1982）。

《2 語発話期：月齢 18～24 か月》

1 歳後半から 2 歳くらいにかけては、2 つの語を結びつける試みがなされ、2 語発話が始まる。例えば「マーちゃん・ブーブー」「ニャーニャ・イッチャッタ」「コーエン・イクノ」「アオイ・ブーブー」などのように表現される。こうした語の叙述内容は、子どものその時々の発話状況によって異なることがあり、「マーチャン・ブーブー」では、形容詞的な表現「これはマーちゃんの自動車です」とも、要請の表現「マーちゃんに自動車をとってちょうだい」とも「マーちゃんを自動車に乗せてちょうだい」とも解釈ができる。従って、子どもの身近にいる養育者は、発話の状況や脈絡、子どもの発音の強さ・高さ、感情の込め方などから表現の内容を把握して対応していくのである。

また、岡本（1982）は、1 人の女児のことばの獲得過程を詳細に追跡研究した結果、「クロ・ニャンニャン」「ニャンニャン・チョッキ」というように、2 語発話の段階で、子どもが同一音声でも、他の語との組み合わせにおいて、その語が果たす名詞的、形容詞的、動詞的な機能にしたがってその語を置くべき位置を巧みに使い分けていることを明らかにした。

《3 語発話から多語発話へ：月齢 25～36 か月》

喃語期の終わりから 1 語発話の期間までは比較的時間がかかるが、2 語発話以降、とくに 2 歳前後からは急に語彙数も増え、表現内容も多様になってくる。また 2 語発話がみられるようになると、2、3 か月の間に 3 語発話がみられるようになる。そして、個人差はあるが、3 歳ごろまでに獲得される語彙数は、およそ 900 語といわれている。この時期の発話は、電報文を思わせるような、テニオハなどの助詞、助動詞を除いた言い方なので、電報文と呼ばれることもある。例えば、「キイロイ・モーフ・オチタ」「ナンダ・コレ・ワカンナイ」「オモチャ・カッテ・ママ」といった表現である。この電報文の時期を経て、子どもは「多語発話」といわれる、より大人に近い話し方になっていく。

---

6 金田一春彦他編 1995『日本語百科大事典』 大修館 p. 1251

多語発話の特徴として、日本語では助詞の活用が現れる。また助詞の大部分は3歳くらいまでに覚えるといわれている。そして、「オカアサンガ　イタイイタイッテ　イッテタノ」というような複雑な文が2歳半ごろから話せるようになる。

### (2) 本論文の研究対象であるY児について

**◆生後1年間の音声発達の過程**

《反射的発声期：0～1か月》

生まれてから最初の約1か月間に、Y児の出す音声のほとんどは、呼吸に伴って発せられる反射的な発声や、不快な泣きの音声であった。但し、養育者の出産後の体調がよくなかったため、Y児の生後38日まで、母子ともに出産のために入院していた大学病院にそのまま入院していた。そのため、確実な観察記録は残っていない。

《クーイング期：2～3か月》

生後2か月11日（1996年6月22日）に、喉の奥をクーと鳴らすクーイングと呼ばれる発声がみられた。また、生後3か月19日（1996年7月30日）に、養育者の歌いかける声に対して、抑揚のある声を出して反応する行為がみられた。

《拡張期：4～6か月》

この時期は「声遊び（vocal play)」とも呼ばれる時期である。生後4か月13日(1996年8月24日)には、「ア～、ア～」と大きな抑揚で、これまでよりも少し長い目の発声がみられるようになった。また、生後5か月17日（1996年9月28日）には、高い声や、ささやくような柔らかい声、大きな声など、さまざまな種類の発声がみられた。これらの多くは主に養育者と関わっている場面でみられたが、ひとりでいるときにも、いろいろな声を出して楽しんでいる。

《基準喃語期：7～9か月》

生後7か月21日(1996年12月2日)に、[mamama][nenene]など、子音と母音による複数音節の反復からなる基準喃語がみられた。これらの音声は、養育者と関わる場面や、Y児がひとりでいるときに、腕を振ったり、手先を舐めたりしながら発声されていた。また、生後8か月26日(1997年1月6日)には、[tatata][jaja]など、子音が以前よりも増え、

よりはっきりとした発声がみられるようになった。

《非重複喃語期：10～11か月》

Y児には10か月6日(1997年2月17日)に[heju]という、反復される音節の子音と母音が異なる非重複喃語がみられた。また、11か月27日(1997年4月7日)に、養育者と共に動物の出てくる絵本[7]を読む場面で、「ワンワン」という初語がみられた。また、同日、養育者の「だめ」という言葉に、「メッ」と模倣して発声した。

初語の出現は、生後1年前後であるといわれている。生後11か月で初語の出現をみたY児の生後1年間の音声発達過程は、ほぼ一般的な子どもの発達過程に沿っているといえるだろう。

**◆1歳から3歳にかけての言語発達の過程**

Y児は、13～18か月(1歳～1歳半)にかけて、アッ、ワッ、などの感嘆詞をはじめ、モー（牛），ニャー（猫），コッチン（時計），ナナ（鼻）などの名詞を含む幾つかの有意味語を習得した。これらの有意味語は1語発話や談話的な喃語の中で持ち出されるという状況にあった。

また、18か月には僅かながら、「モモ・オチタ」「クルマ・キタヨ」などの2語発話が現れ始めた。この2語発話には、「落ちた」という動詞や、「(来た）ヨ」、などの助詞が含まれている。一般的に子どもに2語発話がみられるようになるのは、18か月（1歳半）頃からであり、語彙の発達は、感嘆詞から始まり、名詞、動詞、形容詞と進むといわれている。また、助詞は1歳中期からの語連鎖の発生とともに発達するといわれている[8]。この時期のY児の言語発達は、おおよそ一般的な子どもの発達過程に沿っていることが示唆された。

さらに20か月には「モット・アメ・ホシイ」「オトウサン・クチュチタ・オセンタク（お父さんの靴下が洗濯してある)」などの3語発話が現れた。また、21か月には養育者と絵本をみながら、「クマチャン・ホットケーキ・モッテルネ・オベントウ（熊さんがお弁当にホットケーキを持っている)」という4語発話が出現した。23か月には、家でボール遊びをしながら、昼間に公園で遊んだ年長の女児のことを思い出して、養育者に「オネエチャン・ボール・チテタネ(してたね)・ポーンッテ・ピンクノ・ボール」と話しかける多語発

---

[7] 木村裕一 1989『ごあいさつあそび』偕成社

[8] 村田孝次 1968 『幼児の言語発達』培風館 pp. 152-167

話が現れた。その後は、24か月にも「ネコチャン・ナイテルネ・スズメチャンガ・ドウシタノッテ・シテルネ」という多語発話がみられ、順調に話し言葉を獲得していった。

また、25 か月頃からは、「キュウキュウシャガ・ピーポーピーポー・ユウテタ」(25 か月)、「コレ・オカアサンガ・カッテクレテン」(26か月)、というような関西弁の特徴（下線部）が次第に現れるようになった。

上述したように、本項ではY児の言語獲得に関して、生後30か月（2歳半）までの発達状況を概観してきた。Y児は2語発話期までは、ほぼ一般的な発達時期に沿った成長をみせてきたといえる。しかし、その後、20か月で3語発話が出現し、さらに21か月では僅かながら4語発話が出現し、それ以降は順調に話し言葉の獲得を深めていった。これは、3語発話がおよそ25か月(2歳)頃から出現するという一般的な発達時期に比べると、少し早い言語発達状況であるといえるだろう。

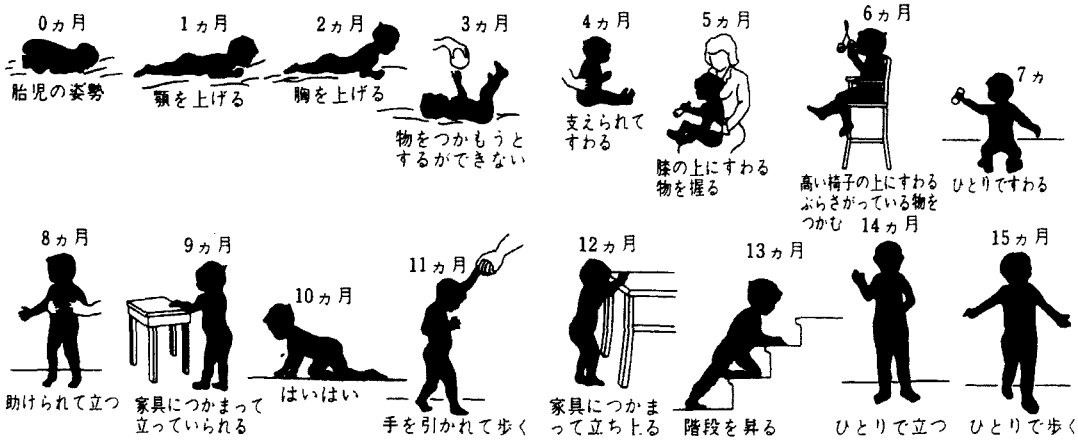
## 第2節　運動動作の発達過程の概観

### (1) 一般的な子どもについて

#### ◆移動運動の発達

新生児以降の移動運動の発達は、一定の秩序に従って、順を追って変化を示すといわれている[9]。以下の図2−1は、シャーレイ(Shirley, M. M)[10]による姿勢と移動運動の発達を示したものである。

**図2−1　姿勢と移動運動の発達**




9 川島一夫 編著 2004 『図でよむ心理学 発達〔改訂版〕』福村出版, クルト・マイネル 著/ 金子明友 訳 1981『マイネル スポーツ運動学』大修館書店, 滝野匡悦・秦 一士 編著 1981 『現代児童心理学要説』北王路書房

10 Shirley, M. M. 1933 The first two years. *Child Welfare Monograph,* 2, 7. Monneapois: Univ. of Minnesota Press.

新生児をうつぶせに寝かせると、頭を床につけ、そのままじっとしているが、1 か月を過ぎると少し頭を持ち上げる。移動のための最低条件である首のすわりは、およそ生後 3 か月でみられるようになる。また、最初の移動運動である寝返りは、4～5 か月頃からできるようになり、6 か月頃にはひとりで座ることができるようになる。次に、8 か月頃から這うことができるようになり、ひとり立ちの姿勢を経て、14～15 か月頃にひとりで歩くことが可能になる。このように、一般的には 1 歳を過ぎた頃から、ひとり歩きが可能になるといわれているが、歩行開始年齢には、かなり個人差があることも考慮しなくてはならない。

**◆全身運動の発達**

個人差はあるが、一般的にはほとんどの子どもが、1 歳半までにひとり歩きが可能になる。歩行が一通り完成すると、幼児は次に、頭、首、腕、脚など身体の各部が協応した全身運動を展開し、走ったり、跳んだり、ぶら下がったり、投げたりすることに熱中する。乳児期の運動系の発達は 1 つの発達系列が支配的であるが、1 歳以降では多くの系列が並列的に発達を開始するので、いろいろな運動技能の習得が同時に始まるといえる。

### (2) 本論文の研究対象であるＹ児について

第 1 章で述べたように、Ｙ児は出産予定日よりも 5 週(37 日)早く生まれた。そのために、新生児の標準身長(約 50cm)や体重(約 3000g)に比べると、かなり小さく、身長 45cm、体重 1908g であった。 しかし、身体的な問題は特になく、生後 3 か月には首がすわり、生後 5 か月にはうつ伏せで胸を上げることや，寝返りができるようになった。

6 か月には支えがあれば座れるようになり，7 か月には支えなしで座れるようになった。8 か月には歩行器やハイハイで移動するようになり，つかまり立ちも可能になった。 11 か月には初歩がみられ，12 か月にはひとりで歩くことができるようになった。また、階段を這って上ることもできた。

16 か月には室内用の小さな滑り台の階段を、手すりを持ってひとりで上った。17 か月になると、幅の広い公園の階段を一段ごとに足踏みしながら、手すりを持たずにひとりで下りることができた。まだ足を左右交互に出すことはできないので、一歩下りるごとに、身体のバランスをとるための休みを入れ、その場でちょっと足踏みをするという状態であった。19 か月には両足そろえて盛んにジャンプするようになった。また、20 か月にはボールを蹴ることができるようになった。22 か月には、20 ㎝くらいの高さから跳ぶことができる

ようになり、23か月には35㎝くらいの高さの台から跳ぶようになった。さらに、26か月には足を少し高めに上げて走ることができるようになった。

以上、30か月（2歳半）までのY児の運動動作の発達過程を概観してきた。出産予定日よりもひと月以上早く生まれたY児であるが、一般的な運動動作の発達にそって、順調に成長を遂げていることが明らかであった。ジャンプや階段の上り下りは、一般的な発達過程よりも少し早いように思われる。

## 第3節　本章のまとめ：一般的な子どもと研究対象Y児の発達過程の比較

本章では、第1節・第2節において、一般的な子どもの話し言葉・運動動作の発達過程と、本研究の観察対象であるY児の話し言葉・運動動作の発達過程を概観した。本節では、まとめとして、一般的に認められる乳幼児の話し言葉・運動動作の発達過程と、Y児にみられた発達過程を表にして比較し、Y児が一般的な子どもの発達過程に対して、どの程度の個人差を有しているかを考察する。

表2－1は、話し言葉と運動動作の発達過程に関して、一般的な子どもとY児を比較したものである[11]。Y児の音声言語の発達については、表より2語発話の出現時期までは、一般的な子どもとほぼ同様の発達を示していることが読み取れる。しかし、その後の3語～多語発話の出現までは、一般的な子どもよりも4か月程度、成長が早いことが読みとれる。

運動動作の発達については、1年を過ぎた頃から、階段のぼりやジャンプに関して、一般の子どもよりも、5～7か月程度早い成長を示していることが、表より読みとれる。この点に関しては、子どもの身近な生活環境の中に、階段や室内用の滑り台などの、自然に運動動作を促進するような物的環境があるかどうかという物的な環境要因や、高いところからジャンプするような行為を容認する養育者であるかどうかという人的な環境要因、さらには子どもの生得的な運動能力などの遺伝的要因などが複雑に関わるのではないかと考えられる。以上のことを考慮して、Y児の発達過程を全体的に判断すると、Y児は一般的な子どもよりも少し成長が早いといえるだろう。

---

11　一般的な子どもの発達的特徴として各月齢に挙げた内容は、以下の文献に基づき、約75%の子どもができるものとした。運動動作については、津守 真・稲毛教子著 1995 『増補 乳幼児精神発達診断法 0～3才まで』大日本図書，日暮 眞・福岡秀興・飯田美代子監修 1996『私の育児日記』 森永乳業株式会社 に基づいている。話し言葉については、江尻桂子 2000 『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房，村田孝次 1968 『幼児の言語発達』 培風館，　加瀬次男　2001　『日本語教育のための音声表現』　学文社 に基づいている。

【表 2-1】　一般的な子どもとＹ児の発達過程の比較（作成：岡林典子）

| 月齢 | | 0～1 か月 | 2～3 か月 | 4 か月 | 5 か月 | 6 か月 | 7 か月 | 8 か月 | 9 か月 | 10 か月 | 11 か月 | 12 か月 | 13 か月 | 14 か月 | 15 か月 | 16 か月 | 17 か月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 運動動作の発達 | 一般的な子ども | うつ伏せで顎をあげる | 首がすわる | 支えがあれば座れる | うつ伏せで胸をあげる/ 支えて立たせると、足を伸縮させる | ・寝返りができる<br>・支えなしで座る | | 支えがあれば立っていられる | つかまって立ちあがる | ・ハイハイでさかんに移動する<br>・つたい歩きができる | 支えなしで数秒間立っていられる | | 2，3 歩ひとりで歩く | ・階段をはってのぼる<br>・ひとりで歩く | | | |
| | Ｙ児 | うつ伏せで顎をあげる | 首がすわる | | うつ伏せで胸を上げる/ 支えがあれば座れる | 寝返りができる支えて立たせると足を伸縮する | 支えなしで座れる | 支えがあれば立てる/ つかまって立ち上がる | ハイハイでさかんに移動する | 支えなしで数秒立っていられる | 10 歩程度ひとりで歩く/ 階段をはってのぼる | ゆっくりだが、30m 程度ひとりで歩く | しっかりとした足取りで歩く | | 室内用滑り台の階段を、手すりを持ってのぼる | | 幅広い階段を一段ごとに足ふみを入れて下りる |
| 音声言語の発達 | 一般的な子ども | 反射的発声期 | クーイング期 | 拡張期 | | | 基準喃語期 | | | | 非重複喃語期 | | 初語の出現～1 語発話期 | | | | |
| | Ｙ児 | 反射的発声期 | クーイング期 | 拡張期 | | | 基準喃語期 | | | 非重複喃語期 | 初語の出現 | 1 語発話期 | | | | | |

| 月齢 | | 18 か月 | 19 か月 | 20 か月 | 21 か月 | 22 か月 | 23 か月 | 24 か月 | 25 か月 | 26 か月 | 27 か月 | 28 か月 | 29 か月 | 30 か月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 運動動作の発達 | 一般的な子ども | 手すり、片手に支えられて、階段を上り下りする | | | | 滑り台にのぼり、すべる | 両足でピョンピョン跳ぶ | ひとりで一段ごと両足をそろえて階段を上り下りする | | | | | | ・20cm くらいの高さから跳ぶ ・走る |
| | Ｙ児 | 室内用の滑り台をすべる | 両足をそろえて跳ぶ | ボールを蹴る | | 20cm くらいの高さから跳ぶ | 35cm くらいの高さから跳ぶ | | | 走る | | | | |
| 音声言語の発達 | 一般的な子ども | 2 語発話期 | | | | | | 3 語～多語発話期 | | | | | | |
| | Ｙ児 | 2 語発話の出現 | | 3 語発話の出現 | 4 語発話の出現 | | 多語発話の出現 | | | | | | | |

# 第３章　話し言葉の発達段階からとらえた音楽的行為の変化過程
## ～養育者とＹ児のやりとりを中心に～

前章では、一般的な子どもの話し言葉・運動動作の発達過程と、本研究の観察対象であるＹ児の話し言葉・運動動作の発達過程を概観した。また、それらを比較・検討し、Ｙ児が一般的な子どもよりも、少し早い成長過程にあることを示した。

話し言葉の獲得過程は、喃語から初語の出現、原言語[1]、１語発話、２語発話、３語から多語発話へと進むが、その進行の度合いは個人差が大きい。本章では、はじめにＹ児が話し言葉をどのように増やしていくのかについて、その具体的な言葉の内容を示し、獲得過程における発達段階を区分する。そして、話し言葉の発達段階に沿って、Ｙ児にどのような音楽的行為がみられるのか、その変化の過程を捉えて分析を試みる。

### 第1節　Ｙ児の話し言葉の獲得過程における発達段階の区分設定

本節では、次節以降で話し言葉の獲得段階に沿って、音楽的行為に関する事例を分類・整理するために、話し言葉の発達段階の区分設定をする。そのために、生後 0～30 か月までの期間に養育者が記録した観察日誌と、ＶＴＲによる記録をもとにして、Ｙ児が発した音声や具体的な言葉の内容を、月齢ごとに書き出した。そして、それらを話し言葉の発達的変化に基づいて、７つの段階に区分し、表 3-1 にまとめた[2]。以下に、７つの発達段階と区分設定の理由を述べる。

**【Ｙ児の話し言葉の獲得過程における発達段階の区分設定と設定理由】**

**①　前言語期（生後 0～10 か月）**

Ｙ児には、生後 11 か月 27 日に初語が出現し、その後１語発話期へと移行していくので、第１段階は初語の出現するまでの生後 0～10 か月とする。

**②　１語発話期　（生後 11～17 か月）**

**(1)　１語発話前期　（生後 11～13 か月）**

11 か月に初語が出現してから、18 か月に２語発話が出現するまでを、１語発話期と

---

[1] 子どもの言語発達を研究している小椋たみ子は、「日本語にはなっていないが文脈から意味のわかる音声」を原言語と定義し、「原言語の中で分節していない音で構成され、話しかけているような音声」を Jargon〔ジャルゴン〕と定義している（小椋たみ子 1999『初期言語発達と認知発達の関係』風間書房 p. 218）。また、元京都女子大学教授の岡本夏木先生から、有意味語が出現してからも、まだ多く残る喃語的発声、談話的な喃語をジャルゴンと呼ぶというご助言を戴いた。

[2] 表 3-1 では、区分がわかりやすいように、月齢の欄を色分けしてある。

する。初語出現の 11 か月から 13 か月にかけては、「アッ」「ワッ」などの感嘆詞や「ニャーオ」「ピョン」「ゴーン」などの擬音語が少しずつ増えていった。14 か月になると、「パンニャ(パンダ)」「メンメ(目)」などの名詞が現れた。そこで、名詞が現れるまでの生後 13 か月までを 1 語発話前期と設定した。

**(2) 1 語発話後期　(生後 14〜17 か月)**

生後 14 か月で名詞が現れ、17 か月までの間に語彙が増加していった。そこで、14 か月以降を 1 語発話後期と設定した。

**③ 2 語発話期　(生後 18〜19 か月)**

18 か月に入ると、「モモ・オチタ (桃のおもちゃが落ちた)」というはじめての 2 語発話が出現した。その後、19 か月にかけて、「オチャ・ホシイ」「ジドウシャ・コワイ」「ニャーニャ・イッチャッタ」など、順調に 2 語発話が増えていったので、この時期を 2 語発話期と設定する。また、この時期は前の時期よりもさらに語彙が増え、1 語発話も頻繁に出現した。カキ、イチゴ、バナナなどの果物の名前や「アリガトウ」「コンニチワ」などの挨拶の言葉も身につけていった。

**④ 3 語〜多語発話期 (生後 20〜30 か月)**

**(1) 3 語〜多語発話前期(生後 20〜22 か月)**

生後 20 か月にはいると、2 語発話の安定とともに、「オフロ・タッチ・コワイ (お風呂で立つのは恐い)」「オカータン・ピアノ・ヒクノ」「モット・アメ・ホシイ」など 3 語発話が出現した。しかし、3 つの言葉が助詞を省いた形で並ぶ電報文のような発話であった。23 か月以降には「ユカチャンノクレヨン」「ジテンシャニノッテ」「コップガスベッタ」のように助詞(網掛け部分)が少しずつ使えるようになった。そこで、助詞が出現するまでの生後 20〜22 か月の期間を 3 語〜多語発話前期と設定した。

**(2) 3 語〜多語発話中期(生後 23〜25 か月)**

生後 23 か月以降には助詞が少しずつ使えるようになってきた。また、26 か月以降は、「オカアサンガカシテクレテン(〔貸してくれた〕という意味)」「ボウシ・ミタイヤ(〔みたいだ〕の意)」「ニアッテルヤンカ (〔似合っているじゃない〕の意)」などの関西弁の言い回し(下線部)が身についてくる。そこで、生後 23〜25 か月の期間を 3 語〜多語発話中期と設定した。

**(3) 3 語〜多語発話後期(生後 26〜30 か月)**

生後 26 か月以降の関西弁が身についてくる時期を 3 語〜多語発話後期と設定した。

【表 3-1】　Ｙ児の話し言葉の獲得過程とその内容　（作成：岡林典子）

| 月齢 | 0～1か月 | 2～3か月 | 4か月 | 5か月 | 6か月 | 7か月 | 8か月 | 9か月 | 10か月 | 11か月 | 12か月 | 13か月 | 14か月 | 15か月 | 16か月 | 17か月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ｙ児の運動動作の発達 | うつ伏せで顎をあげる | 首がすわる | | うつ伏せで胸を上げる/ 支えがあれば座れる | 寝返りができる | 支えなしで座れる | 支えがあれば立てる/ つかまって立ち上がる | ハイハイでさかんに移動する | 支えなしで数秒立っていられる | 10歩程度ひとりで歩く/ 階段をはってのぼる | ゆっくりだが、30m程度ひとりで歩く | しっかりとした足取りで歩く | | 手すりを持って階段をのぼる | | ひとりで一段ごと両足をそろえて階段を下りる |
| Ｙ児の音声言語の発達 | 反射的発声期 | クーイング期 | 拡張期 | | | 基準喃語期 | | | 非重複喃語期 | 初語の出現<br>1語発話期 | 1語発話期 | | | | | |
| Ｙ児の言葉の内容 | 呼吸に伴って発せられる反射的な発声や、不快な泣きの音声 | 喉の奥をクーと鳴らす発声や、抑揚のある声 | 「ア～、ア～」という大きな抑揚のある、少し長い目の発声 | 高い声やささやくような柔らかい声、大きい声などさまざまな種類の発声 | | mamama, nenene など、子音と母音による複数音節の反復からなる基準喃語 | tatata, jaja など、よりはっきりした発声 | | heju という反復される子音と母音が異なる非重複喃語 | 【1語】<br>ワンワ<br>ワン<br>メッ | 【1語】<br>ワンワン。ニャー。ピョン。アッ。 ワッ。バァ。バッ。ゴーン。ガーン。ヨッチョ(よいしょ)。<br>など | 【1語】<br>ワウワウ。ニャーオ。メッ。ココ。ワァー。アッ。バァ。ジャーン、シュッ。プツプツ。ポタポタ。<br>など | 【1語】<br>パンニャ（パンダ)。メンメ(目)。ココ。ピョン。ヤーショ(よいしょ)。ヨイ。アッ。 バァ。バッ。アッタ。<br>など | 【1語】<br>パンチ（パンツ)。ボーリュ（ボール)。チッタ（落ちた)。ナイナイ。ワウワウ。チュウチュウ。ジャー。バァ。 コエ(これ)。 ポーン。ヒトーチュ。ブーダン（ブーラン)。 など | 【1語】<br>トウ(ありがとう)。チッチ(おしっこ)。 レッシー（子ども番組のキャラクター名)。ヨイショ。ニャーニャ。コレ。 ハイ。ジャー。ワァー。 アッ。アッタ。 | 【1語】<br>オチャ。アシ。オミミ。 ナナ(鼻)。ツーツー(うどん)。パカ(馬)。コッチン(時計)。カータン(お母さん)。ハイ。ゴッツン。ポーン。トン。ボン。ワァ。アッ。アイウ。ニャーオ。 など |

| 月齢 | 18か月 | 19か月 | 20か月 | 21か月 | 22か月 | 23か月 | 24か月 | 25か月 | 26か月 | 27か月 | 28か月 | 29か月 | 30か月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ｙ児の運動動作の発達 | | 両足でピョンピョン跳ぶ | | | 20ｃｍくらいの高さから跳ぶ | 35ｃｍくらいの高さから跳ぶ | | | 走る | | | | |
| Ｙ児の音声言語の発達 | 2語発話の出現 | | 3語発話の出現 | 4語発話の出現 | | 多語発話の出現 | | | | | | | |
| 言葉の内容 | 【1語】<br>フウセン。コアラ。カキ。イチゴ。バナナ。オクチ。オミミ。オメメ。ハナ。アッタ。コワイ。アリガトウ。コンニチワ。ポンポン。<br>など<br>【2語】<br>モモ・オチタ。ブーラン・コウエンデ。クルマ・キタヨ など | 【1語】<br>リンゴ,カキ,ブドウ,イチゴ,クルマ,ハッパ,バイバイ,キイロ,アオ, など<br>【2語】<br>ハイ・ドウゾ。オチャ・ホシイ。コローン・ネンネ。 キイロイ・モウフ。ニャーニャ・イッチャッタ。シール・ナイヨ。<br>など | 【2語】<br>アレ・ホシイ。クチュチタ・ハケル（靴下はける)。エンピチュ・チョーン。ドラエモン・クルクルー。など<br>【3語】<br>モット・アメ・ホシイ。オトウサン・クチュチタ・オセンタク。ドラエモン・オカシ・タベタイナ。など | 【2語】<br>オダンゴ・ネベタ（食べた)。ハイ・オカアシャン。オハナ・デタ（鼻が出た)<br>【3語】<br>クマチャン・イタイイタイ・ナッタ。キレイニ・ナオッタ・ネエ。マタ・コッチ・キテ。<br>【4語】<br>クマチャン・ホットケーキ・モッテルネ・オベントウ | 【2語】<br>エンピチュ・オレタ。ブランコ・オモシロイ。イッチョニ（一緒に)・ノム 。<br>【3語】モット・コレ・イルノ。イツ・カゼ・ヒイタ。コレ・ナンダ・オバアチャン。マタ・ブランコ・チュルノ（するの)。コレ・ミテゴラン・サンカク。<br>【四語】アッ・コンナ・チッチャイ・ハッパ。 | 【2語】<br>ユカチャンノ・クレヨン。モグモグ・シテルネ。オリボン・ツケテル。<br>【3語】アンパンマン・ジテンシャニ・ノッテル。セーター・コチョコチョ・シヨウカ。オオキナ・シッポ・デテキタヨ。【多語】オネエチャン・ボール・シタネ・ポーンテ・ピンクノ・ボール | 【3語】<br>カメラニ・ウツッテルノ・ダレ。オイスニ・オスワリ・スルノ。ドラチャンノ・コップガ・スベッタンダ。オカアサンニ・ハミガキ・シテモラウノ。【多語】ネコチャン・ナイテルネ・スズメチャンガ・ドウシタノッテ・シテルネ。オカアサン・オカネ・チョウダイッテ・イッテ。 | 【3語】<br>ドラエモンノ・アシガ・ミエタ。オボウシ・ミタイナ・カオシテル。キュウキュウシャガ・ピーポーピーポー・ユウテタ。オカアサンモ・シャンプー・シタ？ 【多語】ユカチャン・エプロン・スルノ・コレ。キイロイ・モウフ・モッテ・スベリンコ・シタ。オテテヲ・アワセテ・ゴチソウサマ・デシタ。 | 【3語】<br>オカアサン・ジョウズヤナア。トテモ・ヨク・ミエル。オカアサン・スリッパ・ドコイッタ？ 【多語】コレ・オカアサンガ・カッテクレテン。オーイ・オカアサーン・イソイデ・カエッテクルヨ。オヤ・ピンクノ・ボールハ・ドコイッタカナ？オチュクエノ・ウエニ・コッチューンッテ・アタッテナー・オハナ(鼻)ガ | 【3語】<br>オボウシ・ミタイヤ・ホラ。コレ・ヨク・ニアッテルヤンカ。<br>【多語】ヤネノ・ウエニ・ノッテルカラ・マッテテネ。バイキンマン・ナニカ・オカシ・カイニイクカナァ。アッ・ブロックアソビヤ・コレ・ミテ。ユカチャン・ブランコ・シテンネ・オカアサント・イッショニ。 | 【3語】<br>ユカチャンガ・ヒコウキニ・ノッテタカラ。オカアサン・ナニ・ヤッテンノ。【多語】アンパンマンノ・パンツュ・オセンタク・スルンダ。チョット・オカアサン・キイロイ・モウフト・オレンジノ・カボチャ・トッテクレル？アッ・マックラ・ナッテナイワ・ホラ・ココ。チョット・マッテ・ワタシガ・オリルカラ。 | 【多語】<br>YMCAデ・タイソウノ・ユカチャンガ・オテテ・ツナイデ・ドア・アケタラ・タイソウシテンネ。クスリハ・モウ・オバアチャンニ・ワタシタノ？ココニ・カエルチャンガ・ツイテテ・ソレデ・オテテ・アラッテンナァ・ゴシゴシッテ。ガンコチャン・「トイレ・イキタイヨー」ッテ・ユウテタネ。 | 【多語】<br>モウ・ドラエモン・オオキイカラ・ブランコニ・ハイレナイ・ハイレタ・ホラ・チョッキシ・ハイッテル・ホラホラ・ミテ。<br>など |

## 第2節　前言語期にみられるＹ児の音楽的行為について

前節では、Ｙ児に初語の出現するまでの生後 0～10 か月までの期間を、前言語期とすることを示した。本節では、前言語期のＹ児と養育者（執筆者）のやりとりの中でみられた音楽的な音声、言葉や運動動作について、事例に基づき分析と考察を進める。

### (1)Ｙ児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

生後 5 か月にはうつ伏せで胸を上げることや、寝返りができるようになった。生後 6 か月には支えがあれば座れるようになり、7 か月には支えなしで座れるようになった。生後 8 か月には歩行器やハイハイで移動するようになり、つかまり立ちも可能になった。

【話し言葉の獲得状況】

生まれてから最初の約 1 か月間に、Ｙ児の出す音声のほとんどは、呼吸に伴って発せられる反射的な発声や、不快な泣きの音声であった。生後 2 か月に、喉の奥をクーと鳴らすクーイングと呼ばれる発声がみられた。また、生後 5 か月には、高い声や、ささやくような柔らかい声、大きな声など、さまざまな種類の発声がみられた。

生後 7 か月後半になると、[mamama][nenene]など、子音と母音による複数音節の反復からなる基準喃語がみられた。さらに 10 か月には[heju]という、反復される音節の子音と母音が異なる非重複喃語がみられた。

### (2)観察事例の分析と考察

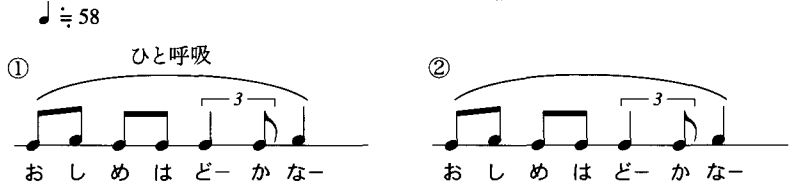
次の事例 3-1 から 3-3 は、養育者の働きかけの中にみられる音楽的行為の事例である。

**【事例 3-1】養育者が言葉を、2 音旋律で 4 拍（律拍）にまとめて、語りかける**

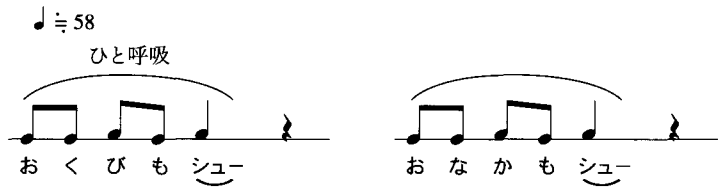
**（生後 1 か月 14 日）【1996 年 5 月 25 日】**

午後 1 時過ぎ、養育者はＹ児に沐浴をさせようと、衣服を脱がせ始めた。「おしめはどーかなー(譜例 3-1)」と 2 回唱えながら、おむつをはずしていく。そして、Ｙ児の肌着の前を開き、「お首もシュー、おなかもシュー(譜例 3-2)」などと言いながら、頭、首、お腹にガーゼで石鹸をつけていく。Ｙ児は手足を伸縮したり、身体をもぞもぞと動かしたりしている。

【譜例 3-1】　《おしめはどーかなー》　採譜者：岡林典子



【譜例 3-2】　《おくびもシュー》　採譜者：岡林典子




この場面は、Y児の音楽的行為というよりも、養育者がY児に語りかけた言葉が、自然に旋律的・拍節的になった音楽的行為であるといえる。それは、養育者がまだ言葉のしゃべれないY児と気持ちを通わせようとして無意識に働きかけた行為の結果である。

養育者の言葉かけは、日本語の音楽的な特徴 [3]に基づいて言葉が拍節的に、そして旋律的にまとめられている。旋律は、関西弁の「おしめ」「おくび」「おなか」（下線部が低くなる）などの、話し言葉の高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされている。それは、2度音程 [4]に基づく2音旋律で、上の音で終止する唱えうたのようである。またリズムについては、第1にひと呼吸の時間単位が、「おしめは・どうかな」「お首も・シュー」という言葉のまとまりで2等分されている。そして、さらに音節が、「おし・めは・どーか・なあ」「おく・びも・シュー・●」（●は休止を表す）と、2音ずつにまとめられ、4拍（律拍）のまとまり [5]が作り出されている。ここには、日本語を話すわれわれが言葉をリズミカルに唱える場合に、それまで無意識に身につけてきた基本的なきまり [6]を用いているこ

---

[3] 民族音楽学者の小泉文夫は、日本語の音楽的特徴として、ピッチ（高低）アクセント・平らなイントネーション・シラブルの等拍性・強弱要素の希薄さなどを挙げている。〔小泉文夫1977『音楽の根源にあるもの』青土社 pp. 150-174 〕

[4] 長2度音程ではあるが、平均律で用いられるような長2度に基づくものではない。

[5] ①言語学者の坂野信彦は、日本語の音数律（特定の音数構成によって成立する特別なリズム）の基本が、2音を1律拍とする4拍子進行によって成立するものであり、8音が日本語の音数律の原型をなすものであると指摘している。〔坂野信彦 2002 「日本語の音数率」飛田良文/佐藤武義編 『現代日本語講座 第3巻 発音』pp. 124-142 〕
②小泉文夫は「日本語の日常的な発音の中ですでにあらわれ、それが歌になると一そう顕著になる傾向として、『2字ずつまとまる』性格があることを指摘しておかなければならい」と述べている。〔注3 p. 163〕
③作曲家の間宮芳生は「2字ずつかためて唱えるリズムのとり方」を、さらに3種類に分類し、(1)等分の形、(2)前へよる形、(3)はずむ形、と呼んでいる。〔間宮芳生 1957「日本民謡におけるリズム」『音楽芸術』 7月号 pp. 15-26, 内田るり子編 『間宮芳生 日本民謡集』1975 全音楽譜出版社 pp. 132-143〕

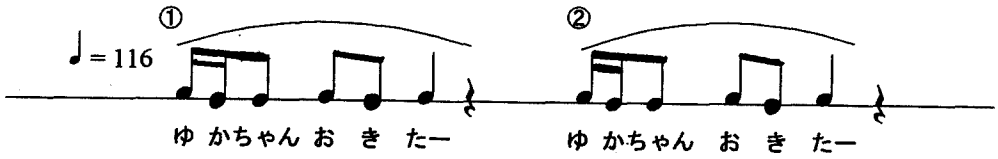
[6] 坂野信彦は、4拍子の拍子進行に乗せるために日本語を話すわれわれが無意識に身につけている基本的な定則を、以下のように指摘している。
(1)2音ずつに区切って拍子をとる　(2)8音に満たない場合は、不足ぶんを休止として末尾に充当する
(3)6音以上の句で3音めで切れる場合は、冒頭に1音分の休止を置く
また、日常の一般的な日本語の発音の原則についても、以下のように指摘している。
(1)どの音も同等の長さで発音する（「いっぽん」のように促音も撥音も1音分の長さをとる）、
(2)2音ずつに区切ってゆき、4音でまとまりを作る（「からすの」も「めくばせ」も機械的に「から」「すの」「めく」「ばせ」と区切る）、というものである。（前掲書4の①）

とが見出せる。

**【事例 3-2】養育者が歌うように呼びかける ①　（生後 5 か月 29 日）【1996 年 10 月 10 日】**

午前 11 時過ぎ、養育者がＹ児を起こしに来た。休日のため、家族皆がゆっくりと目覚めた朝である。養育者がカーテンを開けながら、「ゆかちゃん、おきたー(譜例 3-3)」と、ごく自然に歌うように 2 度呼びかけた。Ｙ児は布団の上で、笑顔になり、手足を盛んにバタバタと動かし始めた。

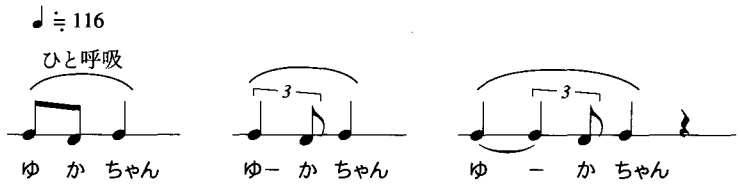
【譜例 3-3】　《ゆかちゃん、おきたー》　採譜者：岡林典子




**【事例 3-3】養育者が歌うように呼びかける ②　（生後 6 か月 24 日）【1996 年 11 月 4 日】**

午前 10 時過ぎ、Ｙ児は布団の上でうつ伏せになって頭をあげ、「エッ、ム～」などと機嫌よく声を出している。部屋に入ってきた養育者は、「ゆかちゃん、ゆーかちゃん(譜例 3-4)」などとリズミカルに、抑揚をつけて何度も呼びかけ、笑顔でＹ児に近づいた。

【譜例 3-4】　《ゆかちゃん》　採譜者：岡林典子




これら 2 つの場面は、Ｙ児の状態がゆったりとしていて穏やかであるときに、養育者の呼びかけの言葉の抑揚が、自然に旋律性を帯びて音楽的になった事例である。事例 3－2 では、養育者の唱える言葉のリズムは、「ゆかちゃん・おき・たー・●」と 4 拍(律拍)にまとめられている。また旋律は、長 2 度音程が保たれている。事例 3－3 の旋律も、同じく長 2 度音程が保たれたものである。リズムは、Ｙ児の表情や様子をみながら呼びかける、養育者のその時々の気持ちの変化によって、「ゆか」「ちゃん」の 2 音のまとまりが、等分の

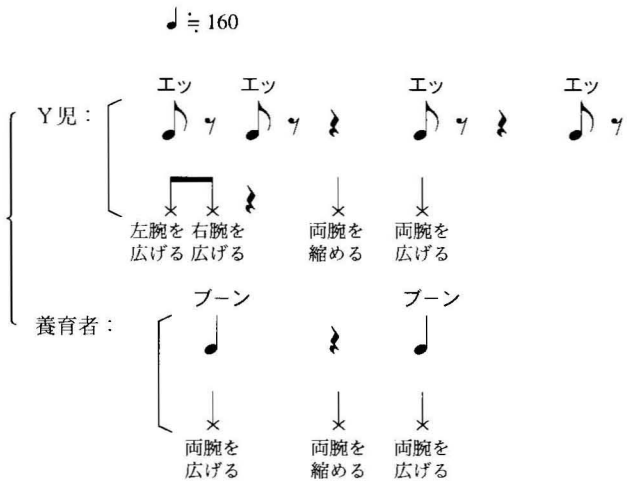
形になったり、はずむ形になったり、のびたりしている。ここには、先に間宮が指摘した3種類の「2字ずつかためて唱えるリズムのとり方」(注4の③参照)が現れている。これらの事例にみられる養育者の音楽的行為は、小泉(1977)が「音楽以前の歌」「無意識の音楽」と指摘しているものにほかならない。

次の事例3-4, 3-5は、Y児にみられる極めて原初的な音楽的行為の事例である。

**【事例3-4】偶発的に動作と音声が同期する ①　(生後6か月24日)【1996年11月4日】**

Y児は運動動作の発達により、うつ伏せになってしっかりと胸をあげることが可能になり、両腕を飛行機の翼のように広げる動作を頻繁に行なうようになった。ベッドの上でうつ伏せになり、養育者と向かい合う姿勢で目をあわせ、話しかけるように「ア～ウ」と柔らかい声を出した。その後、「エッ、エッ」という力強い声と両腕を広げる動作を同期させた。養育者はY児の動作に合わせて、自らも腕を広げ「ブーン」という擬音語を同期させた(譜例3-5)。

【譜例3-5】　《生後6か月の動作と音声の同期》　採譜者：岡林典子



**〔写真3-1・3-2〕　腹ばいで両手を大きく広げる(生後6か月)**

この時期のＹ児の音声発達は拡張期にあり、事例にもみられるような「ア～ウ～」という抑揚のある柔らかい声や、力強い声、その他にも唇をふるわせてブーブーと鳴らすなど、さまざまな種類の音声が発せられている。また、運動動作の発達も進み、うつぶせの姿勢がしっかりと安定したものになり、バランスをとって両腕を広げる動作が頻発している。

この場面でのＹ児の声と動作の同期は、上体をそらせて腕を広げる運動動作を起こそうと、Ｙ児が身体に力を入れたことに随伴して、偶発的に発せられた不随意的なものであろうと考えられる。それは、以下のことより判断できる。その１つは、腕を伸縮させる動作は、伸ばす動作の方が縮める動作よりも力を必要とすることである。そして２つには、譜例 3-5 より、腕を伸ばす動作の時には発声を伴っているが、縮める動作にはみられないことである。今後Ｙ児は、意図的に声や言葉と動作を同期させた音楽的な行為を試みるようになっていくが、この時期にはまだそのような意図性の萌芽はない。

一方、養育者はこのようなＹ児の動作に対して、「ブーン」という擬音語と自らの腕を広げる動作を、同期させている。それは、うつ伏せで腕を広げているＹ児の格好から、飛行機の飛ぶ様子を連想して行われたものである。このように養育者が子どもの声や動きに、自分の声や動きを同期させることについて、鯨岡は、「成り込み」という考えを用いて以下のように説明をしている。

> 関わりあう２者のそれぞれの身体が分離独立しているにもかかわらず、相手の様子に引き込まれ、そこに関心を凝縮し、一体化するような様相を「成り込み」とよんでいる。〔鯨岡(1999) p. 135〕

> 養育者や保育者の関わりにしばしば見られるタイミングのよい声掛けや、子どもの言葉になるはずのところを養育者が言葉にして返してやるいわゆる「代弁」、あるいは、子どもの行為のリズムに合わせて、養育者が首を振ったり、手拍子を打ったりする行動など、一般に子どもと養育する側とが同期する関わりの大半は、この引き込まれ＝成り込みによるものと考えることができます。〔鯨岡(1997) pp. 105-106〕

養育者が子どもの声や動きと同期するような働きかけをする様子は、他の研究者によっても観察されている。麻生(1992)は、自身の６か月になる子どもが足を落下させる行為に対して、「ドシュン」という擬音語を同期させている。また、机をバンバン叩く行為には、

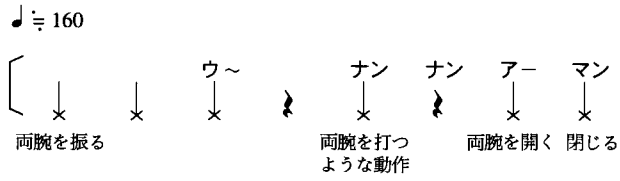
自分の膝を叩いてみせるという行為を試している。そして、そのような行為について、「周囲の大人たちはこのように、乳児の対物的な活動に対して、ことばをかけたり模倣したり大げさに随伴的に反応したりして、その活動を自分たちとのコミュニケート活動に変えてしまおうとする傾向があるといえるだろう。これは、ことばのない乳児とコミュニケートするために私たちがいつの間にか身につけたきわめて重要なスキルの1つである」と説明している。本研究でも、Y児の叩く机の音に養育者が、「トン・トン・トン・●」と擬音語を同期させている場面が観察されている(1997年2月10日)。また、現在観察を継続中の男児(2004年9月27日生まれ)の観察記録においても、鉄琴のバチで床を叩く生後9か月の男児の行為に対して、養育者が、筆者と同様に、「トン・トン・トン・●」と擬音語をかける場面がみられた(2005年7月25日)。

大人が子どもと心を通わせようとして無意識に働きかけるこのような擬音語の中には、日本語のもつリズムや抑揚などの音楽的要素が内包されているものが数多い[7]。子どもは、それらの要素を知覚し、模倣しながら、日常的なやりとりを通して、日本語に基づく伝統的旋律法やリズム感を次第に身につけていくのではないかと考えられる。

**【事例3-5】偶発的に動作と音声が同期する ②　(生後7か月21日)【1996年12月2日】**

7か月に入り、支えなしで座れるようになったY児は、機嫌よく「マンマン…ダァ～ウ～…」「ウ～ナンナンナン…アーマン…(譜例 6)」などと発声している。子音と母音の複数音節の反復からなる基準喃語期に入り、喃語表現も多様になってきている。それらの喃語表現の一部に、両腕を大きく振る動作や、両手を打ち合わせるような動作が同期している。

【譜例3-6】　《生後7か月の動作と音声の同期》　採譜者：岡林典子




7 坂野は、日本語の擬音語の中には「キラキラ」「ワンワン」「ザワザワ」「クルクル」など、4音語が圧倒的に多く、常にそれだけでひとつの表現単位をなしうることを示唆している。そして、この4音という単位が、日本語のリズムにおいて、堅固な枠組として特別な安定性をもつと指摘している。(坂野信彦 1996『七五調の謎をとく―日本語リズム原論―』大修館書店)

この場面のように、Y児の多様な音声表現は、腕を振ったり、ものを叩くなどのリズミカルな運動動作を伴うことが多くみられるようになった。また、「マンマンマン」「ナンナンナン」などのように、基準喃語は反復される傾向があるが、拍節を感じさせるものではない。江尻(2000)は、喃語とリズミカルな運動動作との関連を詳しく調べている。それによると、基準喃語の出現とリズミカルな運動の出現時期が一致していた。また、初期の段階では、音声とリズミカルな運動の同期がみられるが、その後、喃語が安定してくるに従い同期は消失するという。喃語期にみられるこのような音声とリズミカルな運動の同期現象について、江尻は「乳児によって意識的に行なわれる行動というよりもむしろ、内部発生的に生じているものではないかと推測される」[8]と、生物学的要因の側面から考察している。また、同期現象の発生は「生得的にある程度はプログラムされたものであるが、この現象が持続、促進されるためには、音声とリズミカルな運動が同期したときに乳児が受ける音の聴覚フィードバックが正の強化要因として機能する必要があるのではないかと推測される」[9]と、学習要因の側面からも考察している。さらに、音声に運動が付随することは、周囲の者たちの注意を引きつけ、より多くの言語的入力や養育行動を乳児が得るのに役立っているのではないかという、社会的要因の側面からも考察を深めている。

これまでに述べてきた事例 3-4、事例 3-5 は、音楽的と呼ぶには原初的過ぎるかもしれない。しかし、生得的に備わった音声と動作の同期現象をもとにして、日常的に養育者から声や動作による働きかけを受け、その経験を重ねていくことは、子どもの中に他者と気持ちを通わせてリズミカルに声を合わせたり、動作を同期させるという音楽的な行為の基盤を築くことへとつながるのではないかと考える。

次の事例 3-6 は、Y児と養育者との間にみられた音声のやりとりの事例である。

**【事例 3-6】Y児と養育者の間に、抑揚のある音声のやりとりが成立する**
**(生後 10 か月 6 日)【1997 年 2 月 17 日】**

午後 4 時、Y児は養育者とおもちゃ箱をはさんで遊んでいる。養育者はネコのぬいぐるみを取り、「ニャーニャ、スリスリー」と言ってY児の顔をこする。Y児は「m～」とネコの鳴き声を思わせる抑揚のある柔らかな声で発声した。養育者はすぐにY児と同じ抑揚で、「ニャオ～」とまねをする。するとY児も再び「m～」と発声したので、「ニャオ～」「m～」「ニャオ～」「m～」という音声のやりとりが 3 回成立した。

---

8 江尻桂子 2000『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房 p. 109
9 同上書 p. 110

この場面のやりとりは、Yが発した「m～」という音声を、養育者がその場にネコのぬいぐるみがあるという状況と関連づけて、鳴き声だと解釈し、「ニャオ～」と返したことに始まる。この時期のY児には音声模倣が頻繁にみられるようになっており、養育者の「ニャオ～」という音声をさらにY児が音声模倣したことで、やりとりが継続したと考えられる。この事例の他にも、「テッテー」という、意味のない音声を用いたリズミカルな喃語表現をきっかけに、同様のやりとりが成立した場面が観察されている(生後10か月20日)。このように、子どもの喃語表現を養育者が真似て繰り返す行為は、田中泉(2001)の観察事例にも複数あげられているが、田中はこのような周囲の大人の応答が、子どもの有意味語獲得の基盤となっているのではないかと考察している。

ところで、この時期のY児には養育者とのやりとりの文脈の中で、状況を理解して「待つ」という行為が、わずかながら認められるようになってきた。次の事例は、事例3-6と同じ日に観察された『ごあいさつあそび』[10]という絵本の読み聞かせ場面のものである。

養育者はY児に絵本を見せながら、「ことりのピィちゃんがやってきて…トントントン、トントントン、ゆかちゃん、こんにちわ」と読み聞かせている。このあとも「ネコのミケがやってきて…」「こいぬのコロがやってきて…」と続いていく。Y児は養育者の口元を見ながら「こんにちわ」の部分になるまで待って、そこへくると「キッ」「ニャッ」「エッ」などと発声する。

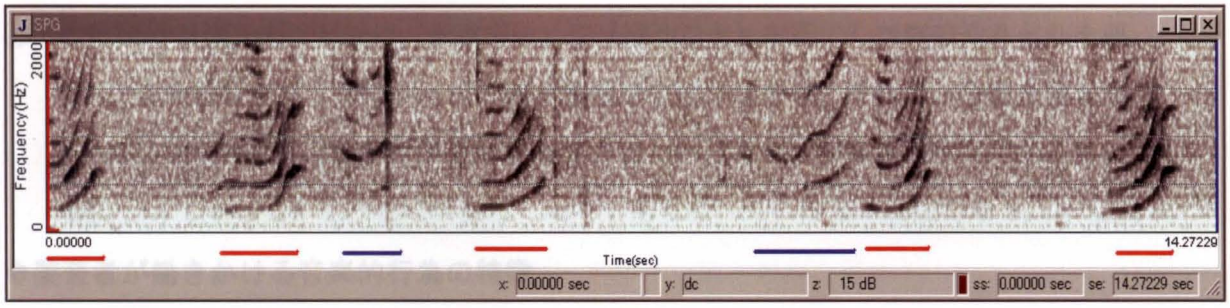
この事例では、Y児が養育者の話しことばの中から「こんにちは」というあいさつの言葉が出てくるのを待って発声をしていることが理解できる。このような「待つ」という行為について、やまだようこ(1987)は、「待つこと」は相手のペースに合わせることや、相手の言うことを自分のところで受けとめることなどを含み、やりとりを成立させるために必要な能力であると述べている。また、やりとりの行為を中心にした遊びは、自分の番、人の番を知り、それを対人関係の中で使いながら、聞く－話す－聞く－話す…というコミュニケーションの基本的態度を作り上げることでもあるといわれている（岡本, 1892)。生後10か月のY児には、「音声模倣」や「待つこと」など、他者とのコミュニケーションや音楽的やりとりを成立させるために必要なコミュニケーションの基本的行為の兆しが見

10 木村裕一 1989 『ごあいさつあそび』偕成社

え始めたと思われる。

下の図 3-1 は、事例 3-6 のＹ児と養育者の声のやりとりを音響分析 [11]したものである。赤線部分が養育者で、青線部分がＹ児である。図 3-1 より、Ｙ児と養育者の声の抑揚はほぼ同じであることがわかる。また周波数より、ピッチについてはＹ児の方がオクターブ高いことがわかる。

**【図 3-1】　　Ｙ児と養育者の声のやりとりの音響分析**




また、交互に交わされる養育者とＹ児の発声の「間」をみると以下のようになっている。

①2 回目の母親の発声　→　1 回目のＹ児の発声まで　　0.38 秒

②1 回目のＹ児の発声　→　3 回目の母親の発声まで　　0.81 秒

③3 回目の母親の発声　→　2 回目のＹ児の発声まで　　2.7 秒

④2 回目のＹ児の発声　→　4 回目の母親の発声まで　　0.13 秒

上記の「間」の値をみると、養育者とＹ児の音声は交互に発声されてはいるが、やりとりの間が一定ではないことがわかる。したがって、Ｙ児はまだ他者と呼吸を合わせて音声のやりとりができる段階にはないことが理解できる。しかし、有意味語獲得以前のＹ児が、音声模倣を基にした声のやりとりを通して、コミュニケーションの基本的態度を学んでいることが明らかである。それは今後、Ｙ児が他者と呼吸を合わせて、音楽的なやりとりを発展させていく基盤となるものであると考える。

### (3) まとめ

本節の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**◆前言語期にみられるＹ児の音楽的行為の特徴**

---

11 日本音響研究所に分析を依頼した。分析に使用された機材は、CSL Computerized Speech Lab Model 4500 (Kay Elemetrics Corp. 製)　DIMENTION 8250 (DELL COMPUTER 製)　である。

① 生後 6，7 か月頃から、Y児は生得的に備わった音声と動作の同期現象を基にして、原初的な音楽的行為の基盤を築き始める。それは、将来Y児が他者と気持ちを通わせて、声を合わせたり、動作を同期させたりするような音楽的行為の基盤となるものであると考えられる。

② 生後 10 か月の時点では、Y児はまだ、相手と呼吸を合わせて音声のやりとりができる段階にはない。

③ 生後 10 か月頃から、「待つ」という行為が、わずかながら認められるようになる。

④ 生後 10 か月頃から、Y児は「音声模倣」や「待つこと」を基にした声のやりとりを通して、音楽的コミュニケーションの基本的態度を学び始める。それは、今後Y児が他者と呼吸を合わせて音楽的やりとりを発展させていくための準備体制作りであるといえる。

**◆養育者が働きかける音楽的行為の特徴**

① 養育者が語りかけるリズミカルな言葉は、2 音ずつまとまり、全体で 4 拍（律拍）のまとまりが作り出される傾向がある。それは、日本語を話すわれわれが言葉をリズミカルに唱える場合に、それまで無意識に身につけてきた基本的なきまりを用いることによって生じる行為である。

② 養育者の語りかける言葉の抑揚には、日本語の音楽的特徴の 1 つである、高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされている。

③ 養育者は、自分の音声、言葉や動きを、子どもの音声や動きに同期させている。

④ 養育者が子どもの名前を呼びかける際に用いる音楽的な言葉は、伝統的な 2 音旋律が保たれている。また、そのリズムは、2 音のまとまりが等分の形や、はずむ形に変化する傾向がある。

## 第3節　1語発話期にみられる音楽的やりとりから

本章第1節では、Y児の言語獲得の状況にしたがって、11か月に初語が出現してから、18か月に2語発話が出現するまでを、1語発話期とすることを示した。また、初語出現の生後11か月から13か月にかけては、主に感嘆詞や擬音語がみられたので、この期間を1語発話前期とし、名詞が現れ始めた14か月から17か月までの期間を1語発話後期とすることも示した。

本節では、2つに区分した1語発話期の前期・後期それぞれについて、事例をもとに、音楽的行為の分析を進める。

### (1) 1語発話前期（生後11～13か月）について

本項では、生後11～13か月の期間に、Y児と養育者とのやりとりの中でみられた音楽的な音声・言葉や運動動作について、事例に基づき分析と考察を進める。

#### ①Y児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

生後11か月には初歩がみられ、階段を這って上るようになった。また、養育者が机を叩くと、同じ動作を真似るというような模倣行動がさかんにみられるようになった。また、12か月には不安定ながらもひとりで30mくらい歩くことができるようになり、13か月には、しっかりとした足取りで歩くようになった。

【話し言葉の獲得状況】

初語「ワンワン」がみられたのは、生後11か月時であった。発せられる音声の大半が、意味不明の喃語表現であるが、養育者が「イヤイヤして」というと首を振る動作をするなど、言語の理解も少しずつ進んでいる。また、動作の模倣とともに、音声の模倣もさかんである。12～13か月にかけては「アッ」「ワッ」などの感嘆詞や「ニャーオ」「ピョン」「ゴーン」などの擬音語が少しずつ増えていった。

#### ②観察事例の分析と考察

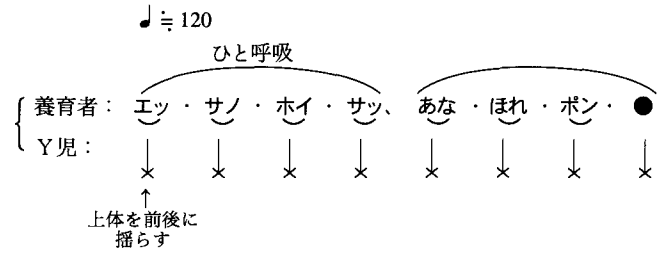
次の事例3-7は、Y児が養育者の唱えるリズミカルな言葉に拍節を感じとり、身体表現を試みた事例である。

**【事例 3-7】養育者のリズミカルな言葉の拍節に合わせて、動作を同期させる**

**（生後 11 か月 27 日）【1997 年 4 月 7 日】**

Y児は養育者からお気に入りの絵本『こぐまちゃんのどろあそび[12]』を読んでもらっている。これまでに何度も読んでもらっているので、すでに絵も話の展開も熟知している。Y児が特に気に入っている穴を掘る場面になり、養育者が「エッ・サの・ホイ・サッ、 あな・ほれ・ポン・●、スコ・ップ・スコ・ップ、 あな・ほれ・ポン・●」（譜例 3-7）とリズミカルに唱えると、Y児は座った姿勢で、ニコニコしながら上半身を前後に揺らした。

【譜例 3-7】　《エッサノホイサ》　採譜者：岡林典子




この絵本は生後 8 か月の頃から繰り返し読んでおり、Y児が気に入っているものの 1 つである。養育者は絵本の中の唱え言葉を、日本語の音数率の原型[13]に基づき、2 音ずつ結びつけて 4 拍（律拍）のまとまりを作り出し、ひと呼吸で唱えることを繰り返している。もちろん、この行為は、無意識になされたものである。この場面では、日本語を話すわれわれが身につけている基本的な定則に従って生み出される、言葉の音楽的なリズムに、Y児が敏感に反応して身体を揺らしたものと思われる。生後 11～12 か月にかけて、このような反応は、別の絵本のリズミカルな言葉に対しても頻繁にみられるようになった。このことは、初語が現れる時期、すなわち日本語を獲得し始める時期には、子どもが言葉の意味を理解し始めるだけでなく、同時に、言葉の抑揚や拍節に敏感になることを示唆している。このことからは、1 語発話前期の子どもは、日本語を獲得し始めると同時に、日本語に基づく伝統的な音楽様式である拍節感覚を身につけ始めるのではないかと推測できる。

---

12 わかやま けん 1973 『こぐまちゃんのどろあそび』こぐま社

13 p. 54 の脚注 5. 6 を参照

次に示す事例3-8、3-9は、有意味語を獲得しつつあるY児の音声表現が、養育者によって意味づけされ、日本語発話における音楽的特徴の1つである2拍（律拍）のまとまりへと導かれていく事例である。

**【事例3-8】養育者によって、Y児の音声が2拍（律拍）のまとまりへと導かれる①**

**（生後12か月5日）【1997年4月16日】**

生後11か月で初語「ワンワン」を獲得したY児は、さまざまな状況や文脈の中で「ワンワン」を用いようとするが、まだ音声は「ワンワ」や「ワンワォー」になったりしている。養育者がオムツを替えていると、隣の家で犬が鳴いた。以下はその時のやりとりである。

養育者①：（犬が鳴く）　あっ、「ワンワン」言うてるね。　ワン・ワン（拍節を強調して発声する）

「ワンワン」言うて（関西弁で「言ってみて頂戴」の意味）

Y児①：　ワンワ…

養育者②：あぁ、言えた。　「ワンワン」言うて。　ワン・ワン（拍節を強調して発声する）

Y児②：ワンワ…

養育者③：ワンワン　…　ワンワン　（再び、犬が鳴く）

Y児③：（犬の鳴き声を真似て）ワンワォ～

養育者：ワンワォ～　…　どこで鳴いてるのかな、ワンワンは。

この事例3-8で、養育者はY児がすでに「ワンワン」という言葉を獲得していることを背景に、Y児から「ワンワン」という発話を引き出そうとしている。その養育者の思いは、「ワンワン言うて」というY児の発話を促す言葉と、「ワン・ワン」と2拍（律拍）の拍節が強調された発話行為（養育者の発話①、②）にみてとることができる。同じような養育者の思いは、次の事例3-9にも現れている。

**【事例3-9】養育者によって、Y児の音声が2拍（律拍）のまとまりへと導かれる②**

**（生後12か月16日）【1997年4月28日】**

Y児は昼食中である。自分の手でうどんをつかみ、意欲的に口に運んでいる。傍で養育者がY児の口にうどんが入るタイミングに合わせて、「ツルツルッ、ツルッ」などと擬音語をかける。するとY児が「オゥウォン」と発声した。養育者はY児がうどんを食べている状況から、「おうどん」と言ったように解釈して、すぐに続けて「おう・どん」〔ou・don〕と言葉を返す。以下はその時のやりとりである。

Y児①：オゥウォン

養育者①：おうどん … おう・どん〔ou・don〕（拍節を強調して発声する）

Y児②： ワンワン … ワンワン

養育者②: ワンワンちがう、おうどん。　… おう・どん〔ou・don〕（拍節を強調して発声する）

Y児③：オゥウォン

養育者③：そう、おうどん。　ツルッ、おうどん

この事例においても、養育者はY児の「オゥウォン」という音声表現に対して、「おうどん」という発話を引き出そうとしている。その養育者の思いは、「おう・どん〔ou・don〕」と拍節を強調して、繰り返し発話する行為（養育者の発話②、③）にみてとることができる。

こうした子どもに向けて繰り返される、養育者の「ワンワン」や「おうどん」のような拍節的な発話は、「ワン」「おう〔ou〕」「どん」などの2音の音形が反復されたり、つなげられたりして、4音のまとまりとなり、2拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出している。これは、先に述べた、日常の一般的な日本語発音の原則[14]があらわれたものである。また、この4音という単位は、日本語の堅固な枠組みとして特別な安定性をもつことが指摘されている[15]。

ところで、小椋(2001)は、初期の語彙発達の特徴として、日本の子どもが英国の子どもよりも、オノマトペ[16]を早期に表出することを挙げている。そして、その要因として、日本語のオノマトペが語彙として体系化されているという日本語自身の要因と、日本の養育者が子どもの模倣しやすいオノマトペで頻繁に語りかけるという養育者側の要因を挙げている。また、日本の養育者の語りかけにみられる特徴については、村田孝次(1968)が、‘育児語’と呼ばれる、養育者が幼児に対してだけ用いる特殊な言語の存在を指摘し、その特徴を次のように示している[17]。

1）幼児の音声にみられる音韻転化その他の音声の歪みがある。（例　お皿→オチャラ）

2）音声パターンが単純で短い。

3）オノマトペや反復形式が多い。

---

14 p.45 の脚注6を参照

15 坂野信彦 1996 『七五調の謎をとく―日本語リズム原論―』大修館書店　pp.25-31

16 小椋たみ子は、オノマトペという語を用いているが、筆者はオノマトペという語を、擬声語、擬態語を合わせた擬音語として理解する。（小椋たみ子 2001 「初期言語発達過程」，乾 敏郎・安西祐一郎編『運動と言語』岩波書店 pp.95-108

17 村田孝次 1986 『幼児の言語発達』培風館 pp.190-196

4）音声的強勢ないし極端な音調を伴い、リズム的である。

以上のことを踏まえて、事例 3-8、3-9 で養育者がY児に働きかけた行為を今一度みてみると、それらが文化的な特徴を反映した行為であることが理解できる。すなわち、それは、日本語に擬音語が多いという日本語自身のもつ特徴と、日本の養育者が擬音語や反復形式を用いたリズミカルな語りかけを頻繁に行うという、文化に規定された一般的な養育者の育児行為によっていると考えられる。

一方、Y児は養育者の働きかけを受け止め、部分的に言葉を理解し、意識的に音声模倣を試みているようである。子どもの側からみると、2 拍（律拍）にまとめられた擬音語や言葉は、リズミカルであり、発話しやすい音素を含んでいる場合が多い。それは、言葉を獲得し始めたばかりの子どもにとっては、親しみやすく、発話しやすいものだといえる。2 つの事例にみられるY児の発話は、「ワンワ」や「オゥウォン」など、まだはっきりとした 2 拍（律拍）の拍節を感じさせるものではないが、養育者の働きかけによって、2 拍（律拍）のまとまりに導かれつつあるといえるだろう。Y児はこのような経験を日常生活の中で重ねることにより、拍節や抑揚などを含んだ日本語に基づく、音楽的様式感を身につけていくものと思われる。

続く事例 3-10 は、事例 3-9 から 5 日後に、Y児が自発的に擬音語を 2 拍にまとめて発話している事例である。

**【事例 3-10】自発的に擬音語を 2 拍（律拍）にまとめて発話する**

**（生後 12 か月 21 日）【1997 年 5 月 2 日】**

午後 3 時前、養育者がY児に昼寝をさせようと準備をしていると、隣の家の大きな犬が太い声で鳴いた。Y児はその声が気になり、「ワンワン」と言いながら部屋の中をウロウロと歩き始める。以下はその時のやりとりである。

Y児：（犬が鳴く）　ワン・ワン

養育者：あっ、ワンワン鳴いたねぇ。　うん？

Y児：ワン・ワン

養育者：ワン・ワン

Y児：ワン…　ワンワ…　（声の抑揚が大きくなり、力強く犬の鳴き声に似た声を出す）

ワンワン…ワンワォ～　…　ワン・ワン　…　ワン・ワン

この場面では、犬の鳴き声をきっかけに、Y児が自発的に「ワン・ワン」と、2 拍（律

拍）にまとめた擬音語を発話している。それは、事例 3-8 でみられた養育者の発話と同様に、2 音の音形を反復して 4 音にまとめ、2 拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出している。先の事例 3-8、3-9 でのＹ児の発話は、養育者の働きかけによって、2 拍（律拍）のまとまりに導かれつつも、まだはっきりとした拍節を感じさせるものではなかった。しかし、この場面では、「ワン・ワン」とはっきりとした 2 拍（律拍）が感じ取れる。それは、「2 音ずつ区切って、4 音でまとまりを作る」という、日本語を話すわれわれが無意識に身に付けている一般的な発音の原則[18]が、Ｙ児にも身に付きつつあることを示していると解釈できる。すなわち、Ｙ児はこれまでの日常生活の中で重ねてきた養育者との経験を基盤として、日本語に基づく音楽的様式感、拍節感を身につけつつあり、それが少しずつ表面に現れ始めたと思われる。

次の事例 3-11 は、Ｙ児が意図的に動作と音声を同期させている事例である。

**【事例 3-11】意図的に動作と擬音語を同期させる　（生後 12 か月 30 日）【1997 年 5 月 11 日】**

Ｙ児はテレビの前で養育者と向き合って座り、ビデオテープのケースを手に持って舐めている。養育者がＹ児の動作に合わせて、「ガブッ」「ガリガリ」などの擬音語をかけると、Ｙ児は養育者と視線を合わせて微笑む。そして、手に持ったケースを勢いよく振りながら、「ゴーン」といって落とし、養育者を見て、にこりと笑う。養育者もＹ児と目を合わせ、少し遅れて「ゴーン」という。Ｙ児は再び養育者と視線を合わせて微笑み、「ゴーン」「ガーン」という擬音語と、振り下ろす動作を同期させて、何度も繰り返す（譜例 3-8）。

この場面で、Ｙ児はひと呼吸で発話する「ゴーン」「ガーン」という擬音語に、手を振り下ろす動作 1 回を同期させている。ひと呼吸でまとめられたこのような行為は、繰り返されることにより、次第に周期性を帯びたリズミカルなものになった。そこには、呼吸を単位にして、拍節的に言葉と動作をまとめる音楽的行為が作り出されている。

また、Ｙ児が擬音語と、手を振り下ろす動作を同期させた後に、養育者と視線を合わせて、にこりとする様子からは、Ｙ児の音楽的行為に意図性を捉えることができる。子どもに意図の発生の兆しがみられるのは、生後 5～6 か月頃からで、明白な意図を持って行動をおこすのは、生後 8～9 か月を待たなければならないといわれている[19]。前節で分析した前

---

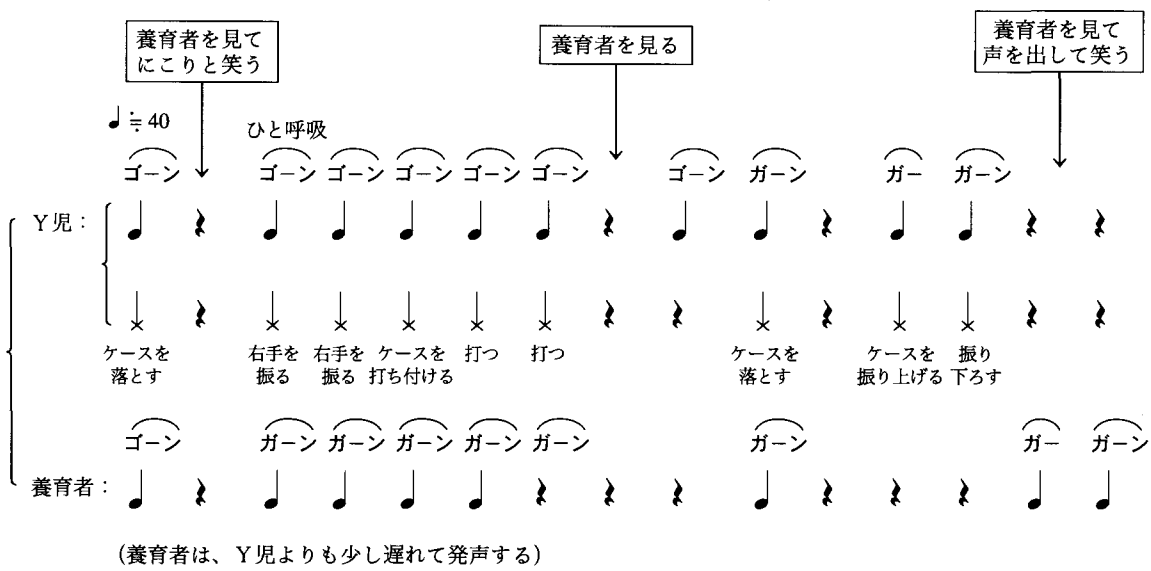
18 p. 45 の脚注 6 を参照

19 岡本夏木 1982 『子どもとことば』岩波新書 179　pp. 57-60

言語期の事例 3-4（生後 6 か月時）、事例 3-5（生後 7 か月時）では、Y児の音声と動作は、まだ偶発的に同期する段階であった。しかし、生後 12 か月後半の 1 語発話期にあたる本事例 3-11 では、意図性をもって動作と擬音語を同期させるというように、行為に変化が現れた。Y児が養育者に向けた視線と微笑みには、「ゴーンと言って振り下ろすと、おもしろいでしょう？」という問いかけや、「この遊びって、おもしろいねェ」と、愉快な気分を養育者と共感し合おうとするY児の気持ちが込められているように思われる。こうした日常生活の中で経験する、養育者との「場の共有」「視線の共有」「情動の共有」などの非言語的コミュニケーションを基盤にして、子どもは言葉を獲得していくとともに、音楽的にも変化し、成長しているといえる。

【譜例 3-8】　《生後 12 か月時の動作と擬音語の同期》

採譜者：岡林典子




次の事例 3-12 ①～③は、Y児に「いないないばあ」のやりとりの中で、次第に養育者と間(ま)を合わせようとする行為が、芽生え始める過程を捉えたものである。事例 3-12-①が観察された生後 12 か月時（1997 年 5 月 10 日）よりも以前から、Y児と養育者の間には、「いないないばあ」に関わるやりとりが観察されている。例えば、生後 10 か月時（1997 年 2 月 28 日）では、養育者と向かい合って『いないないばあ』の本[20]を読んでもらう場面

20 松谷みよ子 1967 『いないないばあ』 童心社

において、Y児は「ばあ」の部分に喜んで、「エへへ…」と笑ったり、笑顔で「エ～」と嬉しそうな声をあげたりしていた。また、生後11か月時（1997年4月7日）には、同様の場面で、養育者が、「にゃーにゃがほらね、いないな～い」と大きな抑揚をつけて発話すると、Y児は養育者の発話の終わりの部分「な～い」にかぶせて、「ア～」と抑揚のある声を出した。さらに、生後12か月19日（1997年4月30日）には、養育者がY児を膝に乗せて、「こんこんぎつねも、いないな～い、いないな～い、いないな～い、ばあ」と絵本を読むと、Y児は絵に見入りながら、少し遅れて「バッ」といった。

これらの場面では、Y児は、顔を隠した動物が、次のページをめくると顔をみせるという、視覚的な変化に興味をもち、喜びを表す段階にあった。しかし、その後にみられた以下の事例では、人に対して働きかける行為が観察されるようになり、次第に養育者と間を合わせようとする行為が、芽生えはじめる。

**【事例3-12】養育者と間を合わせようとする行為が芽生える**

**①動作と「バッ」の声を同期させ、意図的に働きかける（生後12か月30日）【1997年5月10日】**

Y児は、『いないないばあ』の絵本の表紙カバーを、「バッ」といって両手で広げ、傍で片付けをしている養育者に視線を向けた。養育者は、「バッ　…　『いないないばあ』やったねぇ」と言葉をかける。すると、Y児は表紙カバーで顔を隠したまま、自発的に「バァ」「バッ」と繰り返す。以下はその後のやりとりである。

Y児：（表紙カバーで顔を隠したままで）　バッ

養育者：ばあ、してるの？

Y児：（表紙カバーから顔を出し、養育者の方をみて）　バッ

養育者：（Y児に近づいて顔を覗き込みながら）ウ～　…　バッ

Y児：（表紙カバーで顔を隠したままで）　バッ

養育者：（Y児の横に座り、Y児の顔を覗き込みながら）バッ、レロレロレロレロ～

Y児：（表紙カバーで顔を隠したままで）　バッ　…　バッ　…　バッ　…　（立ち上がって歩きながら）　バッ

養育者は、Y児が「バッ」というたびに、同様の言い方で、答えるように「バッ」と声をかける。

この場面では、Y児の方から養育者に積極的に働きかけている。「バッ」という声と動作を同期させて、表紙カバーから顔を出し、養育者の方をみる行為には、意図性が感じられる。意図的な声と動作の同期については、先の事例3-11でも述べたが、同じ時期に観察

〔写真 3-3〕 絵本の表紙カバーで顔を隠す（生後 12 か月）

された本事例にもＹ児の意図性が現れている。

しかし、ここでのＹ児の行為は、意図性が認められるものではあるが、まだ相手の発話の間や、タイミングに合わせようとするものではなく、その時々の自分の気分のままに自由に発声している段階である。

次の事例では、Ｙ児に相手と声を合わせようとする行為の兆しが現れてくる。

**【事例 3-12】養育者と間を合わせようとする行為が芽生える**

**②養育者と声を合わせようとする兆しが現れるが、間が合わない**

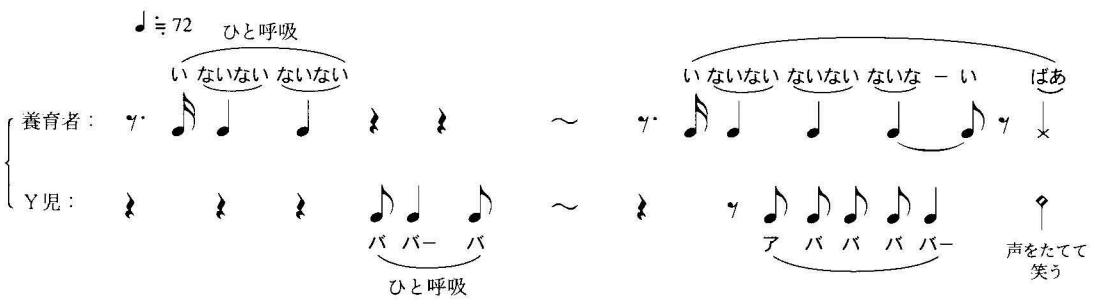
**（生後 13 か月 8 日）【1997 年 5 月 19 日】**

養育者がＹ児と向かい合って、絵本を読み聞かせていた。Ｙ児は、『いないないばあ』の絵本を、「バァ～」と声をあげて持ち上げ、顔を隠し、振り下ろす。再びＹ児が絵本で顔を隠し、動作を止めているので、養育者は「いないない・ないな～い…」とリズミカルに声をかけ、Ｙ児が顔を出すタイミングに合わせて、「ばあ」という。Ｙ児は喜んで、大きな声をたてて笑う。

再びＹ児が顔を隠すので、養育者が「いないない・ないない」と声をかけると、Ｙ児は「ババーバ」と続けて発話し、顔を出して笑う。再度、Ｙ児が絵本で顔を隠したので、養育者は「いないない・ないない・ないな～い」と声をかけた。Ｙ児は養育者のかけ声の途中から、声を合わせるように「アババババー」といって止める。養育者が「ばあ～」というと、声をたてて笑うが、養育者と間を合わせて、自ら「バー」と発声することはない（譜例 3-9）。

【譜例 3-9】　《声を合わせようという兆しが現れた「いないないばあ」のやりとり》

**採譜者：岡林典子**



**〔写真 3-4・3-5〕　養育者と向かい合って、「いないないばぁ」を楽しむ（生後 13 か月）**

この場面では、Y児から自発的に養育者のかけ声に参加し、声を合わせようとする様子がみてとれる。先の事例 3-12-①では、Y児の方から養育者に視線を向けて働きかける様子がみられたが、声を合わせようとする行為は、まだ認められなかった。しかし、この事例 3-12-②では、Y児が自発的に養育者のかけ声に参加してきたところに、変化の兆しが現れている。生後 13 か月の初めに当たるこの事例では、Y児はまだ、かけ声のタイミングや、間を合わせられる段階にはないが、次の 13 か月後半の事例では、養育者と間を合わせて、タイミングよく声を合わせる場面が観察されている。

**【事例 3-12】養育者と間を合わせようとする行為が芽生える**

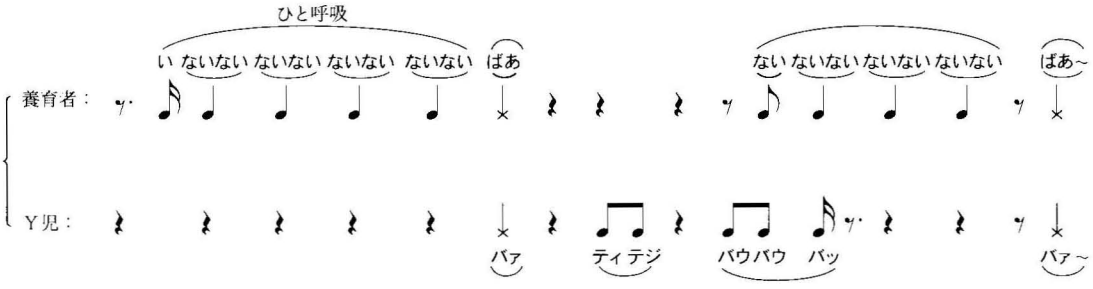
**③養育者と間を合わせる行為が芽生える**　　**（生後 13 か月 28 日）【1997 年 6 月 8 日】**

Y児はテレビの陰に身体を隠したまま、「バァ～」という。養育者が「こっち、ばぁ～」と言葉をかけると、顔を出した。その動作に合わせるように、養育者が「ばぁ～」と声をかけると、Y児は「バァ、ハハハ」と声をたてて笑った。

次に養育者が、「いないない・ないない，ないない・ないな～い」とリズミカルにいうと、Y児はニコニコしながら養育者の顔をみつめ、大きな声で「バァ～」と合わせる。さらに、その次は、Y児の方から誘いこむように、養育者と視線を合わせて、「ティ、テジ … バウバウバ…」とつぶやいて、止まる。養育者はこの行為を、Y児が「いないない…」というかけ声を用いて誘いかけていると解釈し、Y児に続けて「ないない・ないない，ないない・ないな～い…」と声をかけた。Y児は養育者の口元をじっと見つめ、間を合わせてタイミングよく、「バァ」と養育者と声を合わせて、笑った（譜例 3-10）。

【譜例 3-10】　《タイミングよく、声を合わせた「いないないばあ」のやりとり》

採譜者：岡林典子



**〔写真 3-6〕 テレビの後ろから「バア」と顔を出す（生後 13 か月）**

この場面からは、他者の呼吸を読みとって、タイミングや間を合わせるという行為が、Y児に芽生えてきたことが伺える。養育者が発話する「いないない・ないない…」のかけ声の長さと、「ばぁ」のタイミングは、養育者のその時の気分と、1 回ごとの呼吸の長さをもとにして決定されており、一定ではない。

そのつど異なる間の変化を、Y児は養育者の顔や口元をみつめて読みとろうとしている。少しずつ変化する状況の中で重ねられる「いないあないばあ」の経験は、Y児が養育者と間の合う関係を築くための場を提供するものであると考えられる。

ブルーナー(1983)は、「いないないばあ」のような一種のパターン化された状況である「フォーマット」を通して、子どもが言語を習得していくことを見出した。また、やまだようこ(1987)は、このような「いないないばぁ」の遊びが、視覚的変形への興味や、物の不在の理解、物と物との関係、「ないない」という言葉の理解、物の出し入れにおける「ある」「ない」関係の理解、というような子どもの基礎的な能力の発達によって支えられていることを指摘している。さらに、こうしたやりとりのゲームによるコミュニケーション行動が、言葉の発生を背後で支えていることも示唆している。

このように、「いないないばあ」遊びは、これまで子どもの言葉の発生を背後で支えるコミュニケーション機能を有していることが指摘され、注目されてきた。しかし、本事例

においてみられたように、他者と間を合わせる行為、呼吸を合わせる行為を身につけ、間の合う関係、呼吸の合う関係を築くためにも、「いないないばあ」遊びは重要な役割を果たしているといえる。すなわち、この遊びは、子どもが日本の文化の中で音楽的に成長していく過程において、「間」という日本の伝統的な音楽の様式感を身につけるために、一翼を担っているといえる。

### ③まとめ

ここでは、本節第1項の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**◆1語発話前期にみられるY児の音楽的行為の特徴**

① 初語がみられ始める頃になると、養育者が発話する言葉のリズムに合わせ、拍節的に動作を同期させる。

② 生後12か月後半頃から、音声模倣を通して、日本語の拍節感覚が身につきはじめる。それは、「ワン・ワン」のように2音の音形を反復した4音にまとめ、2拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出す行為として現れる。

③ 生後12か月後半頃から、意図性をもって音声や言葉と動作を同期させ始める。

④ 生後13か月頃から、他者と呼吸を合わせようとする行為が、芽生えはじめる。

**◆養育者に働きかけにみられる音楽的特徴**

① 絵本の中のリズミカルな唱えことばを、2音ずつ結びつけて、4拍（律拍）のまとまりを作り出し、ひと呼吸で発話する。

② 日本語の発話の原則に基づいて、2拍（律拍）の拍節を強調した発話を繰り返し、Y児の音声を2拍（律拍）のまとまりへ導こうと試みる。但し、この行為は意図的になされてはいない。

③「いないないばあ」遊びにおいて、その時の気分と1回ごとの呼吸の長さをもとにして、Y児に向かって「いないな～い」とリズミカルに声をかける。

### (2) 1語発話後期（生後14～17か月）について

本項では、生後14～17か月の期間に、Y児と養育者とのやりとりの中でみられた音楽的な音声、言葉や運動動作について、事例に基づき分析と考察を進める。

#### ①Y児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

生後15か月には手すりを持って階段を上り、17か月には手すりを持たずに、一段ごとに両足をそろえて下りることができた。また、足がしっかりとしてきて、歩く足の運びが軽快になっている。16か月からは、ブランコに乗る母親の膝で共に揺れることを好むようになる。

【話し言葉の獲得状況】

生後14か月になると、談話的な喃語の中に、「パンニャ(パンダ)」「メンメ(目)」などの名詞が現れ始めた。また、音声模倣がさかんで、周囲の大人の発話の中から、1語を模倣する。その後17か月までの間に「ボーリュ（ボール)」「コッチン(時計)」「オチャ」など、語彙が急激に増加していく（表3-1参照)。

#### ②観察事例の分析と考察

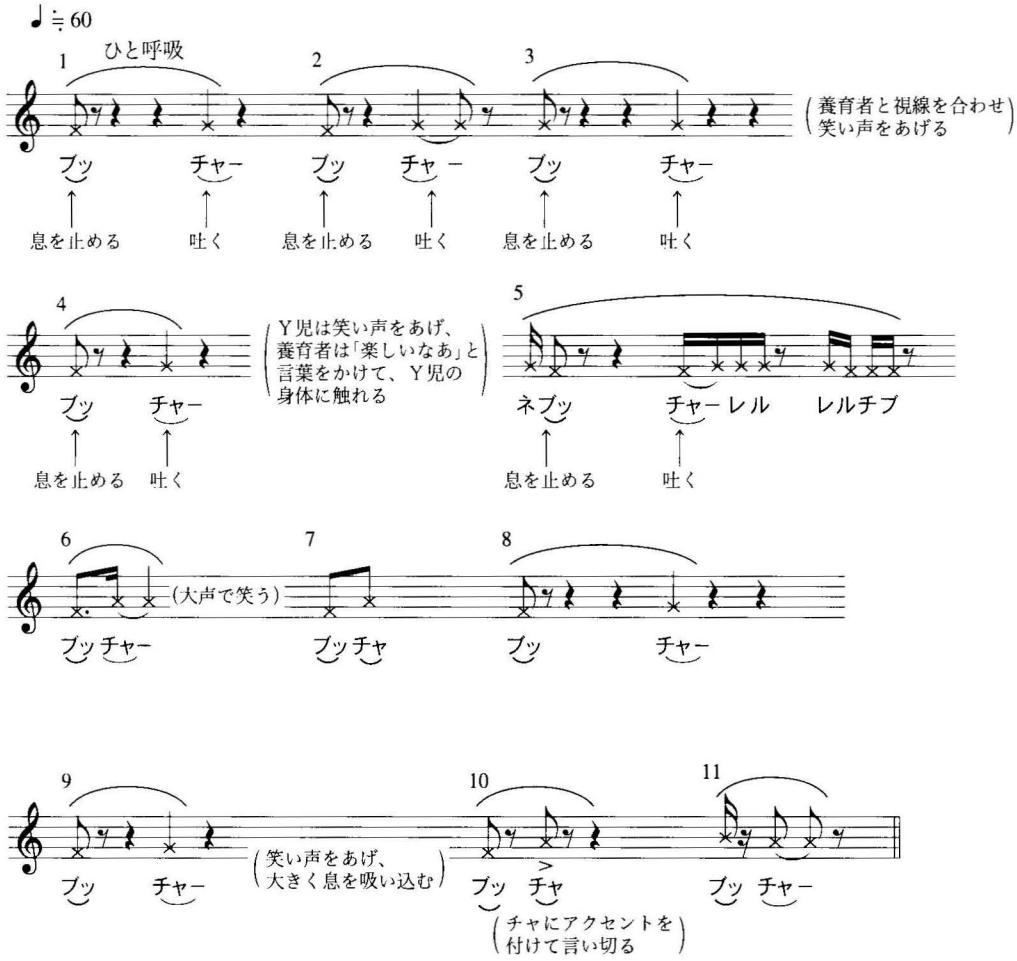
次の事例3-13は、Y児が自発的に、喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて、リズミカルに繰り返した例である。

**【事例3-13】喃語的音声を、呼吸単位に4拍（律拍）にまとめて、繰り返す**

**(生後15か月7日)【1997年7月19日】**

機嫌のよいY児は、鏡台に上って養育者と向かい合い、喃語をつぶやきながら、楽しそうに両腕を大きく振っている。養育者はY児に微笑み返したり、Y児の動作の真似をしたりする。すると、Y児は養育者に向かって、「ブッチャーチャー」と語りかけるように発声した。その後、Y児は養育者と視線を合わせ、微笑しながら、「ブッ・●・チャー・●」と呼吸単位に、この喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて、拍節を感じさせるリズミカルな表現を自ら作り出し、何度も繰り返した（譜例 3-11)。Y児が自ら養育者と視線を合わせて歓声をあげる様子から、養育者はY児が愉快で楽しい気分を養育者と共有しながら、この表現を試みているのだと感じていた。

【譜例 3-11】　《ブッチャー》　採譜者：岡林典子



〔写真 3-7〕 リズミカルな喃語をまとめる（生後 15 か月）

この場面には、15 か月児が養育者を相手に、リズミカルに喃語的音声をまとめようとする過程が現れている。Y児は、有意味語の獲得が進みつつあるものの、まだ喃語的音声が多くみられる状況である。そのような状況のもと、Y児の音楽的行為は、言語的な意味をもたない、喃語的音声の「ブッチャーチャー」という

発声をきっかけに生起し、やがて「ブッ・●・チャー・●」という 4 拍（律拍）の音声のまとまりを作り出し、繰り返し唱えることへと発展した。

はじめのうちは、呼吸単位にまとめる声のリズムが一定しないが、やがてＹ児は、「ブッ」と「チャー」の 2 音のまとまりをもとにして、呼吸単位を 4 等分する安定した拍節にのって唱えるようになる。この安定したリズムを獲得すると、Ｙ児は最大に「快」の表情をみせた。

次の事例 3-14 は、Ｙ児が、「パカパカ」という擬音語を 2 拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて音楽的な表現を試みた場面である。

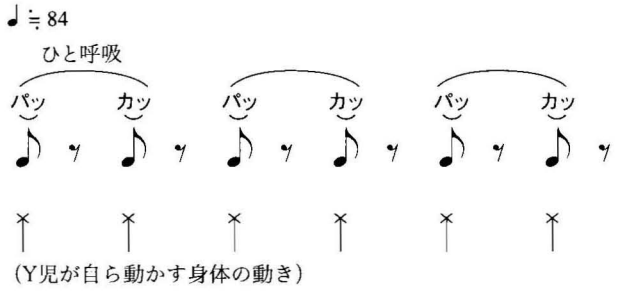
**【事例 3-14】擬音語を 2 拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて繰り返す**

**（生後 15 か月 16 日）【1997 年 7 月 28 日】**

午前 10 時過ぎ、Ｙ児は養育者と機嫌よく遊んでいる。養育者が「ちょっと休憩…」といって、仰向けに寝ころんだ。すると、Ｙ児は嬉しそうな表情で養育者のおなかにまたがり、「パッカッ、パッカッ…」と 37 回も繰り返して、身体を上下に弾ませた。

【譜例 3-12】　《リズミカルな擬音語「パッカッ、パッカッ」と動作の同期》

採譜者：岡林典子



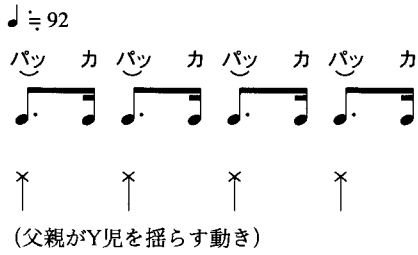
〔写真 3-8〕 養育者にまたがって、身体を弾ませる（生後 15 か月）

この場面でみられた馬乗り遊びは、Ｙ児がしっかりと座れるようになった生後 8 か月頃より、父親が自分のおなかにＹ児を乗せて「パッカ、パッカ」とかけ声をかけながら弾ませたことに始まる。父親とＹ児の間では、この遊びが断続的に遊ばれていたが、養育者との間では、これまでに経験されてはいない。

父親は、馬が走るひづめの音を表す擬態語「パカパカ」のうち「パカ」の2音を、「パッカ」と弾ませて、「パッカ、パッカ」とリズミカルに表現している（譜例3-13）。これは、2音ずつまとまる特徴のある日本語を、「はずむ形[20]」で唱えたものである。こうしたかけ声を、およそ半年間にわたって取り込んできたY児は、この場面では、「パ」「ッ」「カ」「ッ」の4音を「パッ」「カッ」と2音ずつ結びつけて2拍（律拍）の拍節を作り出し、弾む動作と同期させて、37回も繰り返した。

【譜例3-13】　《父親のかけ声「パッカ、パッカ」と動作》

採譜者：岡林典子




ところで、Y児には4音からなる擬音語「ワンワン」を、本事例と同様に2音ずつ結びつけて、「ワン・ワン」と2拍（律拍）の拍節を形成して発話する行為が、すでに1語発話前期の事例3-10（生後12か月21日）において観察されていた。このときの行為は、繰り返されず、1回だけのものであった。しかし、1語発話後期に入った本事例では、「パッカッ、パッカッ…」とリズミカルに37回も繰り返されている。Y児は、自らが作り出す拍節的な擬音語のリズムにのり、声と弾む身体の動きを同期させて繰り返し、自力で馬乗り遊びを楽しむことができるようになっている。こうした行為の変化に、Y児の音楽的な成長がみてとれる。

次の事例3-15は、音声模倣によって、Y児と養育者の間に、「パンツ」という有意味語を用いた音楽的なやりとりが、成立した場面である。

---

20 「はずむ形」とは、間宮芳生が、日本語の2音が歌われる場合に ①等分の形、②前へよる形、③はずむ形、の3種類に分類される、と示唆した中の③に該当するものである（P.45の注5 ③を参照）。

**【事例 3-15】音声模倣によって、1 語のリズミカルな言葉のかけ合いが成立する**

**（生後 15 か月 7 日）【1997 年 7 月 19 日】**

オムツ交換の途中で、Y児はパンツをはくのを嫌がり、養育者から逃げようとする。養育者は、Y児の腕をつかまえて、「パーンツ」とリズミカルに声をかけ、パンツをはかせる。音声模倣の盛んなY児は、すぐに模倣して、「パーンチ」と発声したので、「パーンツ」「パーンチ」「パーンツ」「パーンチ」と、「パンツ」の 1 語を用いたリズミカルな言葉のかけ合いが、Y児と養育者の間に成立した。

【譜例 3-14】　《「パーンツ」のかけ合い》

この場面のリズミカルな言葉のかけ合いは、養育者の「パーンツ」というリズミカルな発話を、Y児が同じリズムで「パーンチ」と音声模倣したことに始まった。養育者が唱える言葉のリズムは、「パーン」「ツッ」と 2 音ずつのまとまりで 2 拍（律拍）の拍節を作り出している。また、「パン」の部分に長音が加わり、はずむリズムが生み出されている。これは、先の事例 3-14 と同様に、間宮の分類した「はずむ形」に当てはまる。間宮は、人々の音楽的な表現の発想形態が、置かれた状況によって異なることを示唆し、「はずむ形」が遊びの場で支配的であることを挙げている [21]。本事例の養育者の音楽的行為は、リズミカルな言葉を用いた遊び気分を利用してY児にパンツをはかせようとした、養育者の無意識な行為から生まれたものである。また、先の事例 3-14 での父親のかけ声が、「パッカ、パッカ」とはずむ形であったのも、本事例 3-15 の養育者の行為と同様に、Y児を楽しませようとした遊びの状況が父親の音楽的行為に作用していたとも考えられる。

ところで、本事例 3-15 の養育者と事例 3-14 の父親のリズミカルな発話は、どちらも「はずむ形」であったが、Y児の表現は 2 つの場面で異なっている。本事例では、Y児は養育者と同様に、2 音を「パーンチッ」と「はずむ形」で発話しているが、先の事例 3-14 では、

---

21 内田るり子編 『間宮芳生 日本民謡集』1975 全音楽譜出版社 p. 134

「パッ・カッ」と「等分の形」で表現している。この違いが生じた背景には、本事例でのY児の行為が養育者の音声を模倣した表現であったのに対して、事例3-14では、Y児の自発的な行為であったという、状況の違いが挙げられる。したがって、1語発話後期にあるY児は、音声模倣に依れば、2音を「はずむ形」にして表現することが可能であるが、独力ではまだ2音を「はずむ形」にして表現することが難しい段階にある、ということができる。

次の事例3-16は、Y児が喃語的音声を4拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて繰り返す場面である。

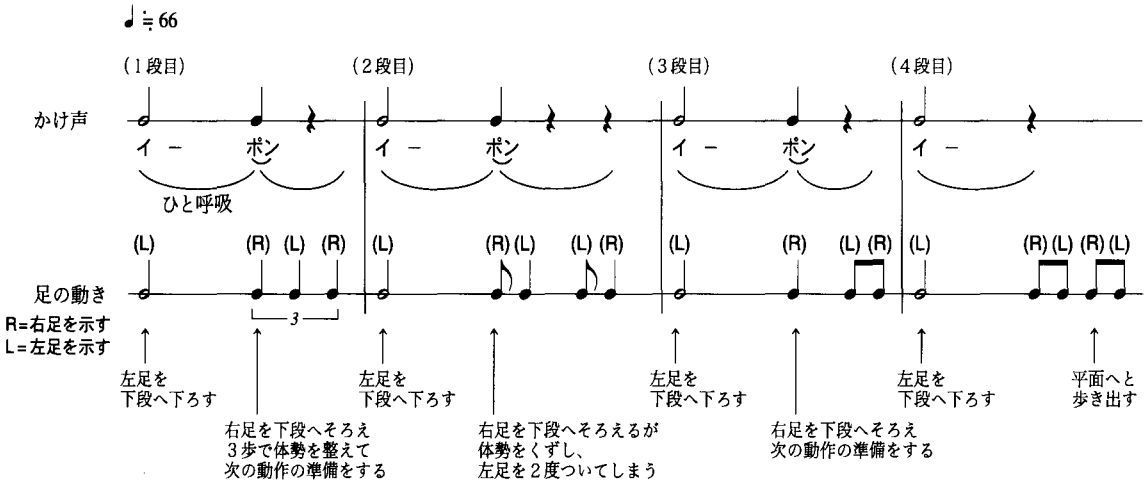
**【事例3-16】喃語的音声を4拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて繰り返す**

**（生後17か月19日）【1997年9月30日】**

秋晴れの気持ちのよい日であった。Y児は昼寝の後、養育者と山の上の公園へ出かけた。1人歩きが上達し、階段のぼりにも積極的に挑戦する毎日である。広々とした公園を嬉しそうに歩き回るY児は、階段を一気に5段上った。そして、景色を見回した後、前かがみになって呼吸を整え、「イーポン」や「ポンイー」と繰り返し唱えて、身体のバランスをとりながら、自力で慎重に、1歩ずつ階段を下りはじめた（譜例3-15,3-16）。

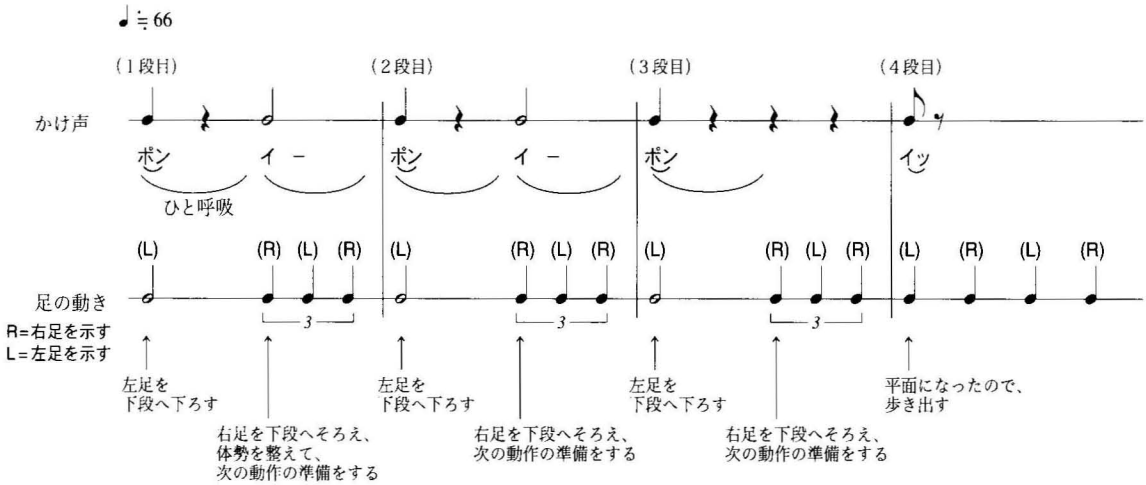
【譜例3-15】　《喃語的音声「イーポン」と動作の同期》

採譜者：岡林典子



【譜例 3-16】　《喃語的音声「ポンイー」と動作の同期》

採譜者：岡林典子




この場面でみられた音声表現は、Y児が階段を下りる動作と同期させて、自発的に生み出したものである。幼い子どもが階段を下りる動作は、大人のように左右の足を交互に出すのではなく、まず左右どちらかの足を下の段におろし、次に残った足をそこへそろえる動作の繰り返しである。身体のバランスをとることがまだ難しい1歳児にとっては、下ろす1歩もそろえる1歩も、ともに慎重に行なわなければならない動作である。そのような動作を習得するために、Y児は、「イ・ー・ポン・●」「ポン・●・イ・ー」など、言語的には意味を持たない喃語的音声の4拍（律拍）の時間的なまとまりを用いて、自力で身体の動きをまとめることを懸命に試みている。

**〔写真 3-9〕 喃語的音声のかけ声を用いて、自力で階段を下りる（生後 17 か月）**

### ③まとめ

ここでは、本節第2項の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**◆ 1語発話後期にみられるY児の音楽的行為の特徴**

① 喃語的音声を、呼吸ごとに4拍（律拍）にまとめて繰り返す。

② 4音からなる擬音語を2音ずつまとめて2拍（律拍）の拍節を作り出し、繰り返し唱える。また、その声と動作を同期させる。

③ 音声模倣によって、養育者との間に1語のリズミカルなかけ合いを成立させる。

④ 音声模倣によれば、2音を「はずむ形」にまとめることが可能であるが、独力ではまだ難しい段階にある。

⑤ 喃語的音声の4拍（律拍）の時間的なまとまりを用いて、階段を下りる身体の動きをまとめる。

**◆養育者に働きかけにみられる音楽的特徴**

① 擬音語や言葉を2音ずつまとめて、「はずむ形」を作り出し、Y児に繰り返し唱えかける。

② Y児を遊ばせる状況において、①のようなリズミカルに「はずむ形」の言葉を作り出す傾向がある。

## 第4節　2語発話期にみられる音楽的やりとりから

本節では、2語発話が出現し、順調に言語獲得が進行している生後18～19か月の期間に、養育者とのやりとりの中でみられたY児の音楽的行為について、事例に基づき分析と考察を進める。

### (1)Y児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

生後15か月頃から手すりを持って、階段を上っていたY児は、17か月で、はじめて手すりを持たずに、ゆっくりと階段を下りることができたが、18か月に入ると階段下りにも少しずつ慣れてきた。また、19か月には、両足をそろえてジャンプすることを身につけ、盛んに試みるようになった。

【話し言葉の獲得状況】

18か月に入ると、「モモ・オチタ（桃のおもちゃが落ちた）」というはじめての2語発話が出現した。さらに言語の理解と習得が進み、養育者の「ボール、コロコロしてごらん」という発話に対して、「コロコロー」といってボールを転がすというような場面もみられた。

また、19か月にかけて、「オチャ・ホシイ」「ジドウシャ・コワイ」「ニャーニャ・イッチャッタ」など、順調に2語発話が増えていった。さらに、イチゴ、バナナ、カキなどの果物の名前や「アリガトウ」「コンニチワ」などの挨拶の言葉も身についてきて、1語発話期よりも語彙がかなり増えている。

### (2)観察事例の分析と考察

次の事例3-17は、Y児の喃語的音声に音楽的な抑揚がつき、4拍（律拍）でリズミカルに唱えられた事例である。

**【事例3-17】喃語的音声に音楽的な抑揚をつけ、4拍（律拍）にまとめて、動作と同期させる**　**（生後18か月24日）【1997年11月4日】**

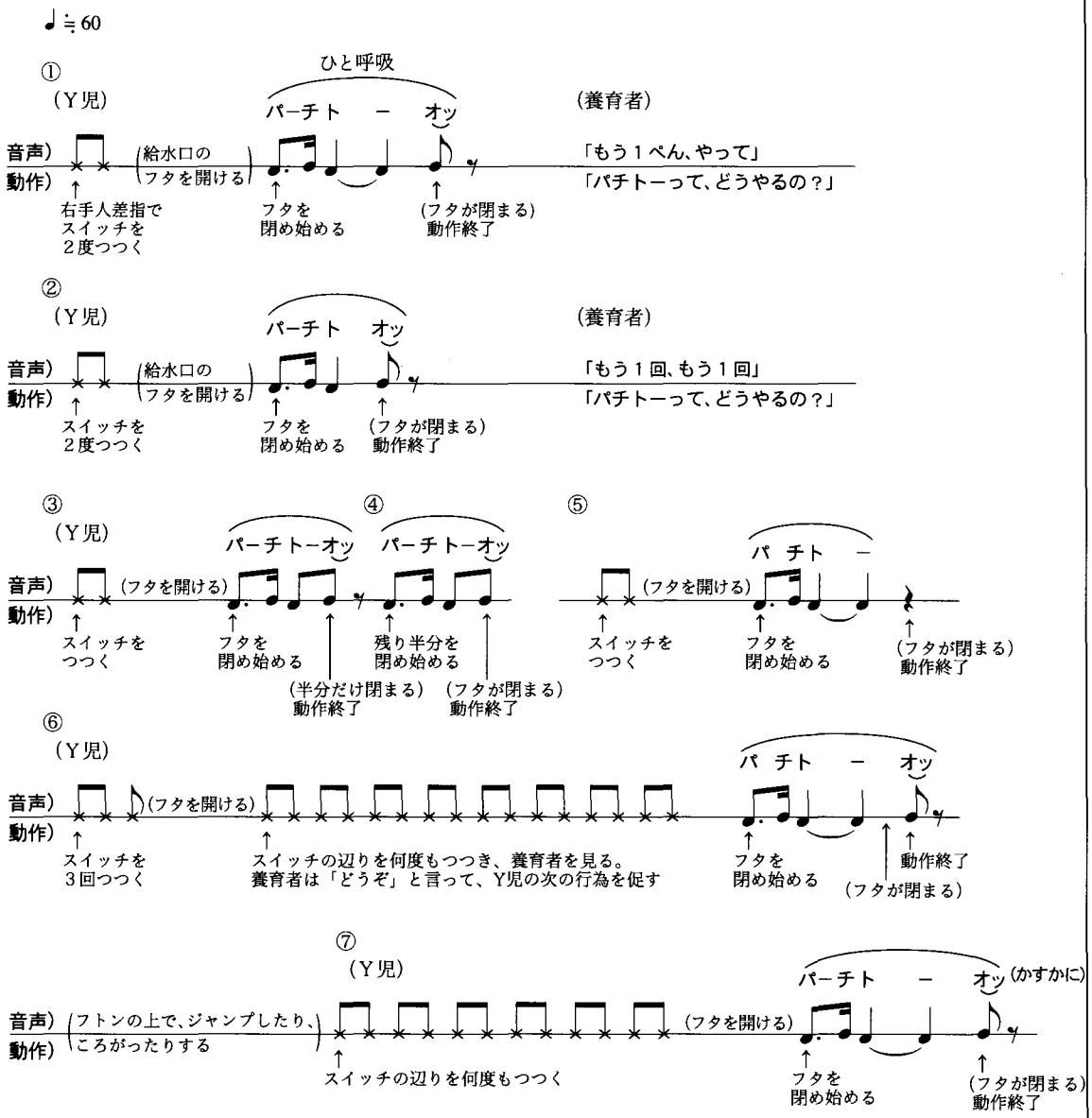
昼寝の前、Y児は部屋の中にある温風機に近づき、いつも養育者がスイッチを押して作動させる時の、動作の真似をはじめる。それは、スイッチを2度押した後、給水口の蓋を開け、「パーチ・ト・ー・オッ」と唱えながら蓋を閉める、という一連の行為であった。

養育者は、この行為に興味をひかれたので、思わず、「もっかい（もう1回の意味）やって…パチトーって、どうやるの？」と言葉をかけた。すると、Y児はおどけてジャンプをしたり、

うれしそうに布団の上で転がりながら、この抑揚のある喃語的音声と一連の動作を同期させて、7回繰り返した（譜例3-17）。その後、次第に、唱える声が朗々と歌い上げるように変化してゆき、呼吸周期も長くなっていった（譜例3-18）。

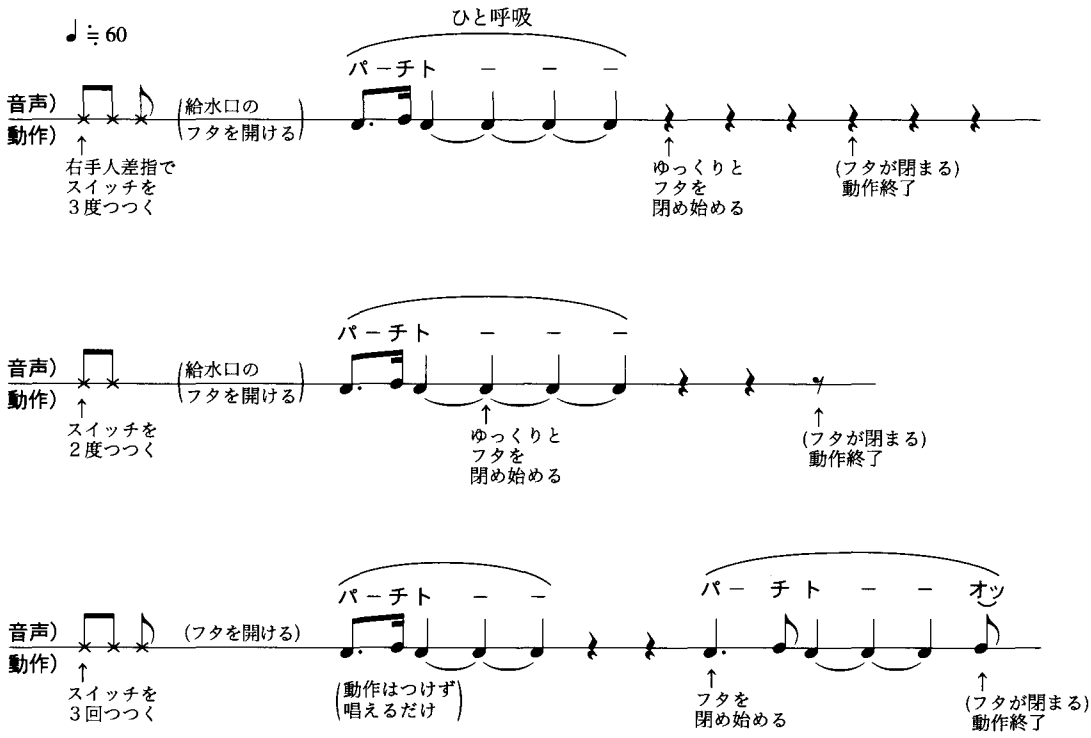
【譜例3-17】　《音楽的な抑揚のある喃語的音声と、動作の同期①》

採譜者：岡林典子



【譜例 3-18】　《音楽的な抑揚のある喃語的音声と、動作の同期②》

採譜者：岡林典子

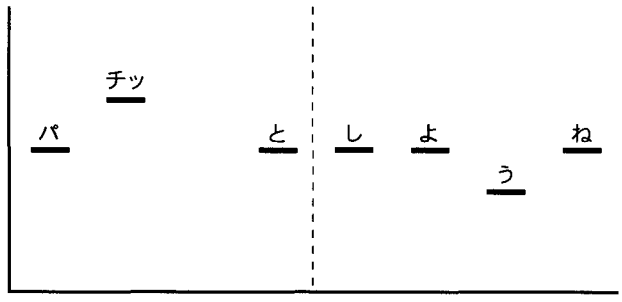



この場面では、Y児の喃語的音声が、次第に音楽的な抑揚のある、歌うような表現へと移行してゆく過程がみてとれる。はじめは、給水口の蓋を開け閉めする動作と同期して、呼吸単位にまとめる声のリズムが一定しない（譜例 3-17①～⑤）。しかし、やがて呼吸単位を 4 等分する安定した拍節にのって、唱えられるようになる（譜例 3-17⑥,⑦）。Y児が繰り返し唱える旋律は、ほぼ長 2 度の音程の隔たりがあり、2 音旋律である。さらに、譜例 3-18 からは、音声と動作の結びつきがゆるみ、音声表現のリズムが、より安定してバランスのとれたものになり、音楽的に発展した表現へと移行したことがみてとれる。朗々と歌うように唱えながら、ゆっくりと蓋を閉める様子からは、Y児が動作と音声を一致させることよりも、自ら作り出した音響のまとまりをリズミカルに唱えることに対して、心地よさを感じているように思われた。

ところで、「パチトー」という音声表現は、生後 12 か月頃からY児がベビーカーに乗るときに、養育者が安全ベルトを締めてやりながら、「パチッとしようね」と語りかけていた

言葉の音響を、取り込んだものではないかと推測できる。Y児は、温風機の給水口の蓋がパチッと閉まることをきっかけに、直感的に安全ベルトを締めるときの養育者の発話「パチッとしようね」に音のイメージをつなげ、このような音声表現を試みたのではないだろうか。それを、この時期のY児に問いかけて答を引き出すのは、困難なことである。しかし、筆者は、以下に示す2つの理由から、この推測が成り立つのではないかと考える。その1つは、養育者の発話「パチッとしようね」と、Y児の音声表現「パチトー」に、「パ・チ・ト」という共通の音が含まれていることである。2つめは、Y児の「パチトー」という抑揚のある喃語的音声の旋律輪郭と、養育者の発話の音高関係とが一致している点である。図3-1より、養育者の発話の音高関係は、「チ」が「パ」や「と」よりも高く発声されていることが読みとれる。一方、譜例3-18より、2音旋律で唱えられた「パチトー」というY児の音声表現も、「パ」や「ト」よりも「チ」が高く唱えられていることが読みとれる。したがって、Y児の喃語的音声の旋律輪郭と、養育者の発話の音高関係には一致が認められ、上記のように推測したのである。

**【図3-1】養育者の発話にみられる音高関係**　　作成：岡林典子




小島美子は、ことば自体のアクセントやイントネーションをそのまま反映した旋律、つまり言葉の支配に無条件に従う旋律が、わらべうたの旋律のもっとも基本的な原型、すなはち、わらべうたの原初的な形であることを示唆している[22]。本事例は、2語発話期にあるY児が、これまでの日常生活での養育者とのやりとりを通して、わらべうたの出発点ともいえる2音旋律を習得しつつあることを示唆する興味深い事例であるといえる。

Y児の音楽的行為はこれまでに、①生後12か月後半頃に「ワンワン」の4音からなる

---

22 小島美子 1969b「旋律法」小泉文夫編『わらべうたの研究/研究編』稲葉印刷所 p.420

擬音語を、2拍（律拍）で「ワン・ワン」のようにリズミカルな1語で表現していたものが、生後15か月頃には、「パッ・カッ、パッ・カッ…」のように2拍（律拍）で37回も繰り返し唱えることができるようになる、②生後15か月には、新たに喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて繰り返すことができるようになるなど、主にリズム面において音楽的な変化をみせてきた。本事例は、2語発話期に入ったY児の音楽的行為が、新たに旋律面において音楽的な変化を遂げつつあることを示唆するものである。

次の事例3-18は、Y児が言語的な意味を持たない喃語的音声を、7拍にまとめて、リズミカルに繰り返した事例である。

**【事例3-18】喃語的音声を7拍（律拍）にまとめて、動作と同期させる**

**（生後18か月24日）【1997年11月4日】**

事例3-17の少し後、Y児は再び給水口の蓋を開け、真剣な表情で手を突っ込んでいた。養育者が視線を向けていることに気づくと、その行為を中断し、照れて布団の上に転がった。養育者は、Y児がもっとやりたかったのではないかと察して、「もっかいやって、ゆかちゃん」と、声をかけた。すると、Y児は、温風機に近づき、前面に貼ってあるラベルを指差しながら、「パア・ウウ・パア・ビイ・ダア…」と、喃語的音声に抑揚をつけて唱え始めた。繰り返すうちに、Y児は次第に、安定した7拍（律拍）のリズムを獲得し、温風機をつつく動作と同期させた。この音楽的行為は、続けて10回繰り返された（譜例3-19）。

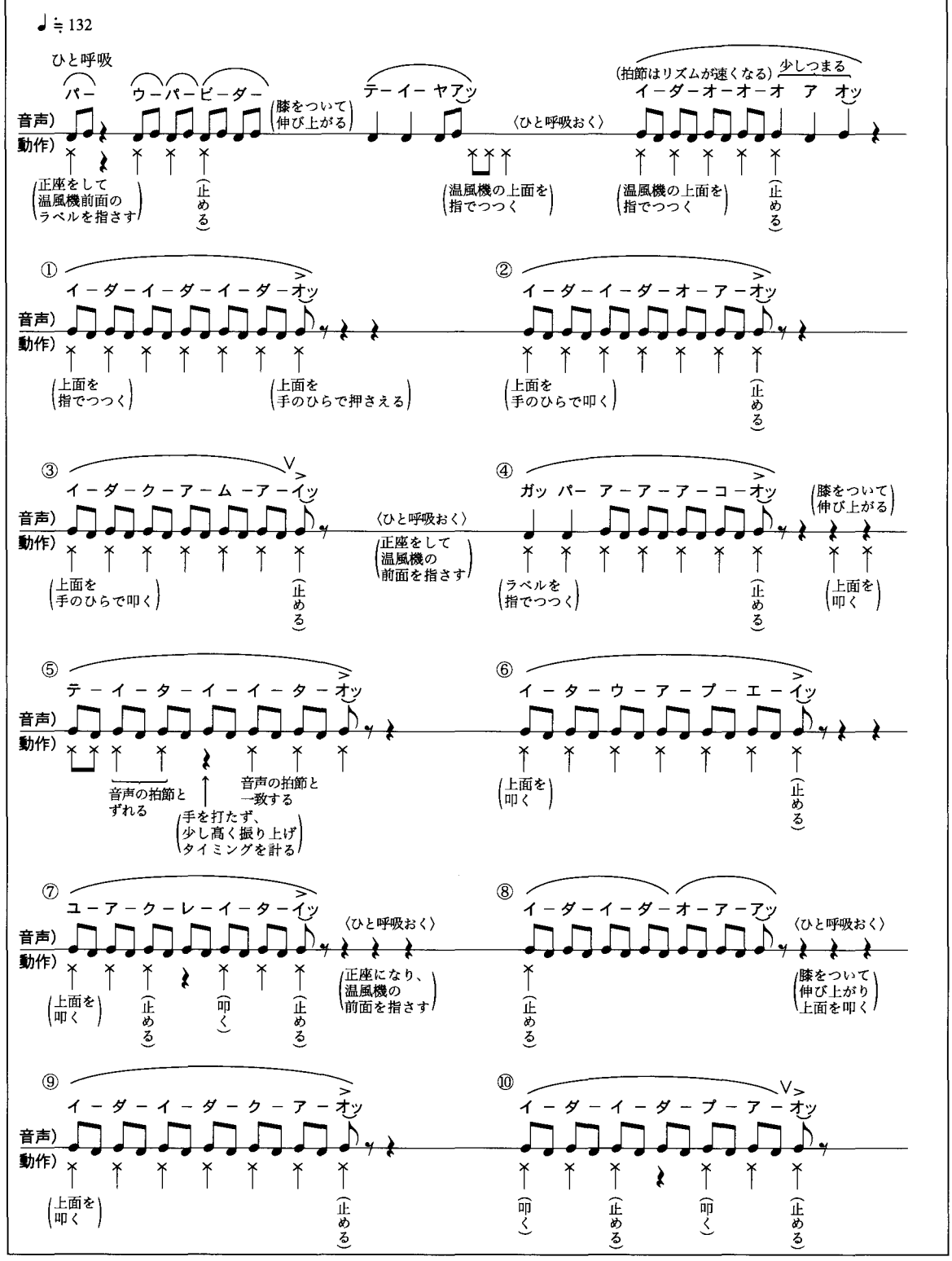
この場面では、偶発的な喃語的音声から、次第に安定した7拍（律拍）のリズムを獲得してゆく過程がみられる。Y児は、はじめのうちは喃語的な音声を、恣意的に温風機をつつく動作と同期させていた。この段階では、まだ呼吸単位にまとめられる音のリズムは一定していない。しかし、次第に7音のまとまりを呼吸単位に拍節的に唱えるようになり、動作と同期させた。ここでの音声のまとまりは、3・3・7拍子の7拍子部分を思わせるものがあった。

ところで、この音楽的行為がみられる約2時間前に、養育者は絵本をみながらY児とやりとりする中で、「おすし」という言葉を教えようとしていた。その場面で養育者は、通常の話し言葉に比べると、より拍節的に「お・す・し」と、1音ずつを強く発声し、絵をつつく動作を同期させて3回発話していた。

ここでの養育者の意識は、Y児に「おすし」という言葉を教えることに集中しており、言葉と動作を結びつけてリズミカルに唱えることに関しては、全く無意識であった。このような養育者と子どものやりとりは、意図的であろうと無意図的であろうと、日常生活の中で幾度となく交わされているものと思われる。事例3-18でみられたY児の音楽的行為は、

日常生活での場面や時間の共有を通して、Y児が養育者の行為をモデルとして取り込み、自ら音楽的に成長する過程を示唆するものである。

【譜例 3-19】　《7 拍（律拍）にまとめられた音声と、動作の同期》　作成：岡林典子



次の事例 3-19 の①～③は、1 語と動作を同期させる音楽的行為の事例であり、日本の文化に慣習的な行為が音楽的にまとめられている様子が伺える。

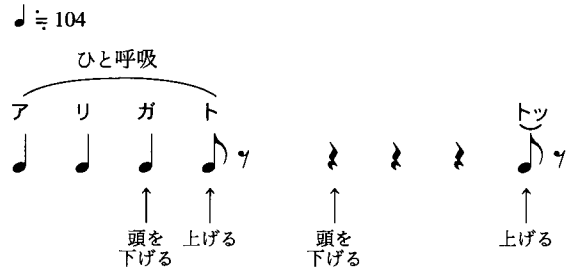
**【事例 3-19】1 語と動作を同期させる**

**①「ア・リ・ガ・ト」の 1 音と、お辞儀をする 1 動作が同期する**

**（生後 19 か月 22 日）【1997 年 12 月 3 日】**

Y 児はおもちゃの車に首飾りが引っかかり、取れなくなった。不快の声を発して養育者に訴える。養育者が首飾りを取ってやると、嬉しそうな表情になった。養育者が「アリガトは？」と、Y 児に礼を言うことを促すと、Y 児は「ア・リ・ガ・ト」と言いながら、立ち上がって礼をした。養育者が「『アリガト』してくれたのー」と頭をなでてやると、Y 児は再び、「●・●・●・トッ」（●は 4 分休符を意味する）といって、お辞儀をした。（譜例 3-20）

【譜例 3-20】　《「ア・リ・ガ・ト」の 1 語と動作の同期》　採譜者：岡林典子




この場面で、養育者は、Y 児に「人に対して礼を言う」ということを教えるために、「アリガトは？」と言葉をかけて、礼を促した。それに対し、Y 児は譜例 3-20 に示したように、ひと呼吸を「ア・リ・ガ・ト」「●・●・●・トッ」と 4 拍に等分割して発声しながら、お辞儀をして「ト」の部分で頭を上げて一連の動作をまとめている。

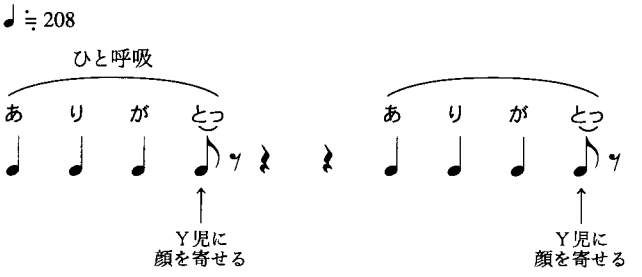
この場面が観察される 3 週間前に、養育者にも同様の行為がみられた。以下はその場面である。

**生後 19 か月 2 日（1997 年 11 月 13 日）**

夕方 5 時半ごろ、Y 児と養育者は向かい合っておもちゃを受け渡ししている。Y 児が養育者の手に「ハイ」といっておもちゃを乗せると、養育者は「あ・り・が・と」と礼を言う。Y 児が全部のおもちゃをのせ終ると、養育者は「ありがとっ、ありがとっ」といいながら、Y 児に顔を近づけた。（譜例 3-21）

【譜例 3-21】　《養育者による「ア・リ・ガ・ト」の1語と動作の同期》

採譜者：岡林典子




この場面での養育者の行為は、譜例 3-21 に示したように、ひと呼吸を「あ・り・が・と」と4つの音節に等分割して発声し、「と」の部分でY児に顔を寄せて動作をまとめている。この表現は、通常の「ありがとう」という話し言葉よりも、はっきりとした発声で拍節を感じさせるリズミカルなものであった。

養育者をはじめとする子どもの周りの大人が、まだ言葉をうまく話すことのできない幼い子どもに対して、「ありがとう」「こんにちは」などの言葉を、通常の言葉よりも1音ずつはっきりと発話する行為は、比較的頻繁にみられる。田中泉(2003)は、11か月の乳児と養育者のやりとりの観察事例において、養育者が子どもに向かって「ありがと」という場面を以下のように記述をしている[23]。

> Y（11ヶ月4日）が母親の前に座り、両手に持ったブロックを反復して打ち合わせると、母親が「カチカチって。」と応え、Yは母親を見ながら再びブロックを打ち合わせる。母親が「じょーず（上手)。」と応えると、Yはその動作をくり返す。
>
> ブロックを持って母親の膝元に寄ったYに、母親が「くれるの？ありがと。(下線は筆者による)」と言うと、Yは「バッ」と声を出す。

田中の観察事例にみられる母親の「ありがと」という表現は、譜例を伴なっていないので確認ができないが、おそらく日本語の音楽的特徴であるシラブルの等拍性により、4拍にまとめられていると推測できる。同様に、本研究においても、祖母が16か月のY児に向

[23] 田中泉 2003『幼児の音声行動にみられる音楽的側面に関する研究―音・リズム・反復を中心に―』日本女子大学大学院人間生活学研究科博士論文 p.84

かって、「こ・ん・に・ち・は」と1音ずつを等拍ではっきりと発話しながら、お辞儀の動作を同期させるという場面がみられた。

一方、本事例のY児のように、言語獲得過程にある幼い子どもの発話において、通常の発話よりも1音ずつの等拍性が強調される場合がある。柴山真琴が行った、中国からの国費留学生の子どもである3歳児の保育園での観察事例にも、以下のように本事例と同様の「ありがと」という表現がみられる[24]。

屋上では三輪車遊びの他にフラフープ遊びも並行して行われていた。

シゲキ：「緑ー！　緑ー！」

緑色のフラフープを欲しがって泣き出す。

夏川先生：「またシゲ君の『緑ー！　緑ー！』が始まったね」（笑いながら）

「ヨウスケ君、使ってないんだったら、シゲ君に貸してあげてもいい？」

ヨウスケ：自分が乗っている三輪車を囲む形で床に置かれた緑色のフラフープを拾い上げて、シゲキに渡す。

智　志　：「ありがと！」（下線は筆者による）

シゲキに代わってヨウスケにお礼を言う。

これらの事例は、養育者をはじめとする子どもの周りの大人や、まだ言葉をうまく話すことのできない幼い子どもが、「ありがとう」「こんにちは」などの言葉を、通常の言葉よりも1音ずつはっきりと発話する行為が、本論文のY児と養育者の間で特別に交わされるものではなく、一般的にも見られる行為であることを示唆するものである。

さて、本事例では、先の事例3-17や3-18と同様に、Y児が日常生活での場面や時間の共有を通して、養育者や祖母などの行為をモデルとして取り込み、自ら音楽的に言葉と動作をまとめる行為を身につけてゆく過程を捉えることができた。

次の事例3-19-②は、Y児が生後17か月の子どもと呼吸を合わせて、「コンニチハ」「バンザーイ」いう1語と動作をまとめた場面である。

---

24 柴山真琴 2001 『行為と発話形成のエスノグラフィー』東京大学出版会 p.107

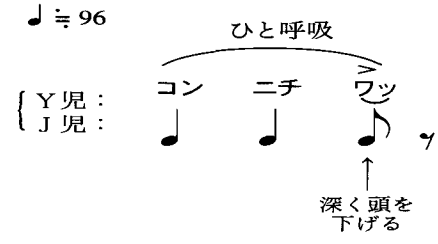
**【事例 3-19】1 語と動作を同期させる**
**②他者と呼吸を合わせて、1 語と動作をまとめる　（生後 19 か月 24 日）【1997 年 12 月 5 日】**

場面 1：

Y 児と J 児（生後 17 か月）は、それぞれの養育者とともに、公園に遊びに来ている。2 人が遊ぶ姿をみて、通りすがりの老人が、「こんにちは」と声をかける。すると、2 人は膝と腰を曲げてお辞儀をする格好をしながら、声を合わせて、「コンニチワッ」と頭をさげた。(譜例 3-22)

【譜例 3-22】　《Y 児と J 児の「コンニチワ」の 1 語と動作の同期》

採譜者：岡林典子

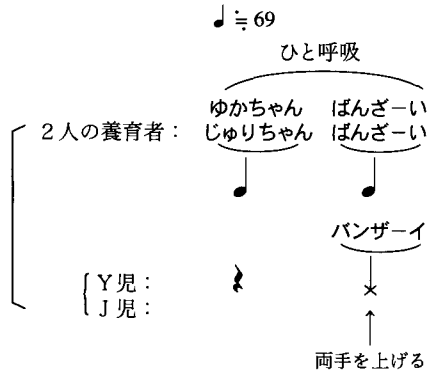



場面 2：

場面 1 の後、養育者は 2 人の子どもが並んだ写真を撮ろうと試みるが、じっとしないので撮ることができない。そこで、名前を呼びかけると、2 人が手を上げた。それをきっかけにして、養育者たちがそれぞれ、「ゆかちゃん、ばんざーい」「じゅりちゃん、ばんざーい」とリズミカルに声をかける。すると、2 人の子どもは、声を合わせて、「バンザーイ」といいながら、両手を上げる動作を同期させた。(譜例 3-23)

【譜例 3-23】　《Y 児と J 児の「バンザイ」の 1 語と動作の同期》

採　譜者：岡林典子



〔写真 3-10・3-11〕「コンニチワ」「バンザーイ」という言葉とともに、動作をまとめる（生後 19 か月）

これら 2 つの場面には、2 人の子どもが呼吸を合わせて、バランスよく言葉と動作をまとめようとする姿が伺える。この時期の子どもは、言葉の意味の理解が進み、頭の中で行為や事象、事物などを思い浮かべることができるようになってくる。こうした認知の発達をもとに、この場面では子どもたちが、「こんにちは」や「バンザイ」など、大人の働きかけた言葉をきっかけとして、その言葉にふさわしい慣習的な動作を思い浮かべ、言葉と動作を音楽的にバランスよくまとめて表現していることが理解できる。

次の事例 3-19-③は、Y 児が養育者の唱える音楽的な 4 拍のリズムにのって、「ポン」という 1 語と動作とを同期させ、養育者と声を合わせる場面である。

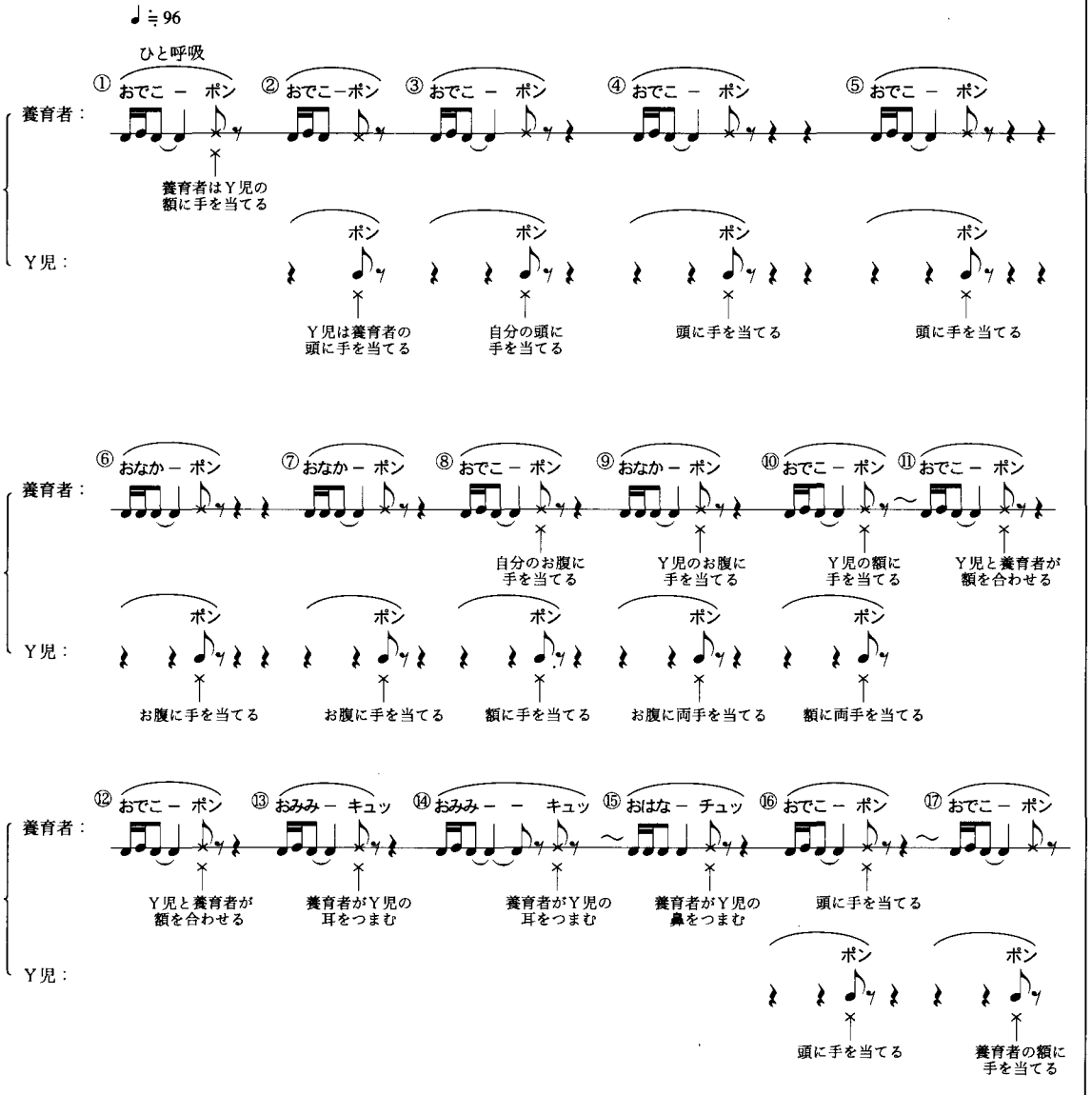
**【事例 3-19】1 語と動作を同期させる**
**③養育者がまとめる安定した 4 拍（律拍）のリズムにのって、1 語と動作を同期させる**

**（生後 19 か月 2 日）【1997 年 11 月 14 日】**

午後 8 時過ぎ、退屈そうにしている Y 児に、養育者は「ゆかちゃん、お母さんと“おでこ・ポン”しようか？」と誘いかけ、Y 児の前に正座した。そして、「おでこー・ポン」と唱え、「ポン」の発声に合わせて Y 児の額に手をあてた。次に「ゆかちゃん、おでこポンして」と Y 児に参加を求め、「おでこー・ポン」と唱えかけた。すると、Y 児は養育者の「ポン」に合わせて、自らも「ポン」と発声して養育者の額に手を当てた。Y 児が誘いにのってきたので、養育者は Y 児と視線を合わせ、微笑みながらこのやりとりを繰り返した。Y 児は、養育者の唱えに合わせて、「ポン」といって自分の額やおなかに手を当てる。この音楽的行為は、少しずつ変化しながら、17 回続いた。（譜例 3-24）

【譜例 3-24】　《Y児と養育者の「おでこー・ポン」を用いた音楽的やりとり》

採譜者：岡林典子



**〔写真 3-12・3-13〕 「ポン」という言葉とともに、養育者の額や、自分の額に手を当てる(生後 19 か月)**

この場面での養育者は、リズミカルな言葉で遊びを誘いかけた。Y児が遊びに加わると、養育者は安定した呼吸周期で、続けて「おでこー・ポン」と唱えかける。これに対しY児は養育者の呼吸の長さと4拍の拍節感を直感的に感じとり、「ポン」のところでタイミングよく養育者と声を合わせて自分の額に手を当てる動作を同期させた。養育者が「おなか・おみみ・おはな」など言葉を入れ替えることを試すと、それに対し適切な動作表現でタイミングよく声や動作を同期させていた。

このように、Y児は養育者との音楽的なやりとりの中で、すでに獲得している4拍にまとめる拍節感覚から、養育者の唱え言葉の拍節を捉え、自分の呼吸を相手の呼吸の長さに合わせて、言葉や声、動作を同期させているのである。

### (3) まとめ

本節の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**●2 語発話期にみられるY児の音楽的行為の特徴**

① 生後 18 か月には、これまでの日常生活での養育者とのやりとりを通して、わらべうたの出発点ともいえる2音旋律を習得しつつある。

② 偶発的な喃語的音声から、次第に安定した7拍（律拍）のリズムを獲得してゆく

③ 日常生活での場面や時間の共有を通して、Y児が養育者の行為をモデルとして取り込み、自ら音楽的に成長する過程を示唆するものである

④ 「アリガトウ」や「コンニチワ」などの慣習的な言葉と動作を、他者と呼吸を合わせて、バランスよくまとめようとする。

⑤ Y児は養育者との音楽的なやりとりの中で、自分の呼吸を相手の呼吸の長さに合わせ

て、言葉や声、動作を同期させることを獲得している。

**◆養育者が働きかける音楽的行為の特徴**

① リズミカルな言葉で遊びを誘いかけ、Y児が遊びに加わると、安定した呼吸周期で、2語を4拍（律拍）にまとめてリズミカルに唱えかける。養育者が語りかけるリズミカルな言葉は、2音節ずつまとまり、全体で4拍のまとまりが作り出される傾向がある。

② 養育者の語りかける言葉は、日本語の音楽的特徴の1つである、高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされ、2音旋律で唱えられる。

## 第5節　3語～多語発話期にみられる音楽的やりとりから

本章第1節において、Y児に3語発話が出現した20か月から観察期間が終了する30か月までを、3語～多語発話期とすることを示した。また、それらを前期、中期、後期の3つに区分することと、その理由についても述べた。

本節では、上記のように区分した3つの期間のそれぞれについて、事例をもとに音楽的行為の分析を進める。

### (1) 3語～多語発話前期（生後20～22か月）について

本項では、生後20～22か月の期間に、Y児と養育者とのやりとりの中でみられた音楽的な音声、言葉や運動動作について、事例に基づき分析と考察を進める。

#### ①Y児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

歩く動作もしっかりと安定し、生後19か月には両足をそろえて盛んにジャンプするようになったY児は、20か月にはいると、ボールを蹴ることができるようになった。また、22か月には、20cmくらいの高さから跳べるようにもなった。

【話し言葉の獲得状況】

20か月にはいると、2語発話の安定とともに、「オフロ・タッチ・コワイ（お風呂で立つのは恐い)」「オカータン・ピアノ・ヒクノ」「モット・アメ・ホシイ」など3語発話が出現した。しかし、まだ3つの言葉が助詞を省いた形で並ぶ電報文のような発話である。その後、月齢が増すとともに少しずつ多語発話の出現が増し、言葉のつながりが長くなった。

#### ②観察事例の分析と考察

Y児と養育者とのやりとりの中でみられた音楽的な言葉や行為について、以下の事例に基づき考察を進めたい。

**【事例3-20】養育者に導かれ、2語を2拍（律拍）にまとめ、動作と同期させる**

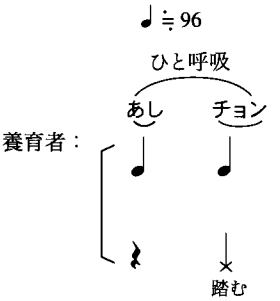
**（生後20か月9日）【1997年12月20日】**

昼食後、Y児は養育者とともに家の庭でボールを蹴って遊んでいたが、雨水を流すマンホールの石の蓋が怖くて近づけない。養育者は蓋が怖いものではないことを理解させようと、「“あし・チョン”ってしてごらん」と蓋を踏んでみせる（譜例3-25)。Y児はニコニコした表情で養育者に近づいて来て、手をつなぎ、呼吸を合わせて、「チョン」のところで踏む動作を同期さ

せる（譜例 3-26）。さらに、養育者の「チョン」という発話に自分の声と動きを同期させて、繰り返し試みる（譜例 3-27）。しばらくすると、Y児は少しためらいながら、自発的に「アシー、チョン」「アシ、チョン」などと発話して、言葉と動作をリズミカルに同期させた（譜例 3-28）。

【譜例 3-25】

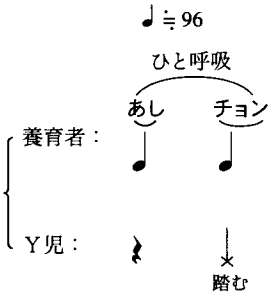
《養育者による「あし、チョン」の表現》　採譜者：岡林典子




【譜例 3-26】

《養育者とY児の「あし、チョン」の表現①》

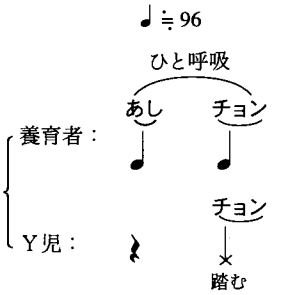
採譜者：岡林典子



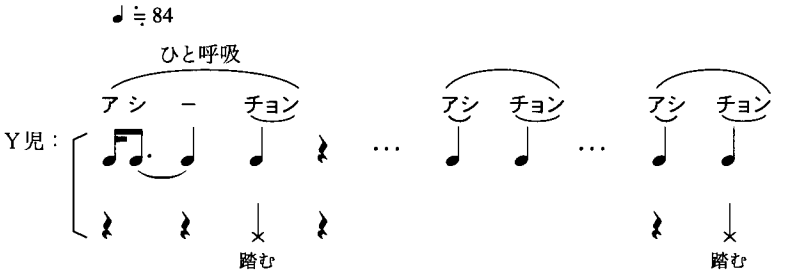

【譜例 3-27】

《養育者とY児の「あし、チョン」の表現②》

採譜者：岡林典子




【譜例 3-28】　《Y児による「あし、チョン」の表現》　採譜者：岡林典子



この場面には、Y児が養育者と言葉のリズムを共感し、やりとりを重ねながら2つの単語をつなげてリズミカルな2語発話を作り出し、動作と同期させてゆく過程がみてとれる。養育者はY児の恐怖感を遊びで取り除こうと思いつき、即興的に「足」と擬音語「チョン」をつなげて2拍（律拍）のまとまりを作り出し、2拍目の「チョン」に蓋を踏む動作を同期させた（譜例3-25）。この2語で構成された即興的な音楽的行為を、Y児は養育者とのわずか4回のやりとりで身につけ、自発的に試みた（譜例3-26, 27, 28）。譜例にみられるY児の行為の変化には、Y児がためらいながらも自発的にこの遊びに参加し、次第に養育者が作り出した2語を2拍（律拍）にまとめるリズミカルな表現を身につけてゆく過程が現れている。

本事例と同じく、前節の事例3－19-③（生後19か月）でも、即興的に2語をリズミカルにまとめた唱え遊び“おでこーポン”が観察されている。しかし、そこでのY児は養育者との17回のやりとりにおいて、養育者が唱えるリズミカルな2語発話「おでこー・ポン」の擬音語「ポン」の部分にのみ、声や動作を同期させることができたが、2語をリズミカルに唱えることは一度もできなかった。生後20か月になり、わずか数回の試みによって、動作を伴ったリズミカルな2語発話を身につけることができた背景には、Y児の言語獲得が、2語発話の定着や3語発話の出現へと着実に進行している状況があると考えられる。

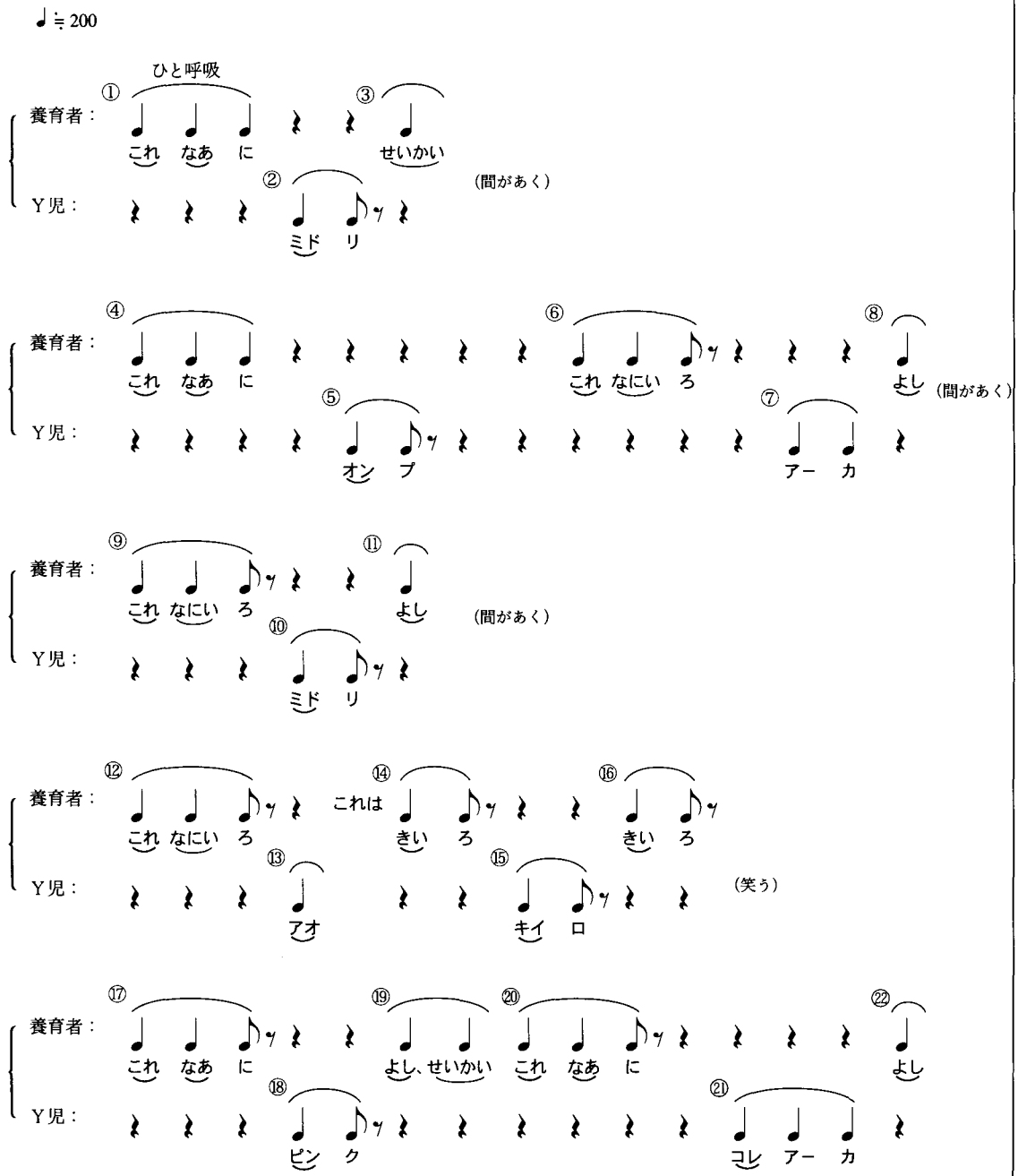
次の事例は、Y児が「これなあに？」と働きかける養育者の拍節的な言葉のリズムにのって、リズミカルに答えることができるようになった場面である。

**【事例3-21】養育者がまとめる拍節的な言葉のリズムにのって、問答遊びに答える**

**（生後20か月29日）【1998年1月9日】**

養育者は座卓の上を整理している。Y児は座卓の上にある色鉛筆とモールを触っている。2か月ほど前からY児は色に興味をもつようになり、覚えた色名も増えつつある。養育者はモールを手に取り、クイズを出すようにY児に向かって「これなあに？」とリズミカルに問いかける。Y児は養育者が作り出した言葉の拍節にのって、「ミドリ」「アーカ」などテンポよく答えてゆき、リズミカルな問答を繰り返した（譜例3-29）。

【譜例 3-29】　《養育者とＹ児の「これ、なあに」のやりとり》　　採譜者：岡林典子




この場面には、相手の作り出す拍節にのって、リズミカルに言葉のやりとりを試みるＹ児の姿が現れている。養育者は「これ」と「なに」の２語をつなげ、「これ・なあ・に●」と２音ずつまとめて拍節を形成し、一呼吸でリズミカルにＹ児へ問いかけている。譜例 3-29

からは、この場面でY児が養育者の作り出す拍節にのって、呼吸を整え、テンポよく色の名前を答えていく様子がみてとれる。しかし、全体的な流れをみると、問答の途中で間があいたり、呼吸の長さが養育者とY児の間で一致していない、などの特徴が見出せる。

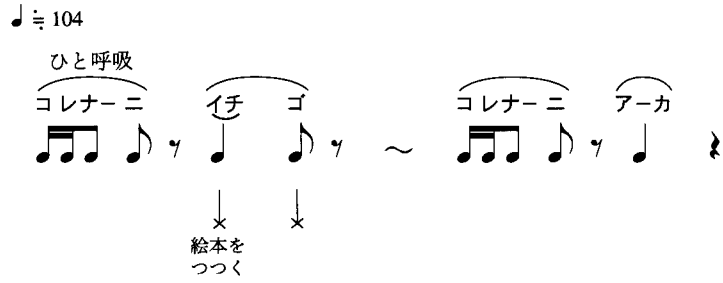
ところで、子どもが物の名前を次々に覚え、語彙を増やしていく時期には、一般的にみても、養育者はこのような問いかけを頻繁に行うようである。ブルーナー(Bruner, J)は、1歳児リチャードの母親が絵本を読む場面でみせる発話の種類を調べ、85の質問のうち57が「これ何？」であったと示唆している(Bruner, J 1983)。また、筆者が購入していた1～3歳児向けの絵本[25]の中には、「どうぶつ、これなあに？」「たべもの、これなあに？」「おもちゃ、これなあに？」などといったページが組まれており、この時期の子どもが「これなあに？」という問いかけを比較的頻繁に経験しているであろうと推測できる。

次の事例3-22は、事例3-21のやりとりに続くもので、Y児が自発的に「これ、なあに」の2語を拍節的にまとめ、リズミカルに自問自答を繰り返した場面である。

**【事例3-22】自発的に、「これなあに」の2語を拍節的にまとめ、そのリズムにのって自問自答を繰り返す　(20か月30日)【1998年1月10日】**

午前10時半ごろ、おやつを食べ終わって機嫌のよいY児は、養育者とともに絵本をみている。ページを自分でめくり、大きな4種類の果物の写真が掲載されたページを開くと、Y児は「コレナアニ？」「イチゴ」「コレナアニ？」「アーカッ」(譜例3-30)と写真を指差しながら、リズミカルに自問自答を始めた。

【譜例3-30】　《Y児による「コレ、ナアニ？」の自問自答》　採譜者：岡林典子




この場面からは、Y児がこれまでの養育者とのリズミカルな問答の経験を基盤にして、「これ」と「なに」の2語を用いて「コレナア・ニ」と2拍(律拍)でリズミカルな問いかけの言葉をまとめる方法を身につけつつあることが理解できる。Y児は、2語発話が定

25 『ベビーブック』1997～1999 小学館

着し、3語発話がみられるようになった3語～多語発話前期に、2語を拍節的にまとめて、リズミカルな問いかけの言葉を発話するようになってきた。

また譜例3-30より、Y児は、問いかける言葉だけでなく、答えの部分も含めて拍節的なリズムにのって唱えていることがみてとれる。特に、「イチ・ゴ●」と2音をまとめて作り出した2拍節に、絵本をつつく動作を同期させていることから、Y児が一呼吸の時間単位を2等分し、2拍の拍節を感じながらこの音楽的行為を試みていることが理解できる。

Y児は養育者の作り出した言葉の拍節にのって、タイミングよく答えることを身につけつつある。だが、この場面では自分から拍節を作り出し、そのリズムにのって自問自答を繰り返している。自分が形成した問いかけの言葉のリズムに、相手がタイミングよく答える間を待って、次の問いかけを継続していくことは、より高度なことかもしれない。

相手のタイミングを計り、間を合わせることを身につけるためには、この場面のようなリズミカルな自問自答の経験を重ねることが、練習の役目を果たしているのかもしれない。それについては、今後のY児の変化に注目し、検討する必要である。この先、Y児と養育者のやりとりは、さらに音楽的な変化をみせることになるが、それについては3語～多語発話後期の事例で取り上げ、詳細な分析を試みることにする。

次の事例3-23は、Y児が2語を4拍（律拍）にまとめて、リズミカルに発話した場面である。現在の言語獲得状況よりも1つ前の段階である2語発話期には、喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて繰り返す場面（事例3-17）が観察されている。しかし、喃語的音声ではなく、2つの言葉をつなげてリズミカルに表現する場面は、現在の3語～多語発話前期に入って、はじめてみられたものである。

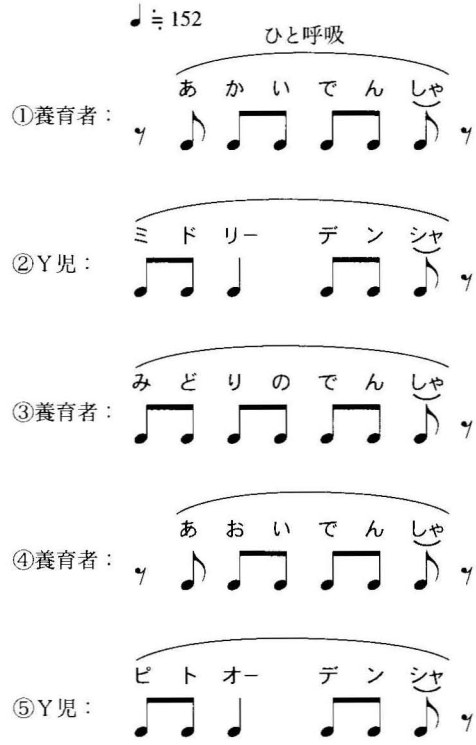
**【事例3-23】2語を4拍（律拍）にまとめて、リズミカルに発話する**

**（20か月30日）【1998年1月10日】**

Y児と絵本を見ていた養育者は、偶然に“でんしゃいっぱいずかん”というページを開き、「あっ、電車だ！」とY児の注意をひきつけた。そこには緑、赤、青などの電車が写真入りで載っている。養育者は、赤色の電車を指し、「●あ・かい・でん・しゃ●　」（譜例3-31-①）とリズミカルに言葉をまとめた。Y児も同様に緑色の電車を指し、「ミド・リー・デン・シャ●」（譜例3-31-②）と言葉をリズミカルにまとめる。養育者はそれを受けて、「みど・りの・でん・しゃ●」（譜例3-31-③）「●あ・おい・でん・しゃ●」（譜例3-31-④）と拍節的に続けた後、「ラピート（関西地方で走っている特急電車の名前）だ」と写真に見入る。Y児は「ラピート」と発音するのが難しいようで、小声で「ピト…」とつぶやいた後、「ピト・ォー・デン・シャ●」

（譜例 3-31-⑤）と拍節的に言葉をまとめた。

【譜例 3-31】　《養育者とＹ児の２語のやりとり》　採譜者：岡林典子




この場面には、やりとりの中で養育者が２語を４拍（律拍）に拍節的にまとめてリズミカルに唱える行為を、Ｙ児がモデルとして取り込み、自ら２語発話をリズミカルにまとめようと試みる姿が現れている。養育者は、はじめにひと呼吸の時間単位を２音のまとまりに従って「●あ・かい・でん・しゃ●」と４拍（律拍）にまとめ、拍節的に唱えている。そのリズムをＹ児も取り込み「みどり」と「でんしゃ」の２語をつなげて、「ミド・リー・デン・シャ●」と、一呼吸の時間単位を４拍（律拍）にまとめようと試みている（譜例 3-31-②）。

**〔写真 3-14〕養育者と絵本に見入る（生後 20 か月）**

続けて養育者が、「みど・りの・でん・しゃ●」「●あ・おい・でん・しゃ●」とリズミカルに発話したので、音楽的な言葉のやりとりが生じた。最後にＹ児が養育者の話し言葉の

中から、「ラピート」という語を取り込み、「ピト・ォー・デン・シャ●」と「デンシャ」の部分を強く発声した。この場面でみられる一連のリズミカルな言葉は、「でんしゃ」の部分が韻を踏んで繰り返されている。それは、日本語のもつリズム感が、より強調され、遊戯的な印象を与える。Y児が、「デン・シャ」とアクセントをつけて強く発話したのは、一連の2語からなる発話の中で、この部分が韻を踏んでいること、そして、それを声に出して発話する心地よさを、Y児が直感的に感じ取っていたからではないかと思われる。

ところで、先に日本語の音数律（特定の音数構成によって成立する特別なリズム）の基本が、2音を1律拍とする4拍子進行によって成立するもので、8音が日本語の音数律の原型をなすものであることを述べた[26]。また、日本語を話すわれわれは、4拍子の拍子進行にのせるために、無意識に 以下のような基本的な技術を身につけている[27]。①2音ずつに区切って拍子をとる、②8音に満たない場合は、不足ぶんを休止として末尾に充当する、③6音以上の句で、3音めで切れる場合は、冒頭に1音分の休止を置く、など。

事例3-31では、養育者が自分の発話を日本語の音数律の原型である8音に整えるために、「●あ・かい」と休止を入れたり、「みど・りの」と助詞の「の」を入れてリズミカルに発話している。一方、Y児も譜例 3-31-②・⑤より「ミド・リー」や「ピト・ォー」と長音を用いて8音に整え、リズミカルな2語発話を工夫して作り出していることが理解できる。

Y児には同時期にこの他にも、紫色をした子ども番組のキャラクター人形を持って、「むらさき」と「ソラオくん」（NHKの子ども番組『おかあさんといっしょ』のゴリラのキャラクターの名前）の2語を結びつけ、「ムラ・タキ・ソラオ・クン」と、4拍（律拍）の枠組みの中にうまく2語をはめ込んで、リズミカルな発話を試みる場面が観察されている（生後20か月30日）。さらに、生後21か月時には、絵を描きながら、「ニャーニャ・カケ・テー・●」「ミドチャン・カケ・テー・●」（「ミドチャン」とはNHKの子ども番組『おかあさんといっしょ』のキャラクターの名前）と、2語を4拍（律拍）にまとめ、言葉を入れ替えてリズミカルに8回繰り返す場面が観察された（1998年1月23日）。

これらの事例は、日本語を4拍子の拍子進行にのせるために、生後2年にも満たない幼ない子どもが、それまでの養育者とのやりとりの経験を通して身につけた拍節感をもとに、2語を4拍（律拍）の枠の中にうまくはめ込んで、音楽的に表現する方法を獲得し成長していることを実証する、興味深い事例であるといえる。

---

26 序章第3節2項と第3章2節の注5を参照

27 第3章2節の注6を参照

### (3) まとめ

本項の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**◆ 3語～多語発話前期にみられるY児の音楽的行為の特徴**

① 2つの語をつなげて2拍（律拍）や4拍（律拍）にまとめ、リズミカルな2語発話を作り出す。

② 養育者の作り出す拍節にのって、リズミカルに言葉のやりとりを繰り返す。

③ 呼吸を整え、自ら拍節を作り出し、そのリズムにのって自問自答を繰り返す。

④ 長音を用いて、日本語の基本的な音数律に基づくリズミカルな2語発話を工夫する。

⑤ 養育者との音楽的な言葉のやりとりの経験を通して、日本語を4拍子の拍子進行にのせるための音楽的表現法を身につけている.

**◆養育者に働きかけにみられる音楽的特徴**

① 養育者は「これ」と「なに」の2語をつなげ、「これ・なあ・に●」というように、2音ずつまとめて拍節を形成し、一呼吸でリズミカルにY児へ問いかけている。

② 子どもの言語獲得の発達状況に応じて、唱えかける言葉のテンポやリズムを変化させている。

③ 子どもが作り出した拍節的な言葉を受け止め、同様のリズムで言葉を入れ替えて繰り返し唱える。

④ 休止や助詞を用いて、日本語の基本的な音数律に基づくリズミカルな2語発話を作り出し、語りかける。

### (2) 3語～多語発話中期（生後23～25か月）について

本項では、生後23～25か月の期間に、Y児と養育者とのやりとりの中でみられた音楽的な音声、言葉や運動動作について、事例に基づき分析と考察を進める。

#### ①Y児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

Y児は、生後19か月頃から両足をそろえて盛んにジャンプするようになったが、次第に高いところから跳ぶ遊びを試みるようになった。22か月には、20cmくらいの高さから跳べるようになっていたが、さらに23か月には、35cmくらいの台から跳ぶようになった。

【話し言葉の獲得状況】

3語～多語発話前期では、助詞を省いた電報文のような発話が目立っていたが、生後23か月～25か月の中期になると、「ユカチャンノクレヨン」「ジテンシャニノッテ」「コップガスベッタ」のように、助詞(網掛け部分)が少しずつ使えるようになってきた。

#### ②観察事例の分析と考察

次の事例3-24-①、②は、Y児が呼吸を整えて、拍節的にまとめた2語と動作を同期させた事例である。

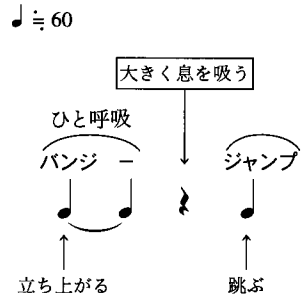
**【事例3-24】呼吸を整え、2語を拍節的にまとめて、動作を同期させる**

**①「バンジー・ジャンプ」といって、ジャンプする　（生後23か月2日）【1998年3月13日】**

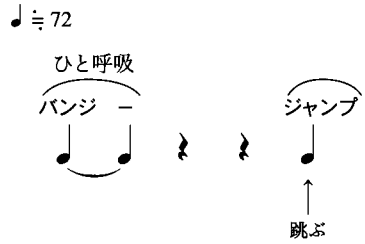
昼食が終わり、Y児はリビングでのんびりと過ごしている。養育者は食事の片づけのために台所にいる。Y児は一人で、40cmほどの高さの台に上り、窓から隣の庭にいる犬をみていた。しばらくすると、台から跳び下りようとして、「バンジー…」とかけ声を発するが、少し怖そうな様子をみせて、思いとどまる。再び、「いくよー…」と自分自身に向けてつぶやき、台の上でしゃがむ。そして、決心したように立ち上がると、「バンジー…」といって大きく息を吸い込み、「ジャンプ」の声と同時に、跳び下りた（譜例3-32)。

台所から養育者が、「お母さん、みてたよ。じょうずやったねぇ。もう1回してごらん」と言葉をかけると、Y児は再び台に上り、今度は自身でリズミカルにかけ声をかけながら、スムーズに跳んだ（譜例3-33)。

【譜例 3-32】　《Y児の「バンジージャンプ」のかけ声と動作①》　採譜者：岡林典子

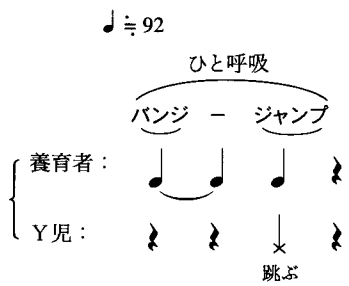



【譜例 3-33】　《Y児の「バンジージャンプ」のかけ声と動作②》　採譜者：岡林典子




この場面では、呼吸を整えて拍節的にまとめた「バンジー、ジャンプ」の2語を、ジャンプする動作に伴うことによって、Y児が高い所から跳び下りる運動動作をスムーズに進行させていることが理解できる。Y児は「バンジー」という語をひと呼吸で2拍にまとめて拍節を作り出し、大きく息を吸うことによって跳ぶタイミングを測っていることが譜例3-32より読みとれる。すなわち、言葉と呼吸によって、タイミングよく跳ぶ動作をまとめているのである。Y児はこのかけ声を養育者とのこれまでの関わりの中で身につけてきたものと思われる。それは、本事例よりも約1か月前の1998年2月19日（22か月8日）に観察された場面から推察できる。そこでは、Y児がおもちゃのトラックの上に立つと、養育者が「バンジー、ジャンプ」（譜例 3-34）とリズミカルにかけ声をかけた。すると、Y児は養育者の「ジャンプ」の語に跳ぶ動作を同期させたのである。

【譜例 3-34】　《養育者の「バンジージャンプ」のかけ声とY児の動作》　採譜者：岡林典子



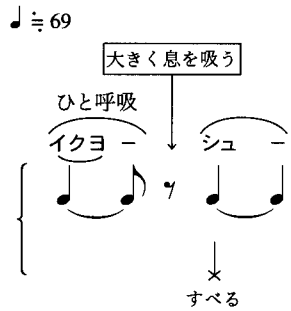
この時の養育者のかけ声と本事例のY児のかけ声との違いは、2 語がひと呼吸で発話されているか、それとも 1 語ずつが呼吸ごとにまとめられているかという点にある。Y児のかけ声には、2 回とも 2 つの語の間に息を吸う間（ま）が入っている。このことは、Y児がまず、「バンジー」という語で跳ぶ動作の構えを作り、次に呼吸を整え、「ジャンプ」という語とともに跳ぶ動作を起こしていることを示している。すなわち、Y児が言葉と呼吸を単位にして、ジャンプする動作をまとめていることを示唆するものである。これと同様の行為が、次の事例 3-24-②にも認められる。次の事例は、Y児が自分自身の行為にリズミカルにかけ声をかけながら、滑り台をすべり下りる場面である。

**②「イクヨー・シュー」といって、滑り台をすべる　（生後 24 か月 2 日）【1998 年 4 月 13 日】**

Y児は夕食後、養育者と歌をうたったり、話をしながら室内用の滑り台で遊んでいる。大きな声をたてて笑ったり、ピョンピョン跳びながら部屋を走ったり、とても機嫌がよい。

滑り台の上に座ったY児に、養育者が下から「はい、どうぞ。きてきてー」と声をかけると、Y児はニコニコしてすべり下りてきた。そして次は、滑り台の上から、自発的に「いくよー…シュー」とかけ声をかけてすべり下りた（譜例 3-35）。

【譜例 3-35】　《Y児の「イクヨー・シュー」のかけ声と動作》　採譜者：岡林典子




この場面でも、Y児は先の事例 3-24-①と同様に、まず、「いくよー」という語ですべる動作の構えを作り、次に呼吸を整え、「シュー」という語とともにすべる動作を起こしていることが、譜例 3-35 より読みとれる。すなわち、言葉と呼吸を単位にして、すべる動作をまとめているのである。この事例のほかにも、筆者が現在観察を継続している女児（2004 年 6 月生まれ）が生後 27 か月時に、養育者とボールを投げ合う場面で、「いくでー…ポン」と言葉と呼吸をもとに、投げる動作をまとめる行為が観察された。

このような動作と言葉をタイミングよく同期させる行為は、言語発達の領域の研究者に

よっても捉えられている。村田(1968)は、「動作語」という用語によって、動作と同期する言葉について以下のように説明している。

一定の動作に従って生じる一定の発声、あるいは“かけ声 (action-cue)”は、比較的早く慣用型の音声に近づき、よく分節している。いまこれを“動作語”とよぶことにしよう。

自分の動作に伴う発声として、物を投げるときのパイ、物を持ち歩くときのヨイヨイ、などが 1;3 までに生じ、自分以外のものの運動動作に伴うものへの発声として、たとえば、人形をすわらせるときのオキン（関西では、子どもに“すわりなさい”というとき、“オッチンしなさい”とよくいう）が 1;5 に自発的に生じた場合を筆者は体験している。どんな子どもにも、正常であるかぎりは、遅かれ早かれ動作語は生じる。〔村田(1968)p. 163〕

また、岡本(1982)は、動作と言葉のかかわりについて、言葉の機能面から以下のように述べている。

ことばは情動面だけでなく、… 自分の動作や行動をコントロールするはたらきをになってくる。自分のことばを自分にさしむけることによって行動を調整し、組織化し、プログラミングしてゆくはたらきは、自我の機能化のはじまりともいえる。

両足をそろえて台から跳びおりる行動は一般に 3 歳前後からできはじめるが、この際最初は、おとなが側から「ぽい」と言ってやり、同時に背中を軽く叩いてやるとはじめて可能であるが、やがて、自分で「ポイ」といってとべるようになっていく。しかし黙ってやらせるとうまく踏み切れない。「ポイ」ということばがこの動作を喚起する役割を果すのである。この「ポイ」が内言化し、心のなかで自分に指令できるようになり、さらに跳び幅等を自由に加減できるようになってゆく。小さい子どもが自分の意図通りに自由にうまく跳べるというその動作の中味には、言葉の機能が充満しているのである。 … 中略 … 幼児期では、言葉の機能の発達をみるには、子どもが話すことばの形式だけにとらわれるのでなく、その動作や行動の背後にこそはたらいていることばのはたらきを見落としてはならぬだろう。〔岡本(1982)pp. 169-171〕

これらの研究者による指摘は、言葉には動作を喚起する機能があることを示唆するものであるが、さらに2者の関わりには事例にみられたように、リズムや間（ま）などの音楽的な要素が内包されているといえる。

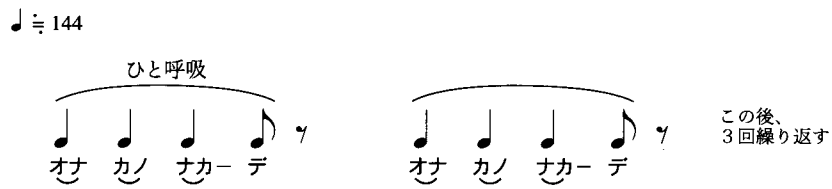
次の事例3-25は、Y児がこれまでに獲得した4拍（律拍）の枠組みに2語をはめ込み、リズミカルな言葉を作り出して、繰り返し唱えた場面である。

**【事例3-25】2語を4拍（律拍）にまとめて、繰り返す**

**（24か月4日）【1998年4月15日】**

養育者が《てるてるぼうず》の歌をうたいながら、絵を描いている。Y児は側で嬉しそうに覗き込んでいる。そして、描きあがった、てるてる坊主の胴の部分に、「おなかのなかで…」といいながら、模様を描いていく。繰り返して発話するうちに、次第に「オナ・カノ・ナカー・デ●」と2音ずつがまとまり、4拍（律拍）の拍節が形成され、リズミカルに繰り返された（譜例3-36）。

【譜例3-36】　《4拍（律拍）にまとめられたリズミカルな2語発話》　採譜者：岡林典子




この場面には、Y児が2語発話を繰り返すうちに、次第に4拍（律拍）の拍節が生起し、リズミカルな2語発話が繰り返されてゆく過程がみてとれる。Y児はこれまでに、1語発話後期から2語発話期にかけて「ブッ・●・チャー・●」や「イー・●・ポン・●」などと、喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて繰り返したり、「アリガト」と1語を4拍にまとめるなどの経験を通して、音声や言葉を4拍にまとめる枠組みを獲得してきている。ここでは、3語～多語発話中期に入って言葉の獲得もかなり進んだ状況にあるY児が、すでに獲得された4拍の拍節感覚を基にして、「おなかの」と「中で」の2語をうまくリズムにのせて繰り返す音楽的な行為が捉えられる。このようにY児の音楽的行為は、言語発達の状況とともに変化を示し、成長していることが認められる。

続く事例3-26は、事例3-25の場面からの一連の流れの中で、Y児が2拍（律拍）のリ

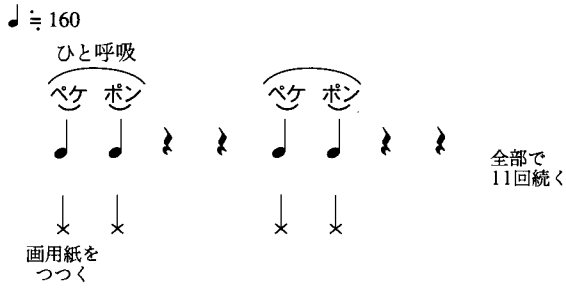
ズムの流れに2語をのせ、動作を伴って繰り返した場面である。

**【事例3-26】2語を2拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて繰り返す**

**（24か月4日）【1998年4月15日】**

事例3-25からの続きの場面である。Y児は、てるてる坊主に模様を描いた後、絵をみて「かわいい！」といって喜ぶ。それから、「おなかのなか、ペケポン…ペケポン…ペケポン」と「ペケポン」の部分を2拍にまとめてリズミカルに11回繰り返し、リズムの流れにのって画用紙を色鉛筆で2回つつく動作を同期させる。（譜例3-37）

【譜例3-37】　《「ペケ・ポン」のリズミカルな発話と動作》　採譜者：岡林典子




この場面でY児は、養育者がてるてる坊主の絵を描くことに参加し、その絵がだんだん仕上がっていくことに喜びを感じている様子で、とても嬉しそうな態度と表情をみせていた。そのような、絵を描こうという表現意欲と出来上がっていく様を捉える情動の高まり、そして養育者と関わる嬉しさや楽しさなどが、「ペケポン」とリズミカルに繰り返しながら手を動かす行為に現れている。Y児の表現は、譜例3-37より、「ペケ」と「ポン」の2語を2拍（律拍）にまとめて、動作を同期させて繰り返していることが読みとれる。Y児は、高まる喜びをこのリズミカルな声と動作を用いて表しているものと思われる。

次の事例3-27は、2語が8拍（律拍）の枠組みでリズミカルにまとめられ、繰り返された事例である。

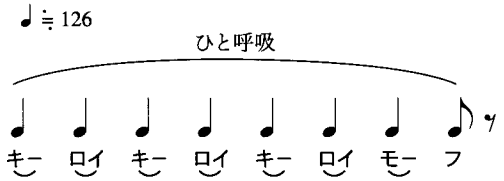
**【事例3-27】2語を重ねて、8拍（律拍）のまとまりを作り出し、繰り返す**

**（24か月23日）【1998年5月4日】**

午後10時を過ぎ、就寝前のY児は、お気に入りの黄色い毛布を探している。養育者に向かって、「キーロイ、キーロイ、キーロイ、モーフ」と発話しながら、部屋の中をうろうろする。発話は次第に8拍（律拍）の拍節感をもって繰り返される（譜例3-38）。養育者は「お父さんの

ところに行ってごらん。あるから…」と言葉をかける。しかし、Y児は父親のところへ毛布を探しにいく様子もなく、その場でおどけてジャンプしたり、ニコニコ笑いながらこのリズミカルな発話を繰り返している。13回目に養育者がY児に黄色い毛布を手渡すと、Y児は気持ちよさそうに顔をうずめる。養育者は「あったねぇ」と言葉をかけて、Y児と気持ちを共有した。

【譜例3-38】　《8拍（律拍）にまとめられたリズミカルな2語発話》　採譜者：岡林典子



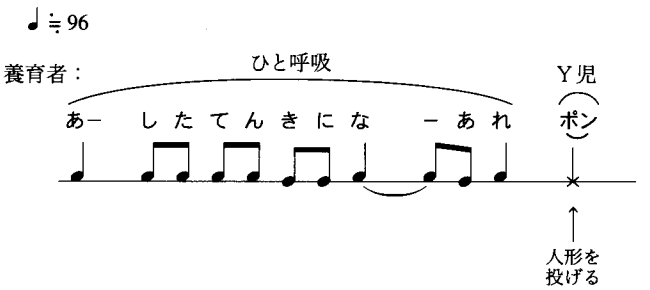

この場面には、Y児が8拍（律拍）の拍節感覚を身につけて、2語をリズミカルに唱えることを楽しむ姿がみてとれる。Y児はお気に入りの黄色い毛布を探しているのであるが、見つからないことで不機嫌な様子はみられない。それは、Y児の明るい表情や声の調子、ジャンプをする様子からも判断できるが、さらに「黄色い」と「毛布」の2語を結びつけて、リズミカルに繰り返す行為からは唱えること自体を楽しんでいることが伺える。

Y児は、普段からこのお気に入りの毛布のことを「キーロイモーフ」と呼んでいる。それをそのまま2音ずつまとめて拍節的に唱えると、「キー・ロイ・モー・フ●」と4拍（律拍）になるのだが、この場面でY児は「キーロイ」の部分を3回繰り返して6拍（律拍）の拍節を生み出し、「モー・フ●」の2拍（律拍）と合わせて、8拍（律拍）にまとめ、繰り返している。8拍にまとめられた「キーロイ・キーロイ・キーロイ・モーフ」を声に出して唱えてみると、「キーロイモーフ」と唱えるよりも、「ロイ」の重なりによって語呂の良さが感じられる。本事例からは、Y児が音声や言葉を8拍（律拍）にまとめる枠組みを獲得し、語を重ねるなどの工夫を凝らして心地よく感じられる語のまとまりを直感的に作り上げる音楽的な力を身につけて成長していることが認められる。

ところで、この時期にY児が8拍（律拍）の枠組みを獲得していることを示す場面が、他にも観察された。本事例から約3週間ほど前（24か月2日【1998年4月13日】）に、養育者がうたう2音旋律の《あーした天気になーあれ》の最後の部分に、Y児がタイミングよく「ポン」と合いの手を入れる場面がみられた（譜例3-39）。この歌は、「あー・した・てん・きに・なー・ーあ・れ●」と7拍（律拍）にまとめられた言葉が、2音旋律にのせて唱えら

れるものである。Y児はこの最後の部分、つまり8拍目にタイミングよく「ポン」と合いの手を入れたのである。それは、先に養育者が唱えた7拍（律拍）の部分を感じとれることや、全体を8拍（律拍）のまとまりとして感じとることのできる拍節感覚を獲得していることが基盤になければ、行えない音楽的な行為である。Y児には2語発話期（生後18か月時）に「イーダーイーダーイーダーオ」と喃語的音声を7拍にまとめて繰り返す音楽的行為が観察されていた。それから5か月余りの期間を経て、Y児は2語を重ね合わせて8拍のまとまりを作り出すことができるようになった。ここには、Y児がより確実に8拍の枠組みを身につけて音楽的に成長している姿が現れている。

【譜例3-39】　《養育者の歌う2音歌に「ポン」と合いの手を入れる》　採譜者：岡林典子




### (3) まとめ

本項の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**◆ 3語～多語発話中期にみられるY児の音楽的行為の特徴**

① 言葉と呼吸を単位にして、ジャンプする動作をまとめる。

② 4拍（律拍）の拍節感覚を基にして、2語をリズムにのせて繰り返す。

③ 2語を2拍（律拍）にまとめて、動作を同期させて繰り返す。

④ 音声や語を8拍（律拍）にまとめる枠組みを獲得し、語を重ねるなどの工夫を凝らして心地よく感じられる語のまとまりを直感的に作り上げる。

**◆養育者に働きかけにみられる音楽的特徴**

① 「あー・した・てん・きに・なー・ーあ・れ●」と7拍（律拍）にまとめられた言葉を、2音旋律にのせて唱える。

② 子どもの動きに応じて、タイミングよくかけ声をかける。

### (3) 3語～多語発話後期（生後26～30か月）について

本項では、生後26～30か月の期間に、Y児と養育者とのやりとりの中でみられた音楽的な音声、言葉や運動動作について、事例に基づき分析と考察を進める。

#### ①Y児の運動動作と話し言葉の獲得状況

【運動動作の獲得状況】

生後24か月（満2歳）までに歩く、30cmくらいの高さからジャンプする、ボールを蹴るなどの運動動作を獲得したY児は、生後26か月頃からは、小走りに走ることを身につけた。

【話し言葉の獲得状況】

生後23か月～25か月の3語～多語発話中期には、「ユカチャンノクレヨン」「ジテンシャニノッテ」などのような、助詞(網掛け部分)の使用がすでに可能になっている。生後26か月以降である本項3語～多語発話後期には、「オカアサンガカシテクレテン(〔貸してくれた〕という意味)」「ボウシミタイヤ(〔帽子みたいだ〕の意)」「ニアッテルヤンカ（〔似合っているじゃない〕の意)」などの関西弁の言い回し(下線部)が身についてきた。

#### ②観察事例の分析と考察

次の事例3-28は、Y児が呼吸を整えて、拍節的にまとめた2語と動作を同期させた事例である。

**【事例3-28】4拍（律拍）にまとめられたリズミカルな問答を、養育者とやりとりする**

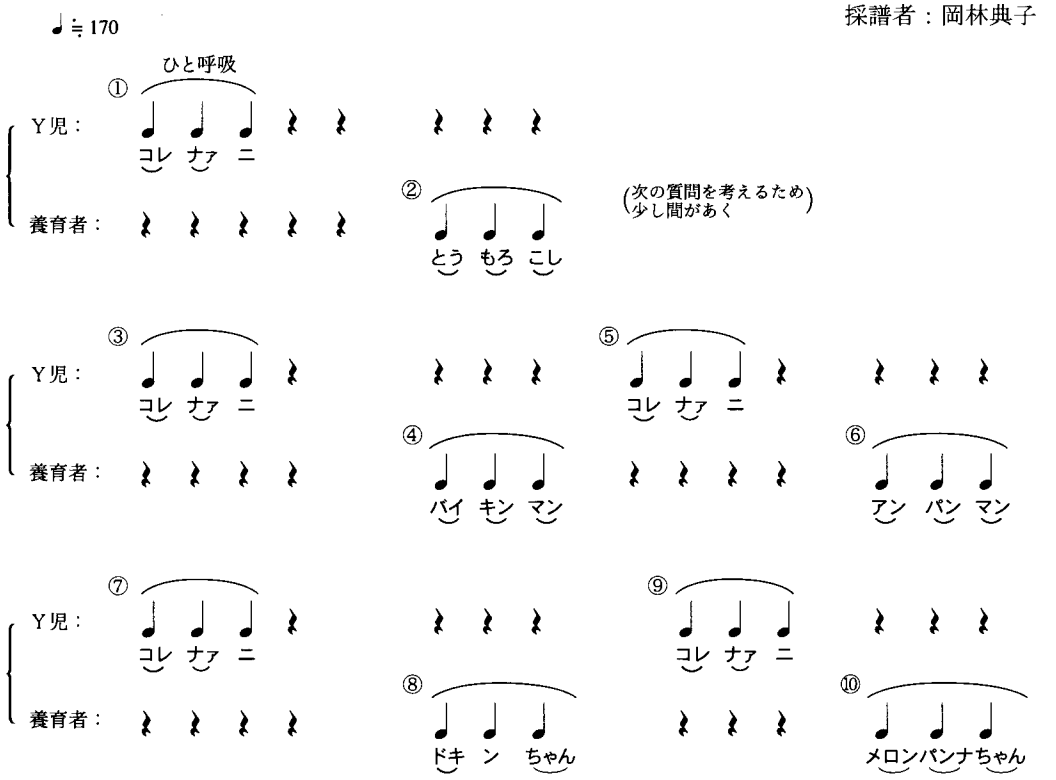
**26か月25日（1998年7月6日）**

夕食後、Y児は落ち着いた状態で絵本をみている。養育者は台所で食事の後片付けをしている。Y児は近づいてきた養育者に向かって、絵本の「これなあに」のページを開いて、絵を指しながら「コレ・ナァ・ニ・●」と4拍（律拍）に言葉をまとめ、リズミカルに問いかける。養育者は、「とう・もろ・こし」や「バイ・キン・マン」などとY児の作り出した拍節にのせてリズミカルに答えていく（譜例3-40)。

何度か問答を繰り返した後、養育者は「じゃあ、今度はお母さんがするよー」と言葉をかけて、「これ・なあ・に」や「これ・だあ・れ」などとリズミカルにY児に問いかける。Y児は養育者の作り出したリズムにのって、「アン・パン・マン」や「メロン・パンナ・ちゃん」などと次々に調子よく答えていく（譜例3-41)。3-41)

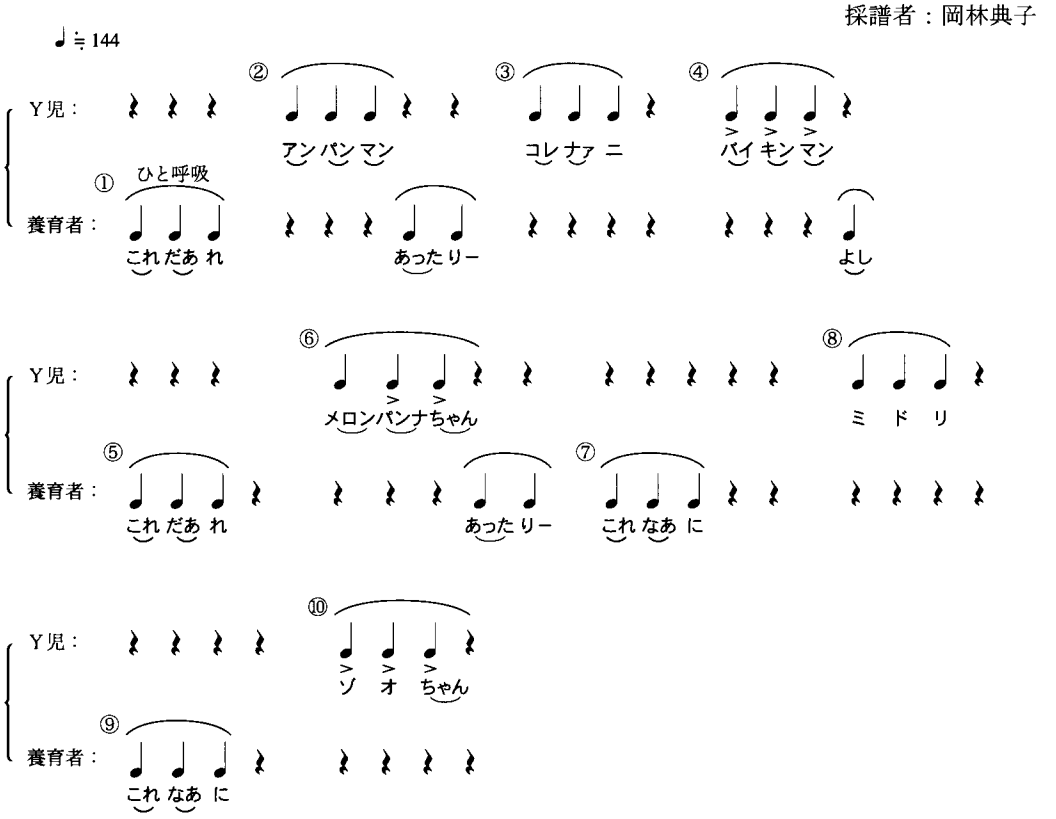
【譜例 3-40】　《Y児から問いかける「これなあに」のやりとり》

採譜者：岡林典子




【譜例 3-41】　《養育者から問いかける「これなあに」のやりとり》

採譜者：岡林典子



本事例は、Y児と養育者が呼吸を合わせ、リズムを共感しながら、問答遊びする音楽的なやりとりの場面である。譜例 3-40 からは、Y児と養育者の呼吸が合い、流れるリズムにのって互いにやりとりをしている様子が伺える。また、譜例 3-41 からは、養育者が作り出す「これ・だあ・れ●」の 3 拍の拍節にのって、Y児が言葉を 3 拍にまとめて答えていることが読みとれる。Y児には本章 5 節 1 項の事例 3-21, 3-22 において同様の問答遊びの場面が分析されている。生後 20 か月時の事例 3-21 では、Y児が養育者の作り出す拍節にのって、呼吸を整え、テンポよく色の名前を答えてはいるが、全体的な流れをみると、問答の途中で間があいたり、呼吸の長さが養育者とY児の間で一致していない、などの特徴が見出せた。また、事例 3-22 では、Y児が自分から拍節を作り出し、そのリズムにのって自問自答を繰り返している姿が捉えられた。筆者はそのようなY児の行為について、「自分が形成した問いかけの言葉のリズムに、相手がタイミングよく答える間を待って、次の問いかけを継続していくことは、より高度なことかもしれない。相手のタイミングを計り、間を合わせることを身につけるためには、この場面のようなリズミカルな自問自答の経験を重ねることが、練習の役目を果たしているのかもしれない。」と推測をした。

その時点からさらに 6 か月を経た本事例では、Y児が質問者になったり、回答者になったり、自在に役割を交代して、他者と呼吸を合わせて問答を繰り返す様子が捉えられる。このことは、Y児が養育者との問答遊びの経験を中心にして、他者と呼吸を合わせ、リズムを共有して言葉を音楽的にまとめてやりとりできる力を身につけ、音楽的に成長していることを実証するものである。

次の事例 3-29 は、生後 27 か月になったY児が 2 音旋律を獲得し、さまざまな形で表現を試みている場面を取り上げた事例である。

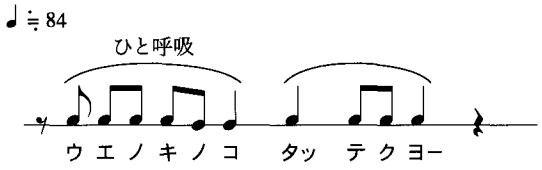
**【事例 3-29】2 音旋律を獲得する　　(27 か月 26 日)【1998 年 8 月 6 日】**

**①多語発話を 2 音旋律にのせて唱える**

Y児は以前からとても欲しかった幼児用の公園セットのブロックを買ってもらい、午後 6 時過ぎに帰宅した。家に入ると、さっそくブロック遊びを始めた。ブランコや滑り台や人間の形をしたブロックを部屋いっぱいに広げて夢中になっている。しばらくすると、ブロックを高い塔のように積み上げ、養育者に向かって「ほら、高いでしょ」と話しかける。夕食の用意をしていた養育者は、「すごーい、高いのができたねー」と驚きの声を上げる。Y児はてっぺんに人間型のブロックを乗せようと思い立った様子で、周りを探すようなしぐさをしていたが、やがて 2 音旋律にのせて、「ウエノ、キノコ、タッテクヨー」(そばにいた養育者(筆者)は、その

場の状況から「木の上に子どもが立っているよ」の意味に解釈した）と唱えはじめた。（譜例3-42）。

【譜例 3-42】　《2 音旋律にのせた多語発話》　採譜者：岡林典子

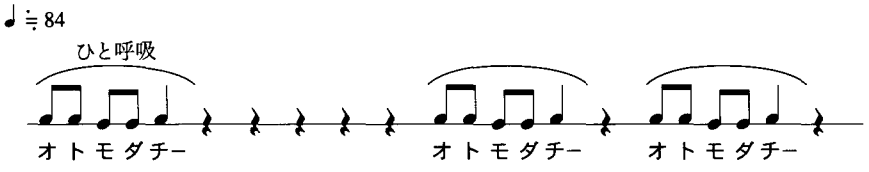



**②1 語を 2 音旋律にのせて繰り返し唱える**

先の事例 3-29-①に続く場面である。Y児は高く積み上げたブロックの上に乗せる人間型のブロックを探しながら、「オトモダチー」と 2 音旋律で繰り返し唱えている（譜例 3-43）。やがて、人間型のブロックを見つけて、「うえのきに、やってくるよ」と言いながら、積み上げたブロックの上に乗せようと試みる。

【譜例 3-43】　《2 音旋律にのせて唱えられた「オトモダチ」の 1 語》

採譜者：岡林典子

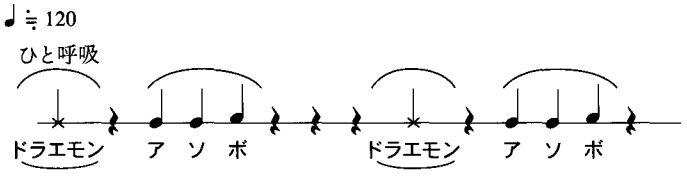



**③2 語を 2 音旋律にのせて繰り返し唱える**

先の事例 3-29-②に続く場面である。Y児は、ブランコ型のブロックにNHKの子ども番組「ドレミファどーなつ」の小さなキャラクター人形を乗せて、「ブーランブーランブーランコッ」と 2 音旋律で唱える（この部分については、第 5 章の事例 5-9 で取りあげる）。次に、そばにあったドラえもんの人形を手に取り、「ドラエモン、アソボ」と 2 音旋律にのせて呼びかける（譜例 3-44）。

【譜例 3-44】　《2 音旋律にのせて唱えられた「ドラエモン、アソボ」の 2 語》

採譜者：岡林典子



これら一連の事例と譜例からは、1 語や 2 語、3 語の発話を 2 音旋律にのせてリズミカルに唱える音楽的行為を捉えることができる。それらは、ひと呼吸の時間単位を言葉のまとまりによって 4 拍に下位分割した拍節的な唱えであった。また、旋律は平均率で用いられるような音程ではないが、長 2 度の音程からなる固定した 2 つの音高で唱えられた 2 音旋律であった。またそれぞれの事例が、すべて上の核音に収まり、終止感を感じさせる。

これまでの観察事例の中で、Y 児の音楽的行為の旋律的側面が捉えられたのは、2 語発話期（生後 18 か月時）に喃語的音声を用いて、「パーチトーオッ」とほぼ 2 度の音程の隔たりのある 2 音旋律で唱えた場面が挙げられる。そのときから 9 か月を経た本事例では、言葉を安定した 2 音旋律にのせて唱えられるまでに成長した Y 児の姿は、文化的コンテクストの中で、Y 児が日本語に基づいた旋律感覚を身につけて、音楽的に成長していることを示唆するものである。

次の事例 3-30 では、Y 児が、言葉を拍節的にまとめることから旋律的に唱えることへと、音楽的に安定した行為へと変化させてゆく過程がみてとれる。

**【事例 3-30】8 拍（律拍）のまとまりをもつリズミカルな言葉を、多様に作りだす**

**－8 拍（律拍）で拍節的に言葉をまとめる行為から、旋律的に唱える行為への変化過程－**

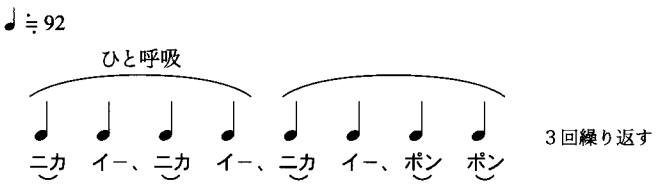
**（28 か月 11 日）【1998 年 8 月 22 日】**

**①「ニカイー」を繰り返して、8 拍（律拍）にまとめる**

Y 児は寝転んでいる父親の横に座り、ブロックを積み重ねながら、「ニカイー、ニカイー、ニカイー、ポンポン」と、リズミカルに 8 拍（律拍）で言葉をまとめて唱えている（譜例 3-45）。ブロックで 2 階を作っているつもりなのか、「ニカイー」という言葉が繰り返される。

【譜例 3-45】　《8 拍（律拍）のリズミカルな言葉のまとまり①》

採譜者：岡林典子




この場面での Y 児の唱えは、「ニカ」「イー」と 2 音ずつがまとまることで生起した 2 拍の拍節が、4 回繰り返されて 8 拍（律拍）のフレーズを形成し、ひと呼吸の長さによってフレーズが 2 分割されて拍節的に唱えられている。Y 児はリズムの流れにのって、このフレーズを 4 回繰り返すが、次第に遊びの状況が父親からの働きかけによって変化する。す

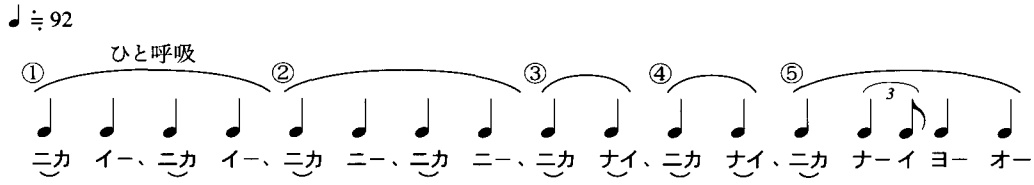
ると唱え言葉も「ニカイー」から「ニカナイ」に変化してくる。次の事例は、その変化の過程を捉えたものである。

**②8拍（律拍）にまとめられた言葉の音声を、「ニカイー」から「ニカナイ」に変化させる**

傍らの父親が、Y児の重ねたブロックをこっそりはずし、いたずらを仕掛けている。ブロックを重ねても重ねても、父親が手を出してはずすので、Y児はいたずらに気がつく。すると、「ニカイー、ニカイー」という唱え言葉は、次第に「ニカニー、ニカニー、ニカナイ、ニカナイ、ニカナーイヨーオー」と変化してゆく（譜例3-46）。

【譜例3-46】　《8拍（律拍）のリズミカルな言葉のまとまり②》

採譜者：岡林典子




この場面では、Y児の発話の音声が「ニカイー」から「ニカニー」へ、そしてさらに、「ニカナイ」へと変化の過程をみせている。譜例3-46より、Y児が「ニカ・イー、ニカ・イー」や「ニカ・ニー、ニカ・ニー」と唱えているときは、4拍の拍節感と呼吸周期が安定しているが、音声が変化をみせはじめると、呼吸周期の安定が乱れるが、再びY児は「ニカ・ナイ・ヨー・オー」と4拍にまとまるリズムと呼吸の安定を取りもどす。

次の事例は、これまで等拍の形で安定していた唱えのリズムに変化が生じてくる場面である。

**③「等拍の形」[28]から、「はずむ形」[29]の「イッカナーイ」へと、リズムを変化させる**

Y児は、先の②の場面の表現をきっかけに、「ニカナイ」の音声表現を「イカナイ」に変化させ、はずむ形を導入して、「イカナーイ、イカナーイ、イッカナーイ、ヨッ」とリズミカルに唱える（譜例3-47）。

この場面では、等拍のリズムにはずむ形が現れる。先に、事例3-15で「パーンツ」という「はずむ形」が現れたときに、「はずむ形」は遊びの場で支配的であると指摘されていることを述べた。ここでのY児も「はずむ形」を導入することにより、遊びの気分が高まり、

---

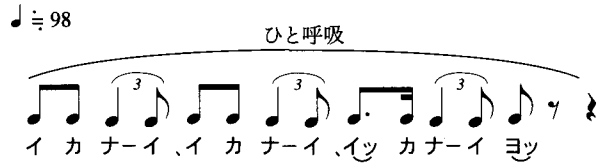
28 第3章第2節の注5③の間宮芳生の分類による

29 注28と同様

さらに表現が展開をみせてゆく。

【譜例 3-47】　《はずむ形で唱えられた「イカナーイ」の言葉のまとまり》

採譜者：岡林典子

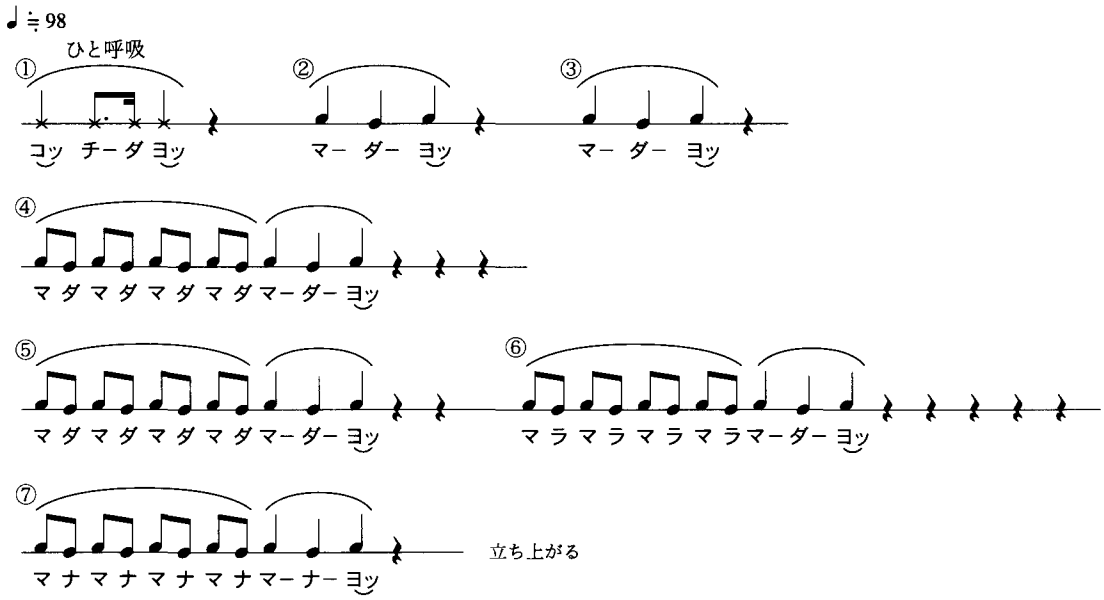



次の事例には、「はずむ形」の導入をきっかけに、Y児が拍節的な表現から旋律性を帯びた表現へと発展させていく過程がみてとれる。

**④言葉を拍節的にまとめることから旋律的に唱えることへと、行為を変化させる**

Y児は、場面③の「イッカナーイヨッ」という「はずむ形」の表現をきっかけに、今度は「コッチダヨ、マダヨ」と言葉を入れ替え、2音旋律で唱えはじめる（譜例 3-48①～③）。その表現は、次第にフレーズのまとまりと、旋律の安定をもたらし、「マダマダマダマダ、マーダーヨッ」のように発展していった（譜例 3-48④～⑦）。

【譜例 3-48】




場面③でみられた「イッカナーイヨッ」という表現を受けて、この場面では「コッチーダヨッ、マーダーヨッ」というはやし言葉のような表現が生まれた。それはまた、言葉のアクセントやイントネーションの支配を受けて、わらべうたの原初的な形である2音旋律にのって繰り返された。先の事例 3-29 でみられたように、Y児はすでに2音旋律を獲得し

ている。本事例は、日本語を基にした旋律的な表現が生起する過程には、拍節的側面が先行して現れることを示唆する一例ではないかと考えられる。

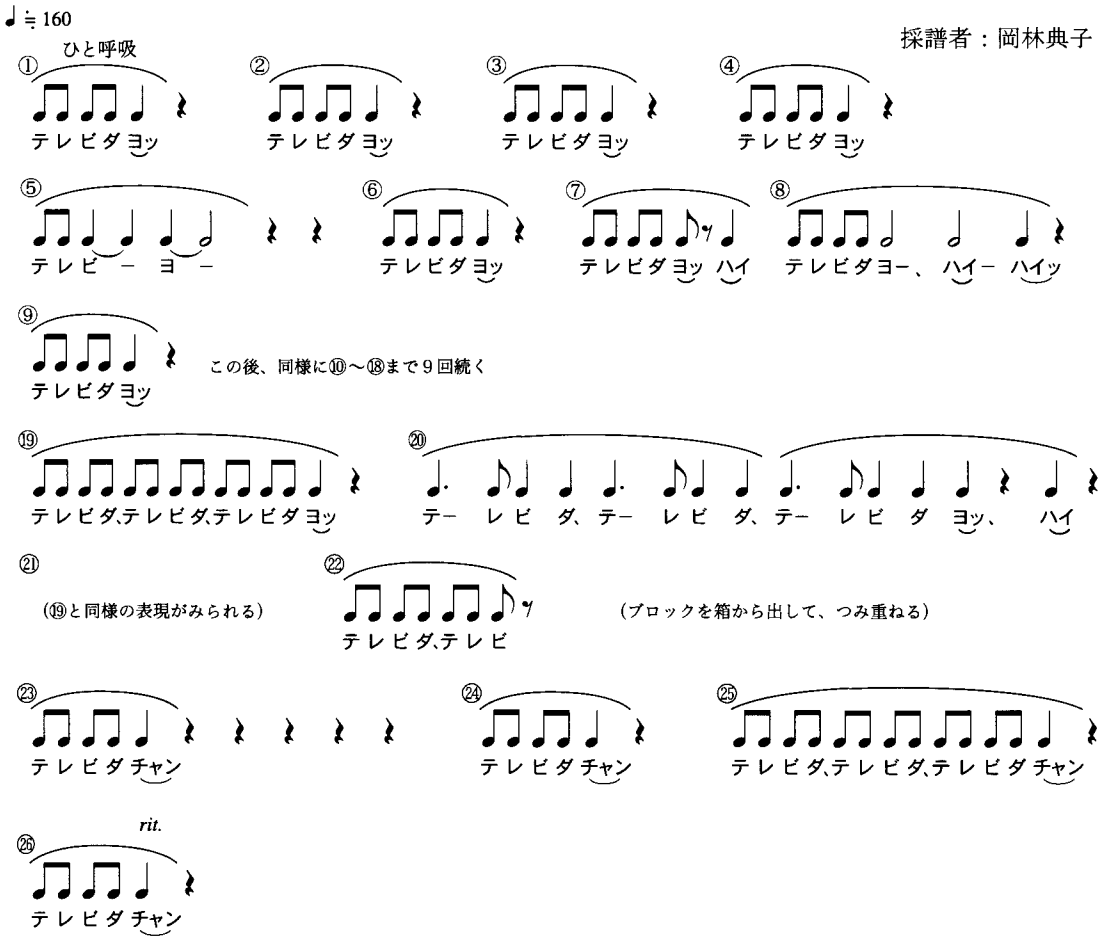
次の事例は、言語の獲得に沿って、これまでに2拍の枠組みや4拍の枠組み、8拍の枠組みを獲得してきたY児が、次々とフレーズをつなげて、リズミカルな表現を発展させていく場面である。

**【事例3-31】4拍（律拍）にまとめた言葉をつなげ、多様にリズミカルなフレーズを作る**

**（28か月29日）【1998年9月9日】**

午後8時過ぎ、Y児はブロック遊びに興じている。「テレビダッタナァ」とつぶやくと、15cm×5cm×10cm くらいの大きさにブロックを組み立て、その上に人間型のブロックを乗せたり、下ろしたりしている。しばらくすると、「テレ・ビダ・ヨッ・●」と4拍（律拍）の拍節にのせて、唱えはじめる（譜例 3-49-①～⑥）。その後、気分がのってきたようで、「テレビダヨッ、ハイ」や「テレビダチャン」（譜例3-49-⑦,⑳）などと変化をつけて、この表現を26回繰り返しながら、意欲的にブロックを積み上げていった（譜例3-49）。

【譜例3-49】　《「テレビダヨ」の発話をつなげたリズミカルな表現》



この場面には、Y児がこれまでに日常生活の中で養育者を中心とした人とのかかわりの中で培ってきた拍節感覚をもとに、日本語を用いて豊かな音楽的行為をみせていることが認められる。はじめは「テレ・ビダ・ヨッ・●」と4拍（律拍）に言葉をまとめて、ひと呼吸で唱えているが、やがて気分の高揚とともに呼吸周期が長くなり、「テレビダヨー、ハイーハイッ」や「テレビダテレビダ、テレビダヨッ」など8拍（律拍）のフレーズを多様に作り出している。ここには、日本語を自由に操り、リズムにのって豊かな表現を試みるまでに成長したY児の音楽的行為を捉えることができる。

次の事例3-32は、先の事例3-31の場面が終了し、落ち着いた状態の中で、Y児が養育者と会話を交わしながら、指切りの唱え歌を3音旋律にのせて歌おうとした場面である。

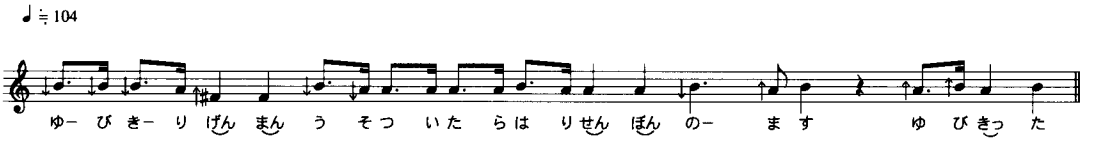
**【事例3-32】3音旋律獲得の兆しがみられる　　（28か月29日）【1998年9月9日】**

ブロック遊びを堪能したY児は、入浴までの少しの時間に、養育者と穏やかに会話を交わしている。養育者が「さっき、すごく素敵なブロックができたねぇ」と言葉をかけると、Y児は「お父さんが帰ってきたら、みせてあげようか」と答える。満足げな表情で過ごしていたが、

しばらくすると、「約束よ」と独り言をつぶやいた後、「ゆーびきーりげんまん、うーそつーいたーら…」と、指切りの唱え歌を3音旋律にのせて歌いだした（譜例3-50）。

【譜例3-50】　　《Y児による指きりの唱え歌の表現》

採譜者：岡林典子




**【図3-1】Y児の指きりの唱えうたのピッチ曲線**

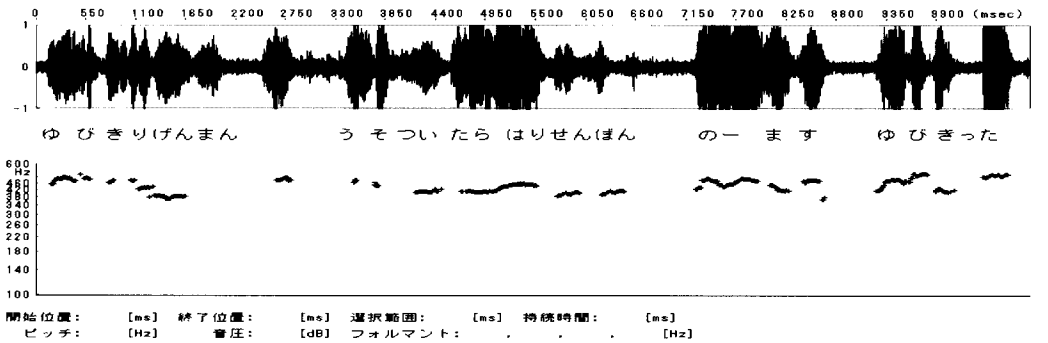


図 3-1 はY児がうたった指きりの唱えうたを音声分析ソフト[30]を用いて音響分析し、音声波形とピッチ曲線を抽出したものである。坂井（2003）は、「五線譜を中心とした定量的な感覚にとらわれがちな現代において、聴覚印象の介在しない分析方法はなくてはならないと考える。加えて、子どもの歌唱、特に乳幼児の歌唱音声は、連続的な上昇・下降を含み、音声が一定の音高にとどまらないことが多いため、五線譜がその記録に適しているとは言えない」と述べ、子どものつくりうたを音響分析の方法を用いて視覚化し分析を試みている。本事例は、Y児が 2 音旋律を獲得後、3 音旋律の獲得の兆しがみえはじめた時期であるので、微妙な旋律獲得の過程を捉えるために、坂井の方法を参考に、Y児の音声を分析した。さらに、そこで示されたピッチを楽音の基本周波数[31]に照らし合わせて、譜面化したものが譜例 3-50 である。譜例 3-50 と図 3-1 からは、確定的ではないが、Y児が 3 音旋律の指きり歌をほぼ旋律に沿って歌っていることが読みとれる。このことから、Y児が 2 音旋律獲得後、3 音旋律を獲得しつつあり、旋律的側面においても音楽的に成長していることが認められた。

### (3) まとめ

本項の観察事例の分析・考察より明らかになったことを、以下の項目についてまとめる。

**◆ 3 語～多語発話後期にみられるY児の音楽的行為の特徴**

① 2 音旋律を獲得し、1 語～3 語発話を旋律にのせて、リズミカルに唱える。

② 8 拍（律拍）のまとめりをもつリズミカルな言葉を多様に作り出し、繰り返し唱える。

③ 4 拍（律拍）にまとめた言葉をつなげて、リズミカルなフレーズのまとまりを作り、繰り返し唱える。

④ 3 音旋律獲得の兆しがみられる。

**◆養育者の働きかけにみられる音楽的特徴**

① 「これ・だあ・れ●」と 3 拍（律拍）に言葉をまとめ、子どもと問答遊びを試みる。

② 子どもの音楽的行為に対して、言葉で励ましたり、促したりする。

---

30 杉藤美代子 2000 『GUGI Speech Analyzer』（株）富士通アニモ

31 『理科年表』2005 丸善株式会社

## 第6節　本章のまとめ

話し言葉の獲得過程は、喃語から初語の出現、1語発話、2語発話、3語から多語発話へと進むが、その進行の度合いは個人差が大きい。そこで、本章1節ではY児が話し言葉をどのように増やしていくのかについて、その具体的な言葉の内容を表に示し、獲得過程における発達段階を、前言語期、1語発話前期、後期、2語発話期、3語発話前期、中期、後期の7つの段階に区分した。そして、2節から5節までは、話し言葉の7つの発達段階に沿って、Y児にどのような音楽的行為がみられるのか、その変化の過程を捉えて分析を試みた。その結果、2節では、前言語期のY児の音楽的行為にみられる特徴が示唆された。Y児は生後6, 7か月頃から、原初的な音楽的行為の基盤を築き始めることが明らかになった。それは、将来Y児が他者と気持ちを通わせて、声を合わせたり、動作を同期させたりするような音楽的行為の基盤となるものであると考えられる。また、生後10か月の時点では、Y児はまだ、相手と呼吸を合わせて音声のやりとりができる段階にはないが、「待つ」という行為がわずかながら認められるようになった。さらに、音声模倣もみられるようになった。こうした「音声模倣」や「待つこと」を基にした声のやりとりを通して、Y児は音楽的コミュニケーションの基本的態度を学び始めるものと思われる。それは、今後Y児が他者と呼吸を合わせて音楽的やりとりを発展させていくための準備体制作りであるといえる。

一方、養育者の働きかける言葉のリズムには、日本語の音楽的特徴の1つである、シラブルの等拍性と関係する伝統的なリズム感が生かされており、日本語の音（おん）が2音ずつまとまり、全体で4拍（律拍）のまとまりが作り出される傾向があることが明らかになった。それは、日本語を話すわれわれが言葉をリズミカルに唱える場合に、それまで無意識に身につけてきた基本的なきまりを用いることによって生じる行為であることが理解できた。また、養育者の語りかける言葉の抑揚には、日本語の音楽的特徴の1つである、高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされていた。養育者が子どもの名前を呼びかける際に用いる音楽的な言葉は、伝統的な2音旋律が保たれており、そのリズムは、2音のまとまりが等分の形や、はずむ形に変化する傾向があることが示唆された。さらに、養育者は、自分の音声や言葉や動きを、子どもの音声や動きに同期させて働きかけていることも明らかになった。このように、養育者はさまざまな形で子どもに働きかけているが、それらは意図的になされている行為ではない。しかし、このような養育者の行為によって、子どもの音楽的成長の基盤が形成され、子どもとの間に

音楽的なコミュニケーションが成立するものと思われる。

3節では、1語発話期におけるY児の音楽的行為の特徴が示唆された。初語がみられ始める1語発話前期では、養育者が発話する言葉のリズムに合わせ、Y児が拍節的に動作を同期させる行為が認められた。また、音声模倣を通して、日本語の拍節感覚が身につきはじめることが明らかになった。それは、「ワン・ワン」のように2音の音形を反復した2拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出す行為として現れる。さらに、意図性をもって自分の音声や言葉と動作を同期させようとする行為が認められた。また、養育者との関係においては、間（呼吸）を合わせようとする行為が、芽生えはじめる。それは、Y児の方から養育者へと視線を向けるという意図的な行為から始まる。しかし、意図性が認められるものの、相手（養育者）に間やタイミングを合わせようとするのではなく、その時々の自分の気分のままに自由に発声する段階である。しかし、次の段階では相手の間やタイミングには合わないが、自発的に相手のかけ声に参加しようとする行為が認められた。その行為の背景には、音声模倣の発達状況が認められる。さらに進むと、そのつど異なる相手の間の変化を、顔や口元をみつめて読みとろうとする行為がみられ、発達的な変化の過程が示唆された。

一方、養育者の働きかけにみられる音楽的特徴には、絵本の中のリズミカルな唱えことばを、2音ずつ結びつけて、4拍（律拍）のまとまりを作り出し、ひと呼吸で発話することや、日本語発話の原則に基づいて、2拍（律拍）の拍節を強調した発話を繰り返すことや、Y児の音声を2拍（律拍）のまとまりへ導こうと試みる行為などが認められた。また、「いないないばあ」遊びにおいて、その時の気分と1回ごとの呼吸の長さをもとにして、Y児に向かって「いないな～い」と誘いかける行為もみられた。

1語発話後期では、Y児に「パッ・カッ、パッ・カッ」と擬音語を2音ずつまとめて2拍（律拍）の拍節を作り出し、繰り返し唱えたり、その音声に弾む動作を同期させる行為がみられた。1語発話前期では、「ワン・ワン」のように2音の音形を反復した2拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出す行為が認められたが、動作を伴うものではなかった。これらの行為からは、Y児が日本語の2音をまとめて2拍（律拍）の枠組みを作り出すという、日本人がもつ拍節感覚を身につけて音楽的に成長していることが伺える。また、喃語的音声を「ブッ・●・チャー・●」と呼吸ごとに4拍（律拍）にまとめて繰り返す行為や、同じく「イ・ー・ポン・●」という喃語的音声を4拍（律拍）にまとめることによって生じる時間単位を用いて、階段を下りる身体の動きをまとめる行為もみられた。

音声を4拍（律拍）にまとめる行為は、1語発話後期に入ってはじめた認められた行為であるが、これは8音が2音ずつまとまって4拍（律拍）を形成するという日本語の音数率の原型を獲得して、Y児が音楽的に成長していることを示している。また、Y児は音声模倣をすることにより、養育者との間に「パーンツ」という1語を用いたリズミカルなかけ合いを成立させた。この行為は、音声模倣によってY児が2音を「はずむ形」にまとめてやりとりをすることが可能であることを示している。

また、養育者の働きかけにみられる音楽的特徴には、擬音語や言葉を2音ずつまとめて、「はずむ形」を作り出し、Y児に繰り返し唱えかける行為が認められた。また、それは養育者がY児を遊ばせる状況において出現する傾向があることが示された。1 語発話が可能になった子どもは、意図性をもって音声模倣をしたり、意図性をもって音声や言葉や動作を同期させはじめるので、この時期の子どもに働きかける養育者には、日本語のリズムや抑揚をより強調して音楽的にまとめて働きかけようとする行為が認められた。それは、Y児をとりまく人的環境要因として、Y児の今後の音楽的成長の過程に影響を与えるものであろうと推察された。

4節では、2語発話期にみられるY児の音楽的行為の特徴を示した。2語発話期になると、Y児はこれまでの日常生活での養育者とのやりとりを通して取り込んだ、日本語の高低アクセントやイントネーションに支配された、わらべうたの出発点ともいえる2音旋律で音声をまとめる行為を獲得しつつあることが明らかになった。1 語発話期には、「ワンワン」の4音からなる擬音語を2拍（律拍）で「ワン・ワン」のようにリズミカルな1語で表現することから、「パッ・カッ、パッ・カッ…」のように擬音語を2拍（律拍）にまとめて37回も繰り返し唱えることができるようになり、やがて喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて繰り返すことができるようになるなど、主にリズム面において発達的な変化をみせてきた。2 語発話期に入ると、Y児の音楽的行為は新たに旋律面においても発達的な変化を遂げつつあることが示唆された。また、偶発的な喃語的音声から、次第に安定した7拍（律拍）にまとまるリズムを獲得してゆく過程も明らかにされた。それは、Y児が日本語をリズミカルにまとめる8拍の枠組みを獲得していることを示唆する行為であった。

さらに、「アリガトウ」や「コンニチワ」などの慣習的な言葉と動作を身につけ、他者と呼吸を合わせて、バランスよくまとめようとする行為や、養育者との音楽的なやりとりの中で、4 拍の拍節リズムにのって、自分の呼吸を相手の呼吸の長さに合わせて、言

葉や声、動作を同期させる行為が認められた。これらの行為の背景には、1 語発話期にみられた意図性の芽生えや模倣行為などの発達とともに、Y児がすでに8音で4拍（律拍）を構成する日本語の基本的なリズム構造による拍節感覚を身につけていることが要因として挙げられた。

2 語発話期の子どもに養育者が働きかける音楽的行為の特徴としては、リズミカルな言葉で遊びを誘いかけ、Y児が遊びに参加すると、安定した呼吸周期で、2語を4拍（律拍）にまとめてリズミカルに唱えかける傾向があることがみられた。また、養育者が唱えかける言葉は、日本語の音楽的特徴の1つである、高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされ、2音旋律で唱えられていた。

5 節では、3 語～多語発話期にみられるY児の音楽的行為の特徴が示された。3 語～多語発話前期では、すでに1語発話前期に2拍（律拍）の日本語のリズムの枠組みを獲得しているY児が、2語を「アシ・チョン」と2拍（律拍）にまとめる行為がみられた。また、1語発話後期には4拍（律拍）の枠組みを用いて、喃語的音声や「アリガト」の1語を4拍にまとめる行為もみられた。さらにこの時期には「ミドリーデンシャ」や「ピトオーデンシャ」などと、長音を用いて2語を4拍（律拍）にまとめようとする行為も認められた。ここには、言語の発達段階に沿いながら、すでに身につけた日本語をもとにした拍節感覚を生かして音楽的行為を試みる、Y児の音楽的な成長の姿が認められた。また、Y児が獲得している拍節感覚は、養育者との「これなあに」というリズミカルな問答遊びにも生かされ、養育者との間でリズミカルな言葉のやりとりを成立させていることが明らかになった。

一方、この時期の養育者は、「これ・なあ・に●」と 2 音ずつまとめて拍節を形成し、一呼吸でリズミカルにY児へ問いかけたり、子どもの言語獲得の発達状況に応じて、唱えかける言葉のテンポやリズムを変化させるなど、Y児の言語の発達段階に応じて、対応していることが明らかになった。

3 語～多語発話中期のY児には、「バンジー、ジャンプ」のように2語を拍節的にまとめて、跳ぶ動作と同期させる行為や、「オナカノ、ナカデ」のように2語を4拍（律拍）にまとめて繰り返したり、「キーロイキーロイ、キーロイモーフ」のように2語を8拍（律拍）にまとめて繰り返すなどの行為が認められた。これらは、Y児がすでに日本語の基本的な拍節構造に基づく拍節感覚、すなわち日本語を基にしたリズム感を獲得しており、その枠組みに言葉をはめ込んで、リズミカルに唱えることを直感的に心地よく感じ、楽

しんでいる行為の現れであると捉えることができる。また、運動動作の発達によって可能になった、高いところからのジャンプや、滑り台を滑る動作をスムーズに行うために、言葉の音楽的なまとまりを意図的に利用するようになったところに、Y児が音楽的に成長している姿を認めることができた。

3語～多語発話後期では、Y児が2音旋律を獲得し、「オトモダチー」の1語や、「ドラエモン、アソボー」という2語、さらに「ウエノ、キノコ、タッテクヨー」という3語を2音旋律で繰り返し唱える行為が認められた。また、8拍（律拍）のまとまりのあるリズミカルな言葉を繰り返すうちに、次第に2音旋律が生起し、8拍の拍節にのって2音旋律で言葉を唱えるというように、拍節的に言葉をまとめる行為から旋律的に言葉をまとめる行為への移行過程が認められた。このことによって、子どもの音楽的行為が、言葉のリズムを把握することから旋律をなぞることへと発達的に変化することが示された。また、「ゆびきーりげんまん」とほぼ3音旋律をなぞるように歌う行為が認められ、3音旋律獲得の兆しがみられた。

以上のように、第3章では、Y児の言葉の発達段階に沿って音楽的行為の変化過程を捉えてきた。その結果、Y児が言語を習得してゆく過程において、日本語に基づく拍節感覚の方が旋律感覚よりも先に身につくという順序性を捉えることができた。また、言葉や動作を音楽的にまとめる行為は、それぞれの言語の発達段階よりも少し遅れて現れることが明らかになった。すなはち、1語を用いた音楽的行為は、さらに言語獲得が進んだ状況にある2語発話期に発現する。また2語を用いた音楽的行為は、さらに言語獲得が進んだ3語～多語発話期に発現することが認められたのである。これらのことは、一人の子どもの言語獲得状況と音楽的行為の関係を縦断的に調べることによって明らかにされた知見である。これら3章で得られた知見をさらに詳細に検討するため、第4章から第6章において、「かけ声」や「擬音語」や「遊ばせうた」に焦点をあてた事例の分析を進めることにする。

# 第４章　動作の伴う拍節的な日本語の獲得過程にみられる音楽的行為
## ～かけ声「ヨイショ、ヨイショ」に関わる事例から～

前章では、Ｙ児が話し言葉をどのように増やしていくのかについて、その具体的な言葉の内容を示し、獲得過程における発達段階を区分した。また、その発達段階の区分に従って、Ｙ児にどのような音楽的行為がみられるのか、その変化の過程を捉えて分析を試みた。その結果、Ｙ児が言語を習得してゆく過程において、日本語に基づく拍節感覚の方が旋律感覚よりも先に身につくという順序性を捉えることができた。

ところで、子どもが「イッセーノーデー」や「さいしょはグー」などのかけ声やリズミカルな言葉を用いるとき、そのほとんどが身体の動きを伴っている。前章においても、観察された拍節的な言葉の事例の多くの場合に動作を伴っていた。

そこで、本章では拍節的な日本語がどのような過程を経て獲得されるのかを検討するために、運動動作に伴う「かけ声」に焦点を当てる。養育者とＹ児の間にかけ声を用いてどのような音楽的やりとりがなされているのか、その実際を示すとともに、Ｙ児の音楽的行為の発達的変化の特徴を明らかにする。

### 第1節　かけ声「ヨイショ、ヨイショ」の獲得過程を分析対象とする理由

子どもの運動動作の獲得は、寝返る、座る、這う、立つなどの過程を経て、歩く、階段を上り下りする、走るといった具合に進展してゆく。これまで多くの発達理論家が、そのようなスキルに対して、成熟的な基礎を想定してきたが、近年においてはそのような生物学的側面だけでなく文化的・社会的側面にも目が向けられるようになってきた。デニスとナジャリアン（Denneis & Najarian）はテヘランの孤児院で、社会的な刺激の欠如した環境におかれた乳児が、2 歳になっても座る、立つといった最も基本的な運動技能さえ獲得していないことを発見した。バターワースら(Butterworth & Harris, 1994）は、この研究結果を取り上げて、子どもの運動動作の発達に関わる社会的環境の重要性に注目すべきであることを示唆している [1]。

---

[1] 村井潤一監訳 1997 『発達心理学の基本を学ぶ』(Butterworth, G. & Harris, M. *Principles of Developmental Psychology*, Lawrence Erlbaum Associates Ltd. 1994) ミネルヴァ書房 p96

このような点を踏まえて、運動動作の獲得過程にある子どもと周囲の人々に目を向けると、養育者や保育者が、無意識ではあるがさまざな社会的サポートを行なっていることが見出せる。筆者は、公園で、跳び上がろうとする14か月の男児に向かって、母親が「たかしくーん、ジャンプしてごらん」と呼びかけた後、「ほらっ、ジャンプ、ジャンプ」と子どもの跳ぶ動作に合わせてかけ声をかける場面を観察した。また、保育園の0〜2歳児クラスにおいては、ヨチヨチ歩く13か月児に向かって、保育者が「ヨイ、ヨイ、ヨイ」と声をかけたり、平均台の上を恐る恐る歩く2歳児の手を引いて、「ヨイショ、ヨイショ」とかけ声をかける場面などを観察した。また、藤田芙美子（1998）も、保育園0歳児クラスの観察から、歩けるようになったばかりの11か月児に対して、保育者が手を叩きながら「たいくん、おいで、いくよ、まんま」とリズミカルに言葉をかけて励ます様子を記述している。

また、言語を獲得しはじめた子どもには、「ヨイッ」や「ヤーショ」などと発声して大人と声を合わせながら、動作をまとめるような行為がみられるようになる。

このように、日常生活の中で、養育者や保育者が子どもを励まそうと、知らず知らずのうちに行なっている、子どもの運動動作に対するかけ声やリズミカルな言葉は、そこに含まれる音楽的要素（例えば、「音声や言葉が拍節的である」「音声と動作が同期する」「他者とタイミングや間を合わせる」など）によって、子どもの音楽的行為の形成過程に影響を及ぼしているものと考えられる。

そこで、本章では、養育者の働きかけを受けとめ、その経験の積み重ねを通して、子どもがいつの間にか身につけていく、運動動作に伴う「かけ声」に焦点を当てる。養育者とY児の間には、かけ声を用いてどのようなやりとりがなされているのか、また、Y児は運動動作や話し言葉の獲得状況に従って、どのように声や言葉や動作を音楽的に組織づけていくのか、その実際を観察事例の分析を通して明らかにする。

尚、動作を伴うかけ声として、「ヨイショ、ヨイショ」というかけ声に注目した理由は、1つには、観察記録全体を通して養育者とY児がこのかけ声を用いてやりとりをする場面が断続的にみられたことである。さらに2つには、かけ声「ヨイショ、ヨイショ」が、日本語の音韻的特徴に基づく拍節的なリズムを形成しやすいので、運動動作や話し言葉の発達状況と音楽的行為の関連が捉えやすいと思われることである。そして3つには、筆者がこれまでにY児以外の子どもを観察してきた中で、子どもや周りの大人たちが「ヨイショ、

ヨイショ」とかけ声をかける場面が幾度もみられたこと[2]より、「ヨイショ」というかけ声が一般的にもよく用いられるものであると判断したことによる。

## 第2節　観察事例の分析と考察

本節では、養育者の「ヨイショ、ヨイショ」というかけ声に支えられて、Y児が寝返る、座る、這う、つかまり立ちをする、歩く、階段を上る、という運動動作を獲得し、自ら「ヨイショ」ということばを用いた音楽的行為を試みるようになる変化の過程について、事例に基づき、分析と考察を進める。

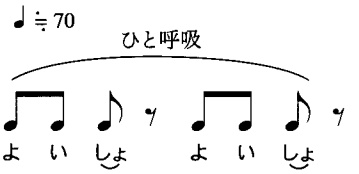
次の事例 4-1, 4-2, 4-3 は、養育者の働きかけの中にみられる音楽的行為の事例である。

**【事例 4-1】養育者がY児の動作に合わせて、多様なリズムでかけ声をかける**

**（生後 5 か月 14 日）【1996 年 9 月 25 日】**

Y児は5か月に入り、自力での寝返りはまだできないが、盛んに寝返りをしようと試みるようになってきた。養育者は、寝返りをしようと自ら身体を動かすY児に、「よいしょ、よいしょ（譜例 4-1)」とリズミカルなかけ声をかける。身体を半身にして止まってしまったY児に、養育者は声のトーンをさらに高くして、「ゆかちゃん、よいしょー（譜例 4-2)」と何度も声をかけて励ますが、うまく寝返ることはできない。再度の挑戦で、もう少しという時に、養育者はY児の片腕をつかんで、「ほら、よいしょ（譜例 4-3)」と身体を反転させ、Y児の寝返る動作を援助した。Y児がくるりと向き直ると同時に、養育者は「ほらできたー！」と嬉しそうな声を出した。

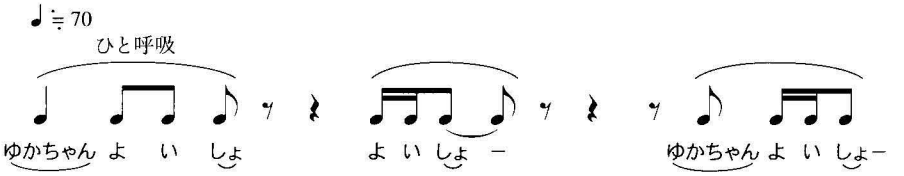
【譜例 4-1】　《寝返りを試みるY児にかけられた、かけ声》　採譜者：岡林典子




[2] ①2002 年 5 月兵庫県西宮市のS乳幼児保育センター2歳児クラスにて、保育者が子どもに「ヨイショ、ヨイショ」とかけ声をかけて、平均台の上を歩かせていた。②2004 年 8 月、福井県の永平寺の階段で、祖母（観光客）が 1 歳半の孫の足の動きに合わせて、「ヨーイショ、ヨーイショ」とかけ声をかけていた。③2004 年 11 月、西宮市のショッピングセンターの下りエスカレーターで、2 歳の子どもをつれた養育者が、「ヨーイショ」とはじめの一歩を出すタイミングをはかっていた。④2006 年 12 月、兵庫県西宮市のＪＲ西宮駅の階段で、2 歳の子どもが、「イショー、イショー」とかけ声をかけながら、階段を下りていた。

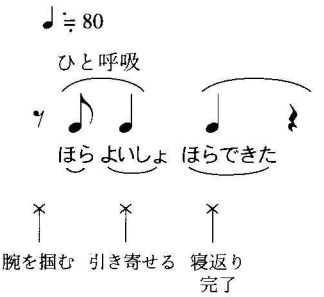
【譜例 4-2】　《止まったＹ児の動作を後押ししようとして養育者がかけた、かけ声》

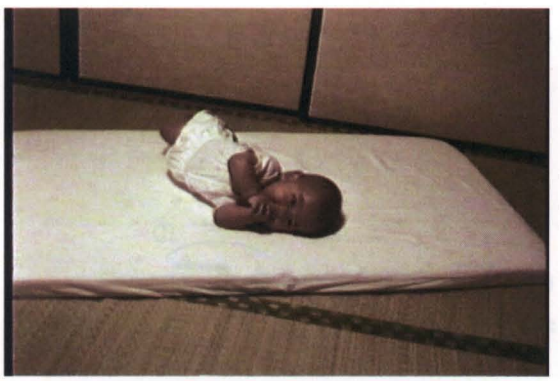
採譜者：岡林典子




【譜例 4-3】　《Ｙ児の寝返る動作を手助けしながら養育者がかけた、かけ声》

採譜者：岡林典子



**〔写真 4-1〕寝返りを試みるが、止まってしまう**

**（生後 5 か月）**

**〔写真 4-2〕養育者の援助で、寝返りを終える**

**（生後 5 か月）**

この場面での養育者のかけ声は、譜例 4-1, 4-2, 4-3 により、「よいしょ・よいしょ」のリズムが多様であることが理解できる。最初に養育者は、Ｙ児が寝返ろうとするのを励ます気持ちで無意識にかけ声をかけた。それは、「よ」「い」「しょ」という 3 音が、「よい」「しょ●」と 2 音ずつまとまり、繰り返されたので、2 拍（律拍）の拍節が形成された（譜例 4-1）。しかし、Ｙ児が身体を半身にしたまま動きを止めてしまうと、養育者のかけ声はトーンが高くなり、それまでの規則的なリズムが保持された安定したかけ声ではなく、ひ

と呼吸単位にまとめられる言葉のリズムが恣意的なものとなった。これは、養育者がY児の寝返る行為を後押しして励まそうとする、強い気持ちの現われではないかと考えられる。

少し間をおいて、Y児が再び寝返りを試み始めると、養育者はタイミングよくY児の腕をつかんで身体を引き寄せ、身体を反転させてやる動作に「よいしょ」のかけ声を合わせた（譜例 4-3)。Y児は、こうして養育者から働きかけられることによって、リズミカルなかけ声を用いて身体の動きをまとめることを体験しているのである。

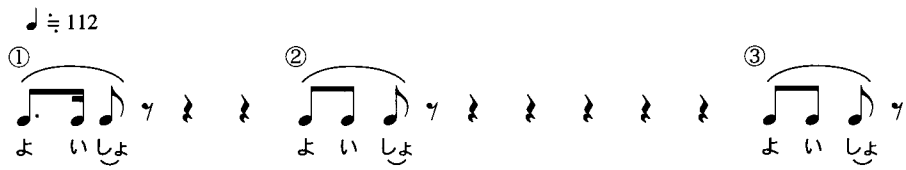
**【事例 4-2】養育者が、「よい・しょ」と 2 拍（律拍）にまとめて、かけ声をかける**

**(生後 6 か月 24 日)【1996 年 11 月 7 日】**

養育者はY児を膝に乗せて「ヒコーキ、ブーン」と揺らした後、膝から降ろして自分の横に仰向けに寝かせた。自力で寝返ることができるようになったY児は、寝返りを始める。養育者は傍らで、Y児の動作に合わせるように、リズミカルに、「よいしょ、よいしょ（譜例 4-4)」と声をかけた。

【譜例 4-4】　《寝返りができるようになったY児に向けてかけられた、かけ声》

採譜者：岡林典子




この場面での養育者のかけ声は、前述の事例 4-1 と同様に、Y児の寝返り行為を励ますためのものである。この時期には、Y児はすでに寝返りの運動動作を獲得しており、養育者はY児のスムーズな動作の遂行に合わせ、安定した拍節にのせて、「よい・しょ、…よい・しょ…」とリズミカルに唱えかけている（譜例 4-4)。この安定した拍節にのせたかけ声は、まだY児が独力では寝返りをすることができなかった事例 4-1 でみられた、養育者の多様なかけ声と異なる点であり、Y児の運動動作に即してみられた変化であるといえる。

さらに、養育者のかけ声を詳細にみてみると、Y児が身体を反転させようと、力を入れ

始めた時のかけ声（譜例 4-4-①）は「よーい・しょ」と「はずむ形」[3]で唱えられており、「よ」の部分の音価が長くなっている。これに続く譜例 4-4-②,③の「よいしょ」は、「等分の形」[4]で唱えられており、「よ」と「い」の音価が均等である。寝返る行為をイメージしてみると、はじめに身体を反転させるところに最も力が入ることがわかる。「よいしょ」というかけ声の意味を国語辞典[5]で調べると、「力を入れて物事をする際、あるいは、ある動作を起こそうとする際などのかけ声」と記されている。この場面では、養育者は動作を起こそうとするＹ児の力の入れ具合を感じ取り、それにふさわしいかけ声「よいしょ」を発しているので、その力動感がこの弾むリズムになって現れたものだと考えられる。

次の事例 4-3 は、つかまり立ちができるようになったＹ児に、養育者が安定したリズムを保持して、かけ声をかけた場面のものである。

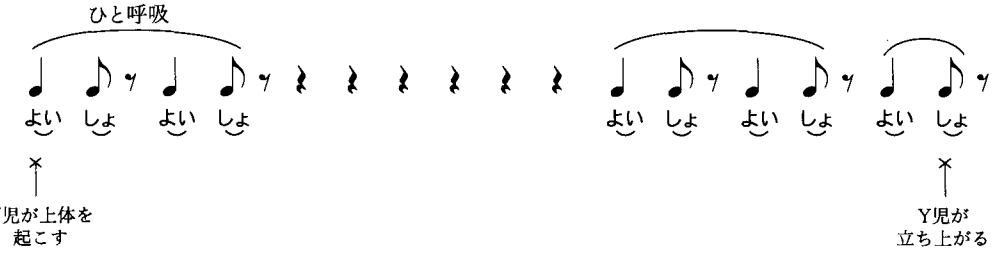
**【事例 4-3】養育者が、安定した 2 拍（律拍）の拍節を保持して、かけ声をかける**

**（生後 8 か月 26 日）【1997 年 1 月 6 日】**

ハイハイからつかまり立ちができるようになってきたＹ児は、高さ 50cm 位の衣装ケースのところまで、ハイハイして近づく。Ｙ児が衣装ケースに手をかけて立とうとした時、傍にいた養育者は、「よいしょ、よいしょ（譜例 4-5)」とかけ声をかけた。Ｙ児が立ち上がると、「あーら、立てたねー。上手に立てたねー」と拍手をする。Ｙ児は得意そうに微笑んで、養育者の方に視線を向けた。

【譜例 4-5】　《つかまり立ちを試みるＹ児に向けてかけられた、かけ声》

採譜者：岡林典子




[3] 3 章 2 節の脚注 5 を参照。間宮芳生の示唆した 3 種類のリズムの取り方「等分の形」「前へよる形」「はずむ形」の 1 つである。

[4] 同上

[5] 林 大 監修 1986 『国語大辞典』 小学館，岩波書店 1998 『広辞苑第 5 版』

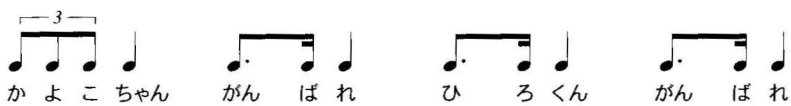
〔写真 4-3〕つかまり立ちを試みる（生後 8 か月）

〔写真 4-4〕つかまり立ちが成功する（生後 8 か月）

この場面での養育者のかけ声は、「よい・しょ●」の 2 音ずつのまとまりによる安定した 2 拍（律拍）の拍節が保持されて、軽快なリズムで唱えられている（譜例 4-5）。養育者は、つかまり立ちができるようになったＹ児の、立ち上がろうとする行為を、かけ声をかけることによって励ましている。この養育者のかけ声は、藤田（1988）が、「声援」として位置づけた、「かよこちゃん、がんばれ、ひろくん、がんばれ（譜例 4-6）」と同様の意味を有しているものと思われる。

【譜例 4-6】　《藤田芙美子が「声援」と位置づけた、子どもの表現》

〔藤田（1988）より引用〕




次の事例 4-4 は、Ｙ児が階段をのぼる自分の足の動きに合わせて、自発的にかけ声らしき発声を試みた場面である。

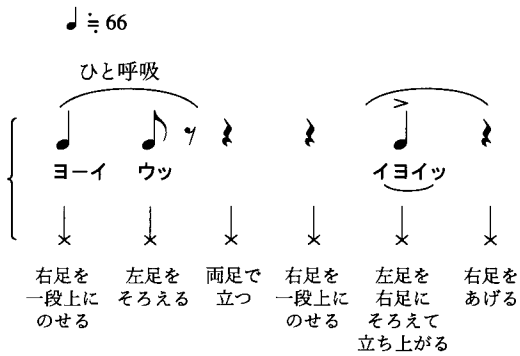
**【事例 4-4】自分の動作に合わせて、かけ声らしきものを発声し始める**

**（12 か月 17 日）【1997 年 4 月 28 日】**

生後 11 か月で歩き始めたＹ児は、12 か月を過ぎ、ハイハイ型ではあるが安定した階段のぼりの運動動作を獲得した。家の階段を精力的に上りながら、右足を上げる動作に合わ

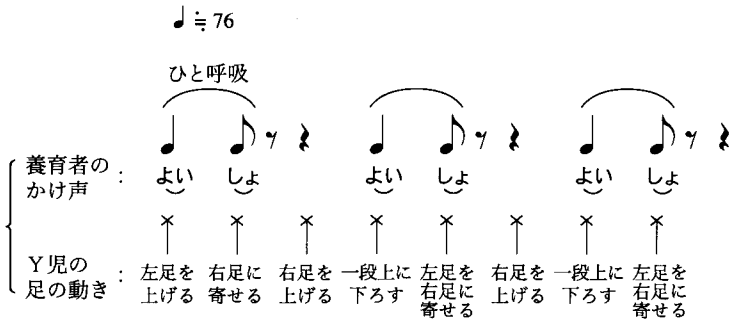
せて「ヨーイウッ、ィヨイッ」（譜例 4-7）というかけ声らしきものを発している。残り 3 段を残して止まってしまったＹ児に、養育者は「はいどーぞ」と言葉をかけて促す。再び上り始めたＹ児の動きに合わせて、養育者は少しゆっくりめに、「よいしょ、よいしょ（譜例 4-8)」とかけ声をかける。Ｙ児が上りきると、「ほら行けたー」と、明るい声を上げてＹ児の達成感を代弁した。

【譜例 4-7】　《Ｙ児が発声した、かけ声らしき声》　採譜者：岡林典子




【譜例 4-8】　《階段を上るＹ児の足の動きに合わせて、養育者がかけたかけ声》

採譜者：岡林典子




この場面でＹ児が自分の動作に伴って発声した、「ヨーイウッ」「ィヨイッ」などのかけ声らしきものは、一連の観察の中で初めてみられたものである。譜例 4-7 より、Ｙ児はこの発声を、2 拍にまとめ、1 音と 1 動作を同期させようとしていることがみてとれる。そして、これらの音声を右足を持ち上げるためのかけ声として、発声していることが理解できる。このようにして、Ｙ児は動作をまとめるためのかけ声を獲得しつつあるといえる。

〔写真 4-5〕階段を這って上る（生後 12 か月）

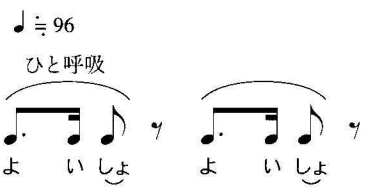
一方、養育者は、「よい・しょ●」の 2 音をまとめて、2 拍（律拍）の拍節を作り出している。しかし、ここではＹ児が次の動作の準備として右足を上げる間を待って、次の動作にかけ声をかけているため、ひと呼吸を 3 拍（律拍）の時間単位にまとめて唱えている。この点は、先の 2 つの事例（4-2, 4-3）と異なるところであるが、これは養育者が、無意識にＹ児の動きに呼吸と声を合わせようと、試みていることによるためだと考えられる。

次に挙げる事例 4-5 は、Ｙ児が養育者のかけ声に合わせて、喃語的音声を 2 拍（律拍）にまとめ、自分の動作に同期させる場面である。

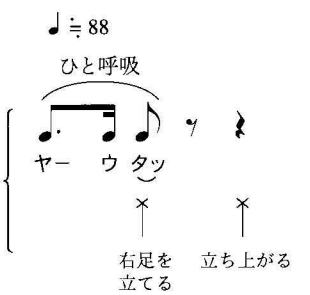
**【事例 4-5】養育者のかけ声を模倣して、喃語的音声を 2 拍（律拍）にまとめ、動作と同期させる**　**（14 か月 13 日）【1997 年 6 月 24 日】**

昼寝をさせるため、養育者はリビングで座り込んでいるＹ児に「よーいしょ、よーいしょ（譜例 4-9）して、2 階へ行こう」と誘いかけ、Ｙ児のお気に入りのタオルケットをもって来る。Ｙ児はそれを見て、「ヤーウタッ（譜例 4-10）」と発話して立ち上がり、階段を上り始める。養育者がＹ児の動きに合わせて「よーいしょ」とリズミカルにかけ声をかけると、Ｙ児は養育者と声を合わせて、「ヤーシャ、ヤーショ」と発声し、喃語的音声と階段のぼりの動作を音楽的にまとめて、テンポよく上って行った（譜例 4-11）。

【譜例 4-9】　《養育者が誘いかけたかけ声》　採譜者：岡林典子

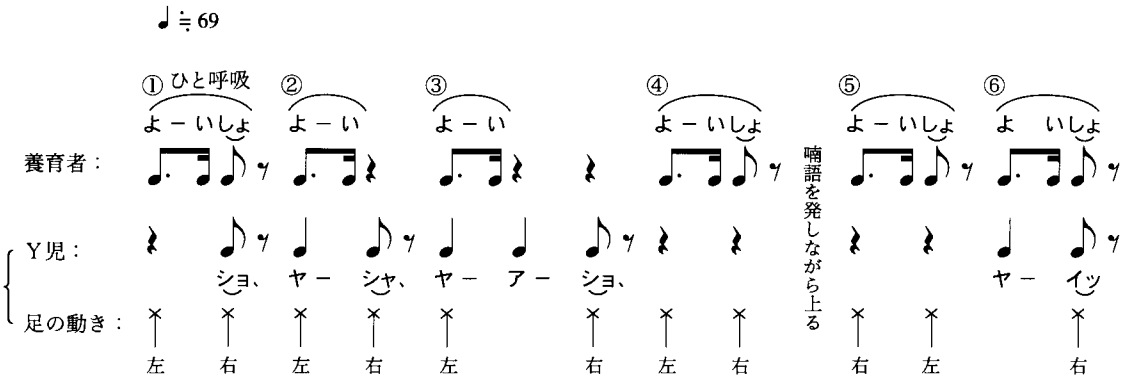



【譜例 4-10】　《Ｙ児が模倣して発話した、かけ声》　採譜者：岡林典子



【譜例 4-11】 《養育者とともに、Y児がまとめた喃語的音声と階段のぼりの動作》

採譜者：岡林典子




事例 4-4（生後 12 か月）で、かけ声らしきものを身につけつつあったY児は、2 か月後のこの場面では、養育者のかけ声を模倣して、喃語的音声でそれらしく「ヤーウタ」「ヤーショ」など、拍節的なかけ声を用いて、動作をまとめるようになっている。音声模倣に依ってはいるが、このような 2 拍（律拍）のリズムの流れにのって、Y児がかけ声らしく音声をまとめて階段を上る行為は、これまでのかけ声に関わる一連の観察の中で、はじめてみられたものである。このようなY児の音楽的行為の変化には、1 語発話期に入り「ヨイショ」らしき発話ができるようになったことや、運動動作の発達によって以前よりもスムーズに階段が上れるようになったことなど、話し言葉や運動動作の発達的な変化が作用していると考えられる。

Y児は養育者とリズムを共感しながら、呼吸や声を合わせて階段のぼりを経験することを通して、声と動作を音楽的に組織づけることを身につけているものと思われる。

次の事例 4-6-①・②は、Y児が自発的に、「ヨイショ」の 1 語を自分の動作と同期させて、多様な表現を試みたものである。

**【事例 4-6】「ヨイショ」の 1 語を、自分の動作に同期させて、多様に表現する**

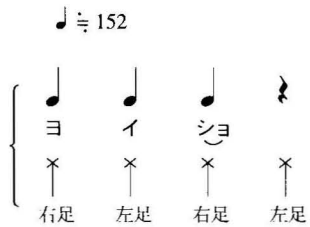
**①「ヨ」「イ」「ショ」の 1 音ずつを、左右の足の動きの 1 動作に同期させる**

**(16 か月 7 日)【1997 年 8 月 18 日】**

Y児は歩くことにかなり慣れたようで、小さな歩幅でちょこちょこと、すばやく歩けるようになってきた。障害物のない祖母宅の庭を、うれしそうに歩き回っていたが、玄関ポーチの 15 cmほどの段差を横切ろうとして、足を上げるタイミングがつかめず、立ち止まってしまう。傍

にいた父親が、「『よいしょ～』ってして」と、言葉をかける。その後、Y児は段差を横切るときに、父親のアドヴァイスを受け入れ、両腕を大きく広げてバランスをとりながら、「ヨイショッ（譜例 4-12)」とかけ声をかけながら、止まることなくスムーズに段差を超えた。その後は、「ヨイショー」「ヨーイ」などのかけ声と、自身の足の動きをリズミカルに同期させ、段差をうまく横切っていた。

【譜例 4-12】　《Y児のかけ声と足の動き》　採譜者：岡林典子



〔写真 4-6〕段差を前に、立ち止まる

（生後 16 か月）

〔写真 4-7〕バランスをとって、段差を超える

（生後 16 か月）

譜例 4-12 より、この場面にみられる、かけ声を用いたY児の自発的な音楽的行為が、「ヨ」「イ」「ショ」の 1 音ずつに、左右の足の動きの 1 動作を同期させるものであることが読みとれる。1 語発話後期にあるY児は、「ヨイショ」とうまく発話できるようになり、1 音が 1 拍の時間単位を有する日本語のリズムの特徴をうまく利用して、身体の動きをまとめられるようになり、音楽的な成長をみせている。Y児がこれまでに、養育者から身体の動きに同期したリズミカルなかけ声をかけられてきた経験の積み重ねは、1 語発話が定着してきたY児に、日本語の音楽的特徴と結びつく音楽的行為を芽吹かせている。

次の事例は、Y児が大きな抑揚をつけたかけ声と、動作を同期させた場面である。

**【事例 4-6】「ヨイショ」の 1 語を、自分の動作に同期させて、多様に表現する**

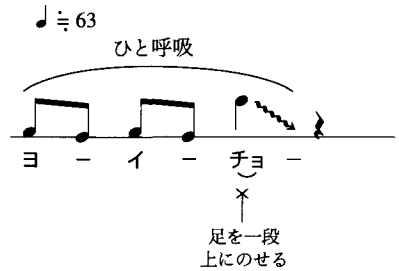
**②大きな抑揚をつけて、ひと呼吸で「ヨーイーチョ～」と発声し、1 動作と同期させる**

**(16 か月 7 日)【1997 年 8 月 18 日】**

Y児は、購入して間もない室内用の滑り台を、まだうまく滑ることができない。傍らにいる養育者に向かって盛んに談話的な喃語で話しかけながら、滑り台の階段を上り下りして遊んでいる。何度か上り下りしたので少し疲れたのか、Y児は階段の手すりをしっかりと持ち、ゆっくりと足を上げながら、力のこもった声で大きな抑揚をつけ、「ヨ～イ～チョ～（譜例 4-13)」とかけ声をかけて 1 段上った。

【譜例 4-13】　《大きな抑揚のついたY児のかけ声と動作のかかわり》

採譜者：岡林典子




この場面で、Y児は「チョ～」の部分が高くなる大きな抑揚をつけたかけ声と、足を 1 段上に上げる 1 動作を同期させている。Fujita(1986) は、日本語を話す行為における音楽的側面について、「その表現形式は日本語の特質である相対的音高関係を保持する」「表現エネルギーが大きい場合、高い音で発声される音節は語気により押し上げられ、語の音節の音高関係は拡大される」「一定の状況下で定められる時間単位は個人の呼吸周期が基準になって作られる」などを含む 4 点を明らかにしている。藤田の理論に従ってこの場面でのY児のかけ声をみると、譜例 4-13 より、「ヨイチョ」という言葉がひと呼吸でまとめられ、強い情動によって語に含まれている各音の音高関係が拡大されていることが理解できる。

養育者や父親とのさまざまな音楽的やりとりを通して、Y児は声と動作を音楽的にまとめるためのルールを獲得し、これを用いて自身の情動表現にふさわしいあり方で表現することができるようになってきたといえる。これまで経験してきた、かけ声を用いた多様な音楽的やりとりは、Y児に声と動作を音楽的にまとめることを学ぶための場を提供してきたといえよう。

ところで、この事例 4-6 が観察された後、しばらくの間、かけ声「ヨイショ、ヨイショ」に関わる音楽的行為がみられなくなった。再びこの行為が観察されはじめたのは、Y児の

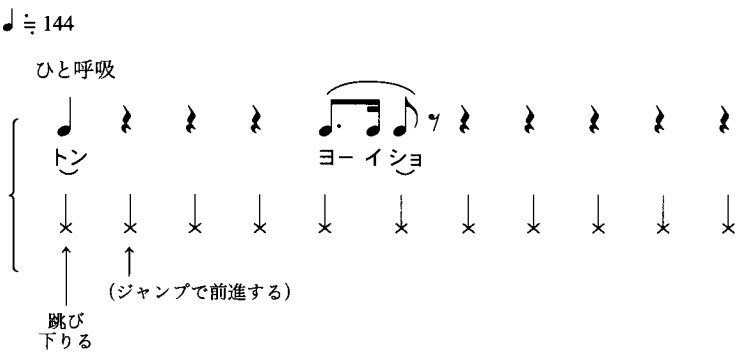
話し言葉が3語～多語発話期に入り、ジャンプを盛んに試みるようになった、生後22か月時であった。

次の事例4-7は、再びY児に、かけ声を用いた音楽的行為が現れはじめた時期のものである。

**【事例4-7】「ヨーイショ」と「はずむ形」にまとめたかけ声を、ジャンプする動作に1度だけ同期させる　(生後22か月16日)【1998年2月27日】**

生後19か月頃より、両足をそろえてジャンプすることを覚えたY児は、盛んにジャンプする毎日である。次第に跳ぶ動作も軽くなり、平らなところはもちろんのこと、20cm程度の高さから跳べるようになった。テレビの子ども番組を見終わって機嫌のよいY児は、「トン」といって少し高い台から跳び下り、ジャンプしながら前進する。そして、1度だけ「ヨーイ・ショ」とリズミカルなかけ声を跳ぶ動作に同期させる。(譜例4-14)

【譜例4-14】　《Y児のかけ声とジャンプの動作》　採譜者：岡林典子




生後19か月頃から盛んに両足をそろえてジャンプするようになったY児は、22か月には少し高さのある所から跳び下りることができるようになり、面白そうに試みる毎日である。この場面でのY児のかけ声は、ジャンプする動作と同期して「はずむ形」で表現されている。これは、「トン」といって跳び下り、勢いづいてジャンプで前進する弾む身体の動きに誘発された表現である。先に事例4-2で、養育者が動作を起こそうとするY児の身体の動きにふさわしいかけ声をかけるために、子どもの動きの力動感が養育者の「よーいしょ」という弾むリズムになって現れたと分析した。本事例は、自分の身体の躍動感が声になって現れるとき、きわめて自然に身体の動きと同期してはずむ形で表されることを示す一例であるといえる。このように、声や言葉と身体の動きはリズムという音楽的な要素で

つながっていることが理解できる。

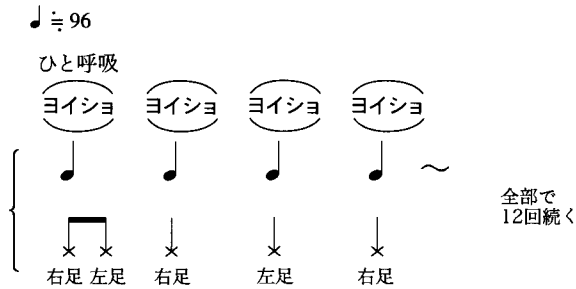
次の事例は、Y児が歩く動きに同期させて、「ヨイショ、ヨイショ」とかけ声を繰り返した事例である。

**【事例 4-8】歩く動きに同期させて、「ヨイショ、ヨイショ…」とかけ声を繰り返す**

**(生後 24 か月 4 日)【1998 年 4 月 15 日】**

夕食後、Y児は養育者とともに、落ち着いた時間を過ごしている。子ども用の椅子を故意に倒し、養育者に向かって「お椅子、大丈夫かしら？」という。養育者は、「お椅子、トンしたねぇ」とY児に言葉を返す。Y児は、椅子を持ち上げて、「ヨイショ、ヨイショ…」とリズミカルにかけ声をかけながら、歩き回る。(譜例 4-15)

【譜例 4-15】　《Y児のかけ声と歩く足の動き》　採譜者：岡林典子




事例 4-7 までにみられたY児の自発的なかけ声の表現は、1 回きりのものであった。3 語～多語発話中期に入って観察された本事例は、一連のかけ声の観察事例の中で、はじめて「ヨイショ」が 14 回繰り返されたものである。3 章では、1 語発話後期に「パッカッ、パッカッ」という擬音語に動作を同期して繰り返した事例や、2 語発話期に「パーチトーオッ」という喃語的音声と動作を繰り返した事例がみられたが、有意味語を用いた発話の繰り返しは、3 語～多語発話期を待たなければ観察されなかった。本事例ではじめて動作と同期した「ヨイショ」のかけ声の繰り返しが観察されたことは、3 章の事例とも関連して、動作を伴うかけ声が話し言葉の獲得過程と深く関わることを示唆している。すなわち、それは拍節的に言葉や動作をまとめる音楽的行為が、言語の発達や運動動作の発達とも関連して獲得されていくことを示している。

次の事例は、Y児が身体の動きに同期させて、多様なかけ声を表現するようになったことを示すものである。

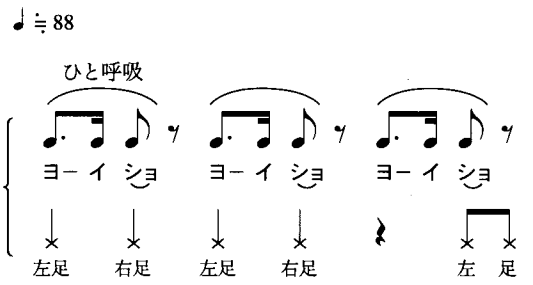
**【事例 4-9】身体の動きに、多様な「ヨイショ」のかけ声を同期させる**

**(生後 26 か月 16 日)【1998 年 6 月 27 日】**

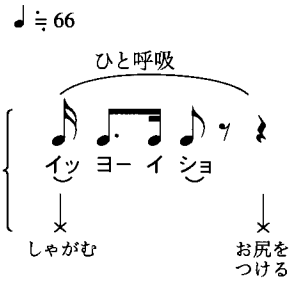
**①「ヨーイショ」と「はずむ形」で自分の動作にかけ声をかける**

昼食後、Y児は上機嫌で室内用の滑り台で遊んでいる。小走りで滑り台に近づき、「ヨーイショ、ヨーイショ」とかけ声をかけながらゆっくりと階段を上る（譜例 4-16)。頂上に立つと、窓の外を眺め、「とてもよく見える」と発話する。養育者は笑いながら、「とてもよく見える？ほーんとォー」と声をかける。Y児は、養育者の方に視線を向け、「イッ、ヨーイショ」といって腰を下ろし、滑り台をすべり下りる（譜例 4-17)。

【譜例 4-16】　《Y児のかけ声と歩く足の動き》　採譜者：岡林典子




【譜例 4-17】　《Y児のかけ声と座る動作》　採譜者：岡林典子

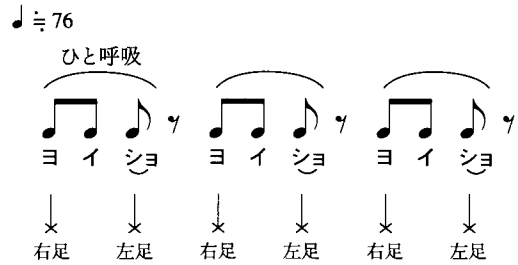



**②「ヨイショ」と「等分の形」で自分の動作にかけ声をかける**

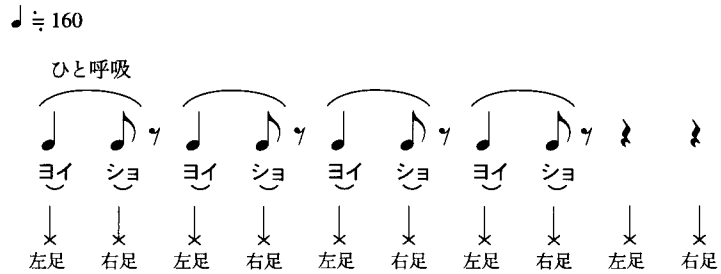
①の場面の続きである。滑り台をすべり下りたY児は、笑い声を上げる。養育者が「とてもよく見えた？」と言葉をかけると、Y児は笑顔で「見えた」と答える。養育者は「そう、よかったねー」と言葉を返す。すると、次はジャンプしながら滑り台に近づき、「ヨイショ、ヨイショ」とかけ声をかけながら階段をのぼり、「シュー」「ピュー」といってすべり下りた（譜例 4-18)。さらに、Y児は上機嫌で、小走りで少し足を高く上げ、「ヨイショ、ヨイショ」と軽快

なテンポでかけ声をかけて、滑り台に近づきすべり下りた（譜例 4-19）。

【譜例 4-18】　《Y児のかけ声と足の動き》　採譜者：岡林典子




【譜例 4-19】　《走る動作に同期するY児のかけ声》　採譜者：岡林典子




本事例の一連の場面では、とても機嫌のよいY児が、滑り台の階段を上る動作や、座る動作、小走りに走る動作に多様なかけ声「ヨイショ、ヨイショ」をかける様子がみてとれる。事例 4-9-①の場面と譜例 4-16, 4-17 からは、ゆっくりと力をこめて階段を上る動作やしゃがむ動作に「はずむ形」でかけ声をかけていることが読みとれる。この表現にはY児の身体の動きの力動感が現れている。また、事例 4-9-②の場面と譜例 4-18, 4-19 からは、Y児の楽しい気分の高まりがジャンプや小走りなどの動作になって現れ、軽快なテンポのかけ声と同期していることがみてとれる。Y児は本事例が観察された 26 か月になって、走る運動動作を獲得した。譜例 4-19 からは、Y児がこれまでの観察の中で最も速いテンポ♩=160 でかけ声と動作を同期させていることが読みとれる。この事例は、走るという運動動作の獲得がY児の音楽的行為に作用していることを示唆するものである。すなわち、子どもの音楽的行為が運動動作と関連しながら発達していることを実証する一事例である。

また、本事例にみられたY児の多様なかけ声の表現は、事例 4-1, 4-2, 4-3 などで養育者

がY児に働きかけていたかけ声と共通するものである。Y児は、これまでに養育者と日常生活のやりとりの中で重ねてきた経験を取り込み、日本語を基にした拍節感覚を身につけ、多様な表現を試みることができるまでに音楽的成長を遂げてきたといえる。

次の事例4-10は、Y児がさらに多様なかけ声を表現するようになったことを示すものである。

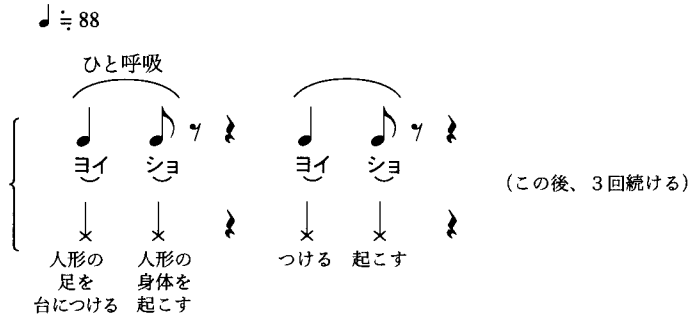
**【事例4-10】自分が動かす人形の動きに、かけ声を同期させる**

**(生後30か月21日)【1998年11月1日】**

昼食後、Y児は一人遊びをしている。足が折れて片足になってしまったアンパンマンの人形をもって、台の上を歩かせながら、「ヨイショ、ヨイショ」とかけ声をかけている。はじめは、少しゆっくりと「ヨイ・ショ・●、 ヨイ・ショ・●」と3拍（律拍）にまとめたかけ声と人形を歩かせる動作を同期させていたが（譜例4-20)、ひと呼吸おいてから、今度は「ヨイ・ショ、ヨイ・ショ」と2拍（律拍）にまとめたかけ声と人形の動きを合わせはじめた（譜例4-21)。次第に気分が高まり、リズムにのってきたY児は、かけ声のテンポと人形を動かす動作を速めていった（譜例4-22)。

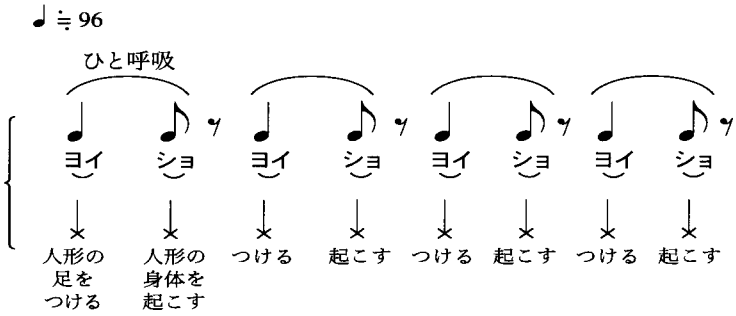
【譜例4-20】　《3拍にまとめたY児のかけ声と人形を動かす動作》

採譜者：岡林典子



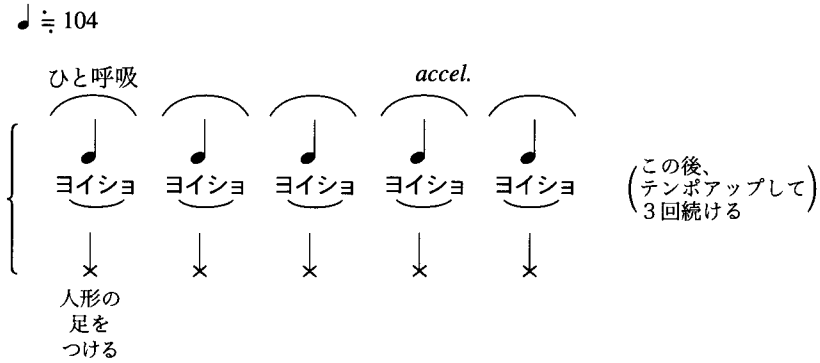

【譜例4-21】　《2拍にまとめたY児のかけ声と人形を動かす動作》

採譜者：岡林典子



【譜例 4-22】　《テンポアップしたＹ児のかけ声と人形を動かす動作》

採譜者：岡林典子




先の事例 4-9 でも、Ｙ児はこれまでの経験を基に、多様なテンポで自在にかけ声を用いることができるまでに音楽的成長を遂げてきたことを述べた。この場面でみられた、人形に働きかける 3 拍や 2 拍にまとめて繰り返されるリズミカルなかけ声も、かつて養育者によってＹ児が働きかけられたかけ声と同様のリズムや拍節をもった表現である。一連のかけ声に関わる観察事例からは、同じ文化を共有し、時間と空間をともに過ごす養育者や周りの大人によって伝えられ、子どもに身につけられる音楽的行為の存在と、Ｙ児の音楽的な成長の姿が捉えられた。

## 第3節　本章のまとめ

本章では、日本語に基づく拍節感覚の獲得過程を捉えるために、運動動作に伴う「かけ声」に焦点を当て、養育者とＹ児の間にかけ声を用いてどのような音楽的やりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Ｙ児の音楽的行為の発達的変化の特徴についても明らかにした。

結果からは、養育者が、寝返りやつかまり立ち、あるいは階段のぼりをしようとしているＹ児の状態を受け止め、共感し、そこに自らの気持ちを沿わせ、声によって励ましていることが明らかになった。また、それぞれの事例からは、以下の様なことが認められた。養育者はＹ児の寝返り動作が途中で止まると、声のトーンを高くして、多様なリズムを用いてかけ声をかけていた。また、Ｙ児が動作を起こそうとして力を入れる時には付点のリズムを用いて働きかけ、スムーズな動作の流れの時には、均等な音価を用いたかけ声であった。さらに、Ｙ児の階段のぼりの動作に呼吸を合わせて、ゆっくりと 3 拍（律拍）のまとまりでかけ声をかけていた。これらに共通する特徴は、養育者がＹ児の動きに沿わせた

リズムや調子でかけ声をかけていることである。

一方、Y児はこのような養育者の働きかけを受けとめ、1 語発話前期になると、自分の動作に伴って「ヨーイ、ウッ」「ィヨイッ」などのかけ声らしきものを 2 拍（律拍）にまとめて発声し、1 音と 1 動作を同期させようとしていた。また、養育者や父親とのさまざまなかけ声を用いたやりとりを通して、Y児は声と動作を音楽的にまとめるためのルールを獲得し、これを用いて自身の情動表現にふさわしいあり方で多様な表現をすることができるようになっていった。本章で挙げた一連のかけ声に関わる観察事例からは、子どもが同じ文化を共有し、時間と空間をともに過ごす養育者をはじめとする周りの大人によって、導かれ、伝えられる音楽的行為の存在が明らかになった。また、子どもが文化的コンテクストにおいて音楽的に成長してゆく姿が捉えられた。

さらに、本章の観察事例において、自発的なかけ声がはじめてY児に現れたのは、生後 12 か月時であった。次章では、抑揚的な擬音語に焦点をあて、その発現時期と獲得過程について詳細な検討を試みる。

# 第５章　動作の伴う抑揚的な日本語の獲得過程にみられる音楽的行為
## ～擬音語「ブーラン、ブーラン」に関わる事例から～

前章では、拍節的な日本語「ヨイショ、ヨイショ」に焦点をあて、寝返る、這う、歩く、走るなど、Ｙ児の運動動作の獲得に伴い、養育者とＹ児の間にかけ声を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示すとともに、Ｙ児の音楽的行為の発達的変化の特徴を明らかにした。本章では、抑揚的な日本語として、擬音語「ブーラン、ブーラン」に焦点をあて、Ｙ児が抑揚的な擬音語を習得していく過程において、養育者との間にどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示すとともに、Ｙ児の音楽的行為の発達的変化の特徴を明らかにする。

### 第1節　擬音語「ブーラン、ブーラン」の獲得過程を分析対象とする理由

第３章では、話し言葉の発達段階に沿ってＹ児の音楽的行為を捉えたため、拍節的に言葉をまとめる行為や、旋律的に言葉をまとめる行為の出現時期については取り上げることができたが、動作の獲得との関係について、詳細な分析を行うことが十分にはできなかった。そこで、前章では、この点に関して検討を深めるため、動作の伴う拍節的な日本語「ヨイショ、ヨイショ」の獲得過程にみられる音楽的行為に関して考察を深めた。

そこで、次に本章では、養育者が無意識に働きかけ、その経験を通して子どもがいつの間にか身につけていく動作に伴う抑揚的な擬音語に焦点を当て、養育者と子どもの間に抑揚的な擬音語を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を明らかにする。養育者は子どもを揺らしたり、ともにブランコで揺れたりしながら、擬音語「ブーラン、ブーラン」をどのように音楽的に用いて働きかけているのか、また子どもは、運動動作や話し言葉の獲得状況に従って、どのように声や言葉や動作を音楽的に組織づけていくのか。事例の分析を通して、その具体的な内容を明らかにしたい。

また、「ブーラン、ブーラン」という擬音語に注目したのは、１つには、観察記録全体を通して養育者とＹ児がこの擬音語を用いてやりとりをする場面が断続的にみられたこと、2つには、擬音語「ブーラン・ブーラン」が、日本語の音韻的特徴に基づく抑揚を有していることにより、話し言葉や運動動作の獲得状況と抑揚的な日本語に関する音楽的行為の関連が捉えやすいと思われるためである。

## 第2節　観察事例の分析と考察

本節では、養育者から「ブーラン、ブーラン」という擬音語を唱えかけられたＹ児が、やがて自分も唱えながら身体を揺らしたり、ブランコに乗ったり、人形を揺らしたりという、自ら「ブーラン、ブーラン」という擬音語を用いた音楽的行為を試みるようになる変化の過程について、事例に基づき、考察を進める。

事例 5-1 は、Ｙ児が養育者から「ブーラン、ブーラン」という擬音語に同期して身体を揺らして、あやしてもらう場面である。

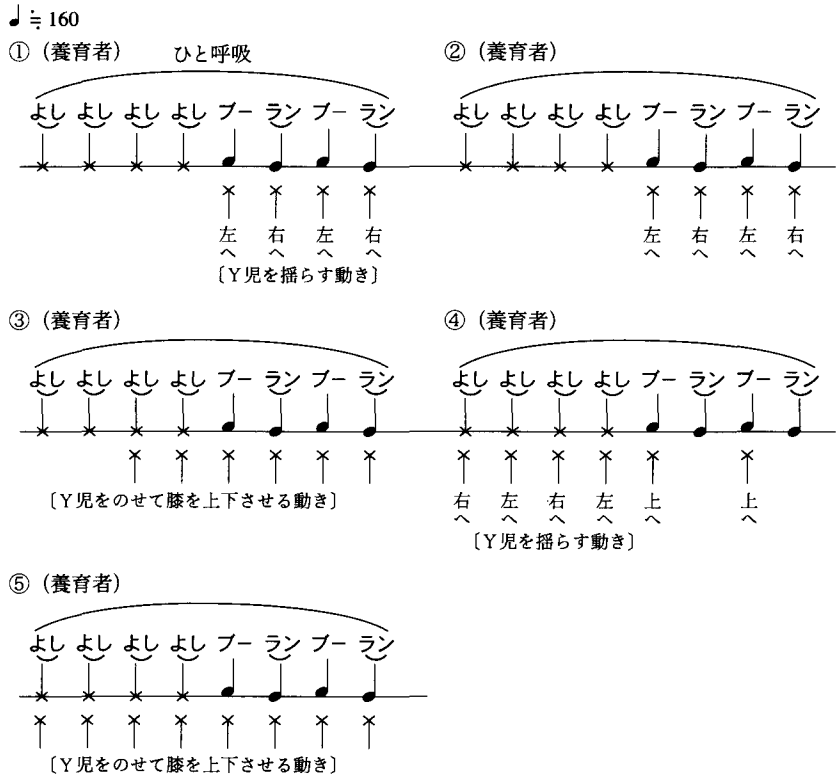
**【事例 5-1】養育者が２音旋律で抑揚的な擬音語を唱え、Ｙ児を揺らす動きと同期させる**

**（生後７か 28 日）【1996 年 12 月９日】**

７か月も後半になり、Ｙ児は支えなしでもうまく座れるようになった。マットの上に座って一人遊びをしていたが、バランスを崩して倒れ、頭をぶつけてかん高い叫び声を上げた。台所で昼食の用意をしていた養育者はＹ児の様子を見て、それほど慌てることはないと判断し、ゆっくりと近づいて抱き上げた。そして、Ｙ児の気持ちを、頭を打ったことから逸らせようという思いで、「よしよしよしよし、ブーランブーラン」（譜例 5-1）と何度も唱えながらＹ児を揺らした。Ｙ児は次第に気持ちを落ち着かせていった。

【譜例 5-1】　《養育者の唱えかける抑揚的な擬音語と、Ｙ児を揺らす動き》

採譜者：岡林典子



この場面で養育者は、頭を打って泣き出しそうなY児をなんとか泣かさずに落ち着かせたいという思いから、とっさにY児を抱き上げて声と動きを合わせて働きかけた。それは、ひと呼吸の時間単位を言葉のまとまりによって、「よしよしよしよし」と「ブーランブーラン」に2等分し、さらに2音ずつのまとまりに従って、「よし・よし・よし・よし」「ブー・ラン・ブー・ラン」と、8拍に下位分割した拍節的な唱えであった。また、「ブーラン」の部分は、通常の話し言葉の高低アクセントとほぼ同じ旋律輪郭であり、平均率で用いられるような2度ではないが、2度音程からなる固定した2つの音高で唱えられた2音旋律である。養育者は初めのうちはこの部分のみを言葉の拍節に合わせて左右に揺らしていたが（譜例5-1-①,②）、次第に8拍全体にわたって、リズミカルに声と動きを同期させていった（譜例5-1④,⑤）。Y児は、この養育者の働きかけを身体全体で受け止め、次第に気持ちを落ち着かせていったものと思われる。

事例 5-2 は、養育者が揺れる人形の動きに同期させて、「ブーラン、ブーラン」という擬音語をかけ、Y児とともにみる場面である。

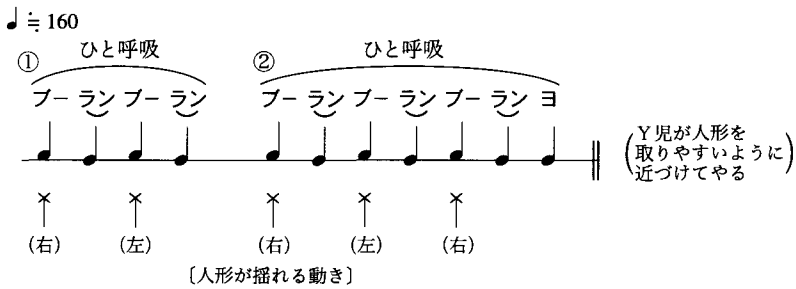
**【事例5-2】養育者が人形の揺れに対して2音旋律で抑揚的な擬音語を唱える**

**（生後8か4日）【1996年12月16日】**

午後9時過ぎ、眠くなりむずかったY児を養育者が抱き上げると、Y児の手が電灯の紐に触れ、先に付いた人形が左右に揺れ始める。Y児はそれを取ろうと手を伸ばすがなかなか取れない。養育者は人形の揺れに合わせるように「ブーランブーラン」（譜例5-2）と唱えながら、Y児が人形を取りやすいように、抱いたまま人形に近づく。Y児がうまく人形をつかむと、「取れたねェー」と言葉をかけ、頬ずりをした。Y児は満足げな表情であった。

【譜例5-2】　《養育者の唱えかける抑揚的な擬音語と、人形が揺れる動き》

採譜者：岡林典子




この場面での養育者は、事例5-1のようにY児の身体の揺れに対して「ブーラン」の言葉を同期させたのではなく、左右に揺れる人形のひと揺れに対して「ブーラン」の言葉の

まとまりを同期させている。旋律は事例5-1と同様に、ほぼ2度の音程が保たれていた。そして、「ブー・ラン」という2音のまとまりによってできる言葉の拍節が、ひと揺れの時間単位を2等分することになり、これがひと呼吸の間に2回ないし3回と繰り返し唱えられることによって拍節的な時間単位を作り出し、リズミカルな表現が生じた(譜例5-2-①)。この唱えは、無意識ではあるが養育者がY児の目線に立って人形の揺れを感じることにより生まれたものだと推測できる。Y児が人形をつかむことに集中し、やっとつかんだ時に養育者が自分がつかんだような気持ちで「取れたねー」と発話したのは、養育者がY児の人形をつかもうとする気持ちを共有していたためであると考えられる。

このように、養育者は、「ブーラン、ブーラン」とリズミカルに唱えることを通して、まだ言葉のないY児と気持ちを共有し、心を通わせようと試みている。

事例 5-3 は、養育者が絵本の挿絵をみて、「ブーラン、ブーラン」という擬音語を用いて、Y児に話しかける場面である。

**【事例5-3】養育者が絵本の挿絵をみて、「ブーランブーランしてくれたね」と話しかける**

**(生後13か9日)【1997年5月20日】**

養育者がY児を膝に乗せ、絵本『ねずみ君のチョッキ』(ポプラ社)を読み聞かせている。最後のページで養育者は、象の鼻に掛けられた伸びたチョッキでブランコをしているねずみを指差しながら、「ぞうさん、ブーランブーランしてくれたねェ」と話しかける。Y児は興味深げな表情で養育者の指差すところに視線を向けている。

この場面で養育者が用いた「ブーラン、ブーラン」は、動きに対する擬音として用いられた前2つのエピソードとは異なり、「ブランコ」や「揺らすこと」など、意味を持った言葉の代名詞として使われているのが興味深い。これについては、例えば、「ぞうさん、ブーランブーランしてくれたねェ」という発話を、「ぞうさん、ブランコしてくれたねェ」、あるいは「ぞうさん、揺らしてくれたねェ」などと置き換えてみると、ここでの表現が、「ブランコ」や「揺らすこと」という意味を含んでいることが理解できる。Y児はこの絵本を非常に好んでいたため、この時期(13〜14か月)には養育者は何度も繰り返し読み聞かせをしており、同様の言葉かけをしている場面が他にも幾度か観察された。(1997年5月25日, 同年6月23日)

事例5-1,5-2,5-3では、養育者からの働きかけが中心となっている。様々な場面での養育者の働きかけに対して、Y児が興味深げな表情をみせたり、気持ちを転換したりという

変化を示したことは、Y児が養育者の働きかけを受け入れ、それによって気持ちに何らかの影響を受けたことによると考えられる。

養育者からの働きかけの内容は、①「ブーラン、ブーラン」の言葉のリズムと、Y児の身体の揺れの動きを同期させてほぼ2度の音程で唱える、②「ブーラン、ブーラン」の言葉のリズムと、物体の揺れの動きを同期させてほぼ2度の音程で唱える、③揺れるもの・揺らすこと・揺れる動作・ブランコなどに対して代名詞的に、意味のある語として「ブーラン」を用いる、のように分類でき、言葉のリズムと抑揚が中心であることから、意味のある語としての使用へと、「ブーラン、ブーラン」の使われ方は、その範囲を広げ、変化をみせている。これには、11か月時の初語の出現に始まる有意味語の習得や、Y児が養育者の発話の意味内容を理解し始めている言語習得の状況との関連が考えられる。

**【事例5-4】養育者の働きかけをきっかけに表現を始める①**

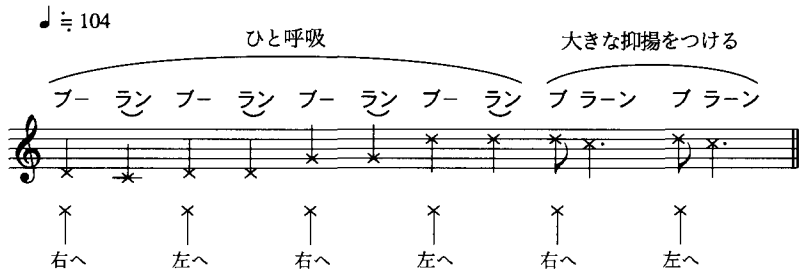
**ー養育者の働きかけの後、「ブーダン、ブッ」と発話するー**

**(生後15か18日)【1997年7月29日】**

午後9時過ぎ、養育者が「お風呂入ろうか？」と言葉をかけると、Y児はお風呂場を見に行き、戻ってきて「抱っこ」と言って養育者に両腕を突き出す。養育者は、もう入浴の時間ということもあって、Y児を抱き上げることはせず、少しふざけて「ブーラン…」と唱えながら、次第にテンポを上げ、左右に大きく揺らした(譜例5-3)。下ろされたY児はステレオのラックにぶら下がっているぬいぐるみに触れながら、「ブーダン、ブッ、ブーリャン、ブッ」(譜例5-4)と発声し、わずかに腰を前後に動かした。

【譜例5-3】　《養育者がY児を揺らす動きと声》

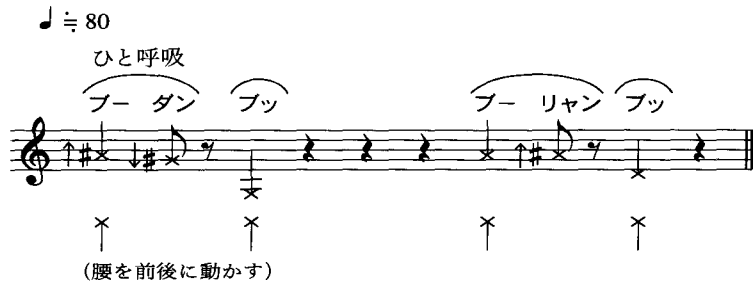
採譜者：岡林典子



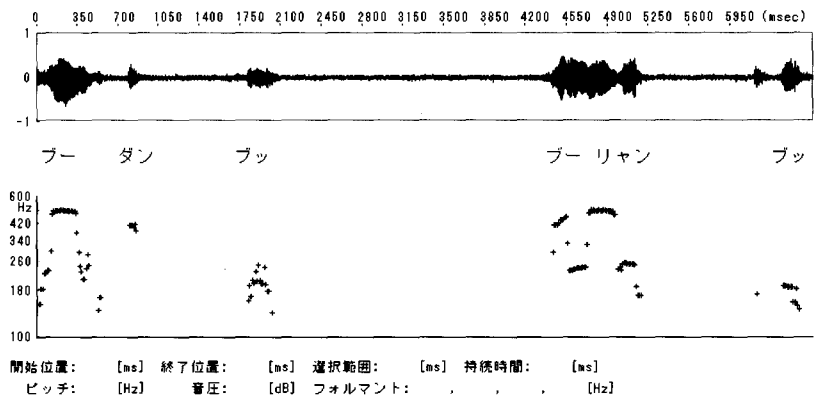

〔養育者がY児を揺らす動き〕

【譜例 5-4】　《Y児の表現する動きと声》

採譜者：岡林典子




**【図 5-1】Y児の「ブーダン、ブッ」のピッチ曲線と音声波形**




この場面での養育者の発話とY児を揺らす動作の関係をみると、ひと呼吸の中で「ブーラン」という語が数回唱えられ、その1回毎にY児の左右への揺れが同期している。唱え言葉の旋律は、事例 5-1、5-2 でみられたような安定した2度音程ではなく、通常の話し言葉の旋律輪郭を基にした長2度の音高が、遊びの気分の高まりにしたがって次第に上昇し、抑揚も揺れの大きさの変化にともなって大きくなっている。

このような養育者からの働きかけを受けながら、遊び気分を共有したY児は、床に下ろされると、「ブーダン、ブッ…」と唱えてかすかに腰を前後に動かした。これは、これまでの観察を通して初めてY児が自ら表現したものである。譜例 5-4 は音声分析によって得られたY児の声のピッチ曲線を示した図 5-1 をもとに譜面化したものである。図 5-1 と譜例 5-4 からは、Y児がひと呼吸で発話する「ブーダン」「ブッ」「ブーリャン」というそれぞ

れの声のまとまりに、1回の腰の動きを同期させていることが理解できる。また、旋律は、話し言葉の抑揚が基になったと思われるが、音程が認められるほどではない。それよりも、「ブー・ダン」「ブッ・●」と2拍の拍節が生起していることがみてとれる。Y児のこれらの音楽的な行為からは、この時期には旋律面よりも拍節面で音楽的な表現がなされていることが理解できる。また、本事例での養育者の働きかけ（譜例 5-3）や事例 5-2 での養育者の働きかけ（譜例 5-2）と比較してみると、言葉と動きの関係においては「ブーラン」という語のまとまりに対して、揺れ1回が同期している点が共通している。また、抑揚については、話し言葉の抑揚が表れている点が共通している。まだ、「ブーラン」とはっきり発話することができないY児の唱えは、「ブーダン」や「ブーリャン」であり、動きもかすかなものではあるが、Y児が養育者のモデルを取り込み、それを自ら表現しようと試みている様子が伺える。

**【事例 5-5】養育者の働きかけをきっかけに表現を始める②**

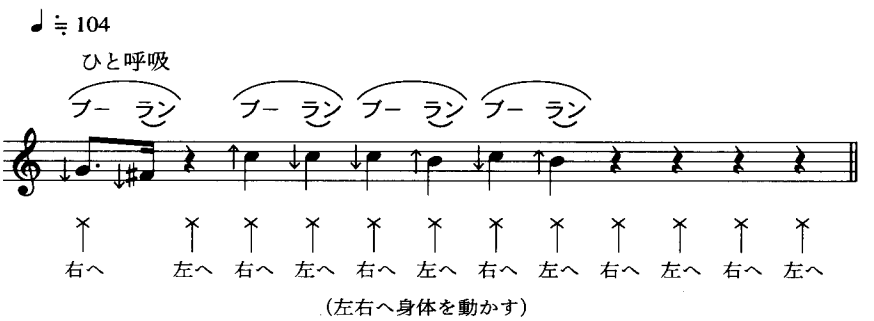
**ー養育者の言葉かけによって、「ブーラン、ブーラン」と発話するー**

**（生後 18 か 21 日）【1997 年 11 月 1 日】**

昼食後、養育者から「公園行こうね。ブーランあるかな？」と言葉をかけられたY児は、子ども椅子の背もたれを両手でつかみ、「ブーランブーラン」（譜例 5-5）と唱えながら身体を左右に揺らし始めた。養育者は、Y児が公園に行ってブランコに乗ることを楽しみにしていると感じ取り、「公園にブーランあったらいいね」と語りかけた。

【譜例 5-5】　　《Y児が揺れる動きと声》

採譜者：岡林典子




この場面での養育者は、事例 5-3（13 か月 9 日）と同様に、「ブーラン」をブランコの代名詞として用いている。Y児は、2 語発話期に入り有意味語の習得数も増え、以前よりも養育者の発話の意味内容を理解できるようになってきた。事例 5-3 では、養育者の発話に

対するＹ児の表現はみられなかったが、この場面では、養育者の「公園行こうね。ブーランあるかな？」という発話をきっかけにして、Ｙ児は公園のブランコを思い浮かべ、「ブーラン、ブーラン」と唱えながら身体を揺らし始めている。

その動きと言葉の関係は、ひと呼吸で「ブーラン」と発声し、それに同期させて左右への揺れの動作をまとめるというものであった。Ｙ児の一番初めの発声は、譜例 5-5 にみられるようにはずむ形であったが、次の１拍を休んで呼吸を整えた後、Ｙ児は擬音語の音（おん）のまとまりによって、「ブー・ラン」とひと呼吸を２分割して拍節的に唱え、左右への身体の揺れを同期させた。この動きと言葉の関係は、事例 5-1 でみられた養育者の働きかけ（譜例 5-1）と同じであり、Ｙ児がこれまでに養育者と共有してきた経験から取り込んだものをモデルとして、自ら表現することを試み始めたことが理解できる。

養育者は事例 5-4 において以前と同様の働きかけを試みているが、Ｙ児は１語発話期よりも言語の習得が進み、養育者の音楽的な働きかけをきっかけに、「ブーダン」さらには「ブーラン」と発話できるようになり、声に同期させて自らの身体を揺らすなどの音楽的行為もみられるようになった。これまでの分析を通じて確認されたＹ児と養育者の行為にみられる幾つかの共通点からは、Ｙ児が養育者の発話や唱え言葉をモデルとして音楽的な表現を試み始めたことが伺える。

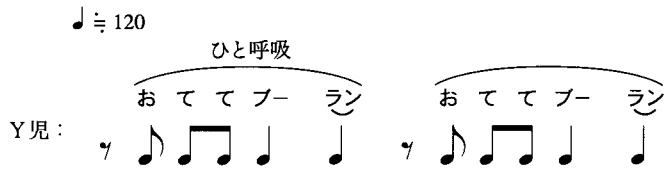
**【事例 5-6】自発的に２語を２音ずつ４拍（律拍）にまとめて、繰り返す**

**（生後 19 か月 15 日）【1997 年 11 月 26 日】**

Ｙ児は、ビーズの首飾りを右手首にかけて一人遊びをしている。揺れる首飾りを見て、「おてて、ブーラン」（譜例 5-6）と独り言を言う。片付けをしながら養育者が近づくと、Ｙ児は養育者の方に視線を向けて話しかけるように、再び「おてて、ブーラン」と発話する。養育者は、Ｙ児が「ほら、おててで首飾りがブーランしてるよ（揺れてるよ）」と訴えているように感じ取り、すぐに「『おてて、ブーラン』してるの？」とＹ児のリズミカルな表現を用いて言葉を返した（譜例 5-7）。

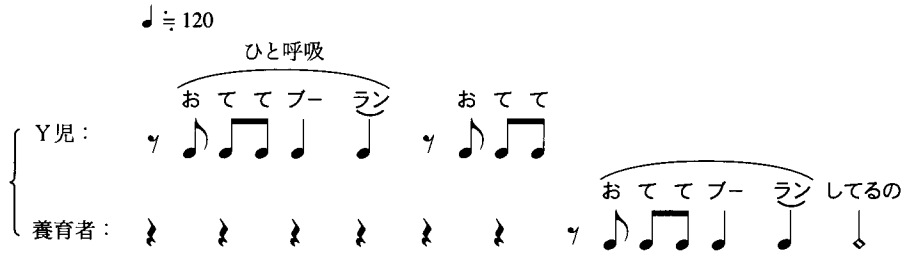
【譜例 5-6】　《Ｙ児のリズミカルな言語表現》

採譜者：岡林典子



【譜例 5-7】　《Y児と養育者のリズミカルな言語表現》

採譜者：岡林典子




「ブーラン」を用いたこの場面のY児の表現は、事例 5-3（13 か月）や事例 5-5（18 か月）で養育者が用いた代名詞的なものと同様で、言葉のリズムよりも意味を含んだ語として使われている。この事例がこれまでと大きく異なる点は、Y児が養育者からの働きかけなしに、自発的にこのような発話を始めたことである。19 か月に入り、Y児はさらに言語獲得が進み、2 語発話も安定しつつある。ここでは、「おてて」と「ブーラン」の 2 語をひと呼吸でまとめて発話した。助詞を含まずに、語と語をつなげて話す言語習得期の 2 語発話や 3 語発話は、通常の話し言葉に比べると、拍節的なリズムを有する傾向があり、リズミカルに聞こえてくる。このような拍節的な発話を、養育者がY児と同じリズムと呼吸の長さで繰り返したことから、リズミカルなやりとりが生まれた。

事例 5-5 までの時期では、養育者の音楽的な働きかけをきっかけにしてY児が音楽的な表現を始めるという養育者主導的なパターンであったが、19 か月に入ったこの場面では立場が逆転し、Y児のリズミカルな表現をきっかけに養育者が同様に応えるという風に、養育者との関係の中でY児が主導的立場に立つように変化してきたところに、Y児の音楽的な成長が伺える。

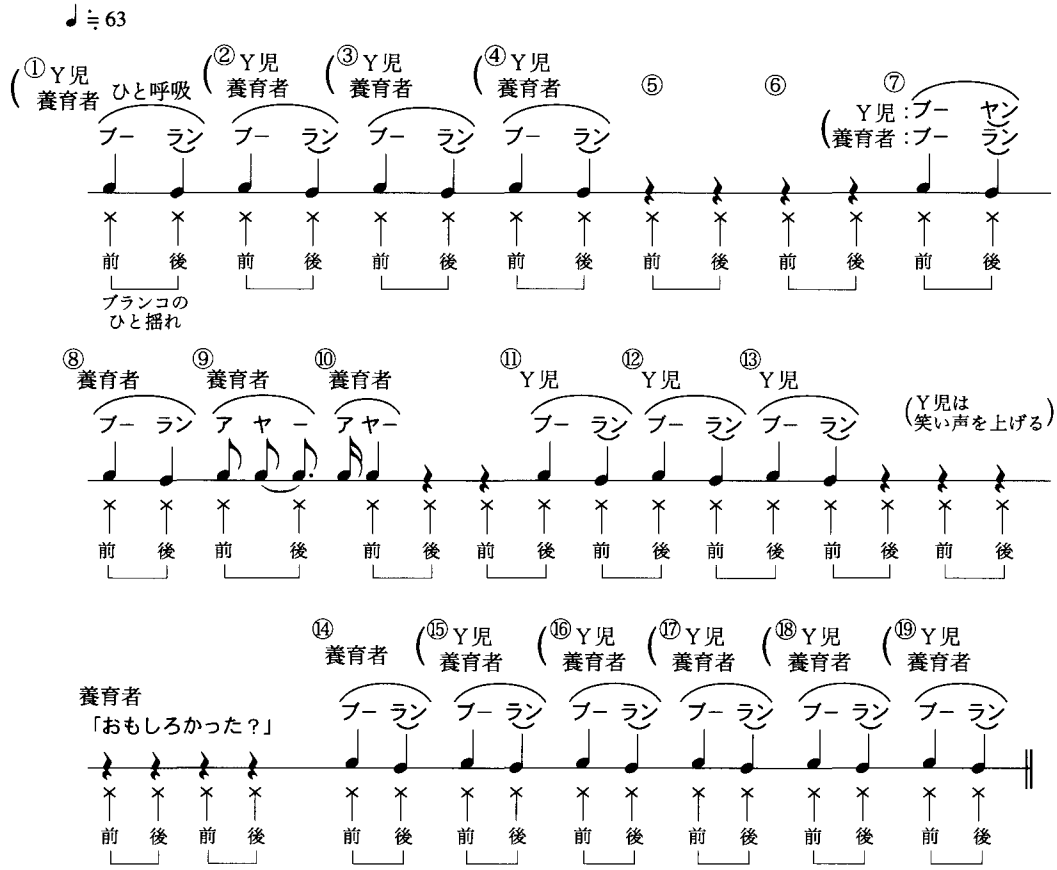
**【事例 5-7】養育者と声を合わせて「ブーラン、ブーラン」と唱える**

**（生後 22 か月 19 日）【1998 年 3 月 2 日】**

公園のブランコで、Y児は養育者の膝に向かい合わせで抱かれ、共に揺れながらどちらからともなく「ブーラン、ブーラン」と呼吸を合わせて、リズミカルに唱える（譜例 5-8）。養育者がブランコを止めると、Y児は「もっとブーランするの」と要求し、今度は養育者と同じ向きになって、先程と同様に揺れた。Y児が時折上げる笑い声に、養育者は、Y児が心から楽しんでいると感じとるとともに、自らもY児と声を合わせて共に揺れることが、とても心地よく感じられた。

【譜例 5-8】　《ブランコの揺れる動きとY児と養育者のリズミカル唱え》

採譜者：岡林典子




この場面では、これまでの観察を通じて初めて、Y児が養育者と呼吸を合わせ、声を合わせて、「ブーラン、ブーラン」と唱える姿が観察された。Y児は養育者と共に、ブランコの前後の揺れが作り出すひと揺れのまとまりに、「ブーラン」の語を同期させて、ひと呼吸で唱えた。ひと揺れの時間単位は、前後の揺れによって 2 分割され、2 拍の拍節が生まれる。また、「ブーラン」は、日本語の音（おん）のまとまりによって、「ブー」「ラン」と 2 分割され、ここにも 2 拍の拍節が生まれる。Y児と養育者は、ブランコに乗って、ひと揺れ 2 拍の拍節を身体で感じながら、これに言葉の拍節を同期させて唱えたのである。また、旋律は、事例 5-1, 5-2 でみられたような 2 度からなる 2 音旋律であった。Y児と養育者は、

このように共に「ブーラン、ブーラン」と声を合わせ、呼吸を合わせて唱えることによって、互いに気持ちを通わせ楽しい気分を共有していると思われる。このような行為の中に養育者と子どもの音楽的なコミュニケーションのあり方をみることができる。

また、Y児は、養育者が唱えることをやめても、自分ひとりで揺れのリズムに乗って同様に唱えることができるようになっている（譜例 5-8－⑪,⑫,⑬）。ここでは、Y児が擬音語を自分の身体の揺れに同期させて音楽的に唱えることを、養育者との音楽的なやりとりの経験を通じて身につけていることが確認できた。

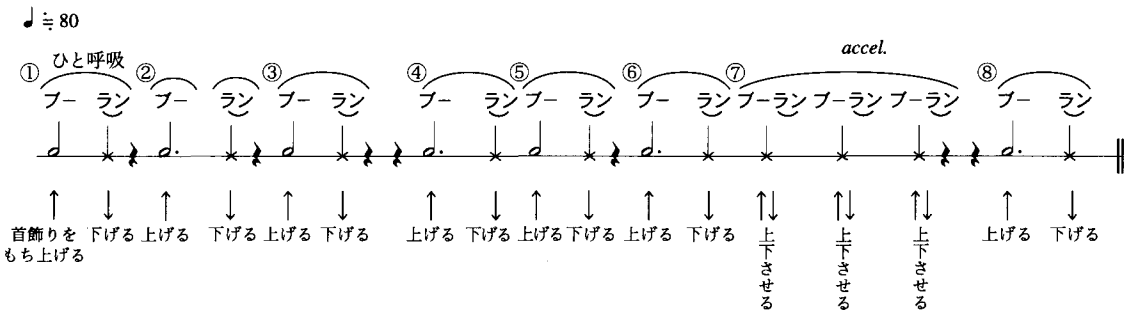
**【事例 5-8】首飾りを揺らしながら、自発的に「ブーラン、ブーラン」と唱える**

**（生後 23 か月 2 日）【1998 年 3 月 12 日**

ビーズの首飾りで遊んでいたY児は、それを両手でつかみ、「ブーラン」とゆっくり唱えながら、上下に動かし始める。気持ちの高揚と共に、声と動作は次第に速くなるが、最後に一度ゆっくり「ブーラン」と唱えて、落ち着く（譜例 5-9）。

【譜例 5-9】　　《首飾り揺らす動きとY児のリズミカル唱え》

採譜者：岡林典子




これまでに、自身の身体の揺れと擬音語「ブーラン、ブーラン」を同期させることを身につけたY児は、ここでは自分が動かす首飾りの動きに合わせて、自発的に「ブーラン、ブーラン」と唱え始めた。動作と発話の関係をみてみると、首飾りを上へ持ち上げる動きに合わせて、「ブー」と発声し、頂点で動きを止め、「ラン」の発声とともに首飾りを振り下ろす、という行為がひと呼吸でまとめられている。一回ごとに、Y児は深く息を吸い込み、ゆっくりしたテンポで動作と言葉を同期させて、ほぼ2度で唱えるというように音楽的な表現を作り出していた（譜例 5-9-①～⑤）。しかし、気分が高まるに従って、次第に動作と発話のテンポは増して行き（譜例 5-9-⑦）、頂点を過ぎると、Y児は再び深く息を吸い込んで呼吸を整え、ゆっくりと声と動作をまとめて（譜例 5-9-⑧）、この場面の一連

の行為を終結させた。

ここでみられたY児の音楽的な行為は、これまでに事例5-1や5-4で養育者が行った音楽的な行為（「ブーラン、ブーラン」の言葉のリズムと、Y児を揺らす動きを同期させて、ほぼ2度の音程で唱える）に通じるものであり、これらの経験を通して、Y児が、自ら動かす物の動きと擬音語「ブーラン、ブーラン」を同期させて音楽的に唱えることを学び、身につけていることが伺える。

**【事例5-9】2音旋律獲得の兆しがみられる ーほぼ2度の音程を保ちながら唱えるー**

**（生後23か月15日）【1998年3月26日】**

Y児の要求で、養育者はサルの人形を電灯の紐に結びつけた。大喜びのY児は寝転んで上を見上げて、「うわぁー、たかいたかい。おサルちゃん、ブーランちてるわ（してるわ）」と興奮した口調で話す。養育者は、「ほんとだ、おサルちゃん、ブーラーンってしてるね」と言葉を返し、人形を揺らしながら、「ブーラン、ブーラン」と唱え出す。Y児も養育者と呼吸を合わせ、声を合わせて、唱え始める。その後、養育者が唱えることを止めても、Y児は独力で人形の揺れに合わせて唱えることを試みた（譜例5-10）。

これまでにY児は、「ブーラン、ブーラン」を日本語の音（おん）のまとまりによって2分割して、2度の音程を保ちながら音楽的に唱えることや、それを自分の身体の揺れや自分で動かす物体の動きに同期させることを身につけてきたが、この場面では、さらに進んで、自分と離れた所で揺れる物体の動きと「ブーラン、ブーラン」を同期させて音楽的に唱えることを、養育者とのやりとりを通して学んでいる。

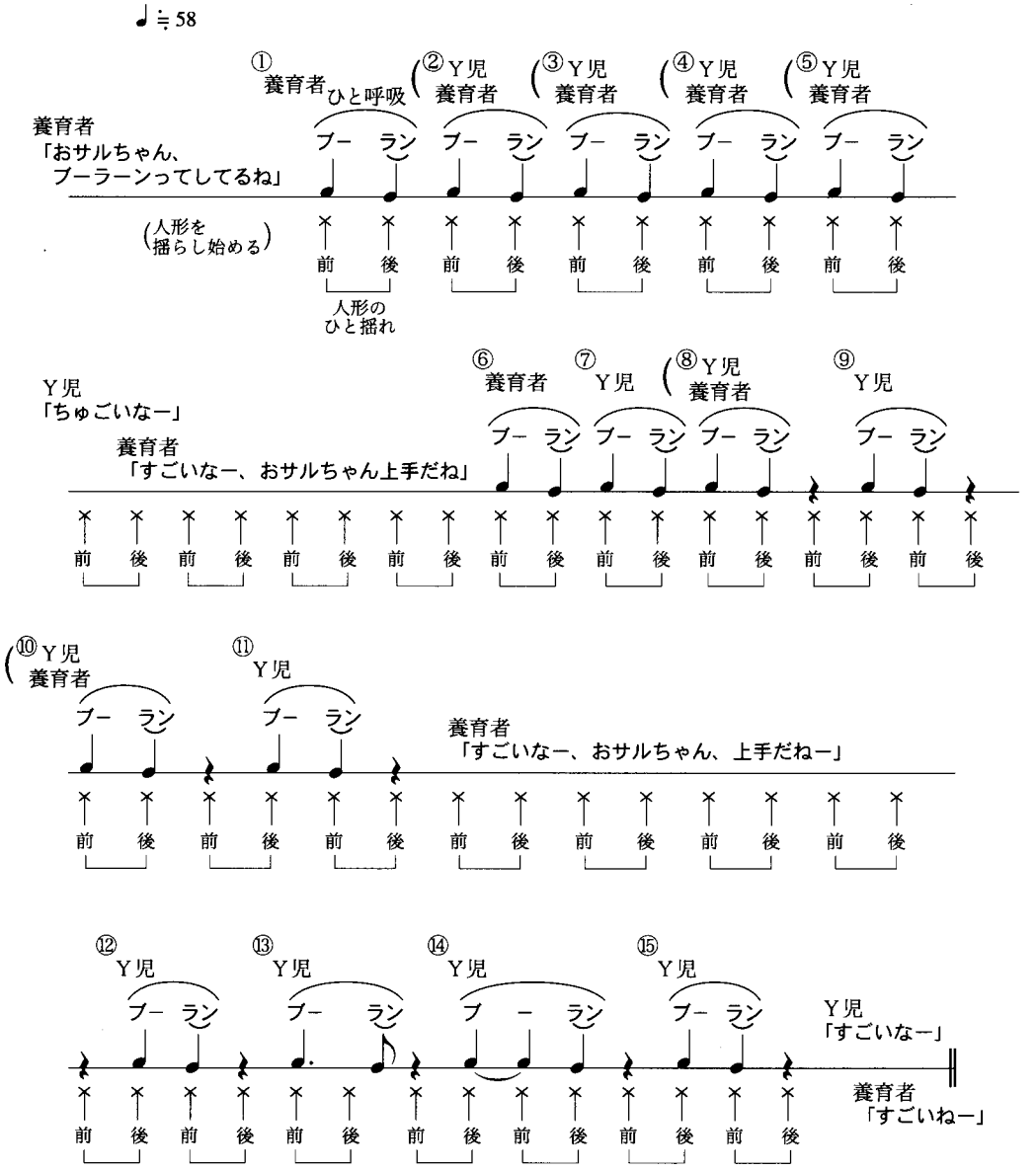
養育者は、初め、紐に結びつけた人形の動きに合わせて「ブーラン、ブーラン」と唱えたが（譜例5-10-①）、高い所で揺れる人形を見て大喜びをしているY児は、続く2回目から大きな声で養育者と呼吸を合わせて唱え始めた（譜例 10－②～⑤）。ここには、Y児が高まる気分を養育者と共有し、心を通わせようと試みる姿が現われているといえよう。共に呼吸を合わせて唱えるという音楽的な行為を通して、Y児と養育者は互いの気持ちを通わせ、音楽的な時間を共有しているのである。

このように養育者とのやりとりを続ける中で、Y児は次第に、養育者の声がなくても、人形の揺れのリズムと声を同期させることを学び（譜例5-10-⑥～⑪）、最後には、独力で言葉のリズムと人形の動きを同期させるために、呼吸の長さを調節している（譜例 5-10-⑫～⑮）。自分と離れた所にある物体の揺れは、自分の身体と違って、直接体感することができないので、言葉のリズムと物体の揺れを同期させることは、より困難であるかもしれ

ない。Y児が独力で試みる「ブーラン、ブーラン」の唱え（譜例 5-10-⑫～⑮）は、これまでのように安定した2拍で持続するのではなく、1回ごとに変化をみせ、Y児が懸命に人形の揺れと自らの声を同期させようと試みている様子が伺える。ここには、主体的な表現者へと変化しつつあるY児の姿を捉えることができる。

【譜例 5-10】　《首飾り揺らす動きとY児のリズミカル唱え》

採譜者：岡林典子




Y児は事例にみられたように、3 語～多語発話中期になると、養育者から動作や言葉による働きかけがなくても、自発的に揺れる首飾りや人形の動きに合わせて「ブーラン、ブ

ーラン」と唱えるようになり、養育者との関係において主導的立場に立った音楽的行為もみられるようになってきた。また、養育者と呼吸を合わせて「ブーラン、ブーラン」と唱えることができるようになり、自ら他者と気持ちを通わせて、気分を共有しようとする姿がみられる。このようなＹ児の行為の変化過程には、表現する主体となっていく音楽的成長過程が現れている。

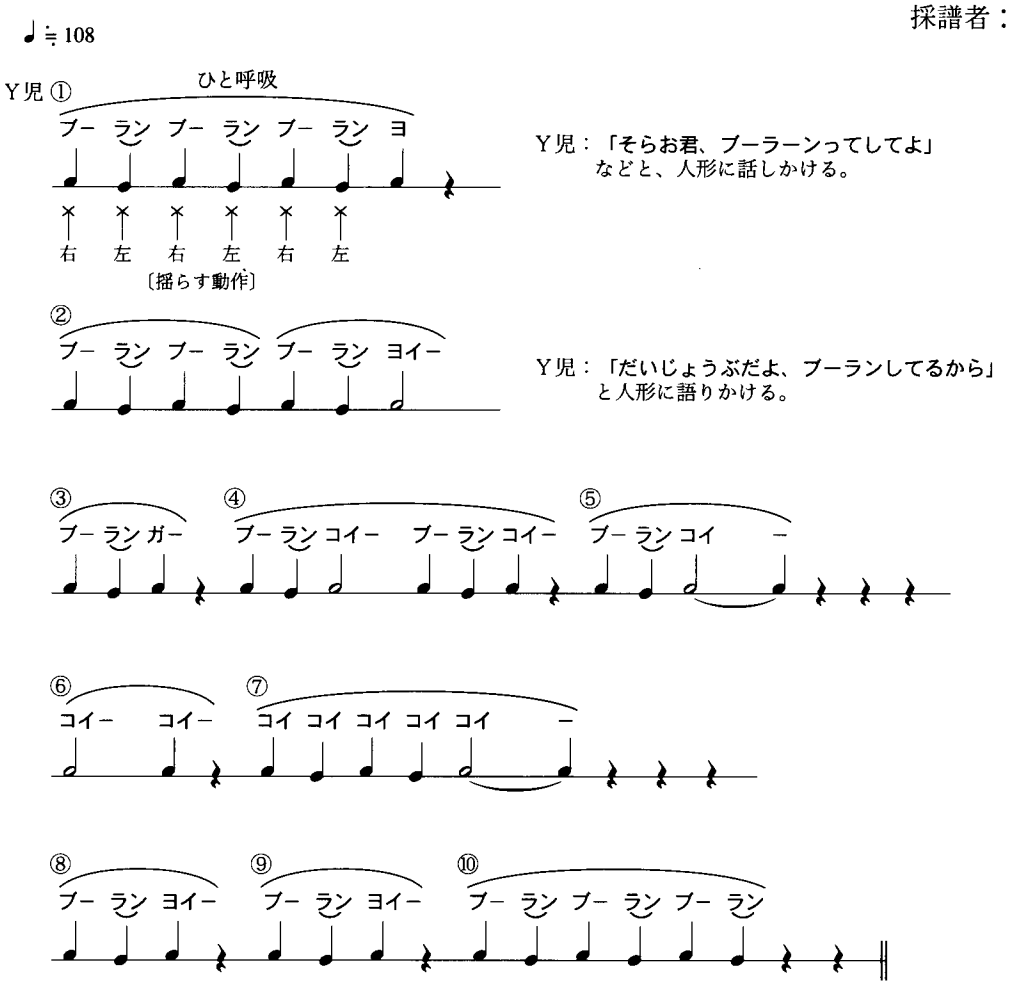
**【事例 5-10】2 音旋律を獲得する ーほぼ 2 度の音程を保ちながら唱えるー**

**（生後 27 か月 26 日）【1998 年 8 月 6 日】**

Ｙ児は以前からとても欲しかった公園セットのブロックを養育者に買ってもらう。帰宅すると、さっそくブロック遊びを始めた。幼児番組のキャラクター人形に話しかけながら、それらを順番にブランコ型のブロックに乗せて揺らし、「ブーラン・ヨイー…ブーラン・コイー…」などと唱えて、夢中になって遊んでいる。（譜例 5-11）

【譜例 5-11】　《ブロックを揺らす動きとＹ児のリズミカル唱え》

採譜者：岡林典子



Y児は欲しかったおもちゃを手にして、上機嫌である。ブランコ型のブロックに人形を乗せて、自ら揺らすブランコの動きと言葉のリズムを同期させ、2 度の音程からなる安定した 2 音旋律にのせて唱え始めた（譜例 5-11-①）。この音楽的な行為は、事例 5-2 で養育者が働きかけたもの（0 歳 8 か月，譜例 5-2-②）と同じである。Y児は 2 歳を過ぎ、身体諸器官の発達に伴って呼吸周期も長くなり、ひと呼吸でこの一連の行為をまとめた。

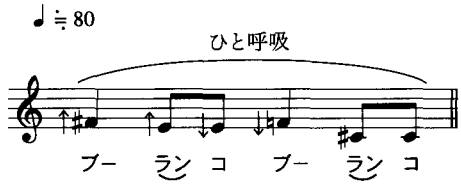
その後、Y児は「ブーラン・ヨイ」（譜例 5-11-②,⑧,⑨）、「ブーラン・コイ」（譜例 5-11-④,⑤）、「コイコイコイ」（譜例 5-11-⑥,⑦）など、言葉を入れ替えて、音楽的に安定した 2 音旋律にのせて唱え続け、2 音旋律を獲得したことが確認できた。

**【事例 5-11】3 音旋律獲得の兆しがみられる**

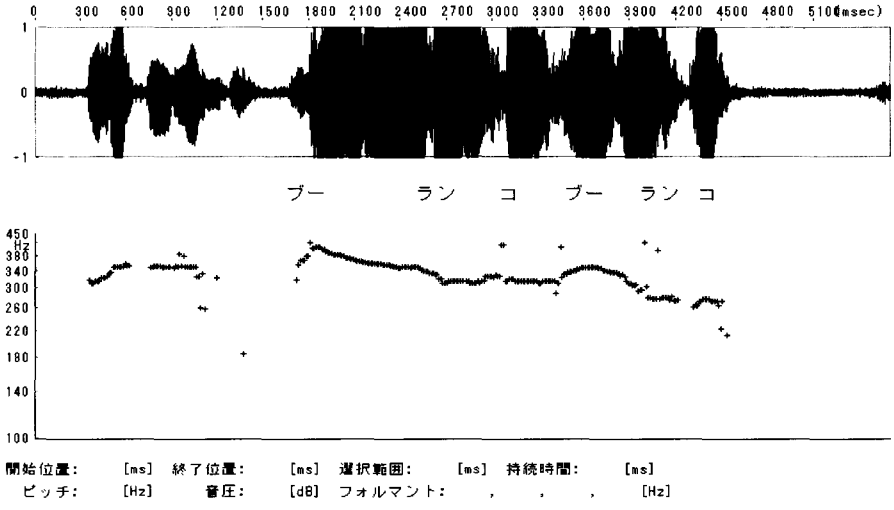
**（生後 26 か月 9 日）【1998 年 6 月 20 日】**

Y児はぬいぐるみを揺らしながら、「あっ、ブーランコちてるわ（「しているわ」の意味）」という。養育者は、「じゃあ、今度はクマちゃんにしてあげて」と誘いかける。Y児は、「ブーランコ、ブーランコ」（譜例 5-12）と繰り返し唱え始める。

【譜例 5-12】　《Y児による「ブーランコ、ブーランコ」の表現》




**【図 5-2】Y児の「ブーランコ、ブーランコ」のピッチ曲線と音声波形**



この「ブーランコ、ブーランコ」という表現は、Y児にはじめたみられたものである。この表現は、生後23か月頃からY児が自発的に「ブーラン、ブーラン」と唱えるようになったので、養育者の留守に保育をしている沖永良部島出身のベビーシッターが、このように唱えかけたことから、Y児が取り込んだものである。この唱えの旋律は、3 音旋律でできている。Y児はこれまでに獲得した2音旋律をもとに、3音旋律らしく聞こえる表現を試みている。そこで、音声分析を行い、ピッチ曲線と音声波形を図5-2に表した。また、それに基づいて譜面化したものが、譜例5-12である。図5-2からは、動態レベルでY児が2度音程と4度音程を歌い分けようと試みていることがみてとれる。譜面化してみると、確定的ではないが、Y児がほぼ3音旋律をなぞって歌っていることが読みとれる。

## 第3節　本章のまとめ

本章では、抑揚的な日本語として、擬音語「ブーラン、ブーラン」に焦点をあて、Y児が抑揚的な擬音語を習得していく過程において、養育者との間にどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示すとともに、Y児が日本語に基づく旋律感覚をどのような過程で、またどのくらいの月齢から身につけていくのかを事例により、検討した。以下に、結果から得られた知見をまとめる。

擬音語「ブーラン、ブーラン」の習得過程にみられたように、Y児は養育者との音楽的なやりとりによって、表現する主体として音楽的に育ちつつある。Y児が表現する主体として変化していく過程には、①養育者からの働きかけを受けとめる→②養育者からの働きかけをきっかけに表現を始める→③働きかけがなくても、自発的に表現を始める→④これまでの経験を基盤として、自分なりの表現を始めるという4つの段階が認められた。それは、言葉をもたない前言語期に、養育者からの音楽的な働きかけを受けとめることに始まり、言語習得の状況に応じて、1語発話期には、養育者の働きかけをきっかけに、「ブー、ダン、ブッ」と拍節的に唱え始める、やがて2語発話期には自分の身体を言葉のリズムに同期させて揺らすなどの行為を身につけることを経て、自発的に揺れる物体の動きに合わせて唱えたり、養育者との関係において主導的立場に立った音楽的行為をみせるようになるという過程であった。

また、伝統的な2音旋律は、3語～多語発話期になって獲得され、その後3音旋律獲得の兆しが現れた。さらに、拍節感覚の方が旋律感覚よりも早期に身につくという順序性が認められた。

# 第6章　遊ばせうたの習得過程にみられる音楽的行為
## ～遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》に関わる事例から～

4章と5章では、拍節的な日本語と抑揚的な日本語に焦点を当て、養育者とY児の間にどのような音楽的やりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児の音楽的行為の発達的な変化の過程を捉えて分析を行い、日本語を基にした拍節感覚の方が旋律感覚よりも先行し、早期に獲得されることが認められた。そこで、本章では、日本語に基づくわらべ歌や遊ばせうたの習得過程において、先に認められた順序性がどのように現れてくるのか、また相手と呼吸を合わせる行為がいつごろ発現してくるのかを確かめるために、遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》に焦点を当て、養育者とY児の間に「遊ばせうた」を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示す。また、Y児が「遊ばせうた」を習得していく過程にみられる音楽的な発達変化の特徴を、話し言葉や運動動作の発達との関わりを中心に明らかにする。そして、そこから得られた知見を、乳幼児の音楽的な成長の筋道を明らかにするための一助としたい。

### 第1節　遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》の習得過程を分析対象とする理由

幼い子どもは、養育者や保育者と触れ合って遊ぶことを好む。言語獲得以前の乳児でも、信頼できる大人から唱えうたのリズムに合わせて手のひらや頬をつつかれたり、「ポン」という声とともに身体を軽くたたかれたりすると、声をたてて笑ったり、もう一回してほしいと手を出したりする。このような大人と子どもが触れ合う遊びについて、永田は「『いないない……バー』という幼な子に対する触れ合いの遊び、『たかいたかい……』と体を高く抱きあげたり、『ぶーらんこぶーらんこ』と体をゆらしてやる遊び、そして子どもが歩きはじめるころは『あんよはじょうず』と手を打ってのはげましなど、これらは子どもに対する大人の心からのうたであり、〝遊ばせうた〟と呼ぶことができます」と述べている[1]。また、岩井は子守うたを眠らせうた、遊ばせうた、子守娘の境遇を歌ったうたの3つに分類し、子守うたの中に「遊ばせうた」を位置づけている[2]。

本章では、音声やことば、及び身体の動きやスキンシップなどを用いて、大人が幼い子ど

---

[1] 永田栄一　1981『日本のわらべうた遊び35』音楽之友社 p. 7

[2] 岩井正浩 1987『わらべうた/その伝承と創造』音楽之友社　pp. 265-275

もに働きかけ、歌いかけるうたを「遊ばせうた」と呼ぶことにする。遊ばせうたには、《だるまさん》のように大人が子どもにやってみせたり、子どもの手を取って一緒にやってみるものや、《一本橋こちょこちょ》のように大人から子どもに仕掛けるもの、あるいは膝に乗せてゆらしたり、ドスンと落としたりするものなどがある。このような遊ばせうたには、音楽的な要素として、言葉を拍節的、旋律的に唱えることや、音声と動作を拍節的に組み合わせること、また相手と呼吸を合わせて動作をタイミングよく同期させることなどが多様に内包されている。こうした遊ばせうたを、日々の生活の中で乳児や低年齢の幼児が信頼できる大人と繰り返し経験し、やりとりする過程からは、子どもの音楽的な成長を捉えるための手がかりが得られるのではないかと考えられる。

ところで、幼い子どもが動作を伴う遊びうたを習得する過程を観察したものとして、保育園で子どもたちに好まれている《げんこつやまのたぬきさん》を用いて1～5歳児の観察を行った遠藤の研究が挙げられる[3]。遠藤は観察結果より、1歳児についてはジャンケンをする最後のフレーズ「またあした」の「た」の部分で音声と手を出す動作の一致がみられたことを挙げている。しかし、観察に際して1歳児11人中5人が何も表現しなかったので、動き・リズム・歌詞についての詳細な分析を省いたこと、さらに手遊びによって導かれる表情についても大きな変化が見られなかったため分析対象からはずしたことが報告されており、言語獲得期にある1歳児が、手遊びうたを通してどのように音楽的表現を試みたかについての過程は明らかにされていない。1歳という年齢を考慮して、観察を集団ではなく個別にしたり、大人が働きかける遊ばせうたを用いるなどしてみると異なった結果が得られたかもしれない。

また、菅井は3～6歳の聴覚障害児13名を対象に《げんこつやまのたぬきさん》の遊びの形成過程を分析した結果、うたの獲得に先立って、身ぶり動作が獲得されることを明らかにしている[4]。しかし、0～2歳の低年齢の子どもについては分析がなされてはおらず、言語獲得期にある乳幼児が手遊びを習得していく過程については検討の余地が残されている。

これらの先行研究の知見から乳幼児の音楽的成長に関して得られる手がかりは、動作のついた手遊びうたの習得は、身振り動作の獲得がうたの獲得よりも先行するという発達的順序性が認められることである。他の研究においても、このような順序性は指摘されるところで

---

[3] 遠藤 晶 1998「幼児の手遊びにおける音楽的発達について」『保育学研究』第36巻第1号 日本保育学会 pp. 36-43

[4] 菅井邦明 1986「音声言語行動の形成条件」『特殊教育学研究』24(2) 日本特殊教育学会 pp. 10-19

ある。そこで、本章では、言語獲得期の子どもが、声や言葉や動作をどのように音楽的に組織づけて、大人が働きかける「遊ばせうた」を習得していくのかを知るために、養育者が子どもとコミュニケーションをとろうとして働きかける「遊ばせうた」に焦点を当て、養育者と子どもの間に「遊ばせうた」を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示す。さらに、子どもが「遊ばせうた」を習得していく過程にみられる音楽的な発達変化の特徴を、話し言葉の発達との関わりを中心に明らかにすることを目的とする。

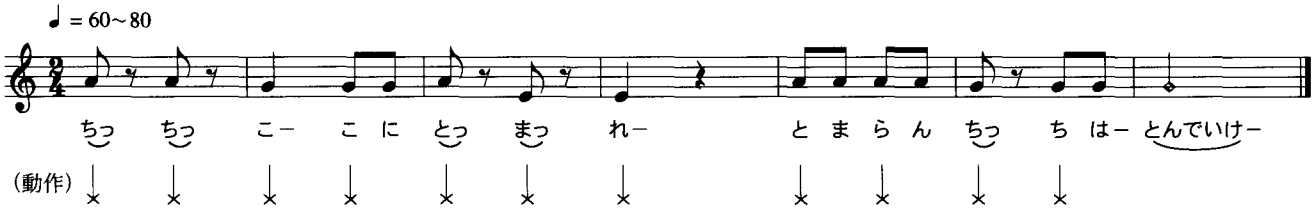
尚、「遊ばせうた」の中でも《チッチッ、こーこにとまれ》に焦点を当てる理由の1つは、このうたが日本語に基づく伝統的な旋律性とリズムを有しており、Y児の日本語の獲得過程と音楽的行為との関わりが捉えやすいと思われることである。2つには、動作を伴ったうたであるので、動作と言葉の関わりから拍節感覚の獲得過程が捉えやすいと思われることである。3つには、観察期間を通じて、Y児と養育者の間に断続的にこの遊ばせうたを用いたやりとりが観察されたことである。

### ◆遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》について

このうたは、筆者の友人が自分の0歳の子どもに歌いかけていたのを、見て覚えたものである。「チッチッ、こーこに、とまれー、とまらん、チッチはー」と唱える言葉の拍節に同期させて、大人が人差し指で、子どもの手のひらをつつき、最後に「とんでいけ～」と両者がバンザイをして遊ぶものである（譜例6-1）。

【譜例6-1】　《ちっちっ、こーこにとまれ》

採譜：岡林典子




### ◆Y児の音楽的行為の変化過程

「遊ばせうた」を用いた養育者とY児の音楽的なやりとりにおいて、Y児の音楽的行為には話し言葉の発達に沿って、次第に特徴的な変化がみられるようになった。次のⅠ～Ⅶは、観察期間中に捉えられた音楽的行為の特徴を、それが出現した時期とともに順を追って示したものである。

Ⅰ）養育者の働きかけを受け止め、表情や声で反応する ： 7か月～（前言語期）

Ⅱ）養育者の働きかけに、動作の模倣や音声で参加し始める： 13か月～（1語発話前期）

Ⅲ）自発的に部分的な表現を始める： 15か月前半～（1語発話後期）

Ⅳ）音楽的にさまざまな展開をみせる： 15か月後半～（1語発話後期）

Ⅴ）養育者のうたに、部分的に言葉を合わせて動作を同期させる： 19か月～（2語発話期）

Ⅵ）言葉と動作を同期させて、うた全体を通す： 21か月～（3語～多語発話前期）

Ⅶ）2音旋律を獲得する： 26か月～（3語～多語発話中期）

「遊ばせうた」の習得に関して、Y児の音楽的行為は上記のような変化の過程を示した。それぞれの特徴に基づくと、Ⅰ）は養育者の働きかけを受容して反応する「受容期」、Ⅱ）は養育者の働きかけを模倣し始める「模倣期」、Ⅲ）は自立して部分的に表現をはじめる「自立期」、Ⅳ）はさまざまに音楽的な萌芽をみせ始める「音楽的萌芽期」、Ⅴ）は部分的に言葉で表現しはじめる「音楽的展開期」、Ⅵ）は音程を保って歌う段階にはないが、歌詞とリズミカルな動作を身につけて、うた全体を通すことができ、一応の完成をみる「第1次音楽的完成期」、Ⅶ）は2音旋律を保ってうた全体を通すことができる「第2次音楽的完成期」に、区分することができる。

次節では、Ⅰ）～Ⅶ）に区分したそれぞれの時期にみられる特徴的な事例について、分析と考察を行う。

## 第2節　事例の分析と考察

前節では観察期間中に捉えられたY児の音楽的行為の特徴を、順を追って捉え、変化の過程を示した。そして、それぞれの特徴に基づいて、7つの時期を設定した。本節では、各時期に特徴的な事例を抽出し、養育者とY児の間に遊ばせうたを用いてどのような音楽的なやりとりがなされているのか、その実際を示す。また、話し言葉の獲得状況に沿ってY児の音楽的行為の分析、考察を進める。尚、観察期間中には、他にも分析事例と同様の内容をもつ事例がみられたが、ここでは各内容が顕著に現れているものを取り上げた。

### 第Ⅰ期）受容期：養育者の働きかけを受容して反応する

**【事例6-1】養育者の働きかけを受け止め、声や表情で反応する**

**ー最後の部分で笑顔になるー　　（生後11か月27日）【1997年4月7日】**

夕食後、Y児は養育者に絵本を読んでもらったり、おもちゃで遊んだりしている。養育者は絵

本を読み終えると、Y児の手のひらをつつきながら「チッチッ、こーこに…」と唱えかけた。最後の「とんでいけ～」の部分で大きな抑揚をつけて発声しY児の両腕を持ってバンザイをさせる。Y児は「エ～」と声を出して笑顔をみせた。

最後の「とんでいけ～」のところで養育者からバンザイをしてもらうと、Y児は発声しながら笑顔をみせるという反応をした。この遊ばせうたを用いてY児と養育者が遊ぶ場面は、生後7か月時から数回観察され、これまでY児は微笑むという反応をみせてきた。発声を伴なって微笑むという反応は今回が始めてであった。

### 第Ⅱ期）模倣期：養育者の働きかけを模倣し始める

**【事例6-2】養育者の働きかけに、動作の模倣や音声で参加し始める①**

**ー養育者の動作を真似して、自分の足を指でつつくー（生後13か月21日）【1997年6月1日】**

昼食後ゆったりと休憩し、Y児は絵本をみたり、おもちゃで遊んだりしている。養育者はY児に近づき、1度目はY児の手に、2度目は「さあ、今度は足にいくよ」と右足の裏を人差し指で「チッチッ…」と唱えながらつつく。Y児は途中から養育者と同じように左手の人差し指を立てて、自分の足をつつく。養育者はY児が動作を真似て遊びに参加してきたことを嬉しく思い、「そうそう」と声をかける。最後のフレーズ「とまらんチッチはー…（間をおいて）…とんでいけー」で養育者が大きな抑揚をつけて手を広げると、Y児は足を触ったまま「ウェ～」と発声した。

**〔写真5-1〕養育者とともに遊ぶ①**

**（生後13か月）**

**〔写真5-2〕養育者とともに遊ぶ②**

**（生後13か月）**

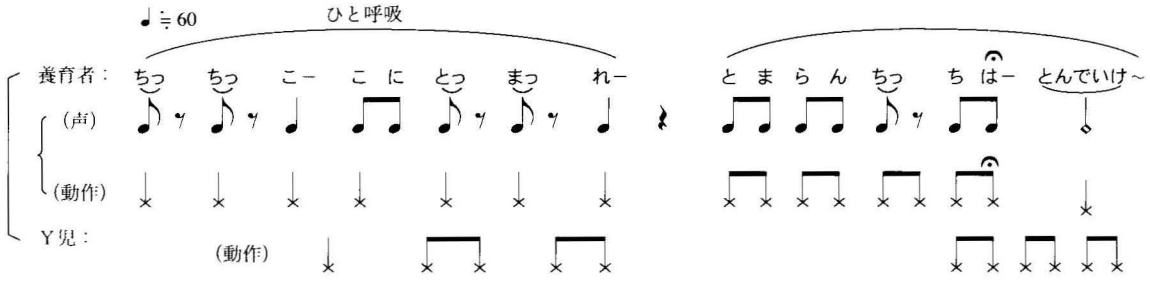
**【事例 6-3】養育者の働きかけに、動作の模倣や音声で参加し始める②**

**ー人差し指を立てて養育者の動作を真似るー　（生後 14 か月 16 日）【1997 年 6 月 27 日】**

おもちゃの箱で遊んでいるＹ児に「マリオってどこに書いてある？」と養育者が尋ねると、Ｙ児は「ココ」と言ってその部分を指差す。Ｙ児の言語理解が進んでいることが確認できた養育者は、嬉しそうに「そうやったねェ」と声をかける。養育者が箱を両手でつつきながら「チッチッ…」と唱え出すと、向かい合って座っていたＹ児も養育者の動作を見て、同じ様に両手の人差し指を立てて箱の方に向け、空中で振る。しかし、養育者が歌ううたの拍節には同期していない。

【譜例 6-2】

作成：岡林典子



**〔写真 5-3〕養育者とともに遊ぶ③（生後 14 か月）**

これらの場面では、Ｙ児が養育者の動作を真似たり、僅かに発声を伴って遊びに参加してくる様子がみられる。言語の理解も少しずつ進み、受容期に比べると遊びにおけるコミュニケーションの深まりが感じられる時期である。Ｙ児の言語獲得状況は一語発話の時期であり、養育者が「ぞうさん」と言うと「ジョウ」、「よーいしょ」と声をかけると「ヨーイエッ」などと、動作の模倣だけでなく言語面における模倣的発声も盛んである。

## 第Ⅲ期）自立期：自発的な部分表現が出現する

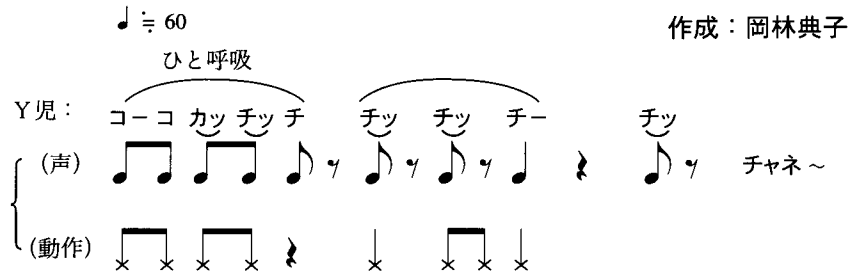
**【事例 6-4】喃語的音声と動作が同期する**

**（生後 15 か月 10 日）【1997 年 7 月 21 日】**

夕方、Ｙ児は一人で絵本を見ながら喃語的音声を発していたが、次第にリズミカルに「コーコーカッチッチ」と唱えて、左手を右の指数本でつつき始める。続けて「チッチッチー、チッ…チ

ャネ～」と遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》の初めの部分だと感じとれる音声表現を自発的に行なった。

【譜例 6-3】




この時期のY児には、指示的な意味は持たないが話をしているような、談話的喃語が非常に盛んに観察されていた。また、その中には「プツプツ」「ジャー」「チュウチュウ」などの擬態語が多く含まれていた。乳幼児の言語発達を研究している村田孝次によると、子どもの初期談話の中には擬態語や擬声語が多数含まれるという[5]。ちなみに、この遊ばせうたの始まりは「チッチッ」という擬声語である。この擬声語の部分からY児が自発的に音声と動作を同期させて表現を始めたことからは、Y児の言語獲得状況が、一般的な子どもの初期談話の特徴を有しているものと考えられる。また、言語発達の側面が音楽的表現に反映されているとも考えられる。

また、Y児の表現は、一呼吸ごとに「コーコーカッチッチッ」や「チッチッチー」とまとめられていたが、うたの始まりの部分だと思われる「チッチッチー」の表現の方が、より拍節的にはっきりと唱えられていた。さらに譜例 6-3 からは、一音節に一動作を同期させようとする傾向がみてとれる。小泉文夫は日本語の音楽的特徴の 1 つとして、シラブルの等拍性を挙げている[6]。ここでのY児の表現は、日本語の獲得過程にある一語発話期の子どもが、日本語の音楽的特徴をもとにした音楽的行為を身につけつつあることを示唆していよう。

### 第Ⅳ期）音楽的萌芽期：表現にさまざまな音楽的萌芽がみられる

**【事例 6-5】表現にさまざまな音楽的萌芽がみられる**

**①動作がはっきりした拍節を刻むようになり、養育者のうたの前半部に動作を同期させる**

---

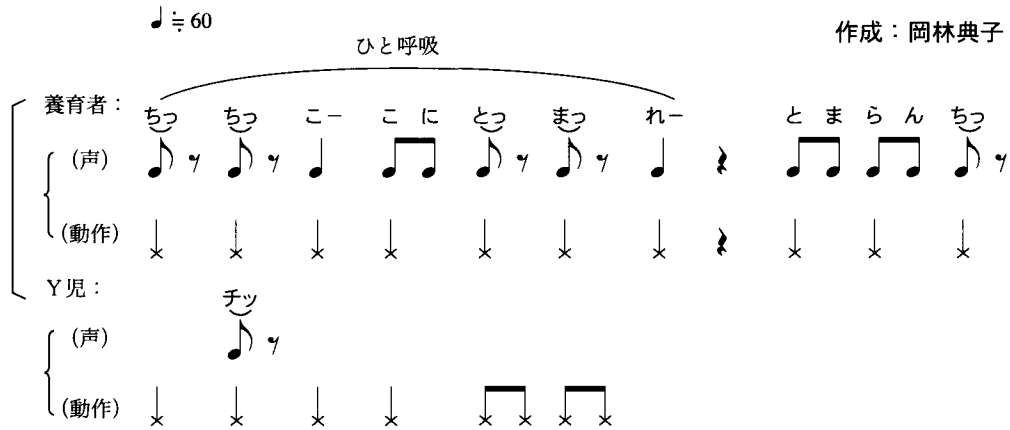
5 村田孝次 1968 『幼児の言語発達』培風館

6 小泉文夫 1971 『音楽の根源にあるもの』 平凡社 pp150-171

**（生後 15 か月 25 日）【1997 年 8 月 5 日】**

お昼過ぎに目覚めたＹ児はとても機嫌がよい。布団で寝転んでいる養育者の上に馬乗りになったり、「キャ～」といってころがったりしている。「チッチッチ」というＹ児の発声に、養育者は寝転んだまま自分の手のひらをつつく動作をして、「一緒にやろう」と誘う。Ｙ児はニコニコしながら養育者と動作を合わせて自分の手のひらをつつき、うたのほぼ半分まで動作を同期させることができた。（譜例 6-4）

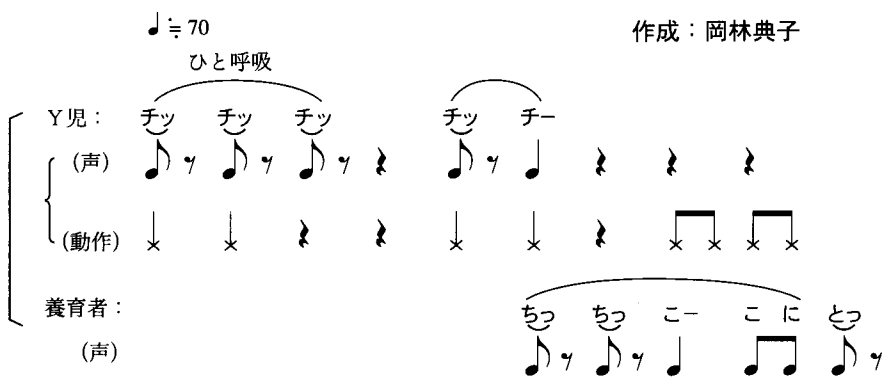
【譜例 6-4】




**②初めてＹ児から誘う**

Ｙ児と何度か《チッチッ》を楽しんだ後、養育者は休憩をする。すると、Ｙ児が布団の上に寝転び、目の前の養育者に誘いかけるように「チッチッチ」と言いながら両足を上下させる。さらに声と動作を同期させて左手で右手をつつく。Ｙ児の表現に誘われて養育者が唱えはじめると、Ｙ児は照れた様子を見せて止めてしまう（譜例 6-5）。

【譜例 6-5】

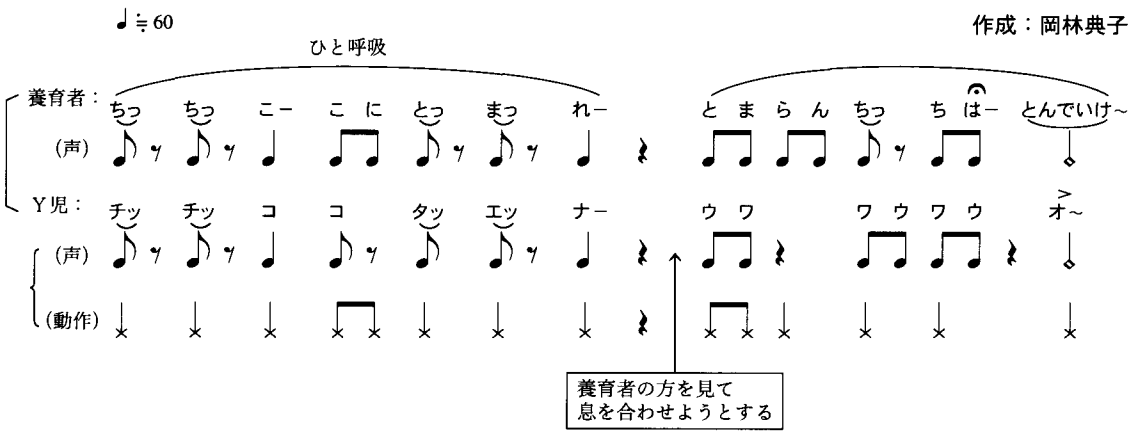


この場面のＹ児は、言葉の理解度がさらに進み、養育者の「一緒にやろう」という言葉による誘いかけで遊びに参加できるようになっている。また、手のひらをつつく動作は以前よりも拍節的に表現されており、養育者のうたの前半部を通して同期できた（譜例 6-5）。さらに譜例 6-5 からは、1 音節に 1 動作を同期させようとする表現が、自立期（事例 6-4：15 か月 20 日、譜例 6-3）よりも顕著になっていることがみてとれる。また新たにＹ児から養育者を誘い込むような行為もみられるようになった。

**【事例 6-6-①】呼吸を合わせようと、視線を向ける（生後 16 か月 4 日）【1997 年 8 月 15 日】**

夏休みで祖母宅に来ているＹ児は、一人で積み木遊びをしていた。積み木を持った手で太ももをつつく行為を見て、養育者が「チッチッ…」と唱えかけると、Ｙ児は笑顔で参加してくる。喃語的発声を養育者の唱えるうたのほぼ全体に伴いながら、大きな動作を同期させる。フレーズの切れ目では、呼吸を合わせようとして養育者に視線を向ける。そうして、Ｙ児と養育者の声や動作が心地よく同期した。（譜例 6-6）

【譜例 6-6】

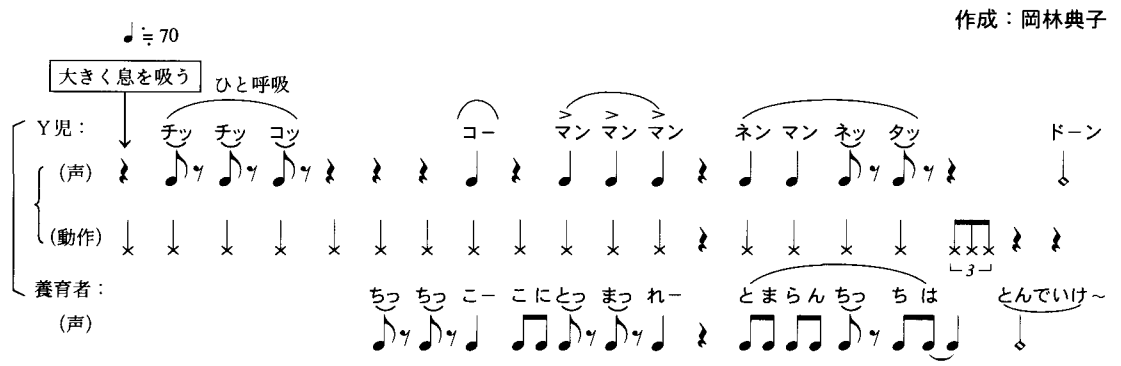



**【事例 6-6-②】遊ばせうた全体に喃語的音声と動作を同期させる**

**（生後 16 か月 4 日）【1997 年 8 月 15 日】**

「もう一回できる？」という養育者の言葉かけに、Ｙ児は大きく息を吸って両手を構え、自発的に唱え始めた。「チッコッコッ」でＹ児の唱えが止まってしまったので、養育者が続けると、Ｙ児の動作が次第に大きくなり、力強く手を打ち始める。「とんでいけ～」のところでは、気分の高揚がピークに達したのか、「ドーン」と大きな抑揚で力強く発声した。（譜例 6-7）

【譜例 6-7】




この場面では、さらに音楽的な展開が顕著に現れている。その1つは、うたのほぼ全体を通して喃語的音声と動作が同期している点である。事例 6-4（譜例 6-3）や事例 6-5-①(譜例 6-4)でも部分的に声と動作の同期がみられたが、ここではそれらの行為がさらに長く持続するようになっている。また音楽的な萌芽の2つ目の特徴は、Y児に呼吸を合わせようとする意識と行為が芽生えてきたことである。人は呼吸を手がかりにして、他者のテンポと自分のテンポをすり合わせ身体的コミュニケーションを行なうが、コミュニケーションだけでなく、音楽的行為にとっても呼吸を合わせることは基本的な事柄である。Y児が養育者に視線を向け、呼吸を合わせて動作のタイミングをはかる行為や、養育者の言葉をきっかけとして、大きく息を吸って両手を構える行為は、音楽的にみた萌芽であるといえるだろう。

また、この時期の養育者の働きかけには、Y児の身体に触れずにうただけを唱えかけることや、「一緒にやろう」「もう一回できる？」などの言葉で誘うこと、また途切れてしまったY児の唱えうたの流れを、切らないように続けて歌うなどの変化がみられる。これには、Y児の言語理解力が高まったことや、Y児が以前よりも自立して、より発展した音楽的表現を行なうようになったことなどが関係している。

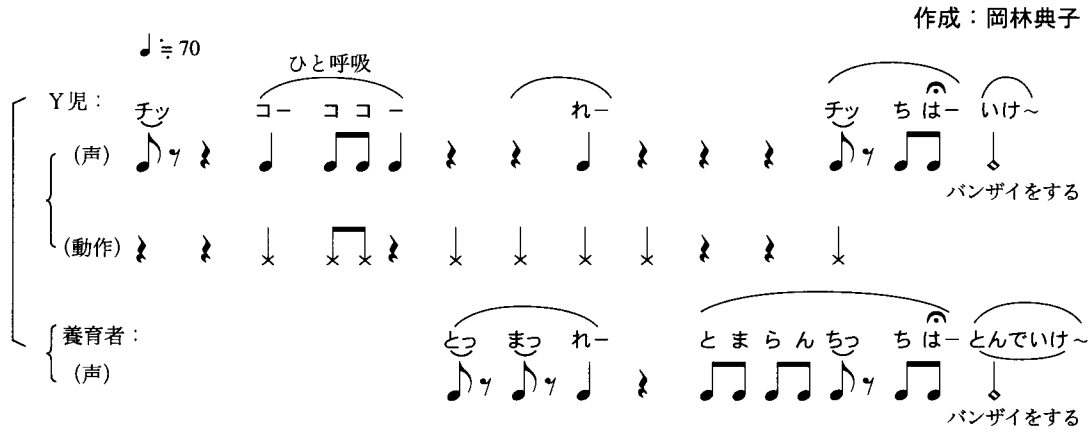
## 第Ⅴ期）音楽的展開期：部分的に言葉を唱えて、動作と同期させる

**【事例 6-7】養育者のうたに、部分的に言葉を合わせる　(19 か月 2 日)【1997 年 11 月 13 日】**

午前 10 時ごろ、家事がひと段落した養育者は、Y児と遊び始める。Y児はしばらく養育者の膝に抱かれた後、降りて自分の手のひらをつつきながら「チッ、コーココー…」と唱えて止まってしまう。養育者が続けて「とっまっ、れー…」と唱えると、Y児は手の甲を人差し指でつつきな

がら、養育者のうたに合わせて、「れー、…チッチはー…、いけー」と部分的に発声し、最後に笑いながらバンザイの動作を同期させる。(譜例 6-8)

【譜例 6-8】




この場面では、言葉による表現が部分的にみられるようになっている。Y児には 18 か月から、「モモ、オチタ（桃のおもちゃが落ちた)」「ブーラン、コウエンデ（公園でブランコに乗りたい)」などの 2 語発話が出現してきている。1 語発話期には、Y児の音楽的表現は喃語的音声によるものだったが、2 語発話期に入ると、遊ばせうたの表現に言語が挿入され始めた。このことから判断すると、言語獲得の進行状況が、Y児の遊ばせうたに関わる音楽的行為の変化に少なからず反映されているものと思われる。また譜例 6-8 からは、フレーズの終わりの部分に言語が挿入されていることがみてとれる。フレーズの切れ目は養育者の呼吸の切れ目である。つまり、Y児は養育者の呼吸に合わせながら、言葉を音楽的にまとめようとしていると考えられる。

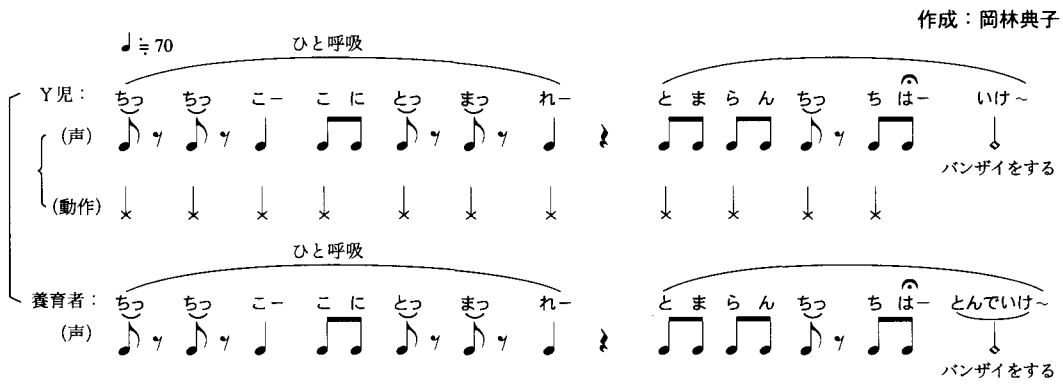
### 第Ⅵ期）第 1 次音楽的完成期：言葉と動作を同期させて、うた全体を通す

**【事例 6-8】言葉と動作を合わせて最後まで唱える**

**(21 か月 5 日)【1998 年 1 月 16 日】**

午後 9 時、入浴前のくつろいだ時間にY児と養育者が遊んでいる。Y児はお気に入りのドラえもんやスヌーピーの人形に、「ドラえもん、《チッチ》しよ」などと言葉をかけ、養育者と共に「チッチ…」と動作を伴って歌いかける。(譜例 6-9)

【譜例 6-9】




この場面で、Y児は自ら意欲的に何度も人形に遊ばせうたを試みていた。また、養育者と心地よく声や動作を同期させて遊ぶ様子が伺えた。譜例 6-9 からは、うた全体に言葉と動作を同期させていることがみてとれる。この時期のY児にみられた音楽的行為の発達的特徴としては、①うた全体を通して言葉を拍節的に唱え、動作を同期させることができる、②唱えうたの旋律については、まだ音程を保って歌うという段階にはない、などが挙げられる。

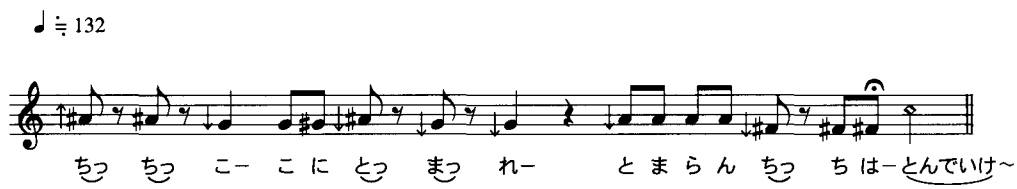
遊ばせうた全体を通して、養育者と言葉や動作を同期させて楽しむことができたという点からみれば、この遊ばせうたの歌詞とリズミカルな動作の習得には、一応の完成をみたといえるかもしれない。しかし、うたの旋律の習得には、まだ時間が必要であろうと思われる。

## 第Ⅵ期）第 2 次音楽的完成期：2 音旋律を保ってうた全体を通す

**【事例 6-9】2 音旋律を保ってうた全体を通す　（生後 26 か月 5 日）【1998 年 6 月 16 日】**

午後 7 時、夕食後のくつろいだ時間にY児と養育者が遊んでいる。Y児は養育者に、「《チッチ》しよ」と言葉をかけ、養育者と共に「チッチ…」と動作を伴って歌う。（譜例 6-10）

【譜例 6-10】




この場面で、Y児は自ら意欲的に養育者に遊ばせうたを試みていた。その旋律は譜例 6-10

より、これまでに獲得してきたほぼ長2度の音程を保ちながら歌われていいることが読みとれる。擬音語「ブーラン、ブーラン」の獲得過程では、この時期3音旋律獲得の兆しがみえ始めていた。遊ばせうたの事例でも、近いうちに3音旋律での表現が現れるのではないかと推測できる。

## 第3節　本章のまとめ

前章では、観察事例の分析を通じて養育者と子どもの間に遊ばせうたを用いてどのようなやりとりがなされているかの実際を示してきた。ここではまとめとして、子どもの音楽的行為の発達的な変化の特徴と、養育者の働きかけの特徴について述べる。

### 3.1 養育者とのやりとりの中で、子どもの音楽的行為はどのように発達的に変化しているか

観察事例の分析より、遊ばせうたの習得には7つの時期に区分される発達の過程がみとめられた。それは、養育者が一方的に子どもを遊ばせようと働きかける段階から、子どもが主体的な表現者となる段階への移行過程であった。換言すると、表現者として受動的段階から能動的段階への転換の過程である。事例分析より、この転換には子どもの日本語の獲得状況が少なからず関連していることが明らかになった。以下に7つの時期の発達内容をまとめる。

**①受容期（7か月～）**

喃語期には、子どもは養育者の働きかけに対し、視線を合わせる、笑顔になるなどの反応をするが、初語が出現し音声言語の獲得が始まると、子どもは養育者の働きかけを受け止め、表情や声で反応するようになる。特にバンザイの動作の部分で、笑顔や発声がみられる。

**②模倣期（13か月～）**

言語の理解と獲得が進み一語発話がみられるこの時期には、子どもは養育者の動作を模倣し、遊びに参加するようになる。しかし、養育者が歌ううたの拍節には同期していない。言語表現においては模倣的発声が頻繁にみられるが、遊ばせうたの表現においては動作表現が音声や言葉の表現よりも先行している。

**③自立期（15か月前半～）**

歌詞の擬声語部分に自発的な部分表現が現れる。また喃語的音声が動作と同期する。表3-1（第3章1節）より一語発話の定着が進んでいることが捉えられるが、この時期には日本語の音楽的特徴であるシラブルの等拍性をもとに、1音節に1動作を同期させようと試みる音楽的行為も現れる。

**④音楽的萌芽期（15 か月後半～）**

動作がはっきりした拍節を刻むようになり、リズミカルな動作が持続する。表 3-1 より 16 か月、17 か月にはさらに一語発話の語彙が増えていることや、18 か月に二語発話が現れたことが読み取れるが、この時期には言語理解の深まりと言語獲得の進行により、自分から声や動作で養育者を誘う、呼吸を合わせようとする意識と行為が芽生える、うた全体に喃語的音声と動作を同期させる、などの音楽的萌芽と変化がみられるようになる。

**⑤音楽的展開期（19 か月～）**

表 3-1 よりこの時期には二語発話が定着してきたことが読み取れる。それに伴って、フレーズの終わりに部分的に言語と動作の同期がみられ、喃語的音声による表現だったものが、言語的表現へと移行しつつある。また、養育者の呼吸に合わせながら、言葉を音楽的にまとめようとするようになる。

**⑥第 1 次音楽的完成期（21 か月～）**

この時期には、うた全体を通して言葉を拍節的に唱えて動作を同期させるなど、遊ばせうたのリズムと歌詞の習得に一応の完成をみる。しかし、旋律面に関してはまだ唱えうたの音程を保って歌えるという段階にはない。

**⑦第 2 次音楽的完成期（26 か月～）**

この時期には、うた全体を通して言葉を拍節的に唱えて動作を同期させ、2 音旋律にのせるなど、遊ばせうたのリズムと歌詞の習得に一応の完成をみる。

この時期は 3 語発話が定着し 4 語発話が出現していることから、かなり言語の獲得が進んでいる。一方、この遊ばせうたの歌詞は、「チッチッ・こーこに・とまれ」「とまらん・チッチは・とんでいけ」とそれぞれ 3 語のフレーズから成り立っており、4 語発話の出現という言語獲得状況と関連づけて捉えてみると、この時期にうたのリズムと歌詞の習得に関して一応の完成をみたこともうなづける。

### 3.2 養育者は「遊ばせうた」を、どのように子どもに働きかけているか

観察事例の分析より、養育者は子どもの発達的変化を敏感に捉え、それぞれの時期にみせる子どもの音楽的行為にふさわしい工夫を加えて、子どもに働きかけていることが明らかになった。

**①受容期（7 か月～）**

子どもが言葉を獲得していない時期には、養育者が子どもの身体に触れながら唱えるというスキンシップを中心にした働きかけがみられる。また、養育者は子どもの表情や声による反応を手がかりに、声の抑揚や動作に工夫を加えている。

**②模倣期（13 か月～）**

動作の模倣行為が子どもに見られるようになると、養育者は子どもの身体に触れるだけでなく、箱や人形をつつくなど、動作に変化を加えた働きかけをするようになる。また、子どもが真似しやすいように、動作や声の抑揚を大きくするなどの工夫も加えている。

**③自立期（15 か月前半～）**

子どもが以前よりも自立して表現を試みるようになると、養育者は積極的な働きかけを控えて、子どもの表現を見守るようになる。

**④音楽的萌芽期（15 か月後半～）**

子どもが音楽的に発展した表現を行なうようになると、養育者の働きかけは子どもの身体に触れずにうただけを歌いかける、「一緒にやろう」「もう一回できる？」などの言葉で誘う、また途切れてしまった子どもの唱えうたの流れを切らないように配慮して続けて歌う、などの変化をみせるようになる。

**⑤音楽的展開期（19 か月～）**

この時期も子どもが途中で言葉が続かずに歌えなくなる場面が多くみられたが、養育者は子どもの唱えが途中で止まってしまっても、遊びが中断しないように配慮して、子どもの作り出したリズムにのってうたを続けるなどの働きかけをしている。

**⑥第 1 次音楽的完成期(21 か月～)**

子どもがうた全体を通して言葉を拍節的に唱えたり、拍節的な言葉に動作を同期させることができるようになると、養育者は自分から積極的に働きかけずに、子どもが行なおうとするタイミングや呼吸に合わせて遊びに参加するようになる。

**⑦第 2 次音楽的完成期(26 か月～)**

子どもがうた全体を通して言葉を旋律的に唱えたり、言葉に動作を同期させることができるようになると、養育者は自分から積極的に働きかけずに、子どもとともにタイミングや呼吸に合わせて遊ばせうたを楽しむようになる。

本章では、3～5 章で明らかになった日本語を基にした伝統的な拍節感と旋律感が、歌う行為の中ではどのように現れてくるのかを検討するために、遊ばせうた《チッチッ、こーこに

とまれ》に焦点を当て、養育者とＹ児の間に「遊ばせうた」を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Ｙ児が「遊ばせうた」を習得していく過程にみられる音楽的な発達変化の特徴を、話し言葉の発達との関わりを中心に明らかにした。観察事例の分析より、遊ばせうたの習得には、養育者が一方的に子どもを遊ばせようと働きかける段階から、子どもが主体的な表現者となる段階への移行過程が認められた。事例分析より、この移行過程には、子どもの日本語の獲得状況が少なからず関連していることが明らかになった。また、拍節的な音声表現や動作表現は 1 語発話前期から発現するが、2 音旋律にのった音声表現は、3 語～多語発話期に入ってから認められた。従って、「遊ばせうた」を習得していく過程においても拍節感覚が旋律感覚よりも先行することが確認できた。

# 終章　乳幼児の音楽的成長の過程

本論文では、子どもの音楽性の本質を見据えた発達研究を行うために、日本の文化・社会の中で日本語を習得しつつある子どもの音楽的成長・発達の筋道を解明することを目的として研究に取り組んだ。そして、民族音楽学および音楽人類学の理論と方法に依拠して、子どもが周囲の人々とかかわり、さまざまな生活体験を通して、話し言葉や運動動作などを獲得していく成長の過程を、音楽的な視点で捉えてきた。本章では、第1章から第6章にわたって述べてきた一連の研究結果をふまえ、総合的な考察を行う。

## 第1節　総合的考察

### (1) 研究結果の総括

第1章では、本論文で扱う音楽的行為の概念について、背景とする理論を基に説明した。観察データから音楽的行為を抽出し、分析することが中心となる観察研究においては、どのような行為を「音楽的である」と捉えるかということが、研究の根幹に関わる重要なポイントである。そこで、第1章1節1項では、まず本論文で扱う音楽的行為の内容を述べた。2項では、乳幼児の行動を音楽的な視点から分析する観察研究を意欲的に進めている4人の研究者たちが、子どもの音楽的行為をどのように捉えているのかを、事例の分析記述より比較検討した。その結果、大人の音楽に対する考え方や捉え方の延長上に子どもの音楽的行為を捉えようとする研究と、大人の音楽に対する偏見をはさまず、子どもの立場に立って子どもの音楽的行為を捉え、理解することが必要であるとする研究があることが明らかになった。また、3項では、本論文で扱う音楽的行為の概念規定の根拠について、背景となるブラッキング理論や藤田理論に依拠して行った保育園での観察研究の結果を用いて説明をした。ブラッキングの理論や藤田の理論から得られた示唆に基づき、子どもの立場に立って民族音楽学的な分析を試みると、大人の立場から「指示的意味がぬけ落ちて音だけになった語に、周期的な抑揚とリズムがついた」だけとして切り捨てられかねない表現の中に、子どもたちがさまざまな気持ちや情動を音楽にのせて発散させたり、リズムにのって身体を動かす心地よさを感じていたり、開放的な気分を作り出している実際が見出された。従って、筆者は「子どもの音楽的行為は子どもの立場に立って理解することが必要である」と考えた。そこで、本論文では、「音楽的行為」という語の概念を、西洋音階でできた既成の歌を歌う行為のほかに、

①2 音からオクターブにいたる旋律でできた歌をうたう行為

②日本語の抑揚をもとに、一定の固定した音高で旋律的に言葉を唱えたり、音声をまとめる行為

③日本語の音（おん）をもとに、一定の拍節リズムで言葉を唱えたり、音声や動作を拍節的にまとめる行為

④一定の拍節リズムで、音声や言葉と動作を同期させる行為

⑤他者と呼吸を合わせて、動作や声をタイミングよく同期させる行為

のように理解して用いることを述べた。さらに 2 節では、1 項において本論文で用いた研究法について述べ、2 項において観察対象とフィールドワークの実際について述べた。

第 2 章では、観察対象の個人差に配慮するために、1 節において話し言葉の発達過程に関して、一般的な子どもと本論文の観察対象であるＹ児について概観した。また、2 節において運動動作の発達過程に関して、一般的な子どもと本論文の観察対象であるＹ児について概観した。そして、3 節では、一般的に認められる乳幼児の話し言葉や運動動作の発達過程と、Ｙ児にみられた発達過程を表にして比較検討した。その結果、Ｙ児の音声言語の発達は、2 語発話の出現時期までは、一般的な子どもとほぼ同様の発達を示しているが、その後の 3 語～多語発話期に至っては、一般的な子どもよりも 4 か月程度、成長が早いことが明らかになった。また、運動動作の発達については、1 年を過ぎた頃から、階段のぼりやジャンプに関して、一般の子どもよりも、5～7 か月程度早い成長を示していることが明らかになった。このように、1 節と 2 節からはＹ児の発達過程を全体的に概観すると、Ｙ児は一般的な子どもよりも少し成長が早いことが認められた。

第 3 章では、話し言葉の発達段階に沿って、Ｙ児の音楽的行為の変化の過程を捉えた。話し言葉の獲得過程は、喃語から初語の出現、原言語、1 語発話、2 語発話、3 語から多語発話へと進むが、その進行の度合いは個人差が大きい。そこで、1 節ではＹ児が話し言葉をどのように増やしていくのかについて、その具体的な言葉の内容を表に示し、獲得過程における発達段階を区分した。2～5 節では、養育者との音楽的やりとりでみられたＹ児の音楽的行為を事例として取り上げ、分析と考察を試みた。2 節では、前言語期のＹ児が原初的な音楽的行為の基盤を築き始めることや、待つ行為や音声模倣を通して、音楽的やりとりを発展させていくための準備体制作りをしていることが認められた。一方、養育者の働きかける言葉のリズム面には、日本語の音楽的特徴の 1 つである、シラブルの等拍性と関係する伝統的なリズム感が生かされていた。それは、日本語を話すわれわれが言葉をリ

ズミカルに唱える場合に、それまで無意識に身につけてきた基本的なきまりを用いることによって生じていると思われる。そして、日本語の音（おん）が2音ずつまとまり、全体で4拍（律拍）のまとまりが作り出される傾向があった。また、養育者の語りかける言葉の抑揚には、日本語の音楽的特徴の1つである、高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされていた。養育者が子どもの名前を呼びかける際に用いる音楽的な言葉は、伝統的な2音旋律が保たれており、そのリズムは、2音のまとまりが等分の形や、はずむ形に変化する傾向があることが示唆された。さらに、養育者は、自分の音声や言葉や動きを、子どもの音声や動きに同期させて働きかけていることも明らかになった。このような養育者の行為によって、子どもの音楽的成長の基盤が形成され、子どもとの間に音楽的なコミュニケーションが成立するものと思われる。

3節の結果からは、1語発話期におけるY児の音楽的行為の特徴が示唆された。初語がみられ始める1語発話前期では、養育者が発話する言葉のリズムに合わせ、拍節的に動作を同期させる行為が認められた。また、音声模倣を通して、日本語の拍節感覚が身につきはじめることが明らかになった。それは、「ワン・ワン」のように2音の音形を反復した2拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出す行為として現れる。さらに、意図性をもって自分の音声や言葉と動作を同期させようとする行為が認められた。また、他者との間には、間（呼吸）を合わせようとする行為が、芽生えはじめた。それは、Y児の方から養育者へと視線を向けるという意図的な行為から始まる。しかし、意図性が認められるものの、相手（養育者）に間やタイミングを合わせようとするのではなく、その時々の自分の気分のままに自由に発声する段階である。しかし、次の段階では相手の間やタイミングには合わないが、自発的に相手のかけ声に参加しようとする行為が認められた。その行為の背景には、音声模倣の発達状況が認められる。さらに進むと、そのつど異なる相手の間の変化を、顔や口元をみつめて読みとろうとする行為がみられ、発達的な変化の過程が示唆された。

一方、養育者の働きかけにみられる音楽的特徴には、絵本の中のリズミカルな唱えことばを、2音ずつ結びつけて、4拍（律拍）のまとまりを作り出し、ひと呼吸で発話することや、日本語発話の原則に基づいて、2拍（律拍）の拍節を強調した発話を繰り返すことや、Y児の音声を2拍（律拍）のまとまりへ導こうと試みる行為などが認められた。また、「いないないばあ」遊びにおいて、その時の気分と1回ごとの呼吸の長さをもとにして、Y児に向かって「いないな～い」と誘いかける行為もみられた。

1語発話後期では、「パッ・カッ、パッ・カッ」と擬音語を2音ずつまとめて2拍（律拍）の拍節を作り出し、繰り返し唱えたり、その音声に弾む動作を同期させる行為がみられた。1語発話前期では、「ワン・ワン」のように2音の音形を反復した2拍（律拍）の拍節的なリズムを生み出す行為は認められたが、動作を同期させる行為は認められなかった。これらの行為からは、Y児が日本語の2音をまとめて2拍（律拍）の枠組みを作り出す日本人のもつ伝統的な拍節感を身につけて音楽的に成長していることが示された。また、喃語的音声を「ブッ・●・チャー・●」と呼吸ごとに4拍（律拍）にまとめて繰り返す行為や、「イ・ー・ポン・●」という喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて作り出した時間単位を用いて、階段を下りる身体の動きをまとめる行為もみられた。音声を4拍（律拍）にまとめる行為は、1語発話後期に入ってはじめて認められた行為であるが、これは8音が2音ずつまとまって4拍（律拍）を形成するという日本語の音数率の原型を獲得して、Y児が音楽的に成長していることを示している。また、Y児は音声模倣をすることにより、養育者との間に「パーンツ」という1語を用いたリズミカルなかけ合いを成立させたが、この行為はY児が音声模倣をすれば2音を「はずむ形」にまとめてやりとりができることを示している。

また、養育者の働きかけにみられる音楽的特徴には、擬音語や言葉を2音ずつまとめて、「はずむ形」を作り出し、Y児に繰り返し唱えかける行為が認められ、Y児を遊ばせる状況において、養育者はリズミカルに「はずむ形」の言葉を作り出す傾向があることが示された。1語発話が可能になった子どもは、意図性をもって音声模倣をしたり、意図性をもって音声や言葉や動作を同期させはじめるので、この時期の子どもに働きかける養育者には、日本語のリズムや抑揚をさらに音楽的にまとめて働きかけようと試みる行為が認められる。それは、Y児をとりまく人的環境要因として、Y児の今後の音楽的成長の過程に影響を与えるものであろうと推察される。

4節の結果からは、2語発話期にみられるY児の音楽的行為の特徴が示された。2語発話期になると、Y児はこれまでの日常生活での養育者とのやりとりを通して取り込んだ、日本語の高低アクセントやイントネーションに支配された、わらべうたの出発点ともいえる2音旋律で音声をまとめる行為を獲得しつつあることが明らかになった。1語発話期には、「ワンワン」の4音からなる擬音語を2拍（律拍）で「ワン・ワン」のようにリズミカルな1語で表現することから、「パッ・カッ、パッ・カッ…」のように擬音語を2拍（律拍）にまとめて37回も繰り返し唱えることができるようになり、やがて喃語的音声を4拍（律拍）にまとめて繰り返すことができるようになるなど、主にリズム面において発達的な変

化をみせてきた。2 語発話期に入ると、Y児の音楽的行為は新たに旋律面においても発達的な変化を遂げつつあることが示唆された。また、偶発的な喃語的音声から、次第に安定した 7 拍（律拍）のリズムを獲得してゆく過程も明らかにされた。

さらに、「アリガトウ」や「コンニチワ」などの慣習的な言葉と動作を身につけ、他者と呼吸を合わせて、バランスよくまとめようとする行為や、養育者との音楽的なやりとりの中で、4 拍の拍節リズムにのって、自分の呼吸を相手の呼吸の長さに合わせて、言葉や声、動作を同期させる行為が認められた。これらの行為の背景には、1 語発話期にみられた意図性の芽生えや模倣行為などの発達とともに、Y児がすでに 8 音で 4 拍（律拍）を構成する日本語の基本的なリズム構造による拍節感覚を身につけていることが挙げられるのではないかと考えられる。

2 語発話期の養育者が働きかける音楽的行為の特徴としては、リズミカルな言葉で遊びを誘いかけ、Y児が遊びに参加すると、安定した呼吸周期で、2 語を 4 拍（律拍）にまとめてリズミカルに唱えかける傾向があることがみられた。養育者が唱えかける言葉は、日本語の音楽的特徴の 1 つである、高低アクセントと関係する伝統的な旋律法が生かされ、2 音旋律で唱えられていた。

5 節の結果からは、3 語～多語発話期にみられるY児の音楽的行為の特徴が示された。3 語～多語発話前期では、すでに 1 語発話前期に 2 拍（律拍）の日本語のリズムの枠組みを獲得しているY児が、2 語を「アシ・チョン」と 2 拍（律拍）にまとめる行為がみられた。また、Y児は 1 語発話後期に 4 拍（律拍）の日本語のリズムの枠組みを獲得して、喃語的音声や「アリガト」の 1 語を 4 拍にまとめていたが、この時期には「ミドリーデンシャ」や「ピトオーデンシャ」などと、長音を用いて 2 語を 4 拍にまとめようとする行為が認められた。ここでは、すでに身につけた日本語をもとにした拍節感覚を生かして、Y児が言語の発達に沿った音楽的行為をみせ、音楽的に成長している姿が確認された。また、同様の拍節感は、養育者との「これなあに」というリズミカルな問答遊びにも生かされ、養育者との間でリズミカルな言葉のやりとりを成立させていることが明らかになった。

この時期の養育者の音楽的行為にみられた特徴は、養育者は「これ」と「なに」の 2 語をつなげ、「これ・なあ・に●」と 2 音ずつまとめて拍節を形成し、一呼吸でリズミカルにY児へ問いかけたり、2 語をつなげて 2 拍（律拍）にまとめ、一呼吸でリズミカルに唱えかけることや、子どもの言語獲得の発達状況に応じて、唱えかける言葉のテンポやリズムを変化させるなど、Y児の言語の発達段階に応じて、対応していることが明らかになった。

3語～多語発話中期では、「バンジー、ジャンプ」のように2語を拍節的にまとめて、跳ぶ動作と同期させる行為や、「オナカノ、ナカデ」のように2語を4拍（律拍）にまとめて繰り返したり、「キーロイキーロイ、キーロイモーフ」のように2語を8拍（律拍）にまとめて繰り返すなどの行為が認められた。これらは、Y児がすでに日本語の基本的な拍節構造に基づく拍節感、すなわち日本語を基にしたリズム感を獲得しており、その枠組みに言葉をはめ込んで、リズミカルに唱えることを直感的に心地よく感じ、楽しんでいる行為の現れであると捉えることができる。また、運動動作の発達によって可能になった、高いところからのジャンプや、滑り台を滑る動作をスムーズに行うために、Y児が言葉の音楽的なまとまりを意図的に利用できるようになってきた成長の過程を認めることができた。次に、3語～多語発話後期では、Y児が2音旋律を獲得し、「オトモダチー」の1語や、「ドラエモン、アソボー」という2語、さらに「ウエノ、キノコ、タッテクヨー」という3語を2音旋律で繰り返し唱える行為が認められた。また、8拍（律拍）のまとまりのあるリズミカルな言葉を繰り返すうちに、次第に2音旋律が生起し、8拍の拍節にのって2音旋律で言葉を唱えるというように、拍節的に言葉をまとめる行為から旋律的に言葉をまとめる行為への移行過程が認められた。このことによって、子どもの音楽的行為が、言葉のリズムを把握することから旋律をなぞることへと発達的に変化することが示された。またY児は、この時期に「ゆびきーりげんまん」とほぼ3音旋律をなぞるように歌う行為が認められ、3音旋律獲得の兆しがみられた。

以上のことからは、言語を習得してゆく過程において、日本語に基づく拍節感覚の方が旋律感覚よりも先に身につくという順序性を捉えることができた。また、言葉や動作を音楽的にまとめる行為は、それぞれの言語の発達段階よりも少し遅れて現れることが明らかになった。すなはち、1語を用いた音楽的行為は、さらに言語獲得が進んだ状況にある2語発話期に発現する。また2語を用いた音楽的行為は、さらに言語獲得が進んだ3語～多語発話期に発現することが認められたのである。これらのことは、一人の子どもの言語獲得状況と音楽的行為の関係を縦断的に調べることによって明らかにされた知見である。

3章で得られた知見を詳細に検討するため、4章から6章において、さらに事例の分析を進めた。第4章では、日本語に基づく拍節感覚の獲得過程を捉えるために、運動動作に伴う「かけ声」に焦点を当て、養育者とY児の間にかけ声を用いてどのような音楽的やりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児の音楽的行為の発達的変化の特徴についても明らかにした。結果からは、養育者が、寝返りやつかまり立ち、あるいは階

段のぼりをしようとしているY児の状態を受け止め、共感し、そこに自らの気持ちを沿わせ、声によって励ましていた。それぞれの事例からは、次のようなことが認められた。養育者はY児の寝返り動作が途中で止まると、声のトーンを高くして、多様なリズムを用いてかけ声をかけていた。また、Y児が動作を起こそうとして力を入れる時には付点のリズムを用いて働きかけ、スムーズな動作の流れの時には、均等な音価を用いたかけ声であった。さらに、Y児の階段のぼりの動作に呼吸を合わせて、ゆっくりと3拍のまとまりでかけ声をかけていた。これらに共通する特徴は、養育者がY児の動きに沿わせたリズムや調子でかけ声をかけていることである。Y児はこのような養育者の働きかけを受けとめ、1語発話前期になると、自分の動作に伴って「ヨッチョッ」「ィヨイ」などのかけ声らしきものを発声し、1音と1動作を同期させようとしていた。また、養育者や父親とのさまざまなかけ声を用いたやりとりを通して、Y児は声と動作を音楽的にまとめるためのルールを獲得し、これを用いて自身の情動表現にふさわしいあり方で表現することができるようになっていった。

第5章では、日本語に基づく旋律感覚の獲得過程を捉えるために、抑揚的な日本語として、擬音語「ブーラン、ブーラン」に焦点をあて、Y児が抑揚的な擬音語を習得していく過程において、養育者との間にどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児の音楽的行為の発達的変化の特徴についても明らかにした。結果からは、以下のことが認められた。前言語期にY児が養育者からの音楽的な働きかけを受けとめることに始まり、1語発話後期には、養育者の働きかけをきっかけに、「ブー、ダン」と拍節的に発話し始めることや、自分の身体を言葉のリズムに同期させて揺らすなどの行為が身につくことが認められた。また2語発話期には、自発的に揺れる物体の動きに合わせて唱えたり、養育者との関係において主導的立場に立った音楽的行為をみせるようになった。そして3語〜多語発話期になると、2音旋律獲得の兆しが認められ、次第に2音旋律を獲得し、さらに3音旋律獲得の兆しが認められた。以上、4章と5章からは、拍節的な日本語と抑揚的な日本語の獲得過程を比較することによって拍節感覚の獲得が先行することが明らかとなった。

第6章では、3〜5章で明らかになった日本語を基にした伝統的な拍節感と旋律感が歌う行為の中ではどのように現れてくるのかを検討するために、遊ばせうた《チッチッ、こーこにとまれ》に焦点を当て、養育者とY児の間に「遊ばせうた」を用いてどのようなやりとりがなされているのか、その実際を示した。また、Y児が「遊ばせうた」を習得してい

く過程にみられる音楽的な発達変化の特徴を、話し言葉の発達との関わりを中心に明らかにした。観察事例の分析より、遊ばせうたの習得には、養育者が一方的に子どもを遊ばせようと働きかける段階から、子どもが主体的な表現者となる段階への移行過程が認められた。事例分析より、この移行過程には、子どもの日本語の獲得状況が少なからず関連していることが明らかになった。また、拍節的な音声表現や動作表現は1語発話前期から発現するが、2音旋律にのった音声表現は、3語～多語発話期に入ってから認められた。従って、「遊ばせうた」を習得していく過程においても拍節感覚が旋律感覚よりも先行することが確認できた。

表7-1（巻末）は、観察データから各章の事例として抽出し、分析を試みたすべての事例を、Y児の話し言葉の発達段階に沿って並べたものである。この表を本論文の3～6章を総括したY児の音楽的成長の過程として提示する。

### (2) 乳幼児の音楽的成長の過程

前項では、本論文の3章～6章で得られた知見を総括して、Y児の乳児期から幼児期にわたる（生後0か月から30か月まで）音楽的行為の発達過程を、乳幼児の音楽的成長の過程として表7-1を提示した。3～6章では、各章の目的に従い、縦断的に事例を辿り、分析を試みた。本項では、章の枠を超えて、事例全体を俯瞰して捉え、音楽的行為の発達過程を以下の3点に措定し考察する。さらに、そこから得た知見と表7-1から導き出した乳幼児の音楽的成長の過程として表7-2を提示する。

**①日本語の音（おん）をもとに、一定の拍節リズムで言葉を唱えたり、音声や動作を拍節的にまとめる行為は、どのような筋道をたどって子どもに身につくのか**

Y児は、生後30か月時には8拍（律拍）のまとまりをもつリズミカルな言葉を多様に作り出し、繰り返し唱えることができるまでに成長していた。その源を辿ると、前言語期に養育者から2音旋律にのせた4拍（律拍）にまとめられた呼びかけや語りかけを受けとめていたことに行き当たる。1語発話前期には、養育者によって「ワン・ワン」という2拍（律拍）のまとまりへと発話を導かれたり、運動動作の獲得に従って「よい・しょ、よい・しょ」と2拍（律拍）にまとめられたかけ声をかけられるという経験を重ね、日本語の4音を2音ずつまとめ、2拍（律拍）を作り出す枠組みを獲得し、自発的に「ワン・ワン」と2拍（律拍）に1語をまとめたり、自分の動作に「ヨッ・チョッ」とかけ声をかける行為がみられるようになった。さらに、1語発話後期には、2音ずつ4拍（律拍）にまと

める枠組みを獲得し、喃語的音声や擬音語を4拍（律拍）にまとめて繰り返すことができた。また、2語発話期には8拍（律拍）の枠組みを獲得する兆しをみせ、喃語的音声を7拍にまとめてリズミカルに繰り返す行為がみられた。さらに言語の発達が進み、3語～多語発話期に入ると、4拍の枠組みを活用して、2語を「オナ・カノ・ナカ・デ●」というように4拍にまとめて繰り返す行為や、8拍（律拍）の枠組みを活用して、「キー・ロイ・キー・ロイ・キー・ロイ・モーフ」というように2語を8拍にまとめて繰り返す行為が多様にみられるようになった。

これらの実例は、子どもが日本語の拍節的な枠組みを、2拍から倍の4拍へ、4拍から倍の8拍へと、獲得する枠を広げていることを実証しており、ここに日本の文化と関わって育つ子どもの音楽的成長の過程を捉えることができた。また、いったん獲得されたリズムの枠組みは、音楽的行為の基盤となり、言語の発達状況に応じて、リズミカルに唱える行為が発展していくものと考えられる。2歳前後の幼児が、リズミカルな言葉を繰り返して唱えることを好み、日常生活の中で盛んに試みる行為や、手遊びうたの《これくらいのおべんとうばこ》や《十べえさんと八べえさん》、《いわしのひらき》などの唱えうたを好んでやってみようとする背景には、1語発話の時期から子どもが日本語の拍節感を身につけ、そのリズムに音声や言葉をのせて唱えることに直感的に心地よさを感じるからではないかと推察できる。

**② 日本語の抑揚をもとに、一定の固定した音高で旋律的に言葉を唱えたり、音声をまとめる行為は、どのような過程をたどって子どもに身につくのか**

Y児には、2語発話の時期から日本語の高低アクセントに基づく抑揚にのせて喃語的音声を「パチトーオッ」と唱える行為が認められた。また、言語の発達が進み、3語～多語発話期に入ると、「ブーラン、ブーラン」の表現や遊ばせうた《ちっちっ、こーこにとまれ》の表現において2音旋律で唱えたり、歌う行為がみられ、2音旋律の獲得が確認された。また、さらに月齢が進むと、3音旋律獲得の兆しがあらわれ、ゆびきりの唱えうたを3音旋律に近づいた旋律で唱えたり、遊ばせうた《ちっちっ、こーこにとまれ》を3音旋律で歌う行為が確認された。先行研究の知見では、子どもは初めに言葉のリズムを把握し、次に旋律をなぞるようになると言われている。Y児の行為の変化をみると、同様のことがいえる。しかし、表7－1より、Y児の拍節的に言葉を唱える行為と旋律的に言葉を唱える行為の関係を探ってみると、抑揚的な言葉にも4拍（律拍）の拍節が内在している。この

ことは、Y児が言葉や音声を旋律的に唱える行為には、早期から培ってきた日本語の拍節感覚が作用していることを示していると考えられる。

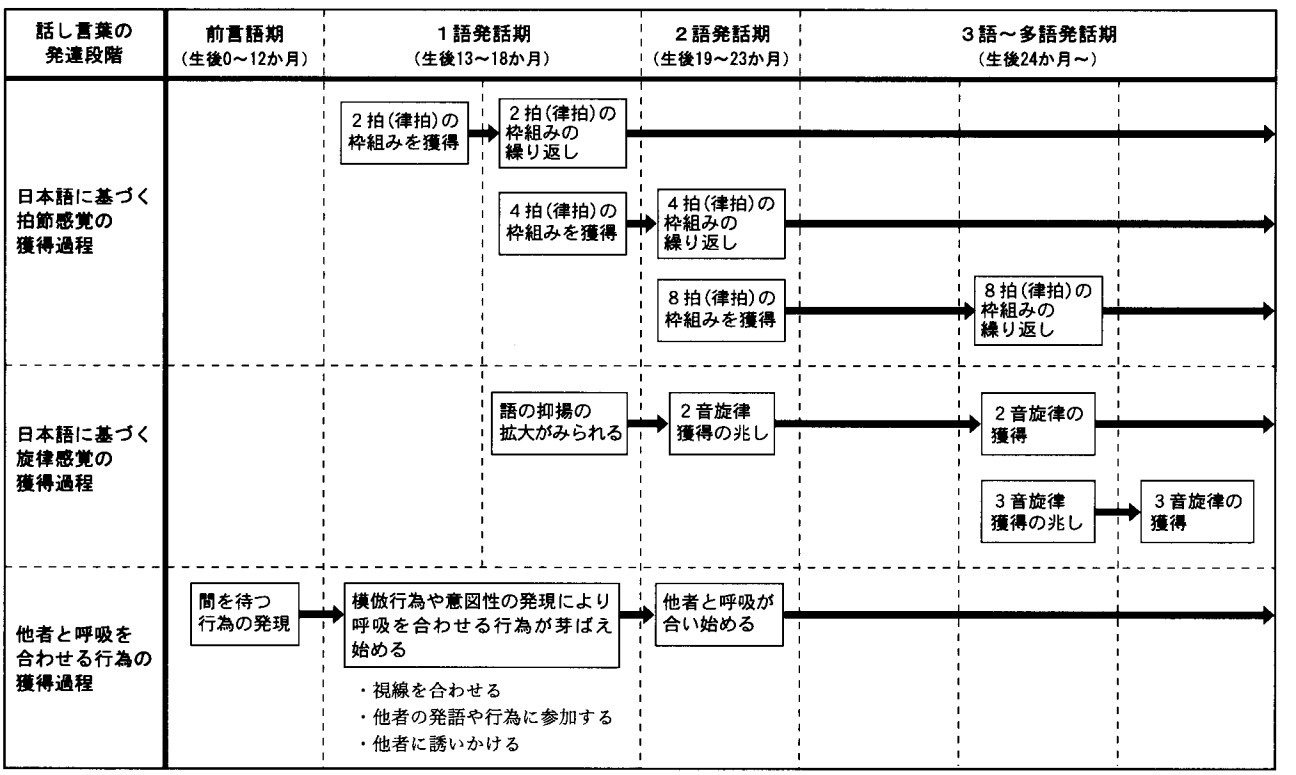
**③ 他者と呼吸を合わせて、動作や声をタイミングよく同期させる行為は、どのような過程をたどって子どもに身につくのか**

Y児が他者と呼吸を合わせて、動作や声を同期する行為は、2語発話期に「コンニチワ」や「バンザーイ」とう慣習的な行為に顕著に現れていた。しかし、そこへ至るまでの時期には、前言語期に養育者の発話を待つ行為や、意図的に養育者に視線を向ける行為などが認められた。観察事例の分析を通して、子どもは「いないないばあ」遊びや絵本の読み聞かせなどをよって呼吸を合わせる関係を築き、音楽的なコミュニケーションの基盤を形成していることが明らかになった。

以上の知見を踏まえ、先行研究によって得られた見解と統合し整理するならば、乳幼児の音楽的成長の過程として表7-2のような過程を1つのモデルとして想定し、描くことが考えられる。

【表7-2】乳幼児の音楽的成長の過程

作成：岡林典子




※話し言葉の発達段階に示した月齢は、一般的な言語の発達段階について、第2章で挙げた文献に基づいている。

## 第2節　本研究の意義と今後の課題

### (1)本研究が示唆するもの

本論文は、子どもの音楽性を文化や社会と関わって育てられるものとして捉え、乳幼児の音楽的行為をあるがままに詳細に観察・記述し、その成長・発達の筋道を明らかにすることを目指してきた。観察と分析の結果からは、日本の子どもがどのように音楽的成長を遂げるのかを、子どもの側に立って、すなわち、子どもの現実の生活場面の具体的な実例を通して見つめなおすことできたと考えられる。

本論文は、子どもの音楽的行為を大人の音楽的偏見をはさまずに、子どもの立場に立って分析を試みた。音楽をその作り手である人間の側から捉えようとする民族音楽学の考え方に基づくフィールド研究は、子どもが生活場面で音楽する本来の姿を具体的に示す資料を提供するものである。また、それらの資料分析を通して得られる知見により、子どもが日本の文化・社会の中でどのように音楽的成長を遂げるのかを見つめなおすことができたと考えられる。

また、近年の研究課題として取り上げられている音楽的な成長に関する研究アプローチの問題について、民族音楽学の理論や方法論に基づく視点を提案することができたと思われる。民族音楽学の理論と方法論に基づく本研究は、文化や社会との関わり中で子どもの音楽的行為が形づくられるという考えを基にして、乳幼児の音楽的行為をあるがままに詳細に観察・記述するという方法を用いるものであり、子どもの音楽的行為に関する研究に、新たな視点を提案する機会となりえたと考えられる。

さらに、子どもの音楽的成長を、子どもが属する文化や社会との関わりの中で、言語や運動動作、対人関係などと絡み合わせて重層的に捉えることができたと考えられる。日常生活の中で、子どもが養育者と関わりながら、手遊びうたを覚えていく様子を観察してみると、動作を模倣することから始まり、部分的に言葉を挿入し、次第にうた全体を言葉と動作で表現するようになるという過程を辿ることが理解できた。はじめは養育者から働きかけられていた遊びも、やがては子どもから養育者を誘い込むようになった。こうした過程には、自然な状況の中で、言語や運動動作、対人関係などの発達と絡み合って、音楽的に育ちゆく子どもの姿があらわれている。民族音楽学的な視点から子どもの音楽的行為を捉えようとする本研究は、音楽的に成長を遂げつつある子どもの姿を、言語や動作、対人関係などの発達過程と関連づけて、重層的に捉えた実証的な資料を呈示することができた

と考えられる。

これまでに述べた3つの点を踏まえて、子どもの音楽的成長の実際を、実践に供する可能性が生まれたと思われる。ブラッキングの主張する丹念なフィールドワークと音楽の文化的分析の手法を用いることによって、これまで音楽的であると捉えられなかった子どもの日常の原初的な音楽的行為を照らし出し、文化と関わる中で子どもが音楽的成長を遂げていることに着目することの重要性を示すことが可能となった。また、日本語を獲得することによって身につけられる拍節感覚を基盤にして、幼い子どもが言葉をリズミカルに唱えることを好む理由を示すことができた。保育園や幼稚園の保育者、また乳幼児の育児をおこなっている養育者には、新たな音楽に対する視点を提供することが可能となった。子どもたちは、獲得しつつあり、また獲得したばかりの母国語の音楽的感覚を用いて、さまざまな音楽的行為を試みている。そして、彼らがそのような育つ場の文化から音楽的感覚を獲得してゆく過程には、事例にみられたように、表現主体となる子どもの傍らに、彼らと心を通わせようと、拍節的で抑揚的な日本語を用いて、音楽的に豊かに働きかける大人の存在が示された。その大人は、自分もかつての子ども時代から日本の文化社会の中に育ち、周りの人との関わりを通して、言葉や慣習的な動作などのさまざまな文化を身につけてきている。本論文によって、日本の文化社会に育つ子どもたちが日常的な生活経験や遊びの中で、同じ文化を共有する人々との関わりを通して音楽的表現法を身につけ、表現する主体として成長している過程の一端を、実例をもって実証できたものと考える。

**(2) 今後に残された課題**

本研究では、筆者の長女1名を研究対象として、縦断的に観察を進めてきた。故に、本研究は一事例に過ぎず、事例の固有性によるデータの偏りや事例数の少なさなどの問題も残されている。ただ、執筆者自らが養育者であるからこそ、その場面の心情や、子どもの生活をまるごと観察することができたという利点も含まれている。現在、筆者は2人の幼児についてそれぞれ、生後7か月から27か月までと生後11か月から30か月までの縦断的に観察を進めている。今後はそれらの子どもから得られるデータや、保育園の観察事例、他の研究者の研究知見などを丹念に集め、分析を重ねていくことが必要だと考える。

また、本論文ではY児の生後 30 か月までの事例分析にとどまっている。Y児はこの後もさらに音楽的行為を発展させて、成長している。その過程の分析には、今後取り組みたいと考える。

## 【引用文献】

### ●序章


有馬大五郎 1951 『日本人の音楽 －国際歌手への道－』名曲堂

Blacking, J., 1967 *Venda Children`s Songs.* Johannesburg: Witwaterdrand University Press

Blacking, J. 1971 Deep and Surface Structure in Venda Music, *Year book of the International Folk Music Concil Ⅷ*

Blacking, J. 1973 *How Musicl is Man?* University of Washington Press(ブラッキング著 徳丸吉彦訳 1978『人間の音楽性』岩波現代選書)

Davidson, L., Mchernon, P. and Gardner, H. 1981 The acquisition of song: A developmental approach, Dcumentary report of the Ann Arbor symposium on the applicati.ons of psychology to the teaching and learning of music. Reston, Virginia: MENC (『音楽の発達心理学』小林芳郎訳　田研出版　1993　p.83)

Dowling ,W.J. 1982 Melodic information processing and its development , *The psychology of music* , ed.D.Deuche.New York: Academic Press　(『音楽の発達心理学』小林芳郎訳　田研出版　1993　p.83 )

Fujita Fumiko 1988 *Problem of Language, Culture and the Appropriateness of Musical Expression in Japanese Children`s Performance* , Tkyo :Academia Music

藤田芙美子 1990「保育園2歳児クラスで観察された話し言葉と歌の中間形式」『日本保育学会第43回大会研究論文集 pp.148-149』

藤田芙美子 1993「子どもはどのように音楽的であるか」『音楽教育学』第23 - 2号pp.55-57

藤田芙美子 1994「音楽性を育てる環境とは」『音楽教育学』第24 - 3号 pp.62-64

藤田芙美子 1988－1997「幼稚園における様式化された話し言葉」ほか『日本保育学会大会研究論文集』

藤田芙美子 1994「音楽表現」『講座　幼児の生活と教育』第4巻 岩波書店 pp.176-194

藤田芙美子 1998「日本の子どもたちの音楽性とその育ちに関する民族誌学的研究」『国立音楽大学大学院研究年報』第十輯

藤田芙美子 1998－2002「周囲の音や音楽に注目し、探索する－保育園0歳児クラスの音楽行動の観察から－」ほか『日本保育学会大会研究論文集』

Gesell, A & Ilg. F. L 1943 *Infant and child in the culture of tiday.* Haper & Brothers. New York. NY. (ゲゼル, A &イルク, F. 依田 新・岡 宏子訳　『乳幼児と現代の文化～その発達と指導～』新教育協会　1954)

Hargreaves, D. J. 1986 *The Developmental Psychology of Music,* Cambridge University

Press, (小林芳郎訳 1993 『音楽の発達心理学』田研出版)

保育所保育指針 1999 フレーベル館

今川恭子 1997「音楽的発達をめぐる実験研究と観察研究の意義と課題」『音楽教育学研究』第 27－3 号 pp. 1-14

今川恭子 1999「音楽的シンボル形成期としての乳幼児期～発達の視点からみる乳幼児の音声行動～」浜野政雄(監修)『音楽教育の研究－理論と実践の統一をめざして－』音楽之友社 pp. 43-53

伊野義博 2003「日本語からはじめる音楽の授業～小学校 1 年生の題材『にほんごは おんがくのすてきなおかあさん』の実践を通して」 日本音楽教育学会 第 34 回大会研究発表資料

岩野美幸・高田美佳 「こひつじ保育園 1 歳児クラス観察記録 たんぽぽ組」『1998 年度 国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究』

岩井正浩 1997 『子どもの歌の文化史 －二〇世紀前半期の日本－』 第一書房

海道朋恵・数田ゆき子ほか 「生活の中にある音楽行動」『1996 年度 国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究』

金田一春彦・林 大・柴田武 編 1988『日本語百科大事典』大修館書店

小泉文夫 1984 『日本伝統音楽の研究 2』音楽之友社

国安愛子 1967「幼児のリズム反応に関する実験的研究(1)」『日本保育学会第 20 回大会論文集』 pp. 37-38

国安愛子 1986 「1 歳から 2 歳の音楽的発達の特性」『広島大学学校教育学部紀要』第 I 部 第 9 巻 pp. 143-156

国安愛子・神原雅之 1987「リズム再生能力の発達に関する実験的研究」『音楽教育学』第 17－1 日本音楽教育学会 pp. 3-12

黒田実郎 監修 1985『乳幼児発達事典』 岩波学術出版社

Mckernon, P. E. 1979 The Development of first songs in young children, *Early symbolization,* eds. H. Gardner D. Wolf. San Francisco: Jossey-Bass. (『音楽の発達心理学』小林芳郎訳 田研出版 1993 pp. 84-85)

Merriam, A. P. 1964 *The Anthropology of Music,* Northwestern University Press (メリアム 藤井知昭ほか訳『音楽人類学』 音楽之友社 1980)

南 曜子 1997「歌唱行動の始まり－乳児の歌唱行動の発達に関する理論化の試み－」『音楽教育学』第 27－1 号 pp. 77-83

南　曜子 1999「言語習得期における発話と歌の関係」『音楽教育学』第29－1号 pp. 17-32

Moog, H. 1968 *Beginn und erstes Entwicklung des Musikerleben im Kndesalter,* B. Shott Sohne, Mainz, (*The musical experience of pre-school children.* Translated by C. Clarke, Schott, London, 1976 )

森上史朗 2001「最近における発達感の変化と保育－幼稚園教育要領・保育所保育指針との関連を中心に」『発達』No86 ミネルヴァ書房 pp. 2-8

中倉みち子・大倉朋子「保育園1歳児クラスにおける音楽行動」『1994年度 国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究』

西本倫子・安森祐子「保育園0歳児クラスの音楽行動の観察記録」『1997年度 国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究』

岡林典子 2003「生活の中の音楽的行為に関する一考察～応答唱《かーわってー・いいよー》成立過程の縦断的観察から～」『保育学研究』第41巻2号 pp. 50-57

岡本拡子 2002「保育における音楽的なやりとりを通して子どもたちが学ぶものは何か－ある保育者と1・2歳児とのかかわりから－」『聖和大学論集－教育学系－』別冊：博士学位論文モノグラフ第10号

坂野信彦 2002 「日本語の音数率」飛田良文・佐藤武義 編『現代日本語講座 第3巻 発音』明治書院

鈴木麻子 2004 「0歳児の音楽行動の発達　－匠登の成長記録から－」名古屋芸術大学音楽教育学科卒業論文

徳丸吉彦 1978「訳者解説」『人間の音楽性』岩波現代選書

梅本堯夫・新名和子 1971 「メロディー感の発達研究 －遊び場面における子どもの歌の分析－」『音楽教育学研究』No62 pp. 20-31

梅本堯夫・菅真佐子・辻斉・菅千索 1985 「幼児におけるリズム同期反応の分析」『発達研究』Vol 1 pp. 75-84

梅本堯夫・菅真佐子　1986 「幼児における音高およびオクターブ類似性の認知」『発達研究』Vol 2 pp. 101-112

梅本堯夫　1987 「音楽行動の発達の特徴と意義」 大畑祥子・川上清文・遠山文吉 編『子どもと音楽　第2巻：子どもの発達と音楽』同朋舎 pp. 91-101

梅本堯夫・岩吹由美子 1990 「旋律化の発達について」『発達研究』Vol 6 pp. 133-146

梅本堯夫 1992「音楽的発達過程の研究（その１） ー音楽大学生と一般女子大生の事例研究ー」『発達研究』Vol 8 pp.163-178

梅本堯夫 1993 「音楽的発達過程の研究（その2） ー音楽大学生と一般女子大生の比較研究ー」『発達研究』Vol 9 pp.99-98

Werner,H. 1917 *Die melodishe Erfindung in früken Kindesalter.* Wien,

幼稚園教育要領 1999 フレーベル館

## ●第１章

Blacking, J., 1967 *Venda Children`s Songs.* Johannesburg: Witwaterdrand University Press

Blacking,J. 1971 Deep and Surface Structure in Venda Music, *Year book of the International Folk Music Concil Ⅷ*

Blacking,J. 1973 *How Musicl is Man?* University of Washington Press(ブラッキング著 徳丸吉彦訳 1978『人間の音楽性』岩波現代選書)

Fujita Fumiko 1988 *Problem of Language, Culture and the Appropriateness of Musical Expression in Japanese Children`s Performance* , Tkyo :Academia Music

藤田芙美子 1990「保育園２歳児クラスで観察された話し言葉と歌の中間形式」『日本保育学会第43回大会研究論文集 pp.148-149』

藤田芙美子 1993「子どもはどのように音楽的であるか」『音楽教育学』第23 - 2号pp.55-57

藤田芙美子 1994「音楽性を育てる環境とは」『音楽教育学』第24 - 3号 pp.62-64

藤田芙美子 1988－1997「幼稚園における様式化された話し言葉」ほか『日本保育学会大会研究論文集』

藤田芙美子 1994「音楽表現」『講座 幼児の生活と教育』第４巻 岩波書店 pp.176-194

藤田芙美子 1998「日本の子どもたちの音楽性とその育ちに関する民族誌学的研究」『国立音楽大学大学院研究年報』第十輯

藤田芙美子 1998－2002「周囲の音や音楽に注目し、探索する－保育園０歳児クラスの音楽行動の観察から－」ほか『日本保育学会大会研究論文集』

日暮 眞・福岡秀興・飯田美代子監修 1996『私の育児日記』 森永乳業株式会社

今川恭子 1997「音楽的発達をめぐる実験研究と観察研究の意義と課題」『音楽教育学研究』第27－3号 pp.1-14

今川恭子 1999「音楽的シンボル形成期としての乳幼児期～発達の視点からみる乳幼児の音声行動～」浜野政雄(監修)『音楽教育の研究－理論と実践の統一をめざして－』音楽之友社　pp. 43-53

桐谷 滋編 1999『ことばの獲得』ミネルヴァ書房

Malinowski, B. 1922 *An Argonauts of the western Pacific:* An Account of Native Enterprise and Adventure in the Aschipelagoes of Melanesian New Guinea, London :George Routledge & Sons. (寺田和男・増田義郎訳 1967「西太平洋の遠洋航海者」泉 靖一(編)『世界の名著』59　中央公論社)

Malinowski, B., 1944 *A Sientific Theory of Culture*, The University of North Calolina Press (姫岡　勤ほか訳 『文化の科学的理論』岩波書店 1958)

南　曜子・梅沢由紀子 1991 「言語習得期の音楽的表現―「即興歌の旋律性」日本音楽教育学会編『音楽教育学の展望Ⅱ下』音楽之友社第 pp. 166-175

南　曜子 1997「歌唱行動の始まり－乳児の歌唱行動の発達に関する理論化の試み－」『音楽教育学』第 27－1 号 pp. 77-83

南　曜子 1999「言語習得期における発話と歌の関係」『音楽教育学』第 29－1 号 pp. 17-32

南　曜子 2002「子どもが歌うことの源」川端有子/戸苅恭紀/難波博孝 編『子どもの文化を学ぶ人のために』世界思想社 pp. 238-253

村山貞雄 編 1987『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査―保育カリキュラムのための基礎資料―』サンマーク社

岡林典子　2003「生活の中の音楽的行為に関する一考察－応答唱《かーわってー・いいよー》の成立過程の縦断的観察から－」『保育学研究』第 41 巻第 2 号 日本保育学会 pp. 210-217

田中　泉 1998「幼児の音声行動における言語的表現と音楽的表現」日本音楽教育学会『音楽教育学』第 28-2 号

田中　泉 2003 『幼児の音声行動にみられる音楽的側面に関する研究　－音・リズム・反復を中心に－』日本女子大学大学院人間生活学研究科人間発達学専攻博士論文

## ●第 2 章

江尻桂子 2000 『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房

日暮 眞・福岡秀興・飯田美代子監修 1996『私の育児日記』 森永乳業株式会社

加瀬次男　2001　日本語教育のための音声表現　学文社

川島一夫 編著 2004 『図でよむ心理学　発達〔改訂版〕』福村出版,

金田一春彦他 編　1995 日本語百科大事典　大修館書店

木村裕一 1989『ごあいさつあそび』偕成社

小嶋祥三 1999「声からことばへ」 桐谷 滋編『ことばの獲得』ミネルヴァ書房 pp. 1-36

クルト・マイネル 著/ 金子明友 訳 1981『マイネル　スポーツ運動学』大修館書店

黒田実郎 監修 1985 『乳幼児発達事典』 岩崎学術出版社　pp. 132-133

村田孝次 1968 『幼児の言語発達』 培風館 pp. 19-35

岡本夏木 1982 子どもとことば　岩波新書

志村洋子 1989 赤ちゃん語がわかりますか　丸善メイツ

Shirley, M. M. 1933 The first two years. *Child Welfare Monograph,* 2, 7. Monneapois: Univ. of Minnesota Press

滝野匡悦・秦 一士 編著 1981 『現代児童心理学要説』北王路書房

津守 真・稲毛教子著 1995 『増補 乳幼児精神発達診断法 0～3 才まで』大日本図書

## ●第 3 章

麻生　武 1992 『身ぶりからことばへ』新曜社

ベビーブック 1997－1999 小学館

Bruner, J. S. 1983 *Child`s talk :Learning to use language.* Oxford University Press.

（ブルーナー著 寺田晃・本郷一夫訳 1988『乳幼児の話しことば　コミュニケーションの学習』　新曜社

江尻桂子 2000 『乳児における音声発達の基礎過程』風間書房

木村裕一 1989『ごあいさつあそび』偕成社

小泉文夫 1977 『音楽の根源にあるもの』 青土社

小島美子 1969b「旋律法」小泉文夫編『わらべうたの研究/研究編』稲葉印刷所

鯨岡　峻 1997 『原初的コミュニケーションの諸相』 ミネルヴァ書房

鯨岡　峻 1999 『関係発達論の構築』 ミネルヴァ書房

間宮芳生 1957 「日本民謡におけるリズム」『音楽芸術』7月号

松谷みよ子 1967 『いないないばあ』 童心社

小椋たみ子 1999 『初期言語発達と認知発達の関係』 風間書房

岡本夏木 1982 『子どもとことば』　岩波新書

坂井康子 2003 『子どものことばとうたの結びつきに関する研究－自発的歌唱の音声分析に基づく考察－』神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文

坂野信彦 1996 『七五調の謎をとく－日本語リズム原論―』大修館書店

坂野信彦 2002 「日本語の音数率」飛田良文・佐藤武義 編『現代日本語講座 第３巻 発音』明治書院

柴山真琴 2001 『行為と発話形成のエスノグラフィー』東京大学出版会

田中　泉 2003 『幼児の音声行動にみられる音楽的側面に関する研究　－音・リズム・反復を中心に－』

内田るり子編 1975 『間宮芳生　日本民謡集』全音楽譜出版社

わかやま けん 1973 『こぐまちゃんのどろあそび』 こぐま社

## ●第4章

藤田芙美子 1988「幼稚園における様式化された話し言葉」『第41回日本保育学会大会研究論文集』pp. 612-613

藤田芙美子　1998 「子どもたちの周囲にある慣習的な音楽行動」『幼児の教育』第97巻第10号　フレーベル館 pp. 6-15

林　大 監修　1986 『国語大辞典』　小学館

Fujita Fumiko 1986 *The Musical Aspects of Speech Acts -The Case of Japanese Children-* 国立音楽大学研究紀要第21集 p. 113

藤田芙美子　1988-1992 「幼稚園における‘様式化された話し言葉’ほか」『 日本保育学会第41回～第45回大会研究論文集』

Fujita Fumiko 1989 *Problem of language, culture and appropriateness of musical expression in Japanese children's musical performance.* Academia music

藤田芙美子 1991「動きを伴うリズミカルな言葉」『日本保育学会代44回大会研究論文集』

藤田芙美子　1996-1998「子どもがうたいはじめるとき　ほか」『日本保育学会第49回～第51回大会研究論文集』

藤田芙美子　1998 『幼児の教育』第97巻 第10号　日本幼稚園協会　pp. 6-15

小泉文夫 1977 『音楽の根源にあるもの』 青土社

村井潤一監訳 1997 『発達心理学の基本を学ぶ』 ミネルヴァ書房 (Butterworth, G. & Harris, M. 1994 *Principles of Developmental Psychology*, Lawrence Erlbaum Associates Ltd.)

## ●第6章

永田栄一　1981 『日本のわらべうた遊び35』音楽之友社

岩井正浩 1987『わらべうた/その伝承と創造 』 音楽之友社

遠藤 晶 1998「幼児の手遊びにおける音楽的発達について」『保育学研究』第 36 巻第 1 号 日本保育学会、

小泉文夫 1977 『音楽の根源にあるもの』 青土社

村田孝次 1968 『幼児の言語発達』 培風館

菅井邦明 1986「音声言語行動の形成条件」『特殊教育学研究』24(2) 日本特殊教育学会 pp. 10-19

## 【参考文献】

陳 省仁 1992「文化人類学からの示唆」 東洋・繁多進・田島信元編 『発達心理学ハンドブック』 福村出版 pp. 384-398

細田淳子 2002「言葉の獲得初期における音楽的表現—身体で感じるリズム—」『東京家政大学紀要』第 42 集 p133-139

細田淳子 2003「乳児は歌をどのようにうたい始めるか—音楽刺激に対する身体反応—」『東京家政大学紀要』第 43 集 pp. 179-84

伊藤勝志 1978「幼児初期の歌唱行動について」『北海道教育大学紀要』教育科学編第 28 巻 2 号 pp. 157-170

伊藤勝志 1987「幼児初期の歌唱行動についてⅡ」『北海道教育大学紀要』教育科学編第 39 巻 1 号 pp. 167-177

柏木恵子 1978『子どもの発達・学習・社会化』 有斐閣選書 627

Krader, B. (櫻井哲男訳) 1995「民族音楽学」『ニューグローブ世界音楽大事典』講談社

国安愛子 1985 冬「音楽的発達と初期学習」『季刊音楽教育研究』 No44 音楽之友社

国安愛子 1996「子どもの音楽－研究の動向と課題－」『音楽教育学』第 26－1 号 pp. 1-8

国安愛子 1997「子どもの生活と音楽行動」『音楽教育学』第 27－1 号 pp. 69 -76

正高信男 1993『0 歳児がことばを獲得するとき』東京：中央公論社

正高信男 2001『子どもはことばをからだで覚える』東京：中央公論社

丸田俊彦・神庭靖子, 1981, スターンの理論, 別冊発達, 9 号, 42-48

箕浦康子 1990『文化の中の子ども』 東京大学出版会

箕浦康子 1999『フィールドワークの理論と実際』 ミネルヴァ書房 1999

守屋慶子 1986「ヴィゴツキー, L. S.」村井潤一編『発達の理論をきずく』(別冊/発達 4) ミネルヴァ書房 pp. 163-175

永野重史 2001『発達とは何か』 東京大学出版会

仲　真紀子 1995 「生涯発達研究のための実験法」『講座 生涯発達心理学 1 生涯発達心理学とは何か 理論と方法』金子書房 pp. 181-190

小此木啓吾ほか訳, 1989, 乳幼児の対人世界・理論編, 岩崎学術出版社 (Stern,D. 1985, *The Interpersonal World of the Infant,* Basic Book)

大畑祥子 1972「幼児における旋律形成の発達的研究(1) 」『音楽教育研究』No77 pp. 41-51

Papoušek, M 1996 Intuitive Parenting: A hidden source of musical stimulation in infancy, in I. Deliege, & J. Sloboda (Eds.) *Musical Beginnings,* Oxford University Press

佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク　　書を持って街に出よう』新曜社

田島信元 1992「ヴィゴツキー理論の展開」東洋・繁多進・田島信元編 『発達心理学ハンドブック』 福村出版 pp. 114-137

田島信元 1996「ヴィゴツキー:認識社会構成論の展開」浜田寿美男編『発達の理論：明日への系譜』(別冊/発達 20) ミネルヴァ書房 pp. 74-94

竹内ふみ子 1982「音楽学」『音楽大事典 1 』 平凡社

山口　修　1982a「比較音楽学」『音楽大事典 4 』平凡社

山本登志哉 1995 「生涯発達のための観察法」『講座 生涯発達心理学 1 生涯発達心理学とは何か 理論と方法』金子書房 pp. 204-214

## 【博士論文に関連する論文】

〔審査付き論文〕

岡林典子 2006 「「遊ばせうた」の習得過程にみられる音楽的行為の発達的変化－話し言葉の発達との関わりを中心に－」『表現文化研究』第 6 巻第 1 号 pp. 1-13

岡林典子 2005 「音楽発達研究における人類学的アプローチの有用性」『全国大学音楽教育

学会研究紀要』第 16 号 pp. 31-40
岡林典子　2003「生活の中の音楽的行為に関する一考察－応答唱《かーわってー・いいよー》の成立過程の縦断的観察から－」『保育学研究』第 41 巻第 2 号 pp. 210-217

岡林典子 2003　「二語発話の定着期にみられる養育者と子どもの音楽的やりとり～20 か月児の行動観察から～」『関西楽理研究』XX 号　pp. 100－106

岡林典子 2000　「言語習得期の子どもにみられる音楽的表現　～一幼児の 15～18 か月における行動観察から～」『乳幼児教育学研究』第 9 号　pp. 13－22

岡林典子 1998 「動作と結びついたリズミカルな音声表現　～17 か月～18 か月児の行動観察から～」『聖和大学論集』第 26 号Ａ　pp. 227-241

岡林典子 1999 「言語習得期にみられる母子の音楽的やりとり　～19 か月児の行動観察から～」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 10 号　pp. 1 -12

〔査読なし論文〕
岡林典子 2002　「擬音語「ブーラン」の習得過程にみる母子の音楽的やりとり　～一幼児の縦断的観察から～」『京都女子大学教育学会教育学科紀要』第 42 号　pp. 81－91

# 謝辞

本論文は、主査 岩井正浩先生をはじめ、副査 柴真理子先生、五味克久先生、佐々木倫子先生、木下孝司先生に、親身なご指導と貴重なご助言を戴くことにより、まとめあげることができました。心より厚く御礼申し上げます。

膨大な観察データの分類に行き詰った私に、岩井先生はフローチャートを作るようにご助言くださり、それによって絡み合っていた多くの事例をカテゴライズしていくことができました。柴先生からはブラッキングの理論と方法論をもとに、子どもの音楽的成長の何を描き出すことができるのかを考えることの必要性を示唆していただきました。五味先生からは、日本語と音楽の関わりについてのご助言をいただきました。佐々木先生からは、音楽的行為の概念を捉えるための示唆をいただきました。木下先生からは、乳幼児の発達的側面に関わる貴重なご助言をいただきました。

幼い子どもが養育者や周りの人々との関わりの中で、どのように音楽的に成長をしているのかということに関心を抱き、学びたいと思い立ったのは、もう25年も前になります。神戸女学院大学ピアノ科で西洋音楽を学んでいた私は、卒業後すぐに短大で保育者を目ざす学生たちを対象に、ピアノ実技を指導する機会を与えられました。当時は、日々の授業をこなす中で、「目の前にいる学生さんたちのその先には、生き生きと成長しつつある子どもたちが存在しているわけなのに、私はその子どもたちについて何も知らないでいる」と、強く感じておりました。そこで、30歳を前に一大決心をして児童学科に編入し、2年間子どもについて学びました。その後、神戸大学大学院教育学研究科において、柳生力先生にご指導頂き、子どもが親しみを感じる人物からの歌いかけは、子どもの積極的な聴取行動を誘発することについて修士論文にまとめました。さらに進学した聖和大学大学院教育学研究科博士後期課程では、元副学長の故・黒田実郎先生、元研究科長の石垣恵美子先生、現学長の山村慧先生から、心理学、幼児教育学、人類学などの領域にわたる数多くのご助言を賜りました。

ブラッキングの理論と研究手法については、名古屋芸術大学の藤田芙美子先生にご指導をいただき、子どもの音楽的行為をあるがままに詳細に観察・記述し、その成長の道筋を明らかにすることを目ざしました。また、本論文に関連する参考論文の作成過程では、神戸大学の小椋たみ子先生、元京都女子大学の岡本夏木先生から、話し言葉の発達に関わる貴重なご助言を賜りました。京都女子大学の山上雅子先生には、子どもの行為に関する観察データの読み取りや分析についてご指導を賜りました。保育園での観察研究には、聖和

乳幼児保育センターの松本まり子園長先生をはじめ、保育士の先生方や園児の皆さんにご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

本論文に着手してから、10 年の歳月が流れました。観察当初 0 歳だった娘は、現在 10 歳、小学 4 年生になりました。観察データを分析する地味な作業は思ったよりも大変で、とても時間がかかりましたが、西洋音楽を 4 歳から学んできた自分自身が、こんなにも日本語や日本の文化に根ざした音楽的な働きかけをしていたのかと、驚きと発見の連続でした。本論文で取り上げたような音楽的行為について広く理解を得るには、まだまだ子どもの音楽的行為に関する多くのデータ分析を積み重ねることが必要だと感じています。今後も地道に努力を続けて参りたいと存じます。

2006 年 12 月

岡 林 典 子

【表 7-1】 Y児の音楽的行為の発達過程 （作成：岡林典子）

| | 前言語期: 生後0〜10か月 | 1語発話期前期: 生後11〜13か月 | 1語発話期後期: 生後14〜17か月 | 2語発話期: 生後18〜19か月 | 3語〜多語発話前期: 生後20〜22か月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第三章から得られたY児の音楽的行為の特徴 | 3-1 養育者による2音旋律、4拍（律拍）の語りかけを、受けとめる。<br>3-2 養育者による2音旋律、4拍（律拍）の呼びかけを、受けとめる。<br>3-3<br>3-4 偶発的に動作と音声が同期する<br>3-5<br>3-6 Y児と養育者の間に、抑揚のある音声のやりとりが成立する。 | 3-7 養育者が作り出す4拍（律拍）の言葉の拍節に合わせて、動作を同期させる<br>3-8 養育者によって、Y児の音声「ワンワ」が2拍（律拍）のまとまりへ導かれる<br>3-9 養育者によって、Y児の音声「オウウォン」が2拍（律拍）のまとまりへ導かれる<br>3-10 自発的に擬音語「ワンワン」を2拍（律拍）にまとめて発話する<br>3-11 意図的に動作と擬音語「ガーン」「ゴーン」を同期させる<br>3-12 養育者との「いないいないばあ」遊びを通して、間を合わせようとする行為が芽ばえる | 3-13 喃語的音声を、「ブッ・●・チャー・●」と呼吸ごとに4拍（律拍）にまとめて、繰り返す。<br>3-14 「パッ・カッ」と2拍（律拍）にまとめた擬音語を、動作と同期させて、繰り返す。<br>3-15 音声模倣によって、「パーンツ」の1語を用いたリズミカルな言葉のかけ合いを成立させる。<br>3-16 喃語的音声を、「イ・ー・ポン・●」と4拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて繰り返す。 | 3-17 喃語的音声に抑揚をつけ、「パーチ・ト・ー・オッ」と4拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて、繰り返す。<br>3-18 喃語的音声を「イーダーイーダーイーダーオ」と7拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて、繰り返す。<br>3-19 1語と動作を同期させる。<br>①「ア・リ・ガ・ト」と、1語を4拍にまとめ、お辞儀をする動作と同期させる。<br>②「コンニチハ」「バンザイ」など、他者と呼吸を合わせて、1語と動作をまとめる。<br>③養育者の作り出す4拍のリズムにのって、1語（「ポン」）と動作を同期させる。 | 3-20 養育者に導かれ、2語を「アシ・チョン」と2拍（律拍）にまとめ、動作を同期させる。<br>3-21 養育者が拍節的にまとめた「これなあに」の言葉のリズムにのって、問答遊びに答える。<br>3-22 自発的に、2語を「これなあ・に」と拍節的にまとめ、そのリズムにのって、問答遊びの自問自答を繰り返す。<br>3-23 「みど・りー・でん・しゃ●」のように、2語を4拍（律拍）にまとめて、リズミカルに発話する。 |
| 第四章から得られたY児の音楽的行為の特徴 | 4-1 Y児の動作に合わせた、養育者による多様なリズムのかけ声を、受けとめる。<br>4-2 Y児の動作に合わせて、「よい・しょ」と2拍（律拍）にまとめられた養育者のかけ声を、受けとめる。<br>4-3 2拍（律拍）の拍節が保持されて、安定したリズムで唱えられる養育者のかけ声を、受けとめる | 4-4 自分の動作に合わせて、「ヨッチョ」「イヨイ」など、かけ声らしき発声をし始める。 | 4-5 養育者のかけ声を模倣して、「ヤーショ」と喃語的音声を2拍（律拍）にまとめて、階段のぼりの動作と同期させる。<br>4-6 「ヨイチョ」の1語を、自分の動作に同期させて、多様に表現する。<br>①足の1歩の動きに、「ヨ・イ・チョ」の1音ずつを同期させる。<br>②大きな抑揚をつけて、ひと呼吸で「ヨーイーチョ〜」と発声し、「チョ〜」の部分と階段のぼりの1動作と同期させる。 | | 4-7 両足をそろえてジャンプする動作に、「ヨーイ・ショ」と「はずむ形」にまとめたかけ声を、1度だけ合わせる。 |
| 第五章から得られたY児の音楽的行為の特徴 | 5-1 養育者が2音旋律で唱えかける、抑揚的な擬音語を、受けとめる。<br>5-2 養育者が、人形の揺れに同期させて唱えた、2音旋律の抑揚的な擬音語を、受けとめる。 | 5-3 養育者が、「ブランコ」などの言葉の代名詞として用いた、抑揚的な擬音語を受けとめる。 | 5-4 「ブーダン、ブッ●」「ブーリャン、ブッ●」と、喃語的音声を呼吸ごとに4拍（律拍）にまとめ、膝を曲げる動作と同期させて繰り返す。 | 5-5 「ブー・ラン」と、2音を呼吸ごとに2拍（律拍）にまとめて、左右に揺れる動作と同期させて、繰り返す。<br>5-6 「おてて、ブーラン」という2語を、呼吸ごとに2音ずつ4拍（律拍）にまとめて、繰り返す。 | 5-7 ブランコの揺れに同期させて、養育者と声を合わせ「ブーラン、ブーラン」と唱える。 |
| 第六章から得られたY児の音楽的行為の特徴 | 6-1 養育者の働きかけを受けとめ、声や表情で反応する。 | 6-2 養育者の動作を真似して、自分の足をつつく。<br>うたの拍節には、同期していない。 | 6-3 人差し指を立てて、養育者の動作を真似る。<br>6-4 喃語的音声と動作が同期する。<br>6-5 ①動作がはっきりと拍節を刻むようになり、養育者のうたの前半部に、動作を同期させる。<br>②はじめて、Y児から誘う。<br>6-6 ①呼吸を合わせようと、視線を向ける。<br>②「遊ばせうた」全体に、喃語的音声と動作を同期させる | 6-7 部分的に言葉を唱えて、動作と同期させる。 | 6-8 「遊ばせうた」全体に言葉と動作を同期させて、最後まで歌う。<br>まだ、音程を保って歌えるという段階にはない。 |

※ 3-1、4-1などの数字は、論文中の事例の番号を表している。

| 3語〜多語発話前期:　生後20〜22か月 | 3語〜多語発話中期:　生後23〜25か月 | 3語〜多語発話後期(1):　生後26〜27か月 | 3語〜多語発話後期(2):　生後28〜30か月 |
|---|---|---|---|
| 3-20　養育者に導かれ、2語を「アシ・チョン」と2拍（律拍）にまとめ、動作を同期させる。<br>3-21　養育者が拍節的にまとめた「これなあに」の言葉のリズムにのって、問答遊びに答える。<br>3-22　自発的に、2語を「これなあ・に」と拍節的にまとめ、そのリズムにのって、問答遊びの自問自答を繰り返す。<br>3-23　「みど・りー・でん・しゃ●」のように、2語を4拍（律拍）にまとめて、リズミカルに発話する。 | 3-24　呼吸を整え、2語を拍節的にまとめて、動作を同期させる。<br>①「バンジー・ジャンプ」といって、ジャンプする。<br>②「イクヨー・シュー」といって、滑り台をすべる。<br>3-25　「オナ・カノ・ナカー・デ●」と、2語を4拍（律拍）にまとめて、繰り返す。<br>3-26　「ペケ・ポン」と、2語を2拍（律拍）にまとめ、動作と同期させて、繰り返す。<br>3-27　「キーロイ・キーロイ・キーロイ・モーフ」と、2語を重ねて8拍（律拍）のまとまりを作り出し、繰り返す。 | 3-28　「これ・なあ・に・●」と、4拍（律拍）にまとめられた、リズミカルな問答を、養育者とやりとりする。<br>3-29　2音旋律を獲得する。<br>①「ウエノ、キノコ、タッテクヨー」という3語発話を、2音旋律にのせて唱える。<br>②「オトモダチー」の1語を、2音旋律にのせて繰り返し唱える。<br>③「ドラエモン、アソボー」の2語を、2音旋律にのせて唱える。 | 3-30　8拍（律拍）のまとまりをもつリズミカルな言葉を、多様に作り出し、繰り返し唱える。<br>（「マダマダマダマダ、マーダーヨ」という8拍（律拍）のまとまりを、2音旋律にのせて唱える）<br>3-31　4拍（律拍）にまとめた言葉をつなげて、リズミカルなフレーズのまとまりを作り、繰り返し唱える。<br>（「テレビダヨッ」を何度も繰り返して長いフレーズにする）<br>3-32　3音旋律獲得の兆しがみられる。<br>（3音旋律にのせて、「ユービキーリゲンマン」と唱える） |
| 4-7　両足をそろえてジャンプする動作に、「ヨーイ・ショ」と「はずむ形」にまとめたかけ声を、1度だけ合わせる。 | 4-8　歩く動きに、「ヨイショ、ヨイショ、…」と、リズミカルなかけ声を繰り返す。 | 4-9　階段を上る、しゃがむ、歩く、跳ぶなどの運動動作に、多様な「ヨイショ」のかけ声を同期させる。 | 4-10　自発的に動かす人形の動きに、「ヨイショ、ヨイショ」のかけ声を同期させる。 |
| 5-7　ブランコの揺れに同期させて、養育者と声を合わせ「ブーラン、ブーラン」と唱える。 | 5-8　首飾りを揺らす動きに同期させて、自発的に「ブーラン、ブーラン」と唱える。<br>5-9　2音旋律獲得の兆しがみられる。<br>ほぼ2度の音程を保ちながら、「ブーラン,ブーラン」と唱える。 | 5-10　2音旋律を獲得する。<br>「ブーラン、ブーラン、ブーラン、ヨイー」と、2度音程を保ちながら、8拍（律拍）のフレーズを繰り返す。<br>5-11　3音旋律獲得の兆しがみられる。 | |
| 6-8　「遊ばせうた」全体に言葉と動作を同期させて、最後まで歌う。<br>まだ、音程を保って歌えるという段階にはない。 | | 6-9　2音旋律を獲得するが、3音旋律は獲得できていない。 | |